

東方嫉妬姫

桔梗楓

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あらすじ

・ 退屈な日常、浮世離れしていく自分に存在の希薄さを感じ始めた自分

・ 親しい友人と会話。

・ 大学の帰り道、ふと気になった神社に立ち寄りお賽銭を上げた所、謎の光に包まれて幻想郷へ…

本作品の注意：下記の点にご了承下さい。

・ この作品は『東方Project』の二次創作です。
・ ヒロインはパルスイですがストーリーの進行上、最初は出番が少ないです。

・ おねシヨタ属性を含みます。

・ 不定期更新です。

・ 戦闘描写はなるべくない方針です。

・ 主人公はあくまで普通の人間です。

・ 独自設定・独自解釈等お見苦しい点もあります。

・ 挿絵は自前です。

以上の点が無理だと判断された方はブラウザバック推奨です。

特に、問題ないという方は進まれて下さい。

後、まだ、小説を書き始めた初心者なので、ご指摘、ご感想をお待

ちしております。

目次

00話	プロローグ	1
01話	幻想入りく嫉妬姫との出会い	5
02話	博麗神社	10
03話	幻想郷の大賢者	13
04話	いらっしやいませ八雲家	16
05話	八雲家の日常と世界の壁	19
06話	それぞれの道	24
07話	挨拶回りく紅魔館編	38
08話	挨拶回りく白玉楼編	42
09話	挨拶回りく永遠亭編	49
10話	挨拶回りく無縁塚編	56
11話	嫉妬姫の憂鬱	63
12話	挨拶回りく守矢神社編	66
13話	挨拶回りく地霊殿編	74
14話	嫉妬姫との再会	82
15話	旧都でのデートく伝わる想い	92
16話	紹介く立ちふさがる壁	103
17話	居酒屋デートく想いの強さ	109
18話	稽古く嫉妬姫の嫉妬	117
19話	碧、閻魔の元で働く	124
20話	舌切雀「大きな葛籠と小さな葛籠」	131
21話	妖怪の山く守る者達	140
22話	奇跡を起こせなかつた少女の恋慕	150
23話	ドキドキ水着回	158

24話	太陽の畑く出会うドSなお姉さんく	164
25話	太陽の畑くドS、此処に極るく	172
26話	太陽の畑く姉と嫁の対面く	181
27話	夏風邪と女医さんのヒミツ	194
28話	夏の終わりりと夜空の花	206
29話	スキマ話く橙の一日く	217
番外編	バレンタインデーく共通ルート編く	231
番外編	バレンタインデーく東風谷早苗編く	241
番外編	バレンタインデーく四季映姫編く	247
番外編	バレンタインデーく八意永琳編く	258
番外編	バレンタインデーく古明地さととり編く	275
番外編	バレンタインデーく水橋パルスィ編く	293
コラボ企画	敵か味方か、もしくは悪夢か?!く謎の仮面のヒーロー	現
るく		318
30話	紅葉デートく神々との遭遇く	333
31話	食欲の秋く家族団欒く	345
32話	スポーツの秋く魅惑の衣装く	351
33話	読書の秋?く大図書館と秋の大敵く	363
34話	十五夜の月く月下に佇むかぐや姫く	382
35話	秋の終わりりと一つの転機	397
36話	二人の生活の始まり	410
37話	白銀の世界と思い出	420
38話	忘符「凍てつく先に在るモノは?」	435
39話	想符「愛しき者達の心」	454

00話 プロローグ

どこにでも必ずいる。

自分はそのにいる筈なのに認識のされていない地味な人間は。だつて、それは僕だから…。

僕：大神 碧（おおかみ みどり）はどこにでもいる普通の大学生だ。

今年で20になり、背は男性にしては低く157cm。性格的には優しい人つて良く言われる。

顔だけは：中性的で、昔、それが原因で虐められてたので、今は長めの髪とメガネをかけて隠している。

まあ：そのせいで影が薄いだの、地味すぎて気が付かなかつただの、さんざん言われているけど。

あと服装もまずいのか、紺の、短めの着流しに黒のジーンズという、若者が着るにはすこし変な格好をしている。

自分は着ていて落ち着くから、別にいいんだけどね？

とはいえ、そんな地味で変わった格好をした人と、お近づきになりたいという人は稀有だ。

まあ、ボツチではないのが救いなのだけ…。

「よう、碧。飯食いに行かかねーか？」

こいつは茜ヶ久保 悟（あかねがくぼ さとる）

入学前からの付き合いでゼミも一緒の友人だ

背も高く、現在は陸上部に所属している

「うちもめつさ腹減つた。こんななら午前中の講義サボれば良かったわ」

こつちの金髪ギャルは井上 祥華（いのうえ しょうか）

見た目に反して、実はかなり真面目で成績は優秀。単位もほぼA判定で通る秀才だ。

この娘も同じゼミで席が隣と言うことで、話す機会が多かったのか

ら自然とつるむようになった。

「茜ちゃん、いいよ。あと、祥華さんはほどほどにね」

アスリートの期待の星、と同学年で一番の秀才…なんで、この二人とつるむようになったのかは、その内。

まあ、二人のお陰でボツチにならずに済んでいる事には感謝をしている。

「今日は何を食べようか？」

「俺は、がつつりビクトリアハンバーグ定食だぜ！」（あれ、かなり油すぎかったよな？）

「祥華さんは？」

「うちは、素うどんに天ぷら乗せかな。コスパ最高やもん」（うん、後でサラダを上げよう）

「碧はどうするんだ？」

「んー…無難にカレーかな？」

「またかよ？よくそんなに食べられるなー？」

「あれもコスパ的には結構いいんよね。うちも、そうしようかな？」

「いいでしょ？この学食が誇るメインメニューなんだし？」

そう。うちの大学の学食は、全国学食ランキングの上位に入っている。しかもそのメニューはカレーだ。いいじゃんカレー美味しいし、ここの安いんだしね？

そうして、シェフから出来上がったカレーを受け取り席を探し着く「しかし、この学食って無駄に広いけど…全席埋まる事なんてあるのかね？」

「入学式の後に使ったときでも全部は埋まらなかったもんねえ」

「確か1000人くらいは一齐に入れるんやったらつけ？ほんと学食だけなら日本一なんやないん？」

そうして、他愛ない話をしながら食事を済ませ、午後の講義を受ける（受けると言っても殆ど眠ってるんだけどね）

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

午後の講義も終了して学内カフェで三人でだべる。こういう時間は嫌いじゃない。

「そういえばさく、茜ちゃんこの前また告られたんだって？」

「うげ：祥華、なんで知ってんの？」

「や、告ったのがうちの友達やったんよ。悪い子やなかったやろ？
なんで断ったん？」

「まあ、こつちも悪い気はしなかったさ：でも、今は運動に専念したい
からって言うのが本音だ」

「茜ちゃんらしいわ。ところで碧はそういう話は“あれから”全然
聞かんけど：？大丈夫なん？」

「ん、こつちは大丈夫だよ。そもそも、あれ自体不測の事態だったんだ
から：」

「偶々、眼鏡を外して髪を上げてたのを見て一目ぼれ：押しに負けて
付き合ったけど、結局自分とは合わないからって一方的に別れて：勝
手だよな：つと、すまんなお前が一番辛いだろうに：」

「んー確かに今でもちよつと引つかかるけど：そこまで気にしなくて
いいよ？それより祥華はどうなの？一番モテそうなの？」

「うち？あゝ、昨日こそ告られたわ。でも、あの目はうちの身体が目当
ての目をしとつたから、即断つたよ」

このように僕の友人は非常にモテるのである。でも本人たちにそ
の気は無く大抵の場合は断っているけど：。

「まあ、あれやん。はやく皆で幸せになれるとええね」

「だな。ん、そろそろ部活の時間だな：すまんが俺はそろそろ行くぞ。
また明日な！」

「うちも、そろそろバイトの時間やね。したら遅くならんうちに帰る
んやえ？」

「二人とも頑張つてね。それじゃあまた明日」

そうして二人と別れ、僕もアパートへと帰っていく。

「もう、暗くなるのがこんなに早くなったんだねえ」

季節は秋：月夜を楽しむには良い季節：今日は土鍋でおでんでも
作ろうかな？なんて考えていると、すぐ横に鳥居が見えた。

「こんな所に鳥居：神社とかあったっけ？まあ帰つてもすることない
し行つて見るかな」

何かに惹かれるように僕は進んで行った。進む先は、ひたすらに荒れ果てた階段や狛犬…何年も手入れされていないのが、一目に分かるような光景だった。

「うわあ…これは酷いな…。あ、でもお賽銭箱だけは綺麗だ…小銭は…あるな」

この際、どんな神頼みでもいいからと、僕は願う…今とは違う環境で、素敵な出会いがある事を…幸せになれる事を…。

(いいわよ…あなたの願い…叶えましょう…)

「え?!何?!今、声が聞こえた…」

すると賽銭箱から、凄まじい光が溢れてきて僕はそれに包まれた…

01話 幻想入りく嫉妬姫との出会い

光が収まり、ようやく目を開けた僕が、最初に見た光景は…地底に広がる雄大な都だった。

「さつきまで、神社に居たはずなのに…ここは…いったい？」

少なくともさつきいた場所とは全く別の地域…いや、日の光の無い、まるで地底のような場所?…神社にいたはずの自分がなぜこんな所に…?

「とりあえず…情報収集かな…?あそこに橋があるから、そこにいつてみよう」

そうして、青年は橋に向かって歩き出す…そこで運命の出会いがあることを知らずに…。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

橋に佇む金髪の美女…特徴的な耳を持つ、“橋姫”水橋パルスィは、いつも考えていた…。

地上の光が妬ましい…

吹き荒ぶ風が妬ましい…

旧都の光が妬ましい…

皆の笑顔が妬ましい…

私自身の呪われた力が妬ましい…

恋人に裏切られ、憎悪と殺意のままに、橋姫としての役目を放棄し、鬼となりながら、恨みを晴らした私には…

この世界は眩しすぎる…忌むべき者が集う地底に来てもそれは変わらない…

この世の全てが羨ましく…この世の全てが妬ましい…

だから私はここで一人で待ち続ける…自身の幸せを…。

「あの…すみません?」

また一人…迷い人が来たのかしら?

そうしてパルスィは出会う…自身の運命を変える青年と…。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

橋の手前に行くと一人の女性が佇んでいた。

金髪のボブヘアーに、ペルシアンドレスのような服。

煌めくような緑色の目に：特徴的な“エルフ”のような耳の女性…。

ここまで来るのに誰とも出会わなかったし：よし、あの人に聞いてみよう。

「あの…すみません？」

すると女性がこちらに顔を向ける：うわ、正面から見られると、すごい綺麗な目だ：つとそうじゃなくて。

「えつと…突然で申し訳ないんですけど…ここはどこですか？」

「どこって…地底に決まってるじゃない？見た所、普通の人間みたいだけど…あなた、地上から来たんじゃないの？」

地底？地上？いや、その前に…普通の人間って…？

「多分、地上にいたと思うんですけど…神社でお参りしたら、急に此処に居て…。自分でもよく分からないんですけど…ここは日本じゃないんですか？」

「質問の多い人ね…妬ましい…。外来人かしら？…いいわ、教えてあげる。ここは幻想郷…忘れ去られたモノが集う楽園って所ね」

幻想郷…もしかして、あの時願ったから…？そうだよね、悪戯やドッキリにしては手が込み過ぎてるし…、何よりそう言われたら…しつくりくる”

「普通の人間がこんな所にいると危ないわよ？巫女達のお陰で前よりは安全になってるけど、それでも妖怪が大人しくなったわけじゃないわ」

巫女？妖怪？

「あの…幻想郷ってそんなに物騒な所なんですか？」

「ああ、そうね…外来人なら分からないわよね。幻想郷は文字通り“幻想”となった者達が集う場所。妖怪、鬼、死霊、天人…色々な種族が共存しているの。ここまでは大丈夫かしら？」

僕は頷いて答える

「物分かりがいいのね…妬ましいわ…。でも、共存と言っても力ある妖怪や鬼は人を襲うわ。そして、この地底にもそんな奴等はいるわ」

なら目の前のこの女性もそうなのだろうか？

「あの…あなたもそうなんですか？その耳…普通の人とはちよつと違
うみたいですし…？」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

この言葉にパルスイは自身のトラウマを想起させられた…。

パルスイが恋人に裏切られた理由…それがこの耳…橋姫の種族と
しての特徴である”エルフ耳”。

“「確かにパルスイはいい女性だと思うけど…やつぱりその耳は俺
には受け入れられない…。俺は普通の女性と幸せになるから」”

そう言つて、他の女に向かつて行った男を、パルスイは許さなかつ
た…。

結果、彼女は鬼となり女ごと男を殺し…自身も幻想となることで消
えて行つたのだ…。

ああ…こいつも同じか…。苛立ちを隠せないまま、彼女は答える。

「ええそうよ！死にたくないのなら、さっさと地上に行く事ね！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

耳の事を聞いた途端、女性は怒りを露わにして、自身に去る様に
言つてきた。

たぶん”耳”の話は彼女にとつてのタブーだったんだろう…せつ
かく親切に教えてくれたのに僕は…。

「ごめんなさい…。でも、あなたが悪い妖怪じゃないって事は分かり
ました。触れられたくない事を聞いてしまったのは謝罪します」

でも、可愛らしいと思つたのだ…彼女のその耳を…綺麗な緑色の目
を…。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

目の前の人間は何を言っているんだろう？自分は悪い妖怪だと脅
した筈なのに…恐れ逃げる所か謝罪までしてきて。

「あなた…私の話を聞いていたの？私は悪い妖怪よ？今、この場であ
なたを殺す事も出来るのよ？」

目元は隠れていて分からないけど、人間は微笑みながら答えた。

「本当に悪い妖怪なら、僕はもう此処にはいないでしょ？それに、あな

02話 博麗神社

地上に向かう事、暫くして。

パルスイさんと別れた僕は、いつもの恰好に戻り、ひたすら地上を目指して歩き続けた。

あれから2時間くらい経ったのかな？

道中で土蜘蛛の妖怪の『黒谷ヤマメさん』と、釣瓶落としの妖怪『キスメさん』に出会った。

ヤマメさんは明るく気さくな人で、キスメさんは逆に内気で無口な性格だった。

二人は元々、地底に封じられた妖怪で、本来人間を襲う悪い妖怪だったらしいのだが、地上との交流が再開されたのを機に、人間を安全に地上と地底へと送る役割を、今はしているそうだ。

その二人の好意で地底の出口まで案内してもらい、その先にある博麗神社へと足を向ける。



博麗神社。

ヤマメさんから聞いた話によると、幻想郷の東の端にあるとされ、幻想郷と外の世界を隔てている博麗大結界の境目に位置しているとされる。

神社周辺には森があり、これが境界の役目をしているらしい。

外の世界との狭間に存在している関係上神社周辺に外の世界の品が神社近辺に落ちていたり、外の世界の人間が迷い込んでいることがよくあるとの事。

つとあれがその神社かな？

何だか見覚えのある鳥居を潜り中に入るとそこそこ大きな神社があった。

「すみませーん。どなたかいらっしゃいますかー？」

すると奥の方から、気だるげな感じの巫女さんが出てきて…。

「はい…何か用？ひよつとして参拝客？」

この人がパルスイさんの言ってた巫女さんかな？

「あの、博麗神社って此処で合ってますか？幻想郷の事について教えてくれるって聞いて来たんですけど…？」

すると、目の前の巫女さんは何かを考えた後、ポンと手を叩き。

「あなた、ひよつとして外来人？」

「たぶん、そうです。気が付いたら地底に居たんで…」

すると巫女さんは、少し驚いた顔で…。

「地底？そりやまた珍しいところに出てきたのね？いいわ、色々教えてあげるから、その本殿の階段にでもかけて頂戴」

「あ、はい。どうも…それで、この幻想郷って何なんですか？」

すると、どこからともなくお茶と煎餅を持ってきた巫女さんが。

「そう慌てないで。そうねえ…まずは自己紹介から、私は『博麗霊夢』

…霊夢って呼んでね。一応、この博麗神社の巫女よ」

「僕は大神碧、普通の大学生です。よろしくお願いします霊夢さん」

「碧ね、よろしく。それで、あなたはここに来るまで、誰と出会って、何を聞いたの？」

そして、僕が初めて出会ったパルスイさん、案内してくれたヤマメさんとキスメさん。三人から聞いた話をそれぞれ伝えた。



「なるほどねえ…。大まかな事は大体それで合ってるわ。この幻想郷は、あなたの元々居た世界のスキマにある別世界。普段は“博霊大結界”という物に守られていて、外の世界から入ってくる事も、また、こちらの世界から外に出る事も出来ないの」

文字通り隔離された空間って事か…。あれ？でもそれだと…。

「なら、なんで僕は此処に入って来られたんですか？」

「結界っていつても完璧に対応できる訳じゃないの。稀に綻びが生じて、その瞬間に外の人が迷い込んだり、逆にこっちの住人が外に出たりもする。でも、普通ならあなたも聞いた通り、この近くの森に出るのだけど…こんなケースは初めてだから、私にも分からないわ」

「地底に出るってこと自体がイレギュラー…。因みに、この幻想郷ってどんなところなんですか？」

「そうねえ…まあ端的に言えばさつき、あなたが聞いてきた事と被る

「ただけど…」

・ 幻想郷は外の世界で忘れ去られ、幻想になった者が辿り着いた楽園、隔絶された世界

・ 住民は、神や妖怪が多く、人間は少ない

・ 博麗神社はその境界、結界の維持をしている場所

・ 巫女である霊夢は、人間と妖怪、神のバランスを保つべき調停者の様な役割をしている

「こんな所かしら？でも、なんで地底に着いたのかしら…何か心当たりはない？」

「なるほど…。そういえばここに来る前に声を聞いたんですけど。それが関係してるのかな？」

「声？それって…」

“ こんな声かしら？”

どこからともなく聞こえてくる声…間違いない、あの時間聞いた声！

「この声…まさかあなたの作業なの！」紫「！」

すると僕たちの目の前にスリットのような線と、リボンのような飾りが現れ、その中から金色の長い髪の女性が現れた。

「はぁーい霊夢、二元气にしているかしら？それに碧君も？この世界はどう？あなたの願いは叶いそう？」

そう言いながら宙に座り、妖艶な笑みを浮かべる女性…。

「あんた…しばらく見ないと思ったら…。何をしたの？」神隠しの主犯“『八雲紫』！」

03話 幻想郷の大賢者

「さて、洗いざらい話してもらおうわよ！紫！」

そうやって霊夢さんは宙に浮かぶ女性に詰め寄る。

「あらあら…手荒い歓迎は嫌いなだけれど？その前にお茶と煎餅を貰うわね？」

すると女性の手が歪んだ空間へと消え、中からお茶と煎餅を取り出す。後ろを見ると、在ったはずの物が無くなっていた。何なのこの力…。

「ふふっ…驚いてもらえて光栄ですわ。自己紹介をしましょう。私は『八雲紫』この幻想郷を創った一人です」

「それと、神隠しの主犯って肩書もある妖怪よ！まったく、最近は何もしていないと思つたら…何で外から人を連れてきたのよ！」

この二人…実は仲が良いのかな？でも確かに気になる。

「八雲さん」紫でいいですわ♪」紫さん…。何で僕をこの幻想郷に連れてきたんですか？」

すると、紫さんの顔から笑みが消え…。

「そうですね、今回の件は、色々な事象の重なった結果起きてしまった、ある意味異変とも言えるものなのよ」

「異変…ですって？でも、こっちには何の連絡も来てないし、そんな予兆も無かったわよ！」

「まあそうですね。今回の件は…博麗大結界の綻び、外の世界の歪み…そして、その子…碧の幻想化が重なって起こった事なの」

「僕の…幻想化…？」

「ええ、あなたは、外の世界での認識が薄れてきていた…心当たりはありますか？」

それはある…。実際、両親も既に亡くなり、親しく話すのは友人二人だけ…。周囲からの認識は無いに等しかった。

「幻想郷は、人に忘れ去られた幻想の行き付く楽園。あなたは此処に来る資格を有していた。そんな時、博麗大結界の綻びが同時期に生じました」

「その時にこつちに流れて来って言うの？だったら何で森に出て来ずに、地底に着いたのよ？」

「碧君…あなたが願った事は何？」

あの時、僕が願った事…。

「僕の願い…今とは違う環境で、素敵な出会いがある事…幸せになれる事…」

「そう、その願いを聞いた私が、境界を歪めたのですわ。あなたの運命を吸血鬼に見て貰って、それに相応しい場所にする様に…」

「レミリアも関わってたの?!でも、なんで人一人の為にあんた達が動いたの?」

「そうですわね…。実は以前、橙が外の世界に出た時に彼にお世話になったことがあるのよ?」

「橙が?…どういふことなの?」

すると、紫さんは目を細めながら語り始めた。

「碧君…あなたはひと月程前に、一匹の猫を助けたと思うのだけど…覚えているかしら?」

猫…あの、帽子を被ってた猫かな?

「怪我をして、車に轢かれそうになってたのを助けて…家に連れて帰って手当をして、餌をあげたのは覚えてます」

「そう、その猫は私の式神…まあ家族だったのよ。夜中にこつそり私を迎えに行ったのですけど…あの子、あなたに恩返しをしたいと言ってね。それで代わりに私がひと肌脱いだのよ」

文字通り…猫の恩返しか…不思議な巡り合わせだね…

「はあ…それなら私にも一声かけなさいよ。そうすればスムーズに話が進んだのに…」

「結界の綻びが予想以上に早まってね、声を掛けられなかったのよ。さて、大神碧君…ようこそ幻想郷へ。私達はあなたを歓迎するわ」

「ちよつと、紫!本人の意思もまだ確認してないのに!」さつき言ったでしょう?」??」

「今とは違う環境…そして出会い。ここならあなたの存在が消える事は無い。そして、運命の出会いもある…まあそれはあなた次第ですけ

ど…どうしますか?」

元の世界には友人二人がいる…でも、あいつらなら大丈夫だよね?

「僕は…ここで…幻想郷で、本当の自分を見つけない。そして、大切な人と出会いたい!」

「うん、良い返事ね。なら、碧君、暫くはうちで暮らさない」

「紫さんの家…ですか?」

「ええ…うちには式神が、藍と橙が居るのだけど…二人ともあなたを歓迎するわよ。それに、お手伝いをしてくれれば都度お給金も出すわ」

ありがたいけど…そこまでして貰ってもいいのかな?

そんな考えを読んだかのように…。

「いいのよ?あなたは私の家族を救ってくれました…。恩には恩で報いる…それが私の矜持ですの」

「なら、ありがたく住まわせて貰います。えっと…これからよろしくお願いします。紫さん」

「ええ、こちらこそよろしくね。うちの子も喜ぶと思うわ。じゃあさっそく家に行きましようか?」

僕がえ?と反応するよりも早く足元に隙間が出来て、僕はそれに吸い込まれて行きました。

妖怪の力って本当に怖いんだな…。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「という訳で碧君は貰っていきますわね♪」

「待ちなさい紫。あなた…本当はもう運命の人を知っているのではありません? 何でその人と合わせてあげないのよ?」

「あらあら、霊夢、あなたともあるう方が、感の悪くなったものね。」

「んだと!」碧君が居た場所、出会った人…もう一度考え直してみなさない?」

そうやって紫はスキマへと消えていく…碧が出会った人…私、紫、ヤマメ、キスメ、パルスィ…。まさか!運命の人って?!

04話 いらつしやいませ八雲家

紫さんの“スキマ”の中はとても不気味な光景だった。

色んな所から目が覗いてきていたり、その昔、戦争で消えた零戦が置かれていたりもした。

これが紫さんの能力…境界を操る程度の能力”なんだ…。

幻想郷の住民にはそれぞれ特有の能力が備わっている。

紫さんなら”境界を操る程度の能力”、霊夢だったら”空を飛ぶ程度の能力”

…パルスイさんはどんな能力なんだろう？

そして、これらを駆使して行われる弾幕ごっこという戦いも聞いた。僕にはとてもじゃないけど無理だけどね。

そうして、紫さんの後ろを付いて少し歩くと、古びたお屋敷のような場所に出てきた。ここが？

「ようこそ、碧君。ここが今日から、あなたが暮らすことになる八雲家よ。藍、橙、お客さんのお出迎えよ」

するとどこからともなく。

「はっ、紫様…この方が例の…？」

「ええ、そうよ。橙の命の恩人よ」

白と青を基調とした、道士服のような恰好をしたキツネ耳の女性は一瞬でこちらに来ると…。

「お前が橙を助けてくれたんだな！ありがとう！本当にありがとう！」

とすごく嬉しそうに抱きしめてくれる…嬉しいんだけど…。

僕の身長は157cm、対して彼女は180cmはあるんじゃないかと言ってくれるの大きさ。

抱き締められると当然身長差で、僕の顔は彼女の胸に埋まってしま
う訳で…。

「むぐー…むぐぐーむー！」

「ここら藍、ダメでしょ、恩人を窒息させたら」

するとキツネ耳の女性は、顔を真っ赤にして。

「し、失礼致しました！…ごほん。私の名前は『八雲藍』紫様の式神、従者をしている。橙の事は本当に感謝しているよ」

「いえ、あつと僕は、大神碧です。今日からお世話になりますので、よろしくお願いします！」

「ああ、こちらこそよろしくな。ん？橙？隠れてないで出て来ないか、お前の恩人なのだろう？」

そういつて藍さんの後ろに隠れていた少女が出てくる。

赤と白を基調とした衣装、それと見覚えのある緑の帽子…あの子が…。

「あ、あのっ！八雲橙です！藍さまの式神をさせて貰ってます！あの時は助けて貰って本当にありがとうございました！」

「ううん…僕は何もしてないよ。助かったのは君の運が良かったから。あの後急に居なくなっただから心配だったけど、元気そうでしたよ」

すると橙ちゃんが俯きモジモジとし始めた…どうしたんだろ？

「橙？お願いしたいことがあるんだろう？」

「は、はいっ！あのですね碧様…『碧お兄ちゃん』って呼んでもいいですか？／／／」

お兄ちゃん…兄弟が居なかった僕からしたら新鮮でいいな。

「うん大丈夫だよ。他にもしてほしいことがあったら、気兼ねなく言ってね」

「じゃあ…あの時みたいに頭を撫でて貰っても良いですか？／／／」

あの時…そういえば落ち着かせる為に、ずっと頭を撫でてあげてたんだよね。

「いいよ。おいで、橙ちゃん」

すると僕を背もたれにするように橙ちゃんは飛び乗ってきて。

「えへへ／／／お願いします。碧お兄ちゃん♪」

そうして橙ちゃんの頭を撫でていると、視線を感じる…つて紫さんと藍さん？

「弟と妹っていいわね〜藍」

「ホントです、これだけでご飯三杯は行けますよ…ああ…ちえくん…

」

生暖かい視線に見られながらも橙の頭を撫でて行く。

そうして、暫くの間、橙ちゃんの頭を撫でてあげました。満足して貰えて何よりだ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

暫くして居間でくつろいでいると…。

「そうよ藍ちゃん、新しい家族も迎え入れた事だし、今日は美味しい物を食べましょう」

「いいですね。でしたら、すき焼きなどは如何でしょうか？」

すき焼きとか、もう何年も食べてなかったから聞いているだけでお腹が鳴ってくる…。

「ふふっ、決まりみたいね。なら一番いい食材を用意しなきゃね」

そうして、その夜はみんなですき焼きパーティーを楽しみました。

こんな良い気持ち…いつ以来だろう…。

色々と不安な事も多いけど…やっぱりこういう温かいの…いいなあ。

“あの人”と、こんな時間を過ごしてみたいな。

05話 八雲家の日常と世界の壁

八雲家に来て早三日。僕は今、藍さんと一緒に朝食を作っている。「藍さん、焼き鮭の焼き具合ってこれぐらいでいいですか？」

お味噌汁を作りながら、こちらを覗いてくる藍さん。

「ふむ、大丈夫だよ。もう焼き魚は碧に任せてしまっても良さそうだね」

「いえ、まだまだですよ。一人暮らししてた頃は、いつもパンとコーヒーだけでしたし…。朝食を作るのって、大変ですけど楽しいですね」

自分の為だけじゃなく、家族の為に作る料理。少しでも美味しく食べて貰いたいという、料理人の気持ちがあった気がする。

「ふふっ…良い傾向だ。よし、味噌汁も出来たし、私は紫様と橙を起こしに行ってくるから、碧はご飯を用意しておいてくれ」

「了解です」

そう、僕の仕事、その一つが八雲家の家事手伝い。

とは言え、今まで最低限の家事しかしたことが無かった僕は、藍さんの助手という形で、家事を覚えて行ってる。

幸いな事に、八雲家には家電製品もあるので、今までと同じような感じで家事はできる。

でも、料理はいつもレトルト食品や外食で済ませていたので、これには少し苦戦した。

包丁で、野菜の皮を剥いたり、魚を捌いたりした事は無かったので覚えるのが大変だった…何度指を切った事か…。

ただ、藍さんの教え方が上手で、初心者僕でも練習していくことで何とか基本的な事はできるようになった。

さて、ご飯と味噌汁と、焼き鮭と漬物。四人分用意をして…。そろそろかな？

「紫様、ちゃんと歩いて下さい」

「ん…まだ眠り足りないのに…」

「ふわぁ…藍しやま…眠たいですう…」

眠そうな二人を引つ張りながら藍さんが席に着かせる。

「二人ともおはようございます。朝食できてますよ?」

「んく…おはよく碧君…いい匂いねく」

「お兄ちゃん、おはようです。お魚が美味しそう…」

「さあ、じゃあ手を合わせて…」

「二「いただきます」二」

そうして八雲家の一日が始まる。

「相変わらず藍の作るご飯は美味しいわねく。この焼き鮭の焼き具合も丁度いいわよ」

「紫様、それは碧が作ったんですよ?」

「お兄ちゃんが?すごい!橙、このお魚大好き!」

「ありがとう、橙ちゃん。そう言つて貰えると嬉しいよ」

そうして朝食と片づけを済ませ、暫く雑談をしていると。

「碧君がうちに来て、もう三日…此処には慣れたかしら?」

「ええ、最初は少し不安もありましたけど。藍さんが色んな事を教えてくれて、色んな事を覚えられて…とても充実してます」

藍さんは少し照れくさそうにしながら…。

「碧の覚えが早いからだよ。こっちも、色々覚えてくれて助かるし、何より教え甲斐があるよ」

「そう、なら良かったわ…。でも、引つ張つてきた私が言うのもあれだけど…、こっちにきて…外の世界に未練は無いのかしら?」

それは…

「正直、自分の事を覚えている人は友人だけだったので…その二人の事が、少しだけ気がかりですけど…まああの二人なら、僕が居なくてももしかりやつてるでしょう」

「あら、そんなに自分の事を卑下するのは良くないわよ?…そうね、あの二人の事を見てみましょうか?」

「え?!そんな事できるんですか?」

「ええ、私の境界を操作する程度の能力なら、結界の干渉は受けられないから、問題なくできるわ。それで、見てみる?」

「……はい。お願いします」

正直、気にならないと言ったら嘘になる。自分の唯一の友人…その二人からも忘れられていたら、と思うと…。

「なら、まずは男の子の方からね…」

すると、スキマに茜ちゃんの写真される…でもその姿は…。

「え…？茜ちゃん…？なんで、そんな姿をしてるの？それにタバコなんて前は吸って無かったのに…」

そう、写しだされた茜ちゃんは、前のようなスポーツマンのような姿では無く、髪を染めタバコを啜えながら歩く、不良のような姿に…。

「幻想郷と外の世界は時間の流れが違うの…そうね、外の世界だと、あなたが居なくなつて二か月と言つた所かしら？次はこっちの女の子ね…」

茜ちゃんの写されたスキマとは別のスキマが開かれる…。そこに居たのは…。

「祥華…さん…？」

あのしつかり者だった祥華さんが、自慢の金髪も黒髪混じりのぼさぼさになり…。自分の部屋に引き籠り、酒瓶の山に埋もれてる…、そして今もまた、強そうなお酒をラツパ飲みして泣いている…。

何これ…。この二か月で二人に何があつたの…？

「この二か月で何があつたのか…二人の声…思い…聞いてみる？」

「はい、お願いします…聞かせて下さい何があつたのかを…」

紫さんは少しずつ…何があつたのかを聞かせてくれた。それは僕を驚愕させるには十分な内容だった。

「まず、茜ヶ久保君…。あなたが大学に来ないのを心配して、真つ先にあなたのアパートに向かつたの。でも、あなたの荷物は幻想入りすると同時にこちらに運び込まれた。つまりもぬけの殻…。ここまではいいわね？」

僕は頷いて答えた。

「幻想入りすることで、あなたの部屋に何も無く。そして、あなた自身の在学自体が無かつたことにされた。本来なら友人の二人も忘れる筈だった。でも違つた、あの二人はあなたの存在を覚えていた。自分の知り合いや職員にあなたの事を聞いた茜ヶ久保君は絶望した…自

分の友達…いえ、親友がある日突然、世界から消えたのだから…」

そして、映し出される茜ちゃんの姿…。

「なんで…：…なんで誰も覚えていないんだ！碧は俺達と一緒に居た！確かに此処に居たのに！俺達の時間は…全部まやかしたのかよ！？」

そこにいつもの元気な姿は無く…：世界に絶望した彼の姿があった。

「そうして、彼は絶望し、大学を辞め、約束されていた将来を棒に振り…：今の姿になったの…：。さて、次は彼女の事についてね…：」

また別のスキマが開かれる。

「井上さん…：彼女もまた、あなたの事を覚えていた。茜ヶ久保君から連絡を貰った彼女は、すぐさまあなたの家に行ったの。そして何も無くなったあなたの部屋を見て、悲しみに暮れたわ…：」

別のスキマに写される祥華さん

「嘘やろ…：う…なんで居なくなっただん？…：なんで誰も碧の事、覚えてないの…：。碧が居ない世界なんて嫌や…：。まだ、うちの気持ちも伝えてないのに…：なんで消えてしまったん…：。碧と一緒に勉強できるから、一緒に食べるご飯が美味しいから…：。うちは頑張ったんよ？…：なのに…：なんで…：」

祥華さん…：そんな風に想ってくれてたんだ…：。彼女の想いにも気が付かないで…：僕は…：。

「彼女も同様に、大学を、アルバイトを辞め、自宅に引き籠り…：毎日お酒に溺れる日々を過ごす様になったの…：。もしかしたら…：。外の世界でのあなたの運命の人だったのかもしれないわね…：。これが外で起きた…：あなたが居なくなっただこと起こった出来事よ？」

何も言えなかった…：確かに二人はいつの間にか仲良くなっていた。

でも、だからこそ、いつも輝いている二人は卒業と同時に…：いや、それよりも前に自分の事を忘れるんだろうと思っていた。

それがどうだ？実際は、二人は幻想という壁を越え、自分の事を覚えていた所か、悲しみと絶望の淵に居る…：。

「紫さん…：。僕は…：間違った事を願ったんでしようか…：」

「いいえ、あなたが願わなくても…：近いうちにあなたは幻想になって

いた。ただ、それ以上にあの二人との絆が強すぎたの…これは私にも予想できなかったから…」

「あの二人に…大切な友人…いえ、親友に、何かしてあげられないんでしようか？」

「…そうねえ…幻想となったあなたを、今更外に戻しても世界がそれを拒絶するでしょう。そうするとあなたの存在は完全に消えてしまう。それは私としても本意ではないわ」

「これ以上誰かを悲しませたくない…どうすれば…。すると隣から藍さんが…」

「碧、向こうに行けないのなら、せめて手紙を送ったりするのはどうだろうか？紫様ならそれも可能だし。今、碧の心にあることを全て書いて、二人に送ってあげればいい」

「藍さん…そうですね、そうします。紫さん…頼めますか？」

「ええ…もちろんよ。ただ、さっきも言った通り、幻想郷と外の世界では時間の流れが違う。だから、なるべくなら早く…そうね、今日中に書くことを進めるわ」

「ありがとうございます！では今から早速書きます…あ、でも仕事は「今日はいいわよ」…すみません…」

そう言つて僕は部屋へと向かった。



「紫様…」

「分かってるわよ…。でもこれは必要な事なの…碧が自分自身の大切さに気が付く為には…ね」

数千年単位で生きてきた自分にも、こういったやるせない感情が湧きあがる…。

ホント…恨むわよ、外の世界の神様を…。

「だからこそ、彼には…いえ、彼等には幸せになつて欲しいの…たとえば世界の壁があつても、時間の壁があつても…その絆は失われないという事を覚えておいて欲しいのよ…」

06話 それぞれの道

碧が居なくなつて二ヶ月…。

あれから俺は、周りの全てを憎んだ。

碧の事を覚えていない奴等、そんな人は存在していないという事実、そして、本当に存在したのか疑つた自分自身を。

部活はもちろん、大学も辞め、今ではその辺のゴロツキと変わらなような事をしてる。

こんな俺を、碧が見たら笑うだろうな…。でも、その碧はもう居ない。大切な親友は…もう。

俺が碧と出会つたのは、入試の時だった。

所属校組が仲良さそうに話している中、俺の隣に窓の外を見ている、他校の制服を着た人が居た。

俺も県外からの入試だったので、多少緊張と寂しさもあつたので、そいつに話しかけてみた。

そいつは隣の県の出身で、此処の学科の雰囲気が入つたから受けに来たという。

まあかく言う俺は、あまり頭が良くなかつたので、自分を鍛えなおす為に、そして新しい出会いを求めて県外まで来たのだが…。

話してみると、この大神というやつは中々良いやつで、色々と馬が合つた。

そして、面接ギリギリまで話をして、合格したらまた会おうと約束をした。

季節は流れ、無事に合格して入学した俺は、まず初めに大神を探した。

すると大神も合格していたみたいで、なんとゼミまで一緒という二重の意味で嬉しい出来事だったのを覚えている。

向こうも、俺の事を覚えていたみたいで、“これからよろしく”と言ってくれた。

俺は、学生寮に入ったのだが大神はアパートで独り暮らしをしているみたいで少し羨ましかった。

顔見知り、同じゼミという事もあってか、講義も同じ物を履修した。でも、頭の良くなかった俺は直ぐに挫折した…。体を動かすことは得意なんだがやはりこういった知識関係は苦手だ…。

そんな俺に、大神は分かりやすく勉強を教えてくれたり、飯を奢ってくれたりした。あいつが居なかったら俺は直ぐに退学していたかもしれない。

いつしか、俺は碧と名前と呼ぶようになり、向こうは俺の事を茜ちゃんと愛称を付けて呼んでくれた（少々恥ずかしかったが…）

そんな中にもう一人、井上という女が話しかけてくるようになった。

井上はとにかく頭が良く、入試をトップの成績で合格した才女らしい：まあ見た目は単なるギャルなのだが。

俺としてはギャルはあまり得意ではなかったので、少々話ずらかったが、碧の取り成しと井上の性格のお陰で直ぐに仲良くなれた。

ある程度生活が落ち着いた頃、兼ねてから興味があった陸上部に入った。

この大学は運動の名門でもあり、元々陸上をしていた俺は直ぐにエースになれた。

名門の：しかも一年でエースになれた俺は、一躍注目の選手となった。

名前が売れば、周りに集まる人も増える、最初は歯牙にもかかけられていなかった俺も連日のように告白されるようになった。

しかし、そんなやつらは一目で欲望に塗れているのが分かったので、俺は即座に断るという選択をした。

すこしでも、俺と近づきになりたいという連中が来る中、碧と祥華だけは、いつもと変わらない態度で接してくれた。

俺はそんな三人で過ごす時間が好きだった。

一時期、俺と祥華が付き合っているのではと噂されたが、こっちにその気は無く、祥華にも想い人がいるのを俺は知っていた。

そんな時、珍しく碧から相談が持ちかけられた。なんでも、告白されたのだけれどどうしたらいいのか？だ。

普段は眼鏡と長い髪で顔を隠しているが、碧は中性的な顔で、実際隠していなければかなりモテていただろう。

聞いてみると、偶々眼鏡を取って、髪をかき上げた時に顔を見られてしまったらしく、そのまま一目ぼれされたそうなの…。

交友関係の狭い碧には丁度いい機会だと思い、俺は交際を勧めた：でも、それは間違いだったんだ…。

彼女という存在が出来た碧は中々俺達との時間が取れず、会うと気まずそうに謝ってくる。

こっちは、碧が幸せならそれで良かったんだが…正直あんな顔はさせたくなかった。

碧という繋ぎが無くなった俺と祥華も自然と会話は少なくなった。そんなとき、碧から話があると言われた。

祥華と二人で聞いてみると、彼女から別れてくれと言われたそう…だ。

余り聞きたくなかったが、理由を聞いてみると…。

“あなたは優しすぎて面白くない。顔目が好みだったから付き合ったけど、やっぱり私には釣り合わなかった”

との事だった。…正直聞いていて胸糞悪くなった。自分から押し迫ったくせに、何て自分勝手な！

隣で聞いていた祥華も同様だったようで珍しく怒りを露わにしていた。

優しすぎて面白くない。マンガやドラマでも聞く言葉だが、優しい事の何が悪い？こうして救われた人間が少なくともこの場に二人は居るのに。

それから、暫く元気の無い碧を俺達は二人でフォローした。なんせ親友なんだからな。

そうして、いつもの日常が帰ってきたと思った矢先…その事件は起こった。

いつも通り大学に来ると、祥華の姿はあるのに碧が居ない。

祥華に聞いてみたが今日はまだ見ていないとの事だった。

心配になった俺達は電話を試してみたが、圏外の通知が響いてくるだ

け。

午後になつても来なかつたので、俺達は講義を休み、碧のアパートに向かった。

チャイムを鳴らしてみただけど何の反応も無い…そこでドアを開けてみると…なんと開いたのだ…と言うことは中に居る？

そして、中に入った俺達が見たのは…何も無い部屋…まるでそこには誰も住んで居なかつたかのような空き部屋。

三人でのんびり過ごしたコタツも…好きな音楽を聞いていた音楽プレーヤーも、寝床に使っていたロフトにも…何も残されていなかった。

俺達は直ぐにそこを出て、管理している不動産屋に連絡を取った。ここに住んで居た大神碧は引越したのか？と。

すると、帰ってきたのは驚愕の返事だった…“その部屋にはこの二年間…誰も住んでおりません”。

意味が分からなかつた。俺達は確かにあの部屋で三人で過ごした。それなのに…。

さらなる不安になつた俺達は大学にも問い合わせた。大神碧は退学したのか？と。

しかし、そこでも…“そのような生徒は大学にはおりません”と…。

俺と祥華は手当たり次第、知り合いに聞いて回った。大神碧を覚えているか？…と。しかし誰一人覚えて居る人は居ない。

極めつけは役所に確認したところ、その人物に該当する戸籍は存在しないとされた…。

目の前が真っ暗になつた…。

そうして、碧が居なくなつたまま二ヶ月が過ぎた…。

最初はいつも通り大学に通っていたが…碧の居ない生活は灰色のそれだった。

祥華とも連絡を取らなくなり…ついに俺も大学を辞めて実家に帰った。

この先俺は、どうなるのだろうか…絶望しかない今の状況に恐怖しな

がら日々を過ごす…。

そんなある日、一通の小荷物が俺宛に届けられた…誰からだ？差出人は…?!

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

あれから二ヶ月…。

うちは、なんも考えられんまま、酒に溺れ、現実逃避を続けてる。自慢やった髪もボサボサになり、色もまばらになってる…。

喉もアルコール焼けして、元々綺麗な声やったのが、ハスキーボイスになってしまった。

でも、もういい…一番見て欲しかった人、うちの大事な人…碧はもうおらへん…。

うちが碧と初めて出会ったのは、入学式が終わってゼミ分けされたときやった。

少なくとも、これから四年間は一緒に過ごす人達…。

そんな中でも碧は、地味で目立たんし、お世辞にも人付き合いが得意なタイプとは言えんかった。

でも、最初の食事会の時…。

将来の為に、少しでも貯蓄をしたくて、素うどんにかき揚げという低予算のセットを注文して、みんなで食べ始めた時…。

“そんなんじや健康に良くないよ？これ上げるから、良かったらどうぞ？”

て言いながら、うちにポテトサラダをくれたんよ。

まあ、正直に言つて、自分の容姿やスタイルには自信があつた…高校の頃から告白も沢山されたし。

でも、そういつた連中は全員うちの顔や身体目当てなのが丸分かりやった。

この人も似たような人なのかと思つて、顔を見てみた…。笑顔やつた。

ただ純粹に、うちの事を心配して、自分の食べる物をくれた。こんな笑顔できる人つておるんやな…。

興味の出たうちは自己紹介をして名前を聞いた。

大神碧：県外から来た人。

身長もうちとあんまり変わらんくらい低くて、見た目は眼鏡や長い髪で隠れてて地味やけど、その隙間から見えた優しい笑顔の印象的な人。

ゼミが同じ事もあって、よく話すようになったんよ。講義で分からん事があつたら、すぐにうちに聞いて来たりした。

最初は大神君って呼んでたんやけど、何度か話すうちに自然と碧って呼ぶようになった。

だって、名字やと他人行儀やし：せつかく綺麗な名前なんやから呼んであげたいやん？

碧もうちの事を祥華さんって呼んでくれるようになった。呼び捨てで良いって言ったんやけど、本人が照れくさがってさん付けで妥協した。

そう言えば碧の隣にはいつも友達がおる。茜ヶ久保悟っていう、まあ見た目と同じアスリートでイケメン：碧とは正反対の人やった。なんでも二人は入試の時に知り合ったみたいで、それ以降仲良くしてるようや。

大学生活も暫くして、落ち着いた頃から、うちの所に、告白してくる男が現れてきた。

それこそ、同学年から先輩まで、色々な人から告白された。

でも、みんな高校の時と同じ、ただ自分の欲望を満たしたいだけ。

もしくは、うちを彼女にできればステイタスっていうような連中ばかりやった。

うんざりやった：大学にまで来て、こんな気分になるなんて最悪やったわ。

そんな連中と付き合うくらいなら、少しでもバイトをして稼いで、一人前になりたい。

やから、うちはひたすらバイトに専念した。もちろん勉強の方も欠かさずに頑張った。

そんな時、碧から声を掛けられた：「祥華さん。良かったらお昼、三人で一緒に食べない？」って。

一緒におった茜ヶ久保君もびっくりしていたけど、うっぷんの溜まったうちはその誘いを受ける事にしたんや。

相変わらず、コスパ重視のうちの注文に、碧はまた、自分のおかずをくれた。

それから、うちの愚痴を聞いてくれたんや。

“ならば、これからは三人でお昼を食べない？そうしたら祥華さんも茜ちゃんも声を掛けられる事が少なくなるんじゃないかな？”

この提案には、うちも驚いたなく。向かいでハンバーグを食べてた茜ヶ久保君も驚いてむせとつたし。

まあ、でも、すぐれる物には何とやらって言うし、その提案に乗ったんや。したら、途端に声を掛けてくる男が減ったんよ。

これにはうちも大助かりやった。そんで、そのまま三人でお昼を食べるって言うのがお約束になったんやけど…。

ある時かな？茜ちゃん（この頃には愛称呼びになっとつた）が部活で忙しくて中々参加できなくなったんよ。

したら、途端に、声を掛けてくる男が出てきてなく。やっぱり茜ちゃんとの噂があったから声を掛けて来んかったんやなく。

で、食事にも関わらず、ナンパしてきたやつがおつて…「そんなダサイやつと居ないで俺と一緒に遊びに行こうぜ」なんて言ってきたんや。

うちはカツとなって言い返そうとしたんやけど…。

“食事中に無粋だよ？それと、人の彼女に何言ってるの？バカなの？発情してんなら街に行けば？”って言い返してたんよ。

あれはスカツとしたなく。その後、“勝手に彼女とか言つてごめんね”って謝ってくれたんやけど…。別にうちは嫌や無かったわ。

そんな感じで…碧の優しさに、少しずつ惹かれて行つたんやけど…。決め手はあの時かな？

講義が終わって、棟の屋上にあるテラスで休もうと思つて行つたら、そこには碧がおつたんよ。

でも、普段と違って、眼鏡を外して、髪は風に靡いて…その素顔がはつきりと見えたんやけど…。

茜ちゃんからこっさり聞いとったけど、本当に綺麗な中性的な顔。物憂い気な表情…風によつて揺らめく長髪。

夕日の反射と相まって、その光景は一種の絵画とさえ思えるくらいに綺麗なモノやった。あの光景は一生忘れんと思う。

そして、そんな彼…碧に完全に惚れたんだと、自覚してしまった。暫く眺めてたんやけど、こっちに気が付いた碧が、慌てて眼鏡を掛けて、髪で顔を隠しこっちにやってきた。

“ごめん、ここに居た事…。僕の顔の事…できれば黙っててくれると助かるんだけど…”

あんなに綺麗な顔をしていて何で？と思つたうちは思い切つて聞いてみたんよ。したら…。

“昔から、この顔で虐められてね…。それ以来髪と、眼鏡で隠してるんだ…”

うち、思いつきり地雷踏んでもうたんやね…。でも、本当の友人なら教えて欲しかったわ。

やから、思い切つて言つてみたんよ。

「なら今度、碧の家に遊びに行つてもええ？そこでちゃんと顔を見せてくれたら内緒にしとくわ」

今考えても、何をうちはトチ狂つた事を言つたんやろうね…／＼でも碧は何か勘違いしたみたいで…“ご飯を食べに…かな？”いいよ、鍋でも用意しておくよ”って、この鈍感男め！

それから、三人で碧の家で鍋パーティもしたんよ。あれは楽しかったな。

碧は家事が最低限しか出来んかったから、殆どの調理をうちがしたんよね（これでも料理位はできるんよ？）

こんな時間がずっと続けばいい…そんなある時、碧から相談が持ちかけられたんよ…。

茜ちゃんと二人で聞いたその内容は、うちを驚かせるには十分な内容やった。

“素顔を見られて、そのまま告白されたんだけど…どうしたらいいんだらう？”

うちは胸が張り裂けそうやった…。碧の素顔を知つとるのは茜ちゃんを除いたらうちだけ…。確かに普通の女ならあの顔を見たら声を掛けたくなる。

すぐさま反対しようと思った。やけど、茜ちゃんが…。

「付き合ってみればいいじゃん？碧の人付き合いの悪さを克服できるチャンスじゃねえの？」って。

確かに付き合う＝結婚するという訳や無い…。それに碧にとってプラスになるなら、それが一番の選択…。

そう思つて、うちもその件に賛成した。本当にバカや…。自分の気持ちを伝えれば、それで良かったのに…。

それからは、碧は彼女との時間を大切にし、うちと茜ちゃんもそれぞれ、バイトと部活に専念していった。

でも碧が彼女と付き合い始めて三ヶ月くらい経つたとき…碧から別れた事を告げられたんや。

そして、その理由を聞いてうちは激怒した。自分から顔目当てで付き合つて、面白くないからハイさよなら…ふざけんなや！

でも、同時に安堵もした…。ああ…これでうちにもチャンスができた…また、楽しい時間が帰ってくるって。

傷心の碧を慰めるように、うちは毎日、碧の家に行つて、ご飯を作つてあげた。

少しでも自分をアピールするために頑張つた…。でも、それがいけなかったんかなあ…。

ある日、碧が消えた。

文字通り…この世界から…その存在が消えた。

最初は何かの冗談やと思つた。茜ちゃんもそうやったようで、友人や職員、果ては市役所まで行つて確認した。

でも、告げられたのは…“そんな人物はこの世に存在しない”という事実…。

意味が分からなかった。でも実際に、うちのスマホで撮つたはずの三人の写真に、彼は映つとらんかった。

まるで、最初からそこには誰もおらんかったかのように…。

傷心の碧に取り入ろうと思った罰が当たったんかな…。

その日から、うちは自分の世界に引き籠った…。ひたすら酒を飲み…酔いつぶれ、夢の中でだけ彼に会える。

夢と現実の境界…そんな言葉があるなら、うちは今、そこにおるんや…。

そんな生活を二ヶ月くらい続けていたある日…母親から小荷物が届いていると聞いた。

朦朧としながらも、うちはその荷物を受け取り、差出人を確認してみた…?!これって?!

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

差出人は…大神碧…?!

それを見た俺はその場で荷物を開けた。

中には手紙と小箱が入っていて…。

『茜ちゃんへ。』

この荷物と手紙が無事に届いている事を祈ります。

最初に、急に居なくなつてごめんね。

多分、僕はもう、元々居なかった人間になつてると思う。

でも、茜ちゃんは覚えてくれていた。その事で苦しませてしまつて、本当にごめんね。

茜ちゃんは大学に入つて出来た、僕の大切な親友だ。

そんな親友を助けてあげられない事を、心から謝罪させて下さい。

僕はもう、そっちの世界に戻る事はできないんだ。

本来なら、茜ちゃんも僕の事を忘れる筈だったんだけど、それ以上に、僕たちの絆は強かつたらしい。

そのせいで、茜ちゃんを苦しませて、絶望させてしまつて。

何もしてあげれないけど、これだけは言わせてほしいんだ。

僕の大切な親友、茜ちゃん、君が居なかつたら、僕はもつと早く消えていたかもしれない。

君と出会えて、本当に良かった。二年間だけど、色んな事をして、色んな事を話したね。

だから、感謝してる。何度言葉にしても言い表せないくらいに感謝

してる。

本当にありがとう。僕の親友、茜ちゃん。

そして、最後に、もう連絡を取ることも出来ないけど、いつでも君の活躍を見守ってるから。

だから、見せてね君が活躍する姿を。

お守りになるか分からないけど、僕からの最後の贈り物を同封してるから。

いつでも明るく、元気な君に早く戻ってね？

今まで、ありがとう。

大神 碧。』

その手紙を読み終わった俺は、涙が溢れそうになった…でもそれを堪えて、同封の贈り物を開けた。

中にはペンダントが入っていた…そして、開封式になったその中には…俺達三人の写真が…。

その瞬間、俺はただひたすらに泣いた、玄関先にも関わらず…。心配した両親が来てもなお、泣き続けた…。

そして、涙を流しつくした俺は決意した。

ペンダントを見ながら…。あいつに…碧に会っても恥ずかしくな
一流のアスリートになることを。

それから数年後…。

彼は陸上を続け、家庭を持った。三人の子供にも恵まれて。

そして彼はオリンピックで金メダルを取った。日本人初めての陸上短距離での金メダルを。

そんな彼の首には、メダルと共に、輝くペンダントがあった。

「見ているか？碧？俺はこれからも走り続ける。だから、いつまでも安心して見守っていてくれ！」

そうして、彼の物語は紡がれていく…幻想ではない現実世界で…。



縫るような思いでその荷物を解く…そして、中には一通の手紙とペ

ンダントが…

『祥華さんへ。』

この手紙を読んでいるってことは、少しは酔いが醒めてるのかな？

(なんでばれてるん／＼／)

急に居なくなつてごめんね。

多分、僕の事は世界から消えた存在になつてる。

祥華さんは覚えてると思うけど、他の人は誰も覚えていないと思うから。

そのせいで祥華さんを苦しませて、引き籠らせる様な生活にさせて、ごめんなさい。

出来る事なら、直ぐにでもそっちに行つて、慰めてあげたい。

あの時、僕が落ち込んでいた時に、祥華さんがしてくれたいに。

でも、今の僕が出来る事は、こうやって最後の手紙を送る事だけ…
本当にごめんね。

もし、僕が、そっちの世界に戻ったら、今度こそ誰からも忘れ去られてしまう。

僕の我儘で申し訳ないけど…祥華さんには僕の事を忘れて欲しくなかつたから…。

それと、祥華さんの気持ちに、気付いてあげられなくてごめんね。
違う出会い方…違う運命なら…祥華さんと付き合ってたのかな？

僕が傷ついていた時に、祥華さんが何かを思つて、それを気にしているなら、それは違うよ？

祥華さんのおかげで僕は立ち直れた。前を向くことが出来た。

だから、傷付かないで？自分を責めないで？

もし、祥華さんが嫌じゃなければ、このペンダントを受け取つて欲しい。

僕達の絆を信じて…。

勝手な事ばかり書いてごめんね。

これが最後になるけど、いつもの綺麗で、明るい祥華さんに戻つて？

そして、自分の夢を見つけて、それを誇れるようになって。

それが僕の望み…。
今まで本当にありがとう。

大神 碧。』

そして、一緒に入っていたペンダントの中には…碧と茜ちゃんとうち…三人で撮った写真と。

碧とうちが二人きりで撮ったプリクラが入ってた。

「ああ……」

ボロボロと流れてきた涙が止まらんかった。

碧が此処に居た証明。私達の絆…。最愛の彼の写真を見ながら、私はその夜一晩中泣き続けた…。

翌日、私は自慢の長髪を黒に染め、バツサリと切ることにした。

時間は過ぎ去り…十年後…

「社長、そろそろ会議の時間です」

「分かったわ。資料の準備はできてるの？」

「はっ、こちらに」

そう言つて女性は資料に目を通す…。

「ダメね、三枚目の五項目。決算数字が違うわ！早急に作り直しなさい！」

「申し訳ございません！直ぐに修正いたします！」

そうして女性秘書は部屋を出て行く。

「はあ、相変わらず社長つて慣れへんわ…。でももうすぐや。あと少しで日本の…ううん、世界の頂点に立てるんや！」

そう、井上祥華はあれから、持ち前の知識と天性の勘を駆使し株式で大儲けし、日本の高所得者ランキングのトップに躍り出た。

さらに、その資金を元手に会社を設立。オリジナルの商品やブランド、サービスを展開して、今では世界規模の大企業になっている。

そんな彼女は愛おしそうにペンダントを開き…。

「碧…。あなたが消えて十年…うちも夢を見つけた。それに、いつでも碧が帰って来てもいいように、うちはずっと待ち続ける…。だから、しっかりと見守つてな♪」

そうして、彼女は思い描く…彼との再会を…。

あの日見た、幻想的な光景を再び見る為に。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「ふう…これで良かったのかしら？碧？」

「はい、荷物：届けてくれてありがとうございます、紫さん」

「ふふっ…あなたも罪作りの男ね♪」

「からかわないで下さいよ…。でも、あの二人なら大丈夫。何せ…」

「あなたの…“親友だから”かしら？」

「いいえ…“自慢の大切な親友だから”ですよ」

こうして、現実との別れを告げ、僕の本格的な幻想郷での生活が始まった。

07話 挨拶回りく紅魔館編く

八雲家に住み始めて一週間、そろそろこの家の、外にも出てみたいと相談した所。

「そうねえ…あなたの紹介と守って貰うための依頼。それから幻想郷の案内も兼ねて、色々な場所に行って見ましようか？」

と紫さんから言われ、今は家の前で待っている。

前に紫さんから聞いた話だと、人間は妖怪から狙われる…そして、その中でも僕は、さらに狙われやすい体質らしい…——そんなこともあるんだ…つと

「待たせたわね」

そう言つてスキマから現れる紫さん…。いつ見てもすごい能力だよね。

「えっと、まずはどこから行くんですか？」

「そうねえ…なら異変が起こった順に案内していきましようかしら？」

「異変…ですか？」

「そう、この幻想郷では新たに幻想入りした勢力が、自陣の勢力の力を誇示するように、異変と呼ばれるモノを、何度か引き起こしてきたの」
そうして、スキマの先に在ったのは…真つ赤なお屋敷…なんとうか…目が痛くなる…。

「ここはスペルカードルール制定後、初めて異変の起こったお屋敷、『紅魔館』よ。さて、門番さん？起きていますのでしろう？」

そういつて紫さんは目の前にいた、チャイナ服？を着て、立ち寝している女性に話しかけた。

「あはは…バレてましたか…。それで、本日はどうされたんですか？」
「ええ、今日は新しく幻想郷に住む住人の紹介をしたくてね。挨拶に来たのよ。ほら、碧、自己紹介しなさい」

「あ、はい！えっと、僕は大神碧…普通の大学生…いえ人間です。何もできませんけど…よろしくお願いします！」

「元気があっていいですね。私は紅美鈴、この紅魔館の門番をしてい

ます。こう見えても妖怪なんですよ?」

見た目は人でも妖怪って結構いるんだな…。

「さあ、ならこのまま入らせて貰うわよ?」

「ええどうぞ。パチユリーさんと小悪魔さんはいつも通り図書館に、咲夜さんとお嬢様、妹様は三人でお部屋に居ると思います」

「分かったわ。さあ行くわよ碧。まずは図書館にね」

「はい、紫さん…とここで此処ではどんな異変が起こったんですか?」

「ふむ…そうね…簡単なあらましとしては…」

・季節は夏、妖怪と人間が暮らす中、突如として紅い霧が現れた

・異変を感じた霊夢達は、調査をするべく発生源と思われる『妖精の湖』へと向かった

・その湖の中心には小島があり、そこには一面を真紅に染められた屋敷、紅魔館が存在した

・異変の原因は単純であり、ただ単純に、日差しが鬱陶しいから、霧によって日光を遮断すると言った、幼稚じみたものだった

「これが後に語られる紅霧異変と呼ばれた異変よ。分かったかしら?」

「ええ…まあ何となくは…でも、日光を嫌うなんて…その妖怪さんは吸血鬼だったんですか?」

「正解よ。さて、ならまずはその友人から挨拶ね。パチエリー。いるんでしよう?」

「むきゅー…。こんな時間に賢者様が態々、何の用かしら? あら? そちらの人間は?」

「そのの説明にきたのよ。小悪魔も呼んでもらえるかしら?」

「ええ。小悪魔、こつちに来なさい」

「はい! パチエリー様。どうされたんですか? ってあら? 可愛い男の子?」

なんだかちよつと妖しい雰囲気羽の生えた女性が出てきた…正直、目が怖い…。

「ごらごら、怖がらせないの。彼は今度幻想郷に移り住んだ大神碧。普通の人間だから、何かあったときに、守ってほしいの。頼めるかしら?」

08話 挨拶回りく白玉楼編く

白玉楼…。

幻想郷の異界、冥界の中にその建物は存在している。

西行妖：そう呼ばれる巨大な桜の木の麓に…。

その冥界の管理者：西行寺幽々子。

妖怪とも違う、亡霊…。死を操る程度の能力”は全ての生きとし生ける者に対して、天敵とも言える能力。

ある日、書架にあつた古い記録から「何者かが西行妖に封印されている」ことを知った彼女は、興味本位でその封印を解こうと試みる。

西行妖は春になつても絶対に満開にならない。

だが、逆に考えれば、満開になれば封印が解けるのではないか？

そう考えた幽々子は、幻想郷の春を集めて無理矢理西行妖を満開にさせようとする。

季節は春先、次第に春の香りが訪れる頃、その異変は起こつた。

いつもなら、幻想郷は白い吹雪から桜色の吹雪に変わるはずだった。

だが、幽々子の従者が幻想郷中の春を冥界に集め、冥界へと送つていった。

訪れるはずの春を奪われる形となつた幻想郷は、冬が去ることができぬまま、長い長い寒さに凍える事となつてしまった。

幻想郷の生き物たちは、明けぬ冬にただただ震えていたのである。

「と、まあこれが後に『春雪異変』と呼ばれることになる異変。博麗大结界が機能して、初めて私が公の場に出た異変よ」

「なら、紫さんは本当はまだ、公の場に出るつもりはなかったんですか？」

「そうね。私はただ、愛する幻想郷と友人が幸せに暮らしてくれれば良かったのだけれどね…」

やっぱり、この人はいいい人だ…

「でも、この果てしなく続く様な階段…今は飛んで移動してますけど、本当に長いですね」

そう、僕は今、白玉楼への階段を紫さんにお姫様抱っこされて運ばれている。

(まあ紫さん身長170cmはあるみたいだから、僕より全然高いんだけど…)

「あの…他の移動手段って無かったんでしようか？流石にこの格好は恥ずかしくて…／＼／＼」

「ふふっ♪照れちゃって…。確かにスキマを使えば直ぐに着くけれど、この階段も含めて冥界…白玉楼なの。あなたにはそれを知っているで貰いたかったのよ？」

「お気遣い感謝します…。でも、やっぱりこの格好は…男としては…」
「そうね、碧君も男の子だもんね。でも、今は我慢して頂戴？それに、私としては役得なんですから…ね？」

ああもう…そんなに綺麗な笑顔で言われたら、何にも言えないじゃないですか！

そうして、暫く階段を進んでいると…。

「何者ですか!?!って紫様じゃないですか？それと…抱えてる子は…？」

白銀色のボブカットのヘアスタイルに黒いリボンを着けた女の子が出てきた。

「あら妖夢。出迎えが遅いわよ？今日は、この子を幽々子に紹介しようと思ってるね…二人共、自己紹介して貰えるかしら？」

「あ、はい。僕は大神碧です。つい最近幻想郷に入ってきて、今は紫さんの家でお世話になってます。よろしくお願いします」

「ご丁寧にも。私は『魂魄妖夢』…半人半霊の庭師で、幽々子様に仕える者です。よろしくお願いします」

「さて、自己紹介も済んだことですし、幽々子の所に行きましょうか？あの子…また、寝てるのかしら？」

「今日は、良いことがありそうって言って、部屋で書物を読んでおります。さあ…こちらへどうぞ」

そうして、妖夢さんに案内された先には一本の巨大な桜とお屋敷があった。

「あの…ところで妖夢さんのその横に居る？人魂みたいなのって…何なんですか？」

「碧さんは最近こちらに来られたんですね？…これは、私の魂です。先程も言ったとおり、私は半人半霊…なので、霊体の部分がこうして、可視化しているのですよ」

「えつと…なら、さつきから漂ってる、この淡く光ってるのも…？」

「ええ…此処は冥界、死者の都ですから、ご想像通りだと思います」

「私達は見慣れているけれど、外の世界だと限られた人しか見えないですからね…。まあ、魂の在り方は人其々…。あまり、じつと見ているのも失礼よ？」

「ごめんなさい…。以後気を付けます…」

「気になさらないで下さい…。外来人なら珍しいのも仕方ありませんし…。さて、ここが白玉楼です。ようこそおいで下さいました、歓迎します」

そう言っ門を開けてくれる妖夢さん…態々気を使ってくれて…ありがたいです。

「ありがとうございます。それで、此処の主…西行寺幽々子さんは…？」

すると、奥の方から…。

「あらあら、紫じゃない？久しぶりね。今日は何か、良い事がありそうな気がしたのだけれど…。その子の事だったのかしらね？」

青い着物と帽子？の様な物を身に着けた、ピンク色の髪の女性が、フワフワと浮かびながらこちらにやってきた。

「久しぶりね幽々子。感の良いあなたの事だから分かってるのでしょ？碧、この人が“西行寺幽々子”…亡霊の姫、冥界の管理人よ」
「は、初めまして。大神碧と言います。この前幻想郷に来てから紫さんにお世話になってます。今後とも、よろしくお願いします」

「そうだったのね。改めまして、私は『西行寺幽々子』…気軽に幽々子って呼んでね。それで、紫？此処に連れて来たって事は、私に頼みたい事があるんでしょう？」

「ええ、流石は親友ね。単刀直入に言うと、この子の事を守って欲しい

の。もちろん常時つて訳じゃないし、あなたの目の届く範囲で構わないから」

紫さん…。本当に迷惑を掛けっぱなしだな…。

「すみませんが、お願いします…。僕には何の力も無い、普通の人間です…。もちろん自衛できる為に努力はしますから…。それまではお願います。僕を…守って下さい！」

「前に、あなたの魂が狙われやすいつて言ったわよね？」

紅魔館を後にした僕は、紫さんからそう言われる。

「ええ。その…なんで僕の魂は狙われやすいんですか？」

——すると紫さんは説明してくれた。

「そうね…。人と妖怪を形作る魂は大きく、四つに分類されるの。それは四魂といつて…。それぞれ“荒魂（あらみたま）”、“和魂（にぎみたま）”、“幸魂（さきみたま）”、“奇魂（くしみたま）”…。これら四つのモノが一つになったもの…それが“魂”」

外の世界に居た時、何となく聞いたことはある…。けど…。本当にあつたんだ…

「そして、それぞれの特性が強いほど…魂はその味を大きく変えるの。例えば荒魂…この特性が強い魂はとても濃い味…。そうね、言わば熟成させたステーキを食べているかんじかしらね？」

それは…。確かに人に…。いや、妖怪によつては食べたくなる味なのだろう…。だとしたら僕は？

「続けるわね。碧君…あなたの魂はこの中でも幸魂の輝きが最も強い…。いいえ、むしろ強すぎると言ってもいいわ」

「幸魂？…どんな特性があるんですか？」

「幸魂の特性は「愛」…。人を愛し育てる力。思いやりや感情を大切に、相互理解を計ろうとする人は幸魂が強い人なのだけ…。心当たりはあるわね？」

確かに…。愛と言われると分からないけど…。思いやりはいつも心がけていた…。

「そして…。重要なのはここから…。幸魂の味はね…。他の魂の追隨を許

さないくらい甘い味……言い方を変えるなら毒蜜……それくらい恐ろしく中毒性のある味なの……」

——それを聞いて、ぞつとした……もし、自分が悪い妖怪に襲われていたら……？」

もし、あのまま現実から何も知らないまま幻想郷に来ていたら……？
「あなたの考えている通りよ。だから私が保護したの……家に居る限り、よほどの干渉が無ければ碧君の無事は保障される。でも、いつまでも家に閉じ込められている訳にもいけない……ごめんなさい……もつと早く、話をしておけば良かったわね……」

すまなさそうに……目を伏せる紫さん……—違う！

「それは違います！紫さんが居たから……藍さんや橙ちゃんが居たから、僕は今まで無事でいられたんです……。それを僕の我儘で……」
するとホツとした笑顔で……—

「——ありがとうね。碧君……その為にも、今は一人でも多くの協力者……いいえ『守護者』が欲しいの。これはその為の挨拶回りなの……覚えていてちょうだい？」

そう……情けない話だけど、今の僕が一人で行動したら、悪い妖怪の格好の獲物だろう。

せつかく幻想郷に来たのに、それで死んでしまったら……あいつらに申し訳が立たない。

だから……生きる為なら、どんなに惨めでも……たとえ女の人に守られても……それで生き残れるなら……。

そう言つて幽々子さんを見る……呆れられてるだろうか？

「いいわよ。あなたの思い……願い、確かに感じたわ……。妖夢「はっ！」分かったわね？……冥界の管理人……西行寺幽々子の名において命ずるわ。この子の護衛と自衛の指南をしてあげなさい。いいわね？」

「はっ！了解いたしました幽々子様！」

「ありがとう、幽々子。楽園の管理者として……この子の保護者として、感謝するわ。……それから妖夢も……この子の為に、暫くは稽古を付けてあげてね？」

「ええ、そうと決まれば早速稽古の予定を立てます。びしばし行きま
すので覚悟しておいて下さいね碧さん！」

「はい！よろしくお願いします！幽々子さんも…本当にありがとうございます
ございます」

「いいのよ？紫の…親友の身内は私の身内…。それに、あなたみたい
な可愛い子を野放しになんて出来ないわ♪」

そう言いながら、悪戯っぽい笑顔を浮かべ僕に抱きついてくる幽々
子さん…。

「むぐつ?!ん?!」

「ほらほら…じつとしていなさい？暴れられると、お姉さん困っちゃ
うわ♪」

身長も紫さんと同じくらいだから、自然と僕の顔は幽々子さんの胸
に埋もれてしまう。

幽々子さんの胸は今まで会った誰よりも大きい。僕も男だし、流石
にこれはマズイ…。

「幽々子…それくらいにしておきなさい？そろそろ私も怒るわよ？」
すると後ろから紫さんの声が…ぞつとするくらい怖いけど…。

「あらあら？いいでしょ？あなたの物って訳じゃないんだし…それ
に…こんな可愛い反応してくれてお姉さん嬉しいわ♪」

全く意に介していない幽々子さんの声が…すごい大物だよこの人
…。

「はあ…こうなるのが目に見えたから、連れて来たくなかったのだけ
れどね…。幽々子、私達はこの後も回る場所があるの。時間も惜しい
からそろそろ離しなさい」

「仕方がないわね。はい「ぷはあ…死ぬかと思った…」あらあら…死
んでも此処に来るだけだから心配はいらないわよ?」

「幽々子…?」

「はいはい。妖夢の指南については追って連絡するわ。碧くん、いつ
でも遊びにいらっしやい。歓迎するわ」

「はい、その時はゆっくりお茶でもしましょうね。なら、紫さん次の場
所へ行きましょうか?」

「ええ。なら幽々子…くれぐれもお願ひね」

そうして、僕達は、次の目的地に向けてスキマを潜って行くのでした。



「妖夢…。あの子の魂、見えたかしら？」

「ええ…とても優しくて、儂くて…綺麗な色をした魂です…妖怪からしたら何よりも欲する様な魂…。確かに彼は狙われるでしょうね」

「碧くんに触れて分かったわ…。魂の危うさに…外の世界での存在の希薄さに。だからこそ、守ってあげないといけないわね…」

「はい…彼には生きて…幸せを掴んで欲しい。私もそう思いました」

「いつそ妖夢と結婚しちやえばいいんじゃないかしら？そうすれば彼も守れるし、私も碧くんと居られるし…一石二鳥ね♪」

「ゆ、幽々子様…からかわないで下さい／＼／」

「あらあら、だったら私が貰っちゃおうかしらね？うふふ♪」

「幽々子様ー！」

後日、碧の特訓の為におめかしをした妖夢と、それに着いて来た幽々子の姿があつたが、それはまた別のお話。

09話 挨拶回りく永遠亭編く

「紫さん、次はどこに向かうんですか?」

「今から行くのは…春雪異変の次に起こった異変…永夜異変と呼ばれる異変の場所。碧君、あなたの世界にはかぐや姫という御伽話があったでしょう?」

「ええ。かぐや姫って言えば、子供なら誰しも知ってる様な物語ですから。それと何の関係があるんですか?」

「今から行く場所…永遠亭にはね、そのかぐや姫…本人がいるのよ?」

「はい?…え?嘘でしょ?かぐや姫って実際に居たの?」

「本当なんですか?!で、でも、かぐや姫が居た時代って奈良時代とかそれくらいじゃ…?」

「あら?よく知ってるじゃない?そのかぐや姫のモチーフになった人物こそ、異変の主、『蓬莱山輝夜』永遠と須臾を生きる月のお姫様なのよ」

「永遠と…須臾?」

「永遠は分かるわよね?須臾はその逆、刹那よりもさらに短い時間の事。彼女達はその能力を使い、異変を起こしたの」

「それは…どんな異変だったんですか?」

「最初は誰も気が付かなかった、博麗の巫女も、そして、私すらも。でも時間が経つにつれてその異常さに気が付いた。そう、本来ならば満月なのに、空に浮かぶ月は、何故か欠けていた。本物の月は隠され、空に浮かぶのは偽物の月だったのよ。月が無いことは妖怪達にとって死活問題。そこで私が夜という時間を止めて、その間に異変を解決することにしたのよ」

「月の光は、妖怪にとってそんなに重要な物なんですか?」

「ええ…妖怪によつては、力の回復、精神の不安定、自我の消失…様々な弊害を生んでしまう。そこで、私と霊夢、レミリアと咲夜、幽々子と妖夢。後は……まだ碧は出会ってないけど『霧雨魔理沙』と『アリス・マーガトロイド』という二人も参戦しての総力戦になったわ」

「それだけの人達が共闘しなければ倒せない相手だったんですか?!」

「いえ、実際は共闘と言うよりも、それぞれの思惑で動いていたから、実際は足の引っ張り合いになってしまったのだけどね…」

「まあ、目的が統一していない味方は、敵って言葉もあるくらいですしね…。それで、結局そのかぐや姫と月は何の関係があっただんですか？」

「良い所に気が付いたわね。輝夜は元々月から追われていた罪人だったの。そして、逃げ回る内にこの幻想郷へと辿り着いたのだけれど…」

（かぐや姫が罪人？…どういう事なの？）

「その追ってから逃げる為に、偽物の月を造り出し、永遠亭へと来れないようにしたの。まあ、そもそも、月の使者は博麗大結界に阻まれて、入る事すら出来なかったから、結局、無意味だったのだけれどね…。ホント、無駄足だったわ…」

（御伽話で聞いているかぐや姫は帝の元から、使者と共に月へと帰って行った。そのお姫様がなぜ罪人になったのか…）

「考えてるとこ悪いけど…着いたわよ。ここが”迷いの竹林”にある”永遠亭”。今では病院代わりの事をしているのよ」

（病院？…ますます分からない…）

「さて…優曇華！…てる！居ないのかしら！」

すると中からドタドタと音がして一人の少女が現れた…ウサギ耳？

「ゆ、紫様?! い、いらっしやいませ。本日はどういったご用件でしょうか?」

「お出迎えご苦労様、優曇華。そうね…あなたの主人と月の頭脳はいるかしら?」

優曇華と呼ばれた少女が慌てて対応する。

「はい！輝夜様でしたらお部屋に、師匠でしたら研究室の方に居ます！」

「そう、なら悪いんだけど、輝夜の部屋に集めて貰えないかしら?」
「直ぐに対応致します！少々お待ちください！」

そうして、再びドタドタと屋敷に入っていく優曇華さん。なんだろ

う…シンパシーを感じる。

暫くして、少しやつれた感じの優曇華さんから、屋敷の奥に案内されて行った。

「輝夜様、師匠、失礼いたします…」

するとそこに居たのは二人の女性…長い銀髪を三つ編みにし、白衣を着た女性と…。

言葉にすることすら恐れ多いとすら思える、まさに傾国の美女…。一目見て分かった、この人がかぐや姫なんだと。

「久しぶりですわね。『八意永琳』、『蓬莱山輝夜』その後、安心して暮らしているかしら?」

「ええ、輝夜の御守りと町医者という二束のわらじだけど、前みたいに追っ手を気にせず暮らせるから助かっているわ」

「御守りなんてひどいわねえ…私の方も、永琳の心にゆとりが出来てくれて安心してているわ。それで、今日はどうしたのかしら?」

「この前新しく幻想入りした子の話は聞いているかしら?この子がそうなんだけど…。実はその事で折り入って頼みがあるのよ」

「あら?賢者様ともあろう方が頼みなんて珍しいわね?何か事情があるのかしら?」

そうして、僕は自己紹介をして、紫さんが説明をしてくれた。

僕は悪い妖怪に狙われやすく、一人で行動したら危険が高い。

それで、幻想郷の各勢力の人達に守ってもらう為に、挨拶がてらお願いして回っている事を。

「ふうん…。話は分かったわ。それで、その子を守るメリットは何?悪いけど他の勢力みたいに私は感情では動かないわよ?」

「別に、それならそれで構わないわ。既に“紅魔館”、“冥界”、そして“八雲家”はこの子を守ることに決めているから」

すると驚いた輝夜さんがこちらにやってきて、僕の眼鏡を取り、髪を上げた…何を…?

「動かないで…そのまま私の目を見て頂戴…」

そのまま、暫くの間、僕と輝夜さんは見つめ合った。傾国の美女…でもなんだろう…?瞳から感じるこの感情は…?

そして、どれくらい時間が経ったか、どこか懐かしそうな顔をした輝夜さんが、僕から離れて行き…。

「ふう…いいわよ。私は特に問題ないわ。ではこちらも名を名乗りましょう。私は『蓬莱山輝夜』この永遠亭の主。そして、隣に居るのは『八意永琳』月の頭脳、今は医者をしているわ。…とは言え私達はあまり動けないから護衛に付かせるのは優曇華とてゐるになるけど…永琳もそれでいいかしら？…って永琳？聞いているの？」

しかし、当の永琳さんはこちらを見たままフリーズしている。

「はあ…検討は付くけど…これはまずいわね…。面倒な事にならないうちにさっさと出て行きなさい？まあ、家に来るなら、お茶とお菓子でも用意しておくから」

「ありがとうございます、輝夜姫様…「輝夜でいいわよ」…なら、輝夜さんで。でも、本当に良かったんですか？」

「これでも、魑魅魍魎溢れる都で過ごした人間よ？人を見る目はあるわ。あなたの目は…いいえ、今はいいわ」

そう言つて、そっぽを向く輝夜さん。

「お忙しい中すみませんでした…。何か僕にできる事が出来たら、直ぐに手伝いにきます。それで、今は、勘弁して下さい」

「気にしなくて良いわ、必要な事はうどんげとてゐるに言つて頂戴？…それから、てゐ！」

すると優曇華さんの横に控えていた小柄な少女が反応した。橙ちゃんと同じくらいの子なのかな？

「なんででしょうか？姫様？」

「自己紹介と、あなたの能力を使ってあげなさい。いいわね？」

「了解です。あたしや『因幡てゐ』そっちの世界じゃ因幡の白ウサギって言われているのかね？まあ、いいさ。あたしの能力は“人間を幸運にする程度の能力”。まあちょっとした幸運だから良いことがあればラッキー程度に考えてくれればいいよ」

ちよつと待って?!因幡の白ウサギ伝説って御伽話の…しかも時代で言えば百万年以上前の話になるんじゃない?!

「ああ…驚くのも無理はないか。こんな形(なり)でも実は幻想郷でも

割と古参の部類なんだよ？じゃあちよつと目を瞑って貰えるかい？」

そうして、僕は目を瞑り何をされるのか不安半分で待つと…。

チュツ…。?!頬に今、柔らかい感触が…?!

「ふう…目を開けていいよ？これで君には私の加護が授けられた。ただし過信はしないでおくれよ？私の幸運は、あくまでも、ほんの少しなのだからね？」

すると、少し呆れた顔をした輝夜さんから…。

「てゐ…自重なさい？普通に頭を撫でるだけでも、あなたの加護は十分に受けられるでしょうに…」

「あはは♪これも一つの役得ってやつさね♪さて、後はうどんげに任せるから、あたしは気が向いたら護衛に回るよ。それじゃあね！」

そう言つてゐさんは去つて行った。色々とインパクトの強い人だったなあ。

「なら、永琳が気を取り戻す前に次の場所へ行きなさい？彼女には私から伝えておくから」

「はい、色々とありがとうございます。輝夜さん」

「なら、次の目的地にこのまま向かうわよ？…輝夜…ありがとうございます」

「あなたから、お礼を言われるなんてね…。良いわよ、好きでやった事なのだから」

「さあ、じゃあこのままスキマで移動するわ。付いてきて」

そういつてスキマを開き中に入っていく紫さん。僕も輝夜さんに一礼し、その中に続いていく。

「御伽話のかぐや姫…実際に会ってみてどうだったかしら？」

僕は少し考えた後に…

「見た目は、本当に伝承通りの、美しい人でした…。でも、あの瞳にあった感情は…：…なんだろう…：郷愁？いえ…：哀愁の様な物が伝わってきたんです。何不自由なく育てられたお姫様…もつと高貴で崇高な人なのかと思つてたんですけど…」

「誰にでも、そういった感情はある物なのよ。傾国の美女でも、それは例外じゃない。それが感じられたなら、あなたにとつても良い経験だったわね」

そうして、二人はスキマの中を進んで行く…次なる目的地“無縁塚”に向けて…。



「姫様？よろしかったのですか？誰にも与さず…が姫様の信条だったはずなのに…？」

「うんげ…あなたのその生真面目さは美点だけれど、もつと臨機応変に、広い視野で物事を捕えなさい？それと…永琳！いい加減戻ってきなさい！」

すると永琳は、ハツとした表情で意識を取り戻し…。

「輝夜！…あの人は!?なぜここに居るの?!あの人は私が…?!」

「落ち着きなさい!!!月の頭脳ともあろう者が軽々しく取り乱すな！」

女王たる風格、その一喝により永琳は鎮まる…。

「あの子とあの人は別人よ？確かに顔立ちは似てるけれど、魂の質が違う。まあ、あなたが錯覚するのも無理はないけれどね…」

そう、碧は似ていたのだ。月に居た頃に永琳の恋人だった人に…。彼女が月を発つ時に自ら殺した恋人に…。

「あの時、あなたがその選択をしてくれなければ、私は此処には居なかった。そして、彼の事を思い出さしてしまった事を、本当に申し訳なく思う…。もし、彼の…碧の護衛に反対なのならば、あなたは外れてくれてもいいわ。その分は私が何とかするから」

「輝夜…何故そこまで、彼の事を？」

そうして、一息ついた輝夜は、懐かしむ様に語った。

「似ていたのよ…。彼の優しい瞳が…おじじ様とおば様…。ただ純粹に、私を優しく愛してくれた、あの時の二人の瞳にね…。感情では動かないって言うておきながら、結局は自分の感情で動く…軽蔑したかしら？」

永琳は知っていた。輝夜がどれだけあの二人の事を愛していたのかを…。あの二人から遠ざけられ、どれだけ絶望したのかを。

そして、そんな優しい瞳をこの幻想郷に來た今でも忘れていない事を。

「いいえ、そんな事は無いわ。それに輝夜が決めた事なら反対はしな

い。彼の…碧の事は私も守りたいと思う。勝手な事だけれど…あの時の贖罪になればと…あの人とは違うと分かっているても、私も感情には逆らえないの。それは同じだわ」

「なら決まりね。永遠亭は全力で彼を守る…。この幻想郷に居る限り。どんな敵からも守って見せると…。それよりもいいの永琳？」

「…？何がかしら？」

「あなた、一目惚れしたんでしょう？「?!／／」丸分かりよ…。まあ昔の恋人に似てたってのもあるのでしょうけど…まさか永琳がシヨタ属性だったなんてねえ…」

「か、輝夜！違うわよ！私はまだ惚れてはいないし！偶々気に入った子が少し背の低い子だっただけで…はっ?!」

「はあ…月の頭脳も、語るに落ちたわね…」

こうして、永遠亭は、今日も賑やかな喧騒に包まれる。新しい風が駆け抜けるのを感じながら…。

10話 挨拶回りく無縁塚編く

「六十年周期の大結界異変」

「それが、今、向かつてる場所… 無縁塚」で起きた異変ですか？」

「ええ、魔法の森を抜け、『再思の道(さいしのみち)』を進んだ先にある、木々に囲まれた小さな行き止まりの空間、無縁仏のための墓地。無縁塚はそこにあるのだけれど、所謂、三途の川と地獄へと繋がる場所なのよ」

「地獄って… 本当にあつたんですね…」

「まあ、あなたの想像している地獄とは少し違うと思うけど…。話を戻すわね、その無縁塚を中心に、幻想郷中でありとあらゆる全ての花が、季節を無視して咲き始めたの…。そして、その理由なのだけれど… 六十年… これは人の寿命の平均と言われているわ。そして、それは外の世界も例外じゃない。外の世界で死んだ者の魂は、この幻想郷へと誘われる。そして、本来であれば死神がそれを地獄へと連れて行くの。ただ、その時は尋常ではない量の魂がこちらの世界に来たせいで、死神も処理が出来なかったの。その結果として、行き場を失った魂は花に宿り、一気に咲き始めた。これが異変の内容ね」

「つまり、その異変は今後も六十年周期で起こる可能性があるという事ですか？」

「いいえ、それは無いと思うわ。ネタばらしをするようですけど、その時魂が溢れかえった理由として、死神が仕事をサボっていたというのが事の真実だったのよ。まあ、それ以来、同じ事が起きないように閻魔が直々に見回りや、人員の増員をしたみたいなんだけれどね」

「サボってたって… 随分ぐうたらな死神さんなんですわ…」

「そうね、まあ、あなたのイメージする死神とはちよつと違うかもしれないですからね。さて、此処が“三途の川”なのだけれど… 居たわね…」

紫さんの視線の先には、寝転がってスヤスヤと息を立てる二つの大きな山… もとい女性が居た。あの人かひよつとして死神なのかな？

「はあ… 小町！ 起きなさい！ 閻魔が来るわよ！」

「ふえっ?!四季様?!すみません!サボってた訳じゃないんです!赦して下さい…って、あれ?…いない?」

「ようやく起きたわね、小町」

「あれ?紫さんじゃないですか?どうしたんですか珍しい?それに…そっちの子は生者ですよね?」

「ええ…。本当なら、此処には死んでも来たくなかったけど…この子の紹介に、今幻想郷の各地を巡っているのよ。碧君、自己紹介を」

紫さんが来たくない?…?どういう事なんだろう?まあそれよりも…。

「あ、はい。僕は大神碧です…碧って呼んでください。つい最近幻想郷に来ました…よろしくお願いします」

「ふむ…良い子だねえ。私の名前は『小野塚小町』…名字で呼ばれるのは好きじゃないから小町って呼んでおくれ。私は、この三途の川の水先案内人を務めている死神さね。よろしく頼むよ」

そう言っ僕の前立つ小町さん…うわ、今まで会った女性で一番背が高いかもしれない…。

「さて、自己紹介もした事ですし、さっさとあの閻魔に会わせて頂戴」
「四季様にかい?あいにく、今日は四季様は非番で、また日を改めて…」
「その必要はありませんよ」…四季様?!何でここに?」

そう言っまた、別の人が現れた。緑色のショートヘアに左右非対称の色をした独特の服を着た、紫さんと同じくらいの背の女性…。

「あら?あなたから足を運んでくれるなんて、手間が省けたわ…閻魔様?」

?!…この人が閻魔様…?でも、何で紫さんは機嫌が悪そうなんだろう?

「先程、冥界の幽々子さんから連絡を頂きました。二度手間になっても困りますので、こちらから赴いたままでです」

「そう、なら、さっさと自己紹介を済ませて次に行きましょう」

「相変わらずの態度ですね…八雲紫…。まあいいです。私は『四季映姫・ヤマザナドゥ』この幻想郷の最高裁判長です。ヤマザナドゥは役職名ですので好きなように呼んで下さい…まあ、今日は非番なので良

いですが…」

「非番なのに態度が偉そうですね？随分なご身分ですこと…」

刺々しく紫さんが答える。それを払しよくするように…。

「えっと、僕は…」先程伺いました。大神碧さんですね」…はい。それでよろしくお願いしますと挨拶に来たのですけど…」

どうにも空気が良くない…主に紫さんがだけど…。小町さんも先程と打って変わって緊張してるし…。

「あなたの事は、幽々子さんから聞き及んでます。ですので、それを踏まえた上で勝手ながら」浄玻璃の鏡」であなたの過去を見させて頂きました」

「プライバシーも何もあったものじゃないわね…。それが閻魔のすることかしら？」

「八雲紫…少し黙っていなさい。」浄玻璃の鏡」は、あなたの過去の行い、全てを映し出すもの…それが善行であろうと悪行であろうとも…」

「僕の…行い…？」

「閻魔として言わせて頂きます。大神碧…。あなたは罪を背負っている」

「僕の…罪…？」

「あなたの行いは尊いものでしょう。他人を助け…友を助け、消えゆく自身を顧みず、最後の最後まで友を信じ続けた。ですがそれは、本当にその人の為に、友の為に…だったのでしょうか？…そう、あなたは少し優しすぎる」

“優しすぎる”…自身のトラウマとも言えるその言葉を聞き…僕は何も言えなかった…。

「…：優しい事の…何がいけないんですか…？」

「あなたの優しさは責任感を問わない物…。対極の“厳しさ”を手術器具と例えるなら、“優しさ”は麻薬。痛みを消すことはできるが、問題の解決は何もしていない…いえ、むしろ自己回復を妨げる分、より一層、性質が悪い」

すると、僕の後ろから凄まじい殺気と共に声が聞こえた…。

「……四季映姫。それ以上の、私の家族への侮辱は、命を散らせることになるわよ……？」

ピリピリとした……いや、押し潰されるような空気……。

「あなたの能力と私の能力、相性が悪いのは知っているでしょう？それでも挑むのであれば、私が此処で裁いてあげましょう……幻想郷の賢者よ！」

あふれ出るプレッシャー……。

「四季様も紫様も……ふ、二人とも止めて下さい！お二人の力がぶつかれば、この幻想郷がどうなるか……」

しかし、一死神程度の力では、二人の力は抑えきれない……いや……この幻想郷で抑えられる者など誰もいない。

「閻魔風情が……美しく残酷に……この大地から往（い）ね！」

怒号と共に周囲の空気が震える……。

「……審判『ラストジャッジメント』！」

強大な二人の力がぶつかろうとした、まさにその瞬間……。

「待つて下さい！」

「碧君?!（大神碧さん?!）」

その中心に僕は立ちふさがった……正直、怖かった……。いや……そんなレベルを完全に越えていた……でも……。

「……四季、さん……続きを……聞かせて……下さい……。紫さんも……僕は、大丈夫……ですから……」

震えながらも、何とか声は出せたと思う……。

「……いいでしょう。では続けます……優しさは、ある意味で病気の様な物です。自分にとつての優しさ、相手にとつての優しさ……。その二つが完全に一致しなければ、優しさは『自己満足な偽善』となってしまう。本当の優しさとは、相手の全てを背負う、“責任”“勇気”“精神力”がいります。そして、ただ優しいだけじゃ駄目なんです。相手の“怒り”や“苦しみ”、“憎しみ”や“妬み”……そういった負の思い……その理由を理解するのです」

じゃあ……僕が今までやってきた事は……一方的な自己満足だったのかな……。

“―優しすぎて面白くない―”

あの時の言葉が頭の中によぎる……。だとしたら…僕は一生…。」「―ですが」…？

「ですが、碧さん…あなたがそれを本当に理解した時、優しさは一番の“力”になります。それが出来るのなら、私は…ヤマザナドウとしてではなく、『四季映姫』個人として、あなたの助けになりましょう。あなたの支えとなりましょう…碧さん――」

すると四季さんはこちらに近づいてきて…。

「しき…さん…う…」

子供をあやすように僕を抱き締めてくれた…。

「あなたの魂の純粋さ…そして、その尊さは私も理解しています…。だからこそ…あなたはもつと自分の事を大切に思うべきなのです。」

少しずつ、ゆっくりと語ってくれた…。

「幻想郷に来てあなたは、心の底から信頼できる友との離別を決意しました…。表には出さなくても、その魂が泣いているのは分かります…。でも、今のあなたには大切な家族がいるのです。私と言う…絶対に勝てないであろう相手でも、命を賭して戦おうとしてくれる家族が…。だから、今だけは泣いてもいいんです…絆があると言っても親友との離別は誰でも辛い…それが永遠なら尚更…。誰も見ていません…此処にはあなたの敵は居ない…だから泣いてください、今まで背負ってきた全てを…」

そうして、僕の顔を隠してくれる四季さん…その厳しさの中にある優しさに、僕は今まで抑えていた感情が決壊してしまい…泣いてしまった…。子供の様に、只ひたすら泣きじゃくった…。四季さんはそれを優しく…そして、愛おしそうに受け止めてくれた…。

「…あの、四季さん「映姫で構いませんよ。碧さん」…映姫さん…ありがとうございます…。それと、こんな恰好見せてしまって…」

「気にしなくて結構ですよ。ああやって、感情を吐き出すことも、人間

の特権です。良い家族を迎え入れましたね…八雲紫？」

「――／＼／＼?!…ええ…自慢の家族よ…。さあ、もうこれ以上此処に居る必要はなくなつたでしょう?次の場所へ行くわよ!」

そうしてスキマを開き中に入る紫さん…何だか少し照れてる感じがする…。

「映姫さん…僕の罪…過去を受け入れ…そして、道を示してくれて、ありがとうございます。映姫さんの期待に応えられるように…これからも精進していきます。それでは、またどこかで…」

そう言つて礼をして、紫さんに続きスキマを潜る…。次の目的地はどこだろう…?

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

彼は行きましたか…。

「ふう…何度やつても、こういう役回りは嫌ですね…でも…」

閻魔として、何度、人や妖怪から非難を受けてきたことか…。

その度に思う。自分の裁きは間違っていたのか?もつと良い答えがあつたんじゃないのか…と。

そして、地獄に堕ちそうな者達を見る度に、説教をするが、まとも聞いてくれるのは、ほんの一握り…。

しかし、彼は全てを真摯に受け止めてくれた…。その上で自分の期待に応えたいと言つてくれた…。

全てに公平である閻魔としてではなく…四季映姫…個人として、これほどまでに嬉しい答えは無い。

だからこそ、碧さんには幸せになつてもらいたい…。

あの子の儂い魂を守つてあげたい…。

優しさの先にある強さを見つけて欲しい…そう願つた。

「珍しいですねえ…というか、あんな事をする四季様なんて初めて見ましたよ」

そう言えば居ましたね…小町…。

「私とて、閻魔である前に一人の個人です。感情の無い機械ではないのですから…」

「てつきり私は、あの子に惚れたのかと思つたんですけど…つて?!四

季様?!何で「悔悟の棒(かいごのぼう)」を振り上げてるんですか?!」
「小町：私はからかわれるのは好きではありません…。それに、あな
た…またサボっていたようですね…?」

「なんでバレて?!ひよつとして最初から?!」

「今日の私は非番ですからね…：多少のお説教だけで済ませようと思
いましたが…。小町：あなたは少し…いえ、かなり怠けすぎです!」

そうして、スコーン!という音が三途の川に響き渡りました。

「きちんと仕事をこなすこと…：これが今のあなたにできる善行です。
分かりましたね?小町?」

あまりに綺麗に入ったのか小町は気絶していました…：我ながらや
り過ぎましたね…。

(しかし、碧さん…：何と言いますか…：母性本能がくすぐられるん
ですね…。殿方に…：あんな事をするのも初めてでしたし…：／／／。小
町の言うことも、あながち間違いではないのかもしれないね／／／)
そうして、気絶した小町と、自身の煩惱と戦う映姫がそこには残さ
れていました…。

11話 嫉妬姫の憂鬱

彼が…碧が地上に上がってから一週間。

最近、私はいつも彼の事を考えている。

もう、外の世界に帰ったのか？

もしくは、地上で他の妖怪に襲われていないだろうか？

心配は尽きない…。

私をこんな気持ちにさせるなんて…でも何ででしょう？不思議と彼の事を考えると妬ましいという気持ちは無くなる。

そんな時、地底の道案内役のヤマメとキスメが遊びに来てくれたわ。

「やくパルスイ。元気にしてるかい？ここ最近は変わったことも無くて暇だね〜」

「(コクコク)」

「あなた達…だからと言って、橋の横で宴会を始めるのはどうなのかしら？」

「まあ、気にしなさんなってね。しかし、あの時の人間はもう帰ったのかね〜？」

「ヤマメ？あの時の人間って？」

もしかして…彼の事かしら…？

「ああ…」週間くらい前にね、地底に迷い込んだ外来人がいたのさ。見た目は地味な感じだったけど、話してて、良い奴だっていうのは直ぐに分かったよ」

やっぱり…碧の事だ…。でも、彼はまた、髪を下したのかしら？地

味って言ってたし…。

「(フルフル)！」

「ん〜、どうしたキスメ？…何？髪とメガネで隠れてたけど、顔立ちは綺麗だったって？本当かい？それは見ておくんだったね〜」

キスメは喋る事は少ないけど、代わりに人を見る目はすごい…。でも、やっぱり碧はそう見えただわ…ああ…妬ましい。

「そーいや、パルスイはそいつには会ってないのかい？」

「いいえ、会ったわよ…多分、この幻想郷で一番最初に会ったのが私じゃないかしら？」

なんだろう…言ってるちよつと誇らしい気分になる…。

「ああ、それであたし達の事を見ても動じなかったんだねえ。しかし、最初に会ったのがパルスイか…。聞かれたんじゃないのかい？それについて？」

ヤマメが言っているのは私の耳だろう…。まあそれくらいに、この耳は特徴的だから仕方がないのだけれど…。

「ええ…もちろん聞かれたわ…。でもね…碧は…「名前呼び?!」うるさいわね…彼は…言ってくれたの…」可愛らしくて素敵だ”って／＼

あれは嬉しかったわ…。あの言葉を思い出すと…今でも胸が温かくなる…。

「…って何よその目は？言いたいことでもあるの？」

「いえいえ…ごちそうさまでしたってね。しかし、ようやくパルスイにも春が来たのかねえ？」

ちよつと?!そんなんじや…いえ…この気持ちは…。

分からない…裏切られたあの時から、私の心は凍りついてしまった…でも…。

「否定はしないわ。でも、私は彼に外の世界に帰る様に言った。あれから一週間…何にも音信が無いってことは、もう帰ってしまったんでしょう…」

そう考えると、我ながらもつたいない事をしたんだなと思うわ…ああ…何で引き止めなかったのかしら…自分自身が妬ましい…。

「そんなにシユンとしなさんな。もしかしたら、こっちに残ってるかもしれないよ？」

「だとしても、態々地底まで来る理由が無いでしょう？彼は只の人間、普通に歩いているだけでも危険なのに…」

「やれやれ…こりや重症だねえ…。キスメ…何とかならないかね？」

「(フルフル)」

「だよね…。それなら、幻想郷の賢者様にでも聞いてみるかい？彼

女なら彼の行方も知っているだろうし？」

「いえ、いいわ。期待して裏切られるのにはもうこりこりよ……。さあ……お酒が足りないわ……旧都から調達してきましょう！」

そう言っただけは一人旧都へと駆けて行く……ああ……できるならもう一度……彼に会いたい……。

そして、もしかまた会えたなら……この気持ちは何なのか確かめてみたい……そう、思いながら私は旧都へと向かった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「はあ……こりや重症だねえ……。何とかしてあげたいけど……ん？どうしたキスメ？」

「(パタパタ)」

「何？……もしかしたら、そう遠くない内に再会できるかも……だって？あんな予言なんて出来たのかい？」

「(フルフル)」

「違う？……女の勘？……まあ……それが当たれば面白いんだけどねえ……やっと思つけた小さな春……できれば届けてあげたいよ」

そんな彼女達の願いは、そう遠くない内に叶う事になる……。

キスメの女の勘は、鋭かったのだと後にヤマメは語る。

12話 挨拶回りく守矢神社編く

「先程は、お見苦しい所をお見せして、すみませんでした…」
「気にしなくていいのよ?…——まあ…泣きついた相手が、あの闇魔つていうのが癪に障るのだけれど」

「あはは…すみません…。それで、今から向かう『守矢神社』では何が起こったんですか?」

話を交えるように、僕は聞いてみた…だって紫さん…ずっと不機嫌なままだもん…。

「はあ…そうねえ。今から向かう場所で起きた事は、異変と言うよりも、神社同士による、信仰心の取り合いって言った方がいいかしらね」「信仰心の取り合い…ですか?」

「ええ、幻想郷…いえ、外の世界もですけど、神々と言う存在は、基本的に人間からの信仰心を力としているの。つまりより、信仰心が高い神様の方がその力を存分に振るえる…此処まではいいわね?」

「はい。ですが幻想郷には、既に博麗神社があるはず…」

「良いところに気が付いたわね。そう、幻想郷には既に博麗神社があった。そして、後から幻想入りした守矢神社の神々はそれを知らなかった。そこで神々と巫女は考えたの…博麗神社を吸収して信仰心を一つに集めてしまえばいいと」

「何て言いますか…横暴な考えですね…。やり口が、手荒すぎます…」

「ええ…そこで博麗の巫女、霊夢は神々と巫女へ弾幕勝負を挑み、無事に勝利した。まあ、代わりに守矢神社の分社を博麗神社に置くことで妥協したみたいだけれども…。さて、この山を登れば守矢神社なのだけれど…いるのでしょうか?パパラッチ天狗と使い走りの狼!」

「あやや…ばれてましたか…流星は紫さんですね」

黒い羽の少女と。

「だから、言ったのですよ…全部お見通しなんですって」

白銀の髪の毛の犬耳の少女が、目の前に現れた。

「まったく…付けるのなら、もっと上手くやりなさい?それで、今日は天魔はいるのかしら?」

「いえ、今日は出張で出かけているのですよ。ですので、ご用件があれば私が聞きますけど？」

「そう、なら、話は早いわ。てっとり早く伝えるわね。この前幻想入りしたこの子…私の所で預かることにしたのだけれど…手を出したら…山ごと消し飛ばすわよ…？」

すると凄まじいプレッシャーが紫さんから放たれる。

「ひいっ?!ゆ、紫さん…?!何だか今日は雰囲気怖いですよ…！」

多分さっきの映姫さんとのやり取りのせいだ…間違いない…。

「他の、河童や厄神、秋の神にも伝えておきなさい！この子を害する者がいれば、この幻想郷から消し去ると。…いいわね！」

「は、はいいい!!!（ダメだ、下手な事を言ったら間違はなく殺されます!?!）」

「り、了解しました紫様（これは…流石にまずいな…）当面の警備は我々が行います。何か問題が起こりそうなら、逐一連絡致しますので…よろしいでしょうか？」

「ええ。それじゃあ後は頼んだわよ…行くわよ、碧」

「あ、はい！すみませんが、よろしく願います…ちよつと待って下さいよ！紫さん！」

そうして、紫と碧は頂上の神社を目指して進んで行く。



「文様…」

「分かってるわよ…。あゝ、まだ鳥肌が収まらない…流石は幻想郷の賢者…伊達じゃないですね」

「この件はどうするおつもりですか？」

「もちろん、大天狗様に報告はしますよ。しかし、紫様が人間を…ですか…。取材のやり甲斐はありそうですね…今回ばかりは、洒落で済みそうにないので暫くは、諦めますか…」

「今まで、接することがあまり無かったからでしょうけど…あれが大妖怪…しかも最高クラス…格が違いすぎますよ…！」

「大天狗様も、紫さんには勝てないって言ってましたからね。まあ我々は連絡の件と哨戒の仕事を続けましょう」

全力タツクルを、普通の人間が喰らったらどうなるか分かっていただろうか？」

赤い服を着た女性がそう言う。

「あーうー。神奈子…少しは早苗の気持ちも考えてあげなよ？あの辛い、外の世界で、唯一、自分が信頼できた人間なんだ。無理はないよ？」

その隣に居た青い服を着て蛙の様な目を付けた帽子の女性が答える。

「そうだね…それで、八雲紫殿…今日はその青年のご挨拶と言ったところかな？」

「ええ。この子は最近幻想郷に住むことになって、今日は、各有力者への、自己紹介を兼ねた挨拶回りをしているのよ。もつとも…早苗が碧君の事を知っていたのは正直予想外でしたけど…」

「それはこつちも同じだよ。外の世界で、早苗から良くお世話になった先輩が居た事は聞いていたけど…まさかその子までこつちに来ていたなんてね。…ひよつとして早苗…能力を使ったの？」

「そんな事はしていませんよ諏訪子様！私達の事情に…先輩を巻き込む事はできませんでしたし…(連れてこれるのなら最初からそうします)」

「早苗…心の声が漏れてるよ…。まあいいさ、自己紹介をさせて貰おう。私は『八坂神奈子』この守矢神社の石柱。軍神とも呼ばれていたね。よろしく頼むよ」

「次は私だね！私は『洩矢諏訪子』土着神の頂点。それと…この神社で本来、祀られている神様だよ！でも気軽に諏訪子って呼んでおくれよ「私の事も神奈子でいいよ」…と言う事さ。さて、改めて君の事を聞かせて貰おうか？」

「は、はい！…僕の名前は、大神碧、この前幻想郷に入ってきました。よろしくお願ひします。それで、本題なのですが…僕は、只の人間です…。皆さんの様に、特殊な能力があるわけでもない…弱い人間です。そこで…勝手なのは分かっています…それでも、僕の事を守って頂けないでしょうか！」

顔を見合わせる二柱…そして、言葉を発しようとした、まさにその時

「神奈子様！誼訪子様！失礼を承知でお願いします！どうか先輩を…碧先輩に協力させて下さい！」

早苗ちゃん?!何で…しかも、土下座までして?!

「ふう…顔を上げな。早苗…。私達は今までお前と、家族として接してきた——」

続ける様に誼訪子さんが…——

「——そんな早苗の頼みを断れる訳ないでしょ?それに…彼は早苗の恩人なんだろう?なら、断る理由なんてない…ううん、逆に今までの恩を、しっかりと返して上げなさい!守矢神社の一柱として命じます!」

「神奈子様…誼訪子様…ぐすつ…ありがとうございます!」

「と…こ…ろ…でく。二人はどんな関係だったんだい?…もしかして…恋人だったとか?」

「す、誼訪子様?!ち、違いますよ!……そうですね、先輩との事を話させて貰います」

そうして早苗ちゃんは語り始めた…。

「あれは、私が高校一年で、先輩が二年生の時でした。——現人神として、地域の人達から敬われていた私は、周囲から浮き…孤独な学園生活を送っていたんです…。虐めこそ無かったものの、孤独な事に嫌気が差した私は学校をサボり、近くの公園でボーっとしながら時間を潰していました。このまま消えてしまいたい…そう思っていた私の頬に温かい物が当てられてビックリしました。慌てて隣を見ると…」

“大丈夫?体調を崩してるのなら体を温めて…えっと、それから…どうするんだっけ…”

「って慌てる先輩が居たんです。私は可笑しくなっちゃって、久しぶりに心の底から笑っちゃいました。それから、先輩に、自分の悩みを聞いて貰ったんです…」

小さいころからクラスで浮いている事…。

孤独で、どこかに行ってしまいたいと思ってしまった事…。

自分の存在は、本当に此処に居ても良い存在なのかと思った事を。「先輩は優しい顔で最後まで聞いてくれました。そして、言ってくれたんです…」

あの時…僕は何て言ったんだっけ…ああそうだ…思い出した…。

“浮いてしまう事は誰だつてある。僕も、あまり人付き合いが得意じゃないから、いつもどこかに行つてしまいたいと思つてしまう”

“でもね…君は違う。君は変われる力を持っている。だから、自分を信じて?”

“君が自分の存在を疑うなら、いつでも僕が相談に乗る…少なくともその間は——君は此処に居られるでしょ?”

“だから、いつでも頼つてきて。…僕の名前は大神碧…三年生…君は?”

「それが、私と先輩の出会いでした。それから、幻想郷に来るまでの間…先輩に相談に乗ってもらい、少しずつですけど友人も増えて行つて…。でも、私はこちらに来ることを神奈子様と諏訪子様から持ちかけられたとき…本当なら…先輩の側を離れたくは無かつたです…。ですが、私にも守矢の巫女としての役目があつたので…結局、先輩とは分かれてしまったのですが…。でも、只の人間の先輩が…何で幻想郷に?」

「うん。僕の場合はね…世界から、存在が忘れ去られようとしたからなんだ…「?!」だから、遅かれ早かれ、幻想郷には来てたと思う」すると早苗ちゃんがぼろぼろと涙を流し始める…。

「世界からなんて…酷過ぎます…ぐすつ…。先輩は何も悪くないのに…、なんで先輩がこんな目に…」

僕は早苗ちゃんの頭を、あの時の様に、優しく撫でてあげた…優しく…優しく…。

「ありがとう…僕の為に涙を流してくれて…。早苗ちゃんが覚えてくれていた事は、僕にとつてもすごく嬉しいことなんだ…。だから、笑つて?早苗ちゃんは泣いてる顔よりも笑つてる顔の方が可愛いんだから…ね?」

「／／／…はい、先輩…／／／」

「二人とも…良い雰囲気ですけれど…。そろそろ話を進めるわよ？それで、守矢神社は、協力してくれるのですか？」

「ああ、軍神の名において、その子を…碧を守ろう！」

「私も同じだよ！土着神の頂点として…早苗の保護者として…娘の信じた子を守るのは当然だよ！」

「神奈子さん…諏訪子さん…。二人とも…ありがとうございます！」

「気にしなさんなよ♪そうだ、紫に、碧はもうお昼は済ませたかい？良ければ家で食べて行かないかい？」

「あら？いいのかしら？こちらとしても助かるのですけれど…碧君…いいかしら？」

「ええ…早苗ちゃんの手料理とか久しぶりなので、楽しみです♪」

「そういう事だ、早苗！きちんと胃袋を掴むんだよ！」

「はい！頑張ります！先輩！楽しみにしてくださいね！」

そういつて厨房に向かう早苗ちゃん…。知り合いの女の子の手料理とか、久しぶりだから楽しみなな。

「さて、じゃあ碧君には早苗との他のエピソードでも語って貰いましょうか？」

「ふむ、良いんじゃないか？私も学校での早苗は良く知らないからね」

「ふっふっふ…さあ…覚悟はいいかな？」

「えっと…お手柔らかにお願いします…」

そうして、早苗ちゃんの手料理に舌鼓を打ちながら、久しぶりに出会った後輩と、楽しく語り合いました。

昼食を済ませた私達は…。

「すみません。お昼をごちそうになってしまって」

「いいんですよ、先輩。良ければまた食べに来てくださいね？」

「うん！是非寄らせて貰うよ。その時はお願いね？」

「はい！」

「さあ…碧君…名残惜しいとは思いますが、次なる目的地…最期の場所…地底へと向かうわよ」

「はい！それでは早苗ちゃん…そして神奈子さん、諏訪子さん…今後

13話 挨拶回りく地霊殿編く

「碧君と早苗が面識があったなんて…少し驚いたわ」

「まあ…唯一、慕ってくれていた後輩だったんで…。引越した時は少しシヨックでしたけどね」

「これからは、いつでも会えるから良かったじゃない♪さて、次に行く場所がこの幻想郷で確認された、最後の異変の地なのだけれど…碧君は一度そこに行っているの」

「それって…?」

「異変が起こったのは博麗神社…そして、その原因となったのは…地底…あなたが最初に現れた場所よ」

「地底…じゃあ、また、あの人と会えるのかな…」

「…?あの人って…誰かしら?地底の入り口近辺だとヤマメかキスメかしら?」

「いえ…、実は僕が居たのはその少し奥で…橋の近くでした…」

「?!…って事は橋姫…水橋パルスイかしら?」

「ええ…とつても良い方で…できればもう一度会いたいなど…」

すると紫さんは何かをブツブツと独り言を言っていた…「——やつぱりそうなのかしら?」とか…何だろう?

「…:碧君…彼女から何かされなかった?…それと彼女と接して何かに対して嫉妬を覚える様な感情は沸かなかったかしら?」

「紫さん…流石に怒りますよ…?パルスイさんは、純粹に心配してくれて…幻想郷の事についてや、博麗神社への行き方を教えてくれたんです」

「ああ…いえ…そういう事じゃないの…。気分を害したなら謝るわ…ごめんなさい。ちよつと確認をしたかっただけなの」

確認…何なんだろう?

「いえ、こつちも早とちりしてしまつてすみません…紫さんは、僕の事を思つて言つてくれたのに…」

「なら、お互い様つて事で、この話は此処までね。さて、話を戻すわね。博麗神社で起こった異変…この異変は雪の降る冬のある日。博麗神

社の近くに突如高、温の間欠泉が噴出した事から始まったの」

そして、紫さんは異変のあらましを話してくれた。

- ・ 温泉水とともに地霊（地底の悪霊）が湧き出てきた
- ・ 同時に地下の妖怪や地霊が、表に出ることに危険を感じ、自分の所にパチュリーが相談に来た

この頃、地上と地底は互いに不可侵であり、今の様に親交が無かった

- ・ そこで霊夢ともう一人が調査に向かった
- ・ そこで進んで行く内に、『地霊殿』という場所で異変の原因を突き止める

間欠泉の原因が地上の侵略を企む妖怪の仕業で、その力の源を八坂神奈子が与えた事を

- ・ 神奈子が力を与えた理由は、地底の底にある旧地獄を核融合炉として活用し「山の産業革命計画」を起こそうと考えていたからである

以上がこの異変の概要である。

「まあ、最初から私か霊夢に相談をしてくれていたら、こんな事にはならなかったのですけれどね…本当に面倒な異変だったわ」

「発展を願うばかりで、根本を見逃しては、それは大事になる…。まあ、流石に神様の考える事は分かりませんが…」

「お陰で、地上と地底の不可侵条約が無くなって、より一層、幻想郷の発展には繋がったのですけれどね…さて、此処が先程話した『地霊殿』…地底の妖怪を統率する一人…『古明地さとり』の住むお屋敷よ」

東洋的な名前とは裏腹に、西洋風のお屋敷が目の前に現れる。シツクな感じの館だ。

「さて…お隣”。居るのでしよう？姿を見せなさい」

すると近くに居た一匹の猫が…人の姿になり…。

「ようこそ。紫様…連絡は受けてます。館にてさとり様もお待ちしております」

「紫さん…この人？は？」

深紅の髪を両サイドで三つ編みにし、根元と先を黒いリボンで結んでいて、頭部に黒いネコ耳がある。

服装は、黒の下地に何やら緑の模様の入った、ゴシックロリータファッションのようなものを着用している。

コスプレ以外でゴスロリ服は初めて見たけど…凄く様になってるなあ。

「ああ、あたいは『火焰猫燐』火車妖猫で、この『地霊殿』の主、さとり様のペットさね。名字は長いから”お燐”って呼んでおくれ」

「僕は、大神碧です。つい最近幻想郷に来ました。碧って呼んでください。よろしくお願ひしますお燐さん」

「うん！元氣そうでいい子だ。では紫様…案内させて頂きますね」
そうして、お燐さんから館の中を連れて行かれる。

中には…黒に、赤色または紫色の市松模様に移られた床や、ステンドグラスの天窓が多数あった。何て言うか…すごく幻想的な館だ…。

「そう言えば、さつきから動物が多く見かけられるんですけど…ここで飼ってるんですか？」

犬や猫は分かるとして…ライオンや黒豹、ハシビロコウやコモドドラゴン等…珍しいにも程がある。

「そうだよ。さとり様は生き物が大好きで、みんなさとり様のペットなんだよ。まあ人の姿になれるのは、あたいと”お空”だけなんだけどねえ」

生き物が好きな地底の主…どんな人なんだろう？

「あの…さとりさんって…」—さあ、着いたよ…まあいいや。此処にその人が居るのか…何だか緊張してきた…」

すると、少しだけ神妙な顔をした紫さんから…。

「碧君…さとりがどんな人なのかは、自分で見て、きちんと判断しなさい。それは必ずあなたの為になるから」

「…？。…紫さん…はい、分かりました」

そうして、扉が開かれる…その先に居たのは…。

やや癖のある薄紫のボブヘアに、眠たげな深紅の瞳。

ゆったりとした水色の服装をしており、下は膝くらいまでのピンクのセミロングスカート。

そして、一番目を引くのが、胸元に浮かぶ、複数のコードで繋がれ

ている赤い目の様な物…あれはいつたい？

「ようこそ地霊殿へ…。私が此処の主『古明地さとり』です…。この胸元の目は〃第三の目（サードアイ）〃私の一部の様な物です」

「大神碧です。最近この幻想郷に来ました。よろしくお願いします（あれ？目の事…口に出したっけ？）」

「いいえ、あなたは口には出していませんよ——?!」ああ、そうですね説明しましょうか。私の種族は覚妖怪。能力は〃心を読む程度の能力〃…この第三の目を使い相手の心を読む事が出来るのですよ。まあ目を外せば、読まない事も出来るのですが…こういった場ではやはり必要になりますので、ご了承くださいね」

「いいえこちらは構いません…。でも、心が読めるって…辛くないんですか…?」

「——?!」

すると、眠たげな眼を見開き、驚いた古明地さんが居ました。僕…何か失礼な事をまた、言ってしまったのかな?…だとしたら謝らないと…。

「あの…——大丈夫ですよ」え…?」

「私の事はさとりで構いません…妹も居るので名字だと不便ですし…。それから、あなたの様な考えを持つ人間は、初めてだったので…少々驚かされました。さて、あなたの答えに応じましょう。確かに、この能力は便利ですが、それ以上に苦痛を伴います。読みたくない感情や人の表裏…それらの全てが私の中に入ってくるのですから…」

やっぱり…だとしたら僕の考えもまた、優しさの押し付け…映姫さんから言われたばかりなのに…。

「感情や考えが読める…。それだけで人は…いえ、妖怪ですら私の近くには寄つてきません。当然です。心を読まれて快い者などいないのですから。ですので私は裏表のないペットたちと共に暮らしていきます」

やっぱり…この人は自分の心を犠牲にして…周りの為に生きる…そんな優しい人なんだ…。

「ただ…あなたの様に私の事を労ってくれた人は初めてです。誰しも

最初は、恐ろしいと…：気味が悪いと思いますから…。あなたの心を読ませて貰いましたが…：不思議と嫌ではありませんでした。あなたは先程、閻魔さまにお説教をされたみたいですね。ですが…：今、私に向けてくれている、その優しさは間違つてはいません。押し付けではなく…：心から私の事を考えてくれたのですから…：それは、誇りに思ってください」

そう言つてさとりさんは第三の目を外す…。

「さとりさん…？」

「あなたとは…もつと語り合いたいです。その語り合いに、これは必要ありません。あなたの要件は先程読ませて頂きました…。この様な忌むべき能力…：そんな私で良ければ支援はさせて頂きます…：どうでしょうか？」

僕は嬉しくなった…。自身ですら疑っていた心を肯定してくれて…：余計な能力無しに、語り合いたいと言つてくれたことに。

「さとりさん…：ありがとうございます…。さとりさんの様な優しい方から支援を受けれるなんて…：光栄です」

「ふふっ…。私は優しくなんてないわ。何の思惑も無く…：普通に話ができるあなたこそ、本当に優しい人間なんだと思うわ…。不思議ね…：あなたの様な人間もいるのね…」

そうして、さとりさんと僕は暫く会話を続けた。何の取り留めもない…：けど充実した話をした。

お互いの事、好きな食べ物やペットの事、家族の事など…。

それから、どれくらい時間が過ぎただろうか…。

コンコンとノックをする音が聞こえてきた。

「ほんと、あの時のお隣の顔と言ったら…：つてあら？誰かしら？」

すると扉から、紫さんとお隣さんが出てきた…：そういえばあれから二人とも、いつの間にか居なくなつてたんだよな。

「碧君、さとりと打ち解けたようね。心配はしていなかったけれど…：良かったわ」

「さとり様も…：久しぶりに、この館以外の方と楽しく話されていたみたいで、良かったですよ」

「ええ…。碧さんの緩やかな…。そして、優しい在り方は、話していても心地良かったです」

さとりさん：「そう面と向かって行われると照れますね：／／／」
「そ、それで、二人とも今まで何処にいたんですか？途中から、居なくなつてたみたいですけど」

「さとりが第三の目を外した辺りからね。二人とも、とっても楽しんでうに話すから…。邪魔しちゃいけないと思つてね」

「です。それで、二人だけにしたんです。それと…碧さんが良ければなんだけど、今日は案内も兼ねて、旧都のお食事処で御夕食をどうかなと、それから…さとり様さえ良ければ今日は地霊殿に泊まっていかれたらと…思いましたね」

「お燐、それは良い考えね。私は反対しないわよ」

「にこやかな顔で答えるさとりさん。ありがたいけど…。」

「旧都」…ですか？」

「ああ…そういえば、碧さんは知らなかったのですね。旧都はこの地底の都…元々は地獄だったのですが、閻魔様…映姫様の措置により地獄は地上へと移設され、残された土地に建てられた都を、“旧都”と呼んでいるのですよ」

「そういうことか。ちらつと紫さんの方を向くと笑顔で頷いてくれた。…よかった。」

「じゃあお願いします。あ、紫さんは…？」

「私が旧都に居ると面倒な事になるから、遠慮しておくわ。そうね、代わりに碧にはこれを渡しておくわね」

「そう言つて、手渡してきたのは…陰陽玉とお札？」

「紫さん…これは？」

「間欠泉での異変の際に造つた、通信用の陰陽玉と私達の家…マヨヒガへの転移札よ。転移札は一人用だけれど…。私もいつもあなたと居る訳じゃないし…かといつてあなたを一人にするのも問題がある。それに、家に帰るには私がスキマを開くか特殊な転移術を使わないと来れないからね。それがあればいつでも、家に帰って来られるし、連絡も取れるから。今日はこちらでゆつくりとさせて貰いなさい？」

ああ…本当に僕は恵まれているんだなあ…。

「ありがとうございます。紫さん…。さとりさん、お隣さんも…今日はよろしくお願いします」

「ええ…私の…初めての人間の友達なんだから…気にしないでね？」

「こつちこそよろしく頼むよ！あたいも、精一杯もてなしさせてもらうからね」

「良かったわね…二人とも…。では私はこれで失礼させていただきますわね…」

そう言つてスキマの中に消えていく紫さん。何かお土産でも買つて帰ろう。

「さて、じゃあ良い時間だし出かけようかね」

「そうね…ああ少し待っていて…ペットたちにご飯を…「今日はもうあげましたよ」…そう、ありがとうございます…お隣」

優しそうな笑顔を浮かべるさとりさん…まるでお母さんみたいだなあ…——とほっこりしてしまった。

準備を整えた僕達は、お隣さんの案内で旧都へと向かった。

そして…。

「此処が旧都…とつても賑わつてて…みんな楽しそうだ…」

「ええ…此処が私達…地底で暮らす者達の自慢の都…『旧都』よ。想像と違って良い場所でしょう？」

うん、その通りだ。

「正直、元地獄つて聞いてたからもっと閑散としてるのかな？つて思つてました…でも、此処は違う…みんな活き活きとして、笑顔で満ち溢れてる…。多いのは鬼だけど…他の妖怪も、みんな楽しそうにお酒を交わしてる。羨ましいいな…」

すると、さとりさんがほほ笑みながら…。

「碧さんも、今日はその一員になるんですよ？さあ、私達が良く行くお食事処までもう少しです…行きましよう？」

さとりさんから手を引かれ人混みを進んで行く…。そうして着い

た一軒のお店。

『料亭『翡翠』』

「この懐石料理は絶品なんですよ？さあ入りましょう」

そうして、通いなれたかの様に店に入るさとりさん。ここって所謂、高級料亭なんじゃ？？こんな店…入るの初めてだ…。

「いらっしやいませ…あら？さとり様ではないですか。いつもご鼻屑に…そちらの方は？」

「いつも悪いですね女将…。こちらは私のお客様…いえ…友人の碧さんです。以後も連れてきますので、よろしくお願いします」

そうして現れたのは少し小柄な二本の角の鬼。見た目の幼さとは別に、はんなりと、落ち着いた雰囲気的女性だ。

「ようこそ、当料亭『翡翠』へ。私がこの従業員兼、女将の『酒吞(しゅてん)』でございます。以後よろしゅう」

「僕は大神碧です。最近幻想郷に来て、今日はさとりさんの所に挨拶に来ました。よろしくお願いします」

「しつかりされた子ですね。あ…そうです。さとり様、今日はお知り合いの方が見えますが…ご合席されますか？」

「知り合い…？誰かしらね…？勇儀かしら？こちらは構わないですよ」

「それではお伝えしますね…。ではさとり様…こちらのお部屋へどうぞ…」

そうして、僕たちは料亭の一室に案内された。そして、襖を開いた先には…。

「あら、さとりじゃない…久しぶりね？…って、——え？碧…？なの？」

見間違える筈がない…金髪のボブヘア、ペルシアンドレスのような服。

煌めくような緑色の目に…特徴的な耳の女性…。

「……パルスィ…さん…？」

こうして二人は再開する…そして、廻り始めた運命…二人の物語は此処から始まる。

14話 嫉妬姫との再会

「……碧…なの？」

「パルスイ…さん…？」

二人は見つめあつたまま沈黙した…。

どのくらい見つめ合っていたのか…その沈黙を破ったのはさとりさんだった。

「えっと、見つめ合ってる所悪いけど…パルスイ…碧…あなた達…知り合いだったの？」

その言葉に二人ともハツとして目をそらす。

「ええ、僕が幻想郷に来た時に…一番最初に出会ったのがパルスイさんなんです。何にも分からない僕に色々教えてくれて…本当にパルスイさんには感謝しています」

すると、少し照れた顔をしたパルスイさんは…。

「そ、そのくらいの事、普通でしょ／＼／＼…それよりも、碧…てつきり外の世界に帰ったのだと思っただけれど…？」

「それについては私から説明させて貰うけど…先に席に着かせて貰っていいかしら？」

そういえば、そうだ。このまま入り口に居ては他のお客さんにも迷惑がかかるし…。

そして、さとりさんの指示により、僕はパルスイさんの隣の席に座る事になったんだけど…パルスイさん…何だか良い香りがする…／

／
暫くして、女将さんがお通しとおしぼりを持って来た。料理に関してはさとりさんに任せる事にしたんだけど…。

「さて、お料理も注文したことですし…。パルスイ、説明させて貰うわね——」

そして、さとりさんの口から、僕についての説明がされた。

幻想郷に住むことになった事

今は八雲家にお世話になっている事

今日は挨拶回りで来た事

自分の身を守ってくれる人に依頼している事

今宵は地霊殿に泊まらせて貰う事

晩御飯を食べに、この店に来てパルスイさんに偶然会った事を…。

「こんなところかしらね？大体の事情は分かってくれましたか？」

「ええ…。それにしても、私と別れてから色々と在ったのね。でも、何で幻想郷に住もうと思ったのかしら？」

「こればかりはさとりさんの口から言わせる訳にはいかない…。意を決して僕は話し始めた…。」

「…紫さんの話だと、…外の世界には…僕はもう存在できないみたいなんです」

その瞬間…その場で聞いていた三人は息を呑んだ。

それはそうだろう、妖怪や、神ならば…自身の信仰や怖れが無くなると消滅する。しかし、人間にそれがあろうだろうか？

人は死んでも、そこに居たという事実は残される。しかし僕は、その事実すらなくなったのだ。

「誰からも忘れ去られ、自身が幻想となる…。遅かれ早かれ、僕はここに來ることになったのだと…。そして、再び僕が外の世界に戻れば、その時は完全に消滅してしまう。幻想郷にも來れず…誰の記憶からも居なくなる…。それだけは嫌だったんです…。そんな時、結界の綻びが起きて、僕は幻想郷に來る事になりました。僕の願いは…今とは違う環境で、素敵な出会いがある事…幸せになれる事…。それを聞いた紫さんが僕を此処に送ったみたいなんです。もしかしたら…此処で運命の出会いがあるからと」

すると、パルスイさんから質問が来る…。

「なら、碧はもう…出会ったのかしら？その…運命の人と…？」

「それは僕にも分かりません…。ですけど、幻想郷の人は皆良くしてくれます。僕が妖怪に狙われやすい事と、八雲家の庇護下にある事を差し置いて…個人として…思ってくれたのを感じました…。こんなにも人に思われた事って、あんまりなくて…正直、少し戸惑ってます…。」

「こう言うっては何ですが…碧さんは元々、外の世界と相性が悪かった

ね…。

注文を済ませ、お通しをつつきながら、そこそこの量のお酒を飲んでみると、女将さんから声を掛けられた…どうしたのかしら？

“パルスイさん。さとり様が見えられたのですが…相部屋にされてもよろしいですか？”

さとりが？丁度いいわ。さとりなら私の心のモヤモヤを聞いてくれるかもしれない…。それで私は承諾したのだけれど…。

襖が開かれてさとりが入って来たの…そして、その後ろには…。

「…碧…なの？」

「パルスイ…さん…？」

私は自分の目を疑ったわ。だって、彼が…碧が旧都にいるなんて普通は思わないでしょ?!

私と碧は暫く見つめ合ったわ…。今日は顔を隠しているのね…。

また、あの時みたいに顔を見せてくれないかしら…？でも、髪の間から見える彼の瞳は相変わらず綺麗だった。

「えっと、見つめ合ってる所悪いけど…パルスイ…碧…あなた達…知り合いだったの？」

さとりの言葉に我に返った…とつても恥ずかしかったわ／＼

そして、さとり達が席に着いたんだけど…何で私の隣が碧なのよ?!

部屋もそこまで広くないから、彼の肩と私の肩がずっと当たってるし…まだ今日はお風呂にも入ってないから、汗の臭いとかしてたらと思うと…／＼

そして、さとりの口から、彼が此処に来た理由を聞いたの…本当に凄い偶然が重なったのね…。

でも、その後…碧の口から幻想郷に残った理由を聞いて、私は絶句したわ。

だってそうでしょう？妖怪や神ならいざ知らず…只の人間が世界に否定されるなんて…あんまりすぎるわよ!?

そして、彼が地底に飛ばされた理由を聞いて、私はドキツとしてしまった。

運命の人…。もし、それが自分なら…。どれだけ良いか…。どれだけ彼を幸せにしてあげられるか…。

でも、彼の口から守矢の巫女の名前が出てきたとき…。思わず私は嫉妬してしまったわ…” 早苗ちゃん”

そう呼んだ彼の顔には、少しだけ嬉しそうな感情が出てたから…。ああ…。妬ましい…。彼にこんな顔をさせる守矢の巫女が…。

「……………妬ましい」

思わず口から、その言葉が出ていたらしい…。

私がハツと見ると、さとりが、やれやれ…。といった顔をして、碧は、心配そうな顔でこつちを向いてくる…。やめて！

私は今…。明確に嫉妬していたのだ…。名前で呼ばれる守矢の巫女に…。一緒に暮らす八雲家の者に…。

今の私は橋姫という前に、嫉妬妖怪という存在でもある。嫉妬妖怪は、名前の通り、他人の嫉妬心、自身の嫉妬心を操り力に変える妖怪。でも、今この時だけは、そんな力は要らなかった。彼に、見られたくない…。嫉妬に塗れた私の姿なんて…！

渦巻く思いが私を巡る…。それが嫌で部屋を後に、立ち上がりとうした瞬間、私の右手は温かい何かに包まれた…。



「……………妬ましい」

パルスイさんから聞こえてきたその声…。ぞつとするような声…。だけれど同時に、何かに縋るような悲しい声…。

するとパルスイさんはハツとして、さとりさんと僕を見てきた。その表情は何かには怯える様な…。恐れる様な表情…。

いけない！…。そう思った時には、僕は行動していた。彼女の右手を握り絞め…。

「大丈夫ですよ。パルスイさん…。僕が言った何かが、また、パルスイさ

わせていた…。

そして、急に力が抜けたと思つたら、パルスイさんはスヤスヤと可愛い寝息を立てながら眠っていた。

何か悩みでもあったのだろうか…？彼女の眼には隈が出来ている…。

自分が何かしてしまったのか…？パルスイさんを思い詰めさせる事を…？

すると、さとりさんから声を掛けられた。

「何となく…分かりましたけど…。まさかここまでだったなんてね…」

「あ、さとりさん…／＼／＼」

「そうだ、ずつと見られてたんだ…僕がパルスイさんを抱き締めた事も…あのキスも…／＼／＼」

そう思つたら、自分が凄く恥ずかしい事をしていたんだなと思い、自分でも分かるくらい顔を赤くして、俯いた…。

「気にしなくてもいいですよ。私もああいった事は、見慣れている訳ではありませんが／＼／＼…こほん。パルスイも、だいぶ思いつめていたみたいだったから…。もし碧さんが嫌な気分をってしまったのなら、地底に住む者の代表として謝罪致します…」

申し訳なさそうに、こちらを向くさとりさん…。

「嫌だなんてそんな…：…ただ、どうして、パルスイさんが、あんな表情をしたのか…僕に…き、キスをしてくれたのが分からなくて…。

でも、僕の気持ちは「ストツプですよ」…？」

「それは後日…彼女に直接言つてあげて下さい。その言葉を最初に聞く権利があるのは彼女だけですから…ね？」

そう言つてさとりさんは、僕の膝の上で眠っているパルスイさんを見る…。

「…分かりました。あ、でも、パルスイさんはどうしましょうか？このままだと風邪を引きますし…」

「それでしたら、別室があるのでそこでお休みさせましょう」

丁度料理を持ってきた女将さんが言ってくれた。

「二階でしたらお客さんも入ってきませんし。お布団もあります。さあ：パルスイさんの事はこちらに任せて、皆さんはお料理を楽しんで下さいな」

そう言つて、パルスイさんを軽々運んでいく女将さん：流石は鬼：自分よりも一回りは背の高い人を運べるんだ：。

その後は、女将さんに言われた通り、料理を食べた。正直、最初はそんな気分じゃなかったけど、一口食べて、その美味しさに感動し、気が付いたら全てを食べ終わっていた。

因みにこの間、お燐さんはずっと赤面して固まっていた。これが普通の反応だよね／／

「女将さん、色々ありました但今日はごちそうさまでした。相変わらず美味しかったですよ」

「さとり様にそう言つて頂けたなら良かったです。碧さんも：旧都に來ることがあるなら是非、うちをご鼻眞に：」

「あ、はい！こちらこそ：美味しい料理とお酒：ごちそうさまでした。あんなに美味しい料理を食べたのは生まれて初めてでした」

「それは良かったです。それと：パルスイさんには、あの手紙を渡しおけば良いのですか？」

「ええ：：お願いします。あ、あと：：これを渡しておいて下さい」
そう言つて僕はポケットから、簪を取り出して渡した。

この簪は自分用で、長い髪を止める時に使うのだけれど、まあ普段はあまり使わないので、今ではお守り代わりのような物になっている。

「あら：：これは綺麗な簪ですね：。分かりました。では手紙と一緒に渡しておきますね」

「よろしくお願いします。それでは失礼します：」
そうして、僕はさとりさんとお燐さんと一緒に地霊殿へと帰つて行つたのでした。

「ではお風呂はここを使っておくれ。それから、部屋の方は後で案内するから」

頼した方なんですもの」

「……あの……違つてたら申し訳ないんですけど……ひよつとして、さと
り様も彼の事……?」

まあ、嘘を付いてもしようがないわね。

「ええ……もし、出会いが違えば、間違いなく恋に落ちていたでしょう。
今の立場なんて関係なく……。でも、先を越されちゃったから……」

パルスィがキスをしていなければ、自分が迫っていたかもしれない
……。でも……。

「とはいえ、只で引き下がるのも女が廢るから……。私もアプローチは
させてもらうわよ?……ふふっ♪今日からライバルね……パルスィ♪」

———そうして、幻想郷の長い長い一日は終わりを告げるのでし
た。

ないでしようか？

明後日…十時頃に、橋に行きます。

パルスイさんが良ければ、そこで待つていて下さい。

それと、この手紙が嘘ではない事の証明に、僕の簪を渡します。

では、会えることを楽しみにしています。

大神碧

その手紙を読んだ私は、昨夜の全てを思い出したの…。

いくら、お酒を飲んでいたとはいえ…私つてば…何て事をしてしまったのよ?!

恋人でもない…しかも出会って間もない男の子に…嫉妬して…慰められて…その上、無理やりキスをして…／／

どうしよう…彼に嫌われていたら…。いや、確実に嫌われているだろう…だって、出会って直ぐの相手から、無理やり唇を奪われたのよ?!

「うあああ……………／／／／／／／／」

昨夜の自分をスペカで吹き飛ばしたい…。

羞恥とも、絶望とも取れるようなうめき声を上げる私に…。

「…どうやら、思い出したようですね。それと、これが彼から預かった簪です…」

手渡されたのは、桔梗の花の意匠が施された小さめの…でも、存在感のある紫の簪だった。

「…綺麗…。それに…何だろう…見ていて落ち着くわ…」

単なる装飾品…なのに、それを見ていると心が落ち着いてくる…。

「——…女将さん…。昨夜は醜態をさらしてしまい、申し訳ありませんでした」

深々と私はお礼をする…。

「あらあら。気にしなくても大丈夫ですよ？…それに、あんなパルスイさんを見るのは初めてでしたので、少し新鮮でした」

そう…私はお酒を飲んでもどこぞの鬼の様に、絡み上戸になったり…ましてや、酔い潰れた事なんて一度も無い。

生まれて初めての経験に、混乱するけど…まずは、あ…さとり?!
そうよ、まずはさとりで謝りにいかないと…。

「女将さん、ご迷惑を掛けてすみません。私は今から地霊殿に行きま
すので。近いうちにまた、来ると思うので…その時は」

「ええ…お待ちしております」

そうして、私は駆け足で地霊殿へと向かった。

はあはあ…やっと着いた…。

「ふう…誰か！居ないのかしら?!」

すると奥から相変わらず眠たげな深紅の瞳…地霊殿の主…さとり

「あら…こんにちわ。ようやくお目覚めになったのね？大方、昨夜の
事を聞きに来たのでしょうか？良いわよ、入って頂戴」

さとりについて行き、居間へと入る。相変わらず見た目に反して、
可愛い縫いぐるみを沢山持っているのね…。

そうして待っていると一杯の紅茶が出される。

「冷めない内にどうぞ？私も頂かせて貰うわね…うん…我ながら上出
来ね。どうかしら？」

「妬ましいくらい、美味しいわよ…。全く…これでいて恋人が居ない
だなんて…本当に不思議よねえ」

「ああ、その事なんですけど。私、碧さんの事を狙う事になりましたの
で、悪しからず」

一瞬、その場が凍りついた。

「あのさ、さとり？今何か面白い事を聞いたのだけれど…私の聞き間
違いかしら？」

「いいえ、聞こえていたのならそのままの意味ですよ？あの子は私の
旦那様にします。それから、家の発展の為にどんどん子供を作っても
らいますから…あ、流石に昨夜は何もしていませんよ？」

「妬ましいことしてくれるわね…。てことは…これで私達は同じ殿方
を狙う、ライバル関係って事になったわね」

「そうね。出会ったのはあなたが最初かもしれないですけど、より長
い時間話したのは私ですからね…ふふっ…♪」

「女たちの間に火花が飛び散る…が。」

「でもパルスィは羨ましいわ。彼の唇を、あんなにも扇情的に奪って行ったなんてねえ」

グサツ!?

「本当なら、彼に多少お酒を飲ませて。体が上手く動かせないところを、私が…とも考えていたのですが。先を越されてしまいましたね」

グサツ!?!グサツ!?

そして、思い出す昨夜の醜態…／／

「まさか出会って十分もしないうちに、あんな事になるなんてねえ…流石、嫉妬姫様と言った所かしら?」

「う…言わないで…いくら酔っていたと言え、いくら再会の嬉しさがあつたと言え、いくら嫉妬の抑え込みをしようとしても…やっちゃった事には変わりないんだから…。はあ…私…嫌われたわよね…?」

「あなた、私は一応ライバルのだけれど…?まあ…本気で嫌っているなら、手紙も書かないだろうし、何より大切な簪何て渡さないとと思うわよ?」

「うん…——そうね、なら私が出来る事は、彼と出会って、気持ちを聞く事。そのためには今から準備をしないとね…。ありがとうさとり!明日、彼と話をするから、それから考える事にするわ」

そうして私は自分の身だしなみを整える為に地霊殿を後にした。

「さて、これから物語がどんな風に動き始めるのか…楽しみね♪」

——素敵な笑顔を浮かべたさとりがその光景を見ていた

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

翌朝、さとりさんとお燐さんにお礼を言いながら、僕は転移札を使つて八雲家へと帰りました。すると…。

「あ!碧お兄ちゃんだ!おかえり〜!」

「む、碧か、紫様から聞いては居たが多少は心配したぞ?」

「ご心配おかけして、申し訳ありませんでした。あ、これお土産の地霊饅頭です」

そう言つて藍さんにお土産を渡しておく…。

「それと、藍さん。突然で申し訳ないんですが…明日…お休みを頂けませんか?」

少し考えた藍さんは…。

「ふむ、その理由は?」

真つ直ぐな目。僕も真摯に答える。

「大切な女性との…デートの約束をしています」

すると予想の斜め上を行った解答だったのか藍さんはフリーズしてしまった。逆に橙ちゃんは…「お兄ちゃんデートするの? 大人だね」と言つてくれた。

そして、藍さんの許可は取れたものの、次は紫さんか…。

「ふわあああ…。おはよう、今日の朝ご飯は何かしら?」

「いつものメニューです。もう、出来てますよ?」

「ありがとね。 (いつもはカリスマ溢れる人なのだが、朝だけは弱いみたいで、いつもこんな感じになる)」

そうして暫くご飯を食べていると…。

「碧君…昨日は良いことがあったかしら?」

と面白半分で聞いてくる紫さん。うん、言うなら今しかない。

「それなんですけど…紫さん…明日一日お休みを頂けませんか?」

すると今まで寝ぼけ眼だった目が一気に鋭くなる。

「それは、昨日の事と関係しているのかしら?」

「ええ…紫さんの言っていた、運命の人に関する事です」

少し考えた紫さんは…。

「——いいわよ? 大方デートでもするんでしょう? 先立つものも要るから…そうね、少しだけれど、これを持っていきなさい」

と言つて渡されたのは諭吉五人分…え?! いいんですか?!

「ゆ、紫さん?! これって…本当に貰つてしまつても良いんでしょうか?」

「ええ。昨日のあなたの活躍の報奨金よ。持っていきなさい。それに、男の子なのだから、きちんとエスコートしてあげるのよ?」

嬉しくなってくる…もう、これだから紫さんは…。

髪型と、中性的だけど彼に良く似合った服装…ああ…相変わらず綺麗な顔立ちだわ…。

向こうもこちらに気が付いたようで、少し駆け足で来てくれた。

「おはようございます。お待ちさせてすみません」

「いいえ、私も今来たところだから、問題ないわ」

（嘘だ…楽しみで一時間も前から来ていたなんて言えない）

「それと…」——？…その服と髪型…パルスィさんに、とっても良く似合ってます。えっと…前の服装も良かったですけど…。その服装も素敵ですね／＼／＼」

それを聞いた私の心臓は、それだけで飛び上がりそうになったわ…それに彼の格好も…。

「碧の格好も、とつても素敵よ？髪で顔を隠してたのが勿体ないくらいに…ね？」

すると、彼は照れた顔をしてそっぽを向いた…ふふっ…可愛い♪

「えっと、じゃあ行きましょうかパルスィさん」

そうして私の手を握ってくれる碧…ああ…やっぱりあの時の感触は夢じゃなかったんだわ…。

「そう言えばどこに行くのかしら？」

「ええ折角の…その…で、デートなのでウインドウショッピングとかを考えてたんですけど…ダメでしたか？」

照れたかと思えば、少ししよんぼりとする碧…それだけでも可愛い…。

「私は構わないわ。碧は旧都へは、この前来て以降、来たのかしら？」
「いいえ。翡翠で晩御飯を食ただけなので…情けない話なんですけど…どこに何があるのか分からないんで、案内してくれると嬉しいかな…と。ダメでしょうか？」

そんな上目使いで言われて断れる人なんて居るわけないでしょう！（彼の方が身長が低いので、自然と上目使いになるの）

旧都の案内を私がしつつ、碧は土地勘を覚える為に必死になっていた。

それでも私の手を、ずっと繋いでいてくれたのはとっても嬉しかった。

ただのだけれどね♪

そして、お昼時…女将さんへのお礼も兼ねて、翡翠で取ることにした。今日のお勧めは、新鮮な魚を使った海鮮丼を二人で注文した。その時の女将さんの微笑ましい笑顔が印象的だったわ。

「ふう…夜の懐石も美味しかったですけど、昼の軽食も本当に美味しいですね！」

「ええ…本当にね…(多分…あなたと一緒に食べているから、余計に美味いのでしようけど)」

無邪気に答える彼に、私は一種の母性本能の様な物…。ううん…違うわね。やっぱり私は彼に恋焦がれているのだと確信した。

会計の時に、彼から——「ここは僕に奢らせて下さい…その、…デートなんですから／＼／」って…ああ…何て幸せなんだろう…。

そうして、午後から再びウインドウショッピングを続けた。見た事も無い商品や、妖怪達の笑顔に、碧も…そして、私も久しぶりに楽しい思いが出来たわ。

——途中、呉服屋の亭主から、「おお…ついにパルスイちゃんにも彼氏ができたのかい？」って言われたときは、二人して顔を真っ赤にしたのだけれど／＼／＼／

そして、気の向くままウインドウショッピングを済ませた私達は、最初に集合した場所、橋の上に戻ってきていた。

余談ではあるが、地底にも疑似ではあるが太陽があり、朝、昼、夜もきちんと時間によって変わる。

その日差しが夜のそれへと変わる前…橋の向こうに夕日が沈む前に…私は彼に気持ちを伝える事にした。

「——パルスイさん(碧)——」

あら…被っちゃったわね…。こういう時は殿方からって言うし…。「碧からどうぞぞ?。」

「ありがとうございます…。えっと…よしっ!。——…すうっ…水橋パルスイさん!幻想郷で僕が初めて出会った人…。そして、優しくて、綺麗で可愛くて…僕は、そんなあなたに…一目惚れしました!パルスイさんこそが運命の人なんだと思いました!…だから…僕と、付

き合ってください！」

そうして、頭を下げる彼…良かったあ…嫌われて無かったんだ…なら、こちらも答えないとね…。

ふう…一息ついた私は自分の思いを語り始めたの。

「私も…あなたの事が…大好きです。でも、私は不安だったの…」

「パルスイさん…？」

不安…そうあの日の夜の事…。

「私はね…初めてあなたから可愛いつて言われた、あの日から、ずっとあなたの事を思っていたの…。この気持ちは何なのか…また、あなたに会えないのかってね？それから毎日の様に、あなたの事を考えたの…それこそ、寝ても覚めてもね？」

「それで…あんなに隈が…ごめんなさい…」

気にしてくれたのね…優しい子…。碧が謝ってくれる。

「いいのよ？碧は何にも悪くはないのだから？…それから、一昨日の夜…気分を変える為に翡翠に行ったの。そこでまさか、あなたと再会できるなんて夢にも思わなかったけど…」

「僕も…本当にびっくりしました。まさかパルスイさんと出会えるなんてって…」

嬉しい…♪碧も思ってくれたのね…

「そして、あなたの事情を聞いて…悲しくなった…でもね、それ以上に…妬ましくなったの…。あなたと暮らしている、八雲紫…。あなたの口から楽しそうに話された守矢の巫女…。そして私の本質は嫉妬…」
意を決して、私は彼に語ったわ…。

外の世界で在った事を…

何故私が自分の耳を嫌っているのかを…

そして、自身の能力…嫉妬心を操る程度の能力の事を。

「あの日…私は自分の嫉妬心を抑えられなかった…。あなたに醜い顔を見て欲しくなかった…。でも、そんな私の事を…あなたは心配してくれて、優しく抱きしめてくれたわ。…温かかった…。ずっと抱きしめて貰いたかった。そして、目の前にあなたの顔があつて…そこで私の…それまで抑えていた恋心が解き放たれたの…。あんな形で…

あなたの唇を奪ってしまったってごめんなさい…」

お酒が入っていたというのはい訳にならない…だから、私は本心を語る…例えば碧に軽蔑されても…。

「今日…あなたに会うまで、ずっと不安だった。醜い嫉妬心を見せた私を軽蔑していないか？いきなりキスをしてしまって…嫌われていないか？…って…こんな私が…あなたに恋する資格なんて…」——パルスイさん！」…？…？…つ！？」

俯きながら語っていた私の唇に…温かい物が触れる…。これは…彼の唇…？

私…彼にキスされているの…？

「んう……っ…んあ……ふう……」

彼の気持ち伝わってくる…私の事を愛してくれているのだと…只ひたすらに、優しく想ってくれているのだと…。

どれくらいそのままキスをされたか…私の思考は蕩けて…気が付いたら日も暮れていた…。

そして、彼の唇が離れて行く…ああ…もつとキスされていたかった…。そして、私の顔を見ながら、碧は言ってくれたわ…。

「パルスイさん…これで僕も同じです。パルスイさんにずっと恋焦がれて…ずっとキスをしたかった…僕の気持ちです…。嫉妬？そんなもの誰だつてします！キスをした？好きな人の顔が目の前に在ったら誰だつてしたくなります！それに…嫉妬してくれるって事は…それだけ僕の事を想ってくれていたからでしょう？僕はそれが嬉しい…。だからもう一度言います…水橋パルスイさん！僕と…恋人になつてください！」

ああ…何て…何て嬉しいんだ…。

私自身が否定していた嫉妬心を受け入れてくれて…その上でまた、告白してくれて…。

…
こんなに私は彼に思われていたんだ…。嬉しくて涙が止まらない

碧はそんな私を、泣き止むまで見守ってくれていた…。そして、私は彼に返事をした。

「ぐすっ…。こんな私に…いいえ、私で良ければ…お願いします…碧
／＼／＼」

すると、彼からとても嬉しそうな声で…。

「――…っ?!…良かったあ…。…ありがとうございます。それと…こ
れから、よろしくお願いします…パルスイさん!」

そして、私達は再び口づけをした…どちらからでもなく…お互いが
求めるままに…。

夕暮れを過ぎ、宵闇に包まれた橋の上で…二人は結ばれた…。

16話 紹介く立ちふさがる壁く

パルスイさんと結ばれた翌日、今僕達二人は、地霊殿に居る。そして、目の前には…神妙な顔をした紫さんとさとりさん。どうしてこうなったのかと言うと、時間は昨夜に遡る…。

キスを惜しむように僕とパルスイさんは、お互いに離れた。

「碧…今日は、この後どうするのかしら？…泊まっていくな？／＼／」
非常に嬉しい相談だけ…。

「嬉しい相談だけ…今日は帰る事にするよ。あんまり遅くなると、八雲家の人達も心配するし…。それに、パルスイさんと恋人になった事を報告したいんだ」

（あれからパルスイさんは「恋人なのだから、同じ立場で話して？」…と言ってくれたので口調を変えた）

「そう…それなら仕方がないわね…。私も…友人に報告したいし…。名残惜しいけど…今日はここまでね…」

少し寂しそうな顔を浮かべるパルスイさん…それなら…。

「パルスイさん…良ければ、僕の渡した簪…受け取って貰えませんか？離れていても…いつでも一緒に居るって事の証の為に」

驚いた顔をしたパルスイさんは…。

「いいの？…これって大切な物なんじゃ…？」

確かに、僕が外の世界から持ってきた数少ない物ではあるけど…。

「いいんです。大切な物だからこそ…大切な人に持っていて欲しい。そう思うのは…僕のエゴなのかな…？」

するとぶんぶんと顔を振るパルスイさん。

「そんな事ないわ！…これを見ているととっても落ち着くの…だから、あなたと会えない時は、いつでもこれを見ているわ♪」

幸せそうな顔で言われると…なんだろう…恥ずかしいけど…凄く嬉しいな／＼／

「じゃあ、話していると…キリがないんで、今日はこれで…また、直ぐに会いましょう！」

そうして、僕は転移札を使って八雲家へと帰った。

帰ったら、丁度夕食時だったみたいで、その席で僕は皆にパルスィさんと付き合う事を報告した。

「そうか、それはおめでどう！良かったな碧！」

と喜んでくれる藍さん。

「本当に、よかったね。お兄ちゃんにも春が来たんだね♪」

そして喜んでくれる橙ちゃん…。

「おめでどう。まあ碧君なら、心配ないと思っていたけど…でも、そうね…碧君、明日…地霊殿に行くわよ」

少し、何かを考えるかの様な紫さんから言われる。

…地霊殿に？

「あの…地霊殿で…一体何を？」

「まあ…それは明日になったら分かるわ。今日は疲れたでしょう？ご飯を食べて、お風呂に入ったら、早めにお休みなさい？」

そうして、僕は言われた通りに早めに就寝する。でも…本当に今日は嬉しいことが沢山あったなあ…。

翌日、準備を整えた紫さんと僕は、地霊殿へと向かった。

そして、この前の様にお隣さんに連れられ、応接室に通されると…

「さとりさんと…パルスィさん…？」

何でパルスィさんが此処に？

「碧さん…話は伺っています。そちらにお掛け下さい…」

そうして、パルスィさんの隣の席に案内される。

僕とパルスィさんは、紫さんとさとりさんの二人と向かい合う形で座ることになった。ここで今の状況と繋がるのだが…。どうしたんだろう？

「碧君…そして、橋姫…水橋さん…まずは二人とも、おめでどう…と言わせて貰うわ」

「私からも、親しい友人同士が結ばれて、とても嬉しい限りです」

ありがたいけど…でもそれなら、何でこんな席を用意したんだろう

？それに…二人の顔も心なしか神妙だし…。

「そうね…碧君の言いたい事も分かるから…説明させて頂きますわね。…碧君は人間、そして水橋さん…あなたは妖怪…これがどういった事か理解できていますか？」

種族の違い…っていう単純な話じゃなさそうだ…。すると隣に居たさとりさんから…。

「恋人になって嬉しいのは分かりますが…単刀直入に言わせて頂きます。人間と妖怪…その壁は二人が思っている以上に厚いのです」

そして、畳み掛ける様に紫さんが続ける…。

「妖怪は、殺される…または忘れ去られれば存在が消える。でもね、人間は違う。“寿命”と言う明確な終わり…壁が…そこには存在するの…理解できるかしら？」

そうか…パルスイさんはこれからも生きていける…でも僕は違う…確実に…死という運命を辿っていく…。

そうなるパルスイさんはどうなる？人間にとつての一生でも、寿命という概念の無い妖怪からしたら…それは一瞬…。

ほんの一瞬の為に、パルスイさんを永遠に悲しませる？そんなのは僕は望んでいない…。でも…。

「八雲様、さとり…二人の言いたいことは分かっているわ。一瞬の気の迷いで、永遠に私を苦しめる事になる。今ならまだ傷の浅い内に解決できる…そう言いたいんでしょう？」

二人は黙って頷く…。パルスイさんも分かっているんだ…それならやっぱり…僕たちは…結ばれるべきじゃなかったのかな…。「でもね！」…パルスイさん？

「でもね、それが何よ？たとえ一瞬かもしれない…泡沫の夢のような物かもしれない…。それが何？ここで、彼と…碧と結ばれなければ、その想いですら無かったことになる…そんなの私は嫌よ！碧が居なくなる…死んでしまう事を考えたら…確かに、それこそ死にたくなるくらいに辛いわ…」

そうして、パルスイさんは一息ついてさらに大きな声で続ける。

「それでも！満たされない永遠よりも、泡沫の夢を私は選ぶわ！私の

事を受け入れてくれた碧……こんな人と出会えることなんてない！永遠に苦しむ？それなら碧が死んだら私も死ぬわ！碧の存在以上に……今の私にとって大切な物なんてこの世界には無いの！……たとえば碧が年をとっても……どんな姿になっても……一緒に生き続ける！これが私の……橋姫ではなく……妖怪でもなく……水橋パルスィ個人としての“覚悟”よ！」

その言葉に、僕は胸を打たれた……ああ……やっぱり……僕の選んだ人は素敵な人だったんだ……——なら、僕も……覚悟を決めなきゃ……——

「我儘かもしれない……パルスィさんを苦しめるかもしれない……。それでも……僕はこの人と……愛するパルスィさんと生きていきたいんです！例えばそれが茨の道になっても……パルスィさんとなら……きつと幸せを掴めるから！」

テーブルの下で、僕とパルスィさんはお互いの手を握り締める。

そんな僕達の言葉を聞いた、紫さんとさとりさんは……ふっ……と微笑みながら言ってくれた……。

「二人の想い……覚悟……確かに聞いたわ……。これなら心配いらないわね、さとり？」

「ええ……私も……異論はないわ紫さん。……二人とも……安心して頂戴？二人の仲を引き裂こうなんて思っていないから……。私達は、それぞれの代表として聞いておきたかったの……二人の覚悟を……」

「それと……碧君にもまだ言っただけだ……。あなたが幻想になった瞬間に、あなたの寿命は無くなっているの。正確には、成長しなくなった……とも言えるのだけれどね」

え？……それじゃあ……？

「碧と……ずっと一緒に居られるってこと……？」

「ええ……そうです。ただ……あくまで寿命が無くなっただけで、病気や、殺されたりしたら、死んでしまうから……注意してね？」

「その辺をフォローするために紫さんと私が話し合ったの……。地底の妖怪には病気を自在に操れる者もいるし、地上には天才と呼ばれる医者も居る。後は、あなた達二人の覚悟と想いを聞いておきたかったの……許してね？」

17話 居酒屋デートく想いの強さく

元々、彼女…水橋パルスイはかなりの美女である。

だが、彼女の能力と、自分からあまり、他人とは関わらないようにするために、そこまで親交も多くな、他の妖怪からも声を掛けられる事は殆ど無かった。

しかし、ある時からそれは変わる。良く旧都に出かけては、色々な食材を買い、そして、前にも増してその美しさに磨きが掛かっている。食材屋の店主からしたら、その顔は新妻のそれだろう。お幸せに！と声を掛けてあげる。

しかし、何も知らない妖怪から見たら、益々美人になり、性格の明るくなつた彼女は、またと無い恰好の獲物である。

今日の仕事を終え、いつもの通り橋へとやってくる。

すると最愛の人…パルスイさんが待っていてくれた。

「ごめんねパルスイさん…いつも待たせちゃって」

「いいのよ？あなたにはあなたの仕事がある…それをキチンとこなせるんだから…何も文句なんてないわよ」

そうして、いつもの様に旧都へと繰り出す。

最近パルスイさんと二人で居酒屋を回り、二人で晩酌をし合うのが日課となっている。

新しいお店を見つけてはそこに行き、二人でその日在った事を話している。

何の取り留めもない、面白味の無い話。でも、二人で飲みながら話す、途端に楽しくなる…これが恋人との時間なんだな…。

でも、その日は運が悪かつたんだろう…。食事を済ませ、店を出て直ぐに…。

「おい…ねーちゃん！最近噂になつてる橋姫だろう？ちよつと俺達と遊ぼうぜえ？」

酔っぱらつた数人の鬼の男達に囲まれてしまったのだ。

「はあ…見て分からないのかしら？今は連れと一緒に居るの…邪魔を

しないでくれる?」

毅然と返すパルスイさん……。しかし相手は酔っ払い…。

「はっ…そんなもやしみたい人間に何ができるっていうんだよ?俺達ならねーちゃんを愉しませてやれるぜ?」

下賤な笑み…。自分が言われた事よりもパルスイさんに“そういう”目線を送っている事が許せない…。

「行こう。パルスイさん、こんな輩…相手にしてもムダだから」

すると鬼の中の一人が、僕のその言葉に激昂する。

「ああん?!人間風情が喧嘩売ってんのか?!」

「それとも何か?目の前で彼女が奪われるのを見てみたいのか?クヘへ…」

こいつら…!ダメだ…せめて、もう少し人通りの多いところまで逃げよう…。

僕はパルスイさんの手と肩を取り、その場から大急ぎで逃げ出した。

「ちよつと碧?!あれくらい的人数なら私でも…」

「ダメ!あの場所だと他の人達の迷惑にもなる…それにこの旧都で、事件なんて起こしたくない…パルスイさんやさとりさんが大切に思う、この旧都で…。それに人通りの多いところならあいつらも暴れられないと思うから!」

でも、その考えは甘かったらしい…。

鬼はすぐさま僕達に追いつき、気が付いたら人気の少ない場所へと追い詰められていた…。しかも…人数が増えている…。

「ハッ!楽なもんだなあ?素直にあの場で着いて来てりやあ良かったものを…」

こいつら…まさか前から狙っていたのか?!だとしたら説明も付く…この大人数と、人気の少ない場所への誘導…やられた…。

「ずつと狙ってたんだよ?最近旧都で話題のねーちゃんをなあ!ひひひー!」

「俺達を愉しませてくれよ?」

ふざけるなよ…でも、いくらパルスイさんでも、この人数の鬼相

手じゃ無理だ…。せめて、パルスイさんだけでも逃がさないと…！
「パルスイさん！転移札を！」

「……無理…：みたいね…：さつきから何度か試そうとしてたんだけど…簡易結界が張られているみたいなの…」

「そんな…：どうかして…。パルスイさんだけでも逃げて！」

「そんな事できる訳ないでしょ！私は碧を守るって…：幸せにするって、紫さんと約束したの！」

すると一匹の鬼が目の前に出てきた…。

「無駄口を叩いてる暇があるのか？そうだな…：その人間を殺せば…：あんなを手に入れる事は容易そうだなあ？」

「碧には手は出させないわ！あんた達全員を道連れにしてでも守って見せるんだから！」

震えているのが分かる…。この人数の…：しかも腕力ならば最強クラスと言われる鬼に囲まれているのだ…：僕も、本当なら逃げ出したいくらいだ…。

でも、僕が逃げたらパルスイさんがこいつらに捕まる…。それだけは絶対にいけない！

「こんな事をして！鬼の…：いや…：旧都に住む人としての誇りが無いのか！」

少しでも時間を稼げれば…：と思つて言葉を放つ…。

「ふん！鬼はなあ…：力有る者が正しいんだよ！それに、俺達はこの旧都が大っ嫌いなんでね…：戦も強奪も出来ない…：こんなクソみたいな場所に誇りなんてあるわけねえだろ！」

「ハッ…：最低ね？それで女一人襲うのに、この人数？情けない男。力有る者が正しい？だつたらあなたは悪ね！寄つて集ることしかできない…：蛆虫ね！」

その言葉に鬼は激昂する…。

「ち、調子に乗るのもいい加減にしがれ！このアマ…：テメエ達、傷がついても構わねえ！この女をボコボコに痛めつけて、奴隷にしてやるぞ！」

そして鬼が拳を振り上げる…。いけない！

私が出て行くこうしたら…。

「まだですよ、勇儀さん？」

同行者から止められる…何でだい？

「そんなこと言っても、あいつら…このままじゃ危ないですよ！」

「いざとなったら、私が直ぐに助けます…勇儀さんは見て下さい。彼の強さを…」

あいつの強さ？分からない…見た目はただの人間、特別な力も無い。そんな人間が何を？

でも、見ていて分かった…あいつは逃げながらも、ずっとパルスィを庇いながら逃げていた。

最愛の人を傷つけない為…。そして言った…。

“この旧都で、事件なんて起こしたくない…パルスィさんやさとりさんが大切に思う、この旧都で…”

最近来た人間なのに、旧都の本質を分かっている…それに、住む人達が、旧都をどれだけ大切に思っているのかを…。

私は胸が熱くなった、この旧都を管理する鬼として…一人の個人として。

そして見た。パルスィに向かって振り上げられる拳を、食らえばその身が碎ける筈の一撃を、彼は自分の身を挺して守ろうとしたのだ…。

それで十分だった…私が動くには…。同行者もそれを分かっていたのか動かなかった。

目の前の鬼から放たれた、“軽い拳”を受け止め…

「惚れた女の為に、自分を犠牲にする…そして旧都の人達を思う、優しさの中にある強さ！あんたの“漢（おとこ）の覚悟”…見せて貰ったよ！」

さあ…暴れるには十分な理由が出来た…今日の私は…最高に気分が良いぞ！

「星熊勇儀！押して参る！」



「勇儀?!何でこんな所に?!」

勇儀…？いったい誰なんだろう…。でも、女性の言葉は胸に響いた…自分の覚悟を…見せて貰ったと…。

「パルスィ…そして、碧…あんた達の強さ…心、見せて貰ったよ！さて、後はこいつらを掃除するだけさ！」

するとゴロツキの一人が…。

「ほ、『星熊勇儀』！山の四天王の一人がなんでこんな所に?!」

「お前らみたいな、鬼の風上にも置けない奴には関係ない！私の友人と彼氏に手を出したんだ…覚悟はできてるね？」

「あ、相手は一人増えただけだ！このままやつちまえ！」

するとゴロツキの鬼達が全員で向かってくる…いけない!?

しかし、目の前の女性は逃げるどころかこちらに笑顔を向け…

「安心しな…直ぐに片付けてやるから？…危ないから伏せとくんだよ！」

そうして、呼吸し…

「行くよ！四天王奥義！…まずは一步！」

踏み出される足…起こる振動…そして同時に女性の周囲に高密度の弾幕が展開される。

「な、何なんだよ?!」

ゴロツキは慌てる…。

「二歩!!」

再び振動が起こると同時に、先程の弾幕よりも外側の範囲で弾幕が展開される。

「まずい！野郎ども！ずらかれ！」

危険を察知した鬼が逃げるように言うが…

「遅い！これで最後だ…三歩…必殺!!」

女性の震脚によつて起こされる、先程よりもさらに激しい振動。

同時に収束された弾幕が一気に解放され、前方50mは更地となつていた…。これが…鬼の力？

「彼女の名前は『星熊勇儀』この旧都の裏の管理者で、山の四天王とも呼ばれている存在よ…助かったわ…ありがとう勇儀」

そうして闇の中から現れたのは…料亭『翡翠』の女将…酒吞…。
しかし、普段と異なりいつもの着物を着崩し最低限の布で体を隠している。

そして何よりも違うのが…幼い身体つきながらも、蠱惑的なその表情…。

「うちの大切なお客さんに、これ以上危害を加えるなら…容赦しませんえ?」

鬼は理解した…目の前の鬼は、自分なんかじゃ届かない…遙か高みに居る存在だと…。

「こ、こいつ…一体なんなんだ?!」

「うちが誰かなんてどうでもええ…。どうせあんさん達は此処で消えるんやさかい…」

すると、酒吞童子はどこからともなく巨大な瓢箪を取り出す。

「根こそぎ根こそぎ…ええ言葉やねえ。骨の髄まで…しゃぶり尽くさんとなあ」

「巨大な瓢箪…うまさかこいつ…まさか四天王を束ねる?!」

鬼が言えたのはそこまでだった…。

「くふふ…死にはつたらよろしおす。『千紫万紅・神便鬼毒』——ああ…骨の髄までうちの物や…」

酒吞童子の持つ杯から零れた酒が一面に広がり、それに触れた鬼達は、悉く溶けていった…。

そして、再び杯に戻ってきたお酒を、酒吞童子は最後に飲み欲し…。「ふう…毒にも薬にもならん味やったなあ…。さて、仕事も済ませましたし…帰りましょうかね」

いつもの雰囲気に戻った女将さんはその場を後にした。

そうして、パルスィを襲撃した鬼達は全て消えて行った。

——この後…二人を襲う者は、鬼神の裁きを受けると話題になり、地底で二人を襲う者は居なくなつた。

18話 稽古く嫉妬姫の嫉妬く

地底での出来事から数日後…。

僕は今、白玉楼の近くにある、妖夢さんの修行場に来ている。
パルスイさんを守れなかった事…。

このままでは自分の事すら守れないという事実…。

皆は気にしなくて良いと言ってくれたけど…これから此処で生きていく為には、そうは言っていられない。

そして、そんな僕を見てか、丁度いいタイミングで妖夢さんから稽古を付けてくれるという連絡があった。

そして、今は妖夢さんから色々と聞かれている…。
のだけれど…。

「あの…。」つ良いですか?」

「…?どうされましたか碧さん?」

「えつと…今から僕に稽古を付けてくれると言うのは分かっています。
分かってるんですが…妖夢さん…。その服で、動きにくくないんですか?」

そう、特訓すると言うのは分かるが、妖夢さんの来ているのは、明らかにパーティードレスの様な服…稽古とは程遠い姿だったのだけど…。

「えつと…似合ってますか…?」

不安気な顔で聞いてくる妖夢さん…いえ…そういう事じゃなくて…。

「いえ、とても良く似合ってますよ。その…一瞬見惚れる位には…。／／」

「あ、ありがとうございます／／」

「良かったわね。妖夢、一日かけて選んだ甲斐があつたわね」

そして、何故か当たり前の様にいる幽々子さん…。なぜ…居るんですか?」

「…そうじゃなくて…、その服だと、動くのに不便じゃないですか?そ

れに…稽古で汚れたら、勿体ないですし…」

すると、あ？——と気が付いた様な顔になった妖夢さん…。

「す、すみません！そうですよ…今日するのはあくまで稽古…私だったら何で…直ぐに着替えて来ますので、そのまま待っていて下さいー！」

そうして、すごいスピードで白玉楼へと飛んでいく妖夢さん…。やっぱり…気が付いて無かったのかな？

「それと…幽々子さん…何でいるんでしょうか？いえ…冥界ですから幽々子さんが居るのは当たり前なんですけど…どうして此処に？」するとふんわりとした笑顔で…。

「そんなの…碧くんの顔を、見たかったからに決まってるじゃない♪」
「…嬉しいですけど…僕には彼女が出来たんですから…少しだけ自重して下さいよ…」

でも、そんな僕の言葉とは裏腹に、幽々子さんは近づいてきて…。「別に幻想郷は一夫一妻制じゃないからいいでしょう？…それに、あなたが地底で襲われたって聞いたときは…凄く心配したんだから…」

俯きながら、悲しそうに言う幽々子さん…。

「心配を掛けてごめんなさい…。でも、あの時はああするしか無くて…むぐつ?!」

前みたいに幽々子さんから抱き締められる…。

「あなたの寿命は無い…。でもそれは死なないって事じゃない…。そして、できるなら碧くんには此処に…冥界に来て欲しくはないの…」

——幽々子さん…本当に心配してくれてるんだ…。

「あなたの命は、もうあなただけの物じゃないの、大切な人と生きるんでしよう？幸せを掴むんでしよう？だったらもう…無茶しないで？これからは私達が何とかするから？だから約束して…——絶対に無茶はしないって…ね？」

優しい心を感じる…幽々子さんの思いを感じる…。

「はい…。ですけど…確約は出来ません…。愛する人が…パルスイさんが危ない目に合うなら、僕は全力で助けるでしょう…それこそ、自

分の命を賭する覚悟で…。——だから…その時は、止めて欲しいんです。僕の事を。…お願います…幽々子さん」

真剣な眼差しで見詰め合う僕達…そして、先に目を伏せたのは幽々子さんだった。

「——…分かったわ。でも、本当に危険な事になりそうなら、その時は直ぐに駆けつけるから…安心して頂戴？もちろん…あなたの愛しの彼女さんの為にもね♪」

「感謝します幽々子さん…」

そして、暫くして妖夢さんが帰ってきた。今度はちゃんと動きやすそうな白い着物に着替えて。

「ふう…すみません、お待たせ致しました…。——…？お二人とも…何かありましたか？」

「い…え、何にも無かったわよ妖夢♪それじゃあこれ以上ここに居ても、邪魔になるから…私はお屋敷に戻るわね」

そして、幽々子さんは、ふよふよと飛んで行った…ホントに心配して来てくれてただけだったんだ…。

「さて…では始める前に、いくつか聞いておきたいのですが…碧さんは何か武道の経験などがありますか？」

武道…あると言えはるのかな…？

「一応部活動…短時間の練習で、剣道と弓道をしたことならあります」
すると妖夢さんは何かを考えながら…。

「成程…背筋が曲がって居なかったのは、武道の経験があったからなのですね。では碧さん…そうですね…仮に剣を持ったとして…前に襲われた鬼に勝てると思いますか？」

それはムリだ。何せ体格や純粹な力が違い過ぎる。

「無理…ですね。同じく弓を持たされていても。勝てる気がしません…」

本当に…何もできないんだな…。

「碧さん…いいのですよ…あなたは普通の人間なのですから…。鬼は妖怪でも上位の存在…そんな者に。普通は勝てる筈がないのです」

「じゃあ…今からやる稽古って…？」

無意味な事なのかな…？そう思うと怖かった…。でも……

「何を考えているのか、何となく分かりますが…今から碧さんに教えるのは、逃げ隠れの仕方です」

「ふえ？」

我ながら変な声が出たと思う…でも、それくらいに、意表を突いた答えだったのだから。

「逃げ方と、隠れ方…ですか？」

「ええ、何かあっても…逃げて、隠れて…生き残れば勝ちなんです。だから、碧さんにはその基本から覚えてもらいます。——いいですね？」

「は、はい！お願いします！」

正直、剣を使った戦い方や、追い詰められたときの立ち回りなどを、教わると思っていたから、少しだけ気が抜けたのは否めない…。

「そうですね…。ではお聞きしますが…逃げる事の何が行けないんですか？逃げずにそこに留まる事で得られる物が、何かありますか？」

「それを言われると…ぐうの音も出ませんね…」

「はい。それでいいんですよ。ですので、碧さんには、逃げる為の術を教えて行きたいと思います。それでは先ずは心を落ち着ける偶に水行に行きましょう」

そうして、妖夢さんに着いて行くと、大きな滝があった。滝に打たれるなんて生まれて初めてだから、少しドキドキする。

「では、私が先に入りますので、真似して隣に来てください……」

そうして妖夢さんに続いて水辺へと入っていく…この水…何だろう？冷たいのに…痛くない？そして滝に向かい妖夢さんに習い手を合わせ目を瞑る。

無心の心が一番良いらしいのだが、一番大切な人の事を思い浮かべてもいいと言われたので、パルスイさんの笑顔を浮かべながら滝に打たれた。

そして、一時間くらい打たれた後、妖夢さんと共に滝から出たわけだが…炊き火にあたる妖夢さんを見て、すごいことに気が付いてしまった…。

の様子を伺う事にしたの。

ほ、ほんとに悪気はなかったのよ！

でも、映し出された光景は、私の斜め上に行くものだったの…。

最初はお洒落した半霊と冥界の主が、二人で碧と話していたわ…稽古じゃなかったの…？

すると、半霊は慌てて着替えに行き、西行寺さんと碧だけが残されたのだけど…なんで碧を抱き締めているの?!

…。それをしているのは、私と碧の家族だけよ！…ああ…妬ましい

でも聞いていたら、それは碧を、心から心配しての事だった…そんな事言われたら…何にも言えないじゃない…。

それに愛しの彼女って…／＼／＼ああもう！調子が狂うわね！

それから半霊が戻って来たの。碧って少しだけ武道の経験があったのね…知らなかったわ…。

私が最初に知りたかったのに…何で半霊なんか…妬ましい…ああ…妬ましいわ…。

それから心を落ち着ける為にまずは水行を言ったのだけれど…水行？…あの服で？

…気が付いてないのかしら？白い服が濡れたらどうなるのかを？

そうして水行が終わって二人とも滝から出てきたのだけれど…あ、碧は気が付いたみたいね…慌てて顔をそらしてる…。

それにしてもあの半霊…何でブラも付けて無いのかしら？誘ってるの？私の彼氏を…？

碧も碧で…そんな貧相な身体を見て…顔を赤らめて…！

もしかして女性の身体に慣れてない？だったら本当なら最初に見せるのは私だった？

それを、あの女は横取りした？…妬ましい…碧の初めてを持っていくあの女が、本当に…心の底から妬ましい…。

…。キチンと会話を聞いていれば、そんな事は無かったのかもしれない

でも、この時の私は嫉妬心のあまり。そんな余裕は全く無かったわ

…。

もうこれ以上…こんな光景は見たくない…。碧のあんな顔を…他の女がさせるなんて許せない…。

— そう思い…私は通信を切ったの…。それが後日、あんな事になるなんてね…。

19話 碧、閻魔の元で働く

妖夢さんとの稽古の翌日。今日は地獄の…映姫さんの横で秘書の様な仕事をしている。

なぜこの様な事になったのかと言うと…昨夜…。

『八雲紫。少々よろしいでしょうか？』

「あら…閻魔様じゃない…こちらに連絡を入れてくるなんて…余程の事でもありましたか？」

そう、幻想郷のトップである二人だが、その仲の悪さ（と言っても紫が一方的に嫌っているだけなのだ）から、連絡を取ることは殆ど無い。

『ええ…実は、明日の法廷で、私の補佐をする筈だった死神達が、殆ど流行病にやられてしまったのです…幸い大事には至りませんでした…が…』

「あら、それは大変ですわね？それで、それと私がどう関係あると？」
すると少し躊躇いながら…。

『あなたに頼むのも申し訳ないのですが…一日だけで良いのです。碧さんを私の秘書として、雇わせて頂けないでしょうか…』

流石にこれには紫さんも驚いたようで、いつも余裕のある表情が驚愕に代わっている。

「……正気なの？それに…何故碧なの？代わりの死神ならいるのではなくて？」

『恥ずかしい話なのですが…地獄も人手不足…、それに…自業自得なのですが…私の事を嫌っている死神も多数います。空いている死神に声を掛けたのですが…皆、拒否されてしまい…』

「普段から部下の管理をしっかりしていないからね。閻魔様の名が泣きますわよ…」

『返す言葉もございません…。それと…碧さんを選んだ理由ですが…、今、手の空いている公平な立場の人間は、碧さんしかいないのです…』

確かに僕は八雲家に居る。でもあくまで居候の身。

「……まあ、そうなるわね。妖怪が裁判に出ると、色んな所から不満が上がる。…かといって人里の人間では、あなたの言葉に耐えられない。選択肢としては間違っていないですわね…ですが、それでも碧があなたの秘書をする必要があるのかしら？」

苦虫を食べたかの様な表情を浮かべる映姫さん…。

「……無論…報酬は、欠勤した死神、全ての分を払わせて頂きます…。あと…私的な言葉で申し訳ないのですが…くっ…私が頼れる方は、碧さんしか居ないので…」

そして、紫さんが何かを言い返そうとするが…。

「分かりました「碧君?!」…映姫さんには恩があります…。それを少しでも返せるなら…僕は問題ありません」

「はあ…。だそうよ？碧君が自分から行くなら、私にそれを止める権利はありませんわ…。ですが…少しでも碧君に負担になるような事があれば…」

「紫さん、大丈夫ですよ。映姫さんの元でなら、安心して働けますし…これも稽古の一環と思つて頑張りますから」

『碧さん…感謝いたします…』

そうして、翌日…紫さんから三途の川まで送られ、小町さんから船に乗せられ地獄へと向かったのだけれど…。

「碧…あんたも変わった人間だねえ…？自分から地獄に行つて働きたいだなんて…私には到底まねできないよ」

「映姫さんには…その、色々とお世話になりましたから…。それにあの人の言葉を聞いていると、何だか自分の道が色々と見えてきて…嬉しいんです」

するとため息をついた小町さんが…。

「はあ…。まあ私の役目は四季様の元に碧を連れて行くことだからねえ…。只、これだけは言っておくよ？決して死者に同情はするな。決して四季様の判決に口を出すな。決して四季様の言葉から耳を背けるな…。これだけは守っておくれよ…いいね？」

「???…分かりました…。ありがとうございませす、小町さん」

「気にしなさんな。さて、川岸に着いたね。ここから見えるあの建物に四季様は居る。後は碧次第だよ。頑張りな」

笑顔で見送ってくれる小町さん…相変わらずいい人だ。

そうして建物に向かうと入り口には…

「ようこそ、碧さん。お久しぶりです今日は来て頂き、ありがとうございます。お聞きしましたよ？地底の橋姫と結ばれたみたいですね。私からも祝福させて頂きます」

この前と同じ服…でも違うのは装飾のされた帽子を被っている映姫さん。成程…これが本来の仕事姿なんだ…。

「こちらこそ…お久しぶりです。連絡もせずに申し訳ありませんでした。どこまで出来るのか分かりませんが、本日はよろしくお願いいたします」

「相変わらず良い方ですね…その調子で善行を積んでください…。碧さんには、本日、私の秘書として、裁判に必要な書類の筆記、管理をお願いいたします。最初は勝手が分からないと思いますが、直ぐに慣れると思いますので、肩ひじを張らず、なるべく自然体でいて下さい」
そうして、映姫さんの臨時秘書として仕事を始めたのだけど…。

これは思った以上に大変だった。

小町さんが連れてきた死者の、詳細が掛かれた巻物を取りに“死者の書庫”へ行き、それを持ってまた戻ってくる。

戻り次第裁判が始まるのだが…。裁判の流れはこうだ。

死者の情報が掛かれた巻物を読む

浄玻璃の鏡（じょうはりのかがみ）で実際のその死者の生前の行いを見る

それを元に、映姫さんが罪状を述べ（罪のない人、妖怪などいない）、それに応じた場所（冥界、天界、地獄）へと、生前の善行の数だけ死錢を持たせ、送る。

しかし、中には裁判を受け入れず、自分は悪くないと言い張る魂も居る。

そんな者には悔悟の棒（かいごのぼう）で、自分の犯した罪の重さを、その身で分かせ、それでも尚悔い改めない魂は、終わりの無い

…。

そうして、彼の作ってくれたケーキを食べ、お茶を頂く…美味しい…。——それになんだろう…この充実感は…。

今まで閻魔として、日々、仕事に明け暮れていた中で、こんなに気持ちよく仕事が終わえられた事が、何度あっただろうか？

仕事を終えた…という達成感はある…でも、人を裁いた、罪人に罪を課した…。いくら全ての干渉を受けない…中立で公平である、自身の能力を持つてしても…やはりキツイものはある。

それが今日はどうだ？達成感と共に、自分の言葉を素直に受け入れ、そして、何の責めもなく、只、純粋に私を労ってくれる…。

閻魔としての…ヤマザナドウとしての私を受け入れ、四季映姫、個人としての私を労ってくれる。

自分が止められなかった。

気が付いたら私は…彼を抱きしめていた…。

「あ、あの…映姫さん…？」

戸惑いが隠せない彼…ですが…せめて今だけは…。

「…すみません、今日は少しだけ疲れてしまったので…。あと少しだけで良いですから…こうさせて下さい…」

私はずるい女だ…。彼には既に、お付き合いしている女性がいる…にも拘わらず、こうやって未練がましく、彼の好意に甘える事しかできない…。

『優しきは麻薬』…私が彼に行った言葉だ…。その言葉を…私は…自分自身で…——

そんな私の心を知ってか知らずか…彼は、碧さんは優しく、私の頭を撫でてくれました。

「…映姫さんが、一番辛いのは知ってます…。本当は優しい人なのに、誰よりも厳しく生きる事を強制されている。——ですから休める時は、休んでください？それが僕にできる、唯一の恩返しですから…ね？」

そうして、私が落ち着くまで…彼はずっと…私の頭を撫でてくれました…——



「すみませんでした…お見苦しいところをお見せして…」

開口一番に映姫さんに言われた…。確かに、いきなり抱きつかれた時は驚いたけど…。

「先程言った通りですよ。休める時に休んでください」
すると映姫さんは少し恥ずかしそうに…。

「…感謝します／＼／」

あと…そうだ…。

「あの…もし、良ければなんですけど…。また、こうしてお手伝いに来ても良いでしょうか？もちろん…毎日という訳ではないんですけど…」

すると驚いた顔の映姫さんが…。

「私としてはありがたいのですが…何故ですか？今日働いていて、分かった筈ですよ？この仕事は、体力ではなく心を摩耗する仕事だと」
僕は、それを承知でお願いしたのだ。

「ええ…多分、今日よりも、もっともつと…辛い日もあるんでしょう…。ですけど、僕はそれを見て、学ばなければいけない…理解しなければいけない…色々な思いを…感情を…そして、映姫さんが前に僕に教えてくれた…優しさを強さにできるかもしれない。そうすれば…彼女を辛い目に合わせずに済むかもしれない…その為の行動なら、いくらでもします…いえ、させて下さい！」

すると、少しだけ…複雑そうな顔をした映姫さんが…。

「碧さんの思いは分かりました。八雲紫にも確認を取らないといけませんので、直ぐにという訳にはいきませんが…。こちらこそ、お手伝い…お願いします」

そうして、僕の…もう一つの仕事先は決まる。

もっともつと…強くなって…パルスイさんと幸せに生きる為に

…



碧に連絡をしたけど…今日は繋がらなかった…。

夕方になっても連絡が無く、心配した私は、陰陽玉の映像を映し出したの…そしたら…。

「なんで…？なんで女と抱き合っているの？…碧？」

映し出されたのは、碧よりも背の高い女性から抱き締められる姿。

そして、私が見たくなかったのは…碧が、自分からその女性の頭を撫でた行為…――

彼の、碧の事だから…何か事情があるのだろう。

優しい彼の事だ、辛そうな女性を見過ごせなかったのだろう。

でも………妬ましい…。

ただひたすらに、妬ましい。

碧を抱きしめている行為が妬ましい…――

碧から撫でられている事が妬ましい…――

あの場に居る事ができない自分自身が、妬ましい…――

この時の私を見たら…人は言うだろう…。自らの嫉妬に狂った”

嫉妬姫”…と…――

20話 舌切雀「大きな葛籠と小さな葛籠」

最近パルスイさんと会話ができていない…。

具体的には地獄での仕事の後からなのだけれど、どうにも彼女の様子がおかしいのだ。

気になって聞いてみたけど「——大丈夫だから」の一点張り
布団に入って考える…。

いつも通りが出来ない。

パルスイさんと何か話したいって思っても、何を話せばいいのか：分らない。

そもそも、僕は…どうしてパルスイさんと話したいって思っているのか。

理由もなく行動を起こしたい、なんで…。

「…変、だよね…」

陰陽玉で連絡しようとしても同じ。

どんな話題をふればいいのか。

急に連絡をして、迷惑だって思われないだろうか？

…こんなこと、初めてだ。

今まではそんな事思いもしなかった。

パルスイさんと一緒に過ごした思い出。

出会ってから今まで、たくさんの時間を過ごしてきた。

「…楽しいこと…いっぱいあったな」

僕もパルスイさんも、お互いに笑顔の思い出ばかり。

良い関係を築いてきたはずだ。

でも、ここ最近はやんちゃとした笑顔を見ていない。

陰陽玉越しでも、僕と顔を合わせると、慌てて取り繕う様に誤魔化されてしまう。

「…もやもやするなあ」

初めての気持ちに、戸惑いを感じる。

これが『本気』で誰かを『好き』になるって気持ち…：なのかな？

「これって…きちんと伝えるべきなんだろうか…」

自分の気持ち：想いだけを優先してしまうことになるんじゃないか？

パルスイさんを不幸にしてしまうんじゃないか？

考え出すとキリがなく：これ以上踏み込めなくなる。

パルスイさんの様子がおかしい原因は、恐らく僕にあるんだろうと思う。

じゃないと：あんな態度にはならないだろうし。

思い出したくない気持ち：あの時の記憶、言葉：”あなたは優しくして面白くない”

——不安が広がっていく…。

忘れられない感覚（トラウマ）が：僕を支配していく…。

もし、パルスイさんから同じ言葉を言われたら…。

「僕は、どうしたらいいんだろう…」



碧と上手く話せない…。

原因は分かっている…。白玉楼と地獄（仕事で言っていた事は聞いた）での出来事を見てしまったからだ。

でも：彼にそれを直接聞くのか？：何で、あんな事を：私以外の女にしていたの？：——って

出来ない！だって私は勝手に、彼のプライベートを覗いてしまった
：軽蔑されてしまうんじゃないか？：また、裏切られてしまうんじゃないか？

それが私の心を痛めつける…そして、もう一つ：彼に隠している事がある…。

『あらあら…ずいぶんと参っているようねえ？』

「——あなた…いつから居たのよ…？」

『失礼ねえ…私はあなた（水橋パルスイ）の一部：抑えきれない嫉妬心がスペルカードに宿った存在：言わばもう一人のあなたなのにねえ』

「うるさい！私は…私は、そんな醜い顔で彼を見ない！——…そんな病んだ瞳で彼を見つめたりなんてしない！」

そう…彼女。…正確には私の溜まった嫉妬心が、スペルカード”舌切雀「大きな葛籠と小さな葛籠」”に宿り、具現化した存在だ。

『嘘ね。現にあなたが見ていたからこそ、私は此処にいるのよ？現実を見なさい？結局…あなたは、あの時から何も変わってないの？嫉妬に狂った嫉妬姫…そのものなのよ？』

「私は…私は！」

しかしそんな私の抵抗を嘲笑うかの様に、私（偽物）は答える。

『力の大半を私に持つて行かれたあなたに、何ができると言うのかしらね？——…そうだわ、良いことを思いついたわ』

そうして、彼女は私の目の前にやってくる…。

「——な、何を?!」

『くすくす…ゲームは簡単よ。明日、私が彼とデートをするから、それが最後まで気が付かれなかったら私の勝ち。気が付かれたら負け。単純で良いでしょ?』

何を言っているんだ？そんな姿で…そんな声色で…碧が気が付かないはず……

「あ、こんばんわ碧。夜分に悪いわね。…——え？元気が、ですって？ええ…あなたの声を聞いていたわ元気になったわ。ここ数日、こちらも立て込んでね…少し疲れていたのよ…。だから…明日、デートしない?…——本当！嬉しい！じゃあいつもの場所で待つてるわね…うんうん…ええ…楽しみにしているわ。それじゃあおやすみなさい碧♪」

嘘だ…あれは完璧に私（水橋パルスィ）だ…なんで…?

『当たり前でしょう? 私はあなたなんだから?——明日は付いてきなさいよね?これで全部が解決する…くすくす♪』

私は絶望した…もう、私が生きる意味なんてないんだ…。碧の事は…全部私（偽物）がやってくれる…。



パルスイさんからデートの誘いが来た…嬉しいけど…なんだろう…この感じは…？

その日の夜に、紫さんと藍さんに確認を取り、翌日地底まで送ってもらうことになった。

「ごめんね、いつも待たせてしまって」

するとそこに居たのはいつも通りのパルスイさん。

「良いのよ。あなたを待つことも、楽しみの一つなんですから♪」

「今日は機嫌が良いんだね」

「ええ、溜まってた仕事も片付いたし、久しぶりにあなたとデートできるからかしらね／＼／」

少し照れた顔で言うパルスイさん…でも…

「さあ、そんな事よりも今日は楽しみましょう♪」

「そうだね。じゃあ、どこから行こうか？——」

そうして僕たちはデートを始めた。

午前中は呉服屋で色々な服を見て…

お昼は翡翠で定食を食べ…

午後はお茶屋さんでのんびり過ごした…

久しぶりにするパルスイさんとの話。ここ数日、どんなことがあったのか…楽しい事はあったのか…。

しかし、二人の会話は何かか”かみ合わない”…まるで最初からこうだったかのように…。

そうして時間は過ぎて行く…。

そろそろ夕日も落ちる頃、僕たちは再び橋の元に来ていた。

季節は秋、少しだけ肌寒くなる季節に差し掛かる…。

「…少し…寒いわね」

「…うん、寒くなってきたね」

そして沈黙…。ダメだ、上手く会話が続かない。

話したいことはたくさんあるはずなのに…。

どうして上手くいかないんだろう…。

二人で並んで歩く…。

でも、僕達の距離は…お互いに手を伸ばして、ようやく触れる事ができる距離…。

「……………」

沈黙の中…パルスイさんからの視線をちらちらと感じる。

どうして良いのか分からないのか…それは僕も同じで、真っ直ぐパルスイさんに向かい合えない。

…このままじゃいつもと変わらない。

僕がパルスイさんを困らせているなら、その悩みを聞かなくてはいけない。

「あ、あの…パルスイさん」

「何かしら？」

「僕は…このままじゃ嫌なんだ…」

「…嫌？」

心の中に閉じ込めていた気持ち…想いを伝える。

「上手く話せなかったり、変に遠慮したり…そういうの、嫌なんだ…」
「……………」

「僕は…前みたいに、パルスイさんと楽しく話したい。一緒に手を繋いで歩いたり、ご飯を食べたり…二人で一緒に笑い合えるようになりたい！」

だから…。確信に迫らないといけない…。

「—だから、教えて。“あなた”は誰？」

すると驚いた顔をするパルスイさん。

「な、何を言ってるのよ！私は、水橋パルスイ！あなたの彼女よ！自分の恋人の顔も見忘れたって言うの!?そんな…酷いわ…ぐすっ…——」
「そう…ですか…。でしたら、なぜ…あなたは僕の簪を持ってい

ないのですか？」

「そ、それは……今日は偶々、持ってきただけで……」

(この人……やっぱり……)

「パルスイさんは……あの簪を……本当の僕だと思って、いつも肌身離さず持つていてくれてます。もう一度問います……あなたはいつたい何者？ なんですか？」

すると、苦しそうに泣いていた顔が一変……その眼は病んでおり、その顔も狂気に満ちていた……

『ばれたなら仕方がないわねえ……ほら、そろそろ出てきていいわよ？』
すると後ろの方から……パルスイさん？

「——碧……ありがとう……碧！」

僕に必死に抱きつくパルスイさん……でもあの人は？

『さて、勝負はあなたの勝ち。私は再び消えるわね……待っててください！……？』

間違つてなければ……だけど……

「あなたも……パルスイさんなんですよね……？」

「碧……？」

『くすくす……そうね、私も水橋パルスイ……正確にはその嫉妬心の塊つて言った方が正しいでしょうけどね』

「嫉妬心の……塊……？」

『まあ詳しい話は私(本物)から聞いた方が早いけど……。碧、あなたが白玉桜と地獄で女性と抱き合ってるのを、私(本物)が見てしまった。そして、その結果として膨大な嫉妬心の塊……つまり私が生まれたの……それを知られたくなくて、今日まであなたと連絡を取ることが出来なかった。自分が嫌われることを畏れて……ね』

そっか……やっぱり僕のせいだったんだ……

悲しそうに俯くパルスイさん……。でも、意を決したようにパルスイさんは語り始めた……

「私は……怖かったの……。もう一人の自分が……。嫉妬に塗れた私自身

が……そして、そんな醜い姿を……あなたにだけは見られなくなかったの……」

『あらあら……随分な言われようね？でももう遅い……私の姿は彼に見られてしまったわ』

パルスィさんも妖怪……そして、その力をあまり知らなかった……いや、知ろうとしなかった自分を殴りたくなる。だけど……！

「……でも、それは誰だって同じだと思う」

『「……？」』

「人も妖怪も関係なく……みんな、どこか自分を隠している部分があつて……その隠している部分も含めて、自分なんじゃないのかな」

「全部……本当の私……？」

『「……へえ？」』

「そう、全部。みんなと話している時も。僕と二人で笑顔で話している時も……それから、力の具現化として出てきたもう一人のパルスィさんも……どれも本当のパルスィさんだ」

「……碧……」

『「……」』

「誰だって、色んな面を当たり前に持っていて……自分を使い分ける。他の人に見せたくない、見られたくない部分……誰でも当たり前前持ってるものだと思う」

「当たり前……持ってる？」

「うん、そういうのを全部含めて『自分』なんだ……って」

そう……誰にでも……言うなら、今しかない……っ！

「ずっと……パルスィさんに言えなかったことがあるんだ……——それは、僕のトラウマ……以前付き合っていた女の子に、言われた言葉……」

すると、パルスィさんの表情が強張る……——当然だよ……誰かと付き合ってたって言っただけだから……。でも、これは伝えなきゃいけない……——僕の為にも、パルスィさんの為にも……

「最初は一目惚れで告白された……どうしようか迷ってたなら、親友の勧めもあつて付き合うことにしたんだ……でもね、そんな中途半端な考えがいけなかったのかな……——最後は、”あなたは、優しすぎて

面白くない”って言われて…一方的にフラれたんだ…。そのせいか、僕は恋愛に対して、積極的になる事が出来なくなっただ…。」

「そんな…っ！あんまりすぎるわ!?優しい事の、何がいけないの! あなたの優しさに、私は救われた! それなのにっ!!」

僕を想って、本気で怒ってくれる…それだけでも嬉しい…でも—

「僕も同じ事を思ったんだ…——だからこそ願った。”今とは違う環境で、素敵な出会いがある事を…幸せになれる事”を…そして、出会った…。僕が…心の底から愛したいと思える人…：パルススイさんに!」

「でも…私は…——」

遮る様に言葉を続ける——

「だからこそ…：パルススイさんには聞いて欲しかった! 隠しては置けなかった!」

パルススイさんを不幸にしたくない自分も、嫌われたくないと思う自分も…。

嫉妬心から生まれたもう一人のパルススイさんも…。

「こんな僕を想ってくれるパルススイさん…。全部を含めて…：そんなパルススイさんの事を好きなんです! たとえどんな顔をして…：僕の事を嫌いになっても…。それは…：今までのパルススイさんを作ってきた全てなんだから!」

「み、碧…：…!」

そうして飛びついて来たパルススイさんを抱き締める…：それから…。

「名前は分からないけど…：あなたもパルススイさんなんだ! だから、こっちに来て!」

『…：ゲームに負けた私は…：素直に消え去る運命なのだけどね…』

「ゲームが何の事かは分からない…：でもね、例え二人に別れても…：どんな姿になっても。——僕はパルススイさんを愛し続ける!」

『——私は嫉妬に狂った女…：何をするか分からないわよ?』

「それでも! それがパルススイさんの一部なら…：僕は全部受け止めな

きやいけない！……だつてそれが……人を愛するつて事だから！」

「碧……／＼／」

「もちろん……パルスイさんが許してくれるのなら……だけどね？」

『やれやれ……私を切り離して、浄化なり何なりすればいいだけでしょ
うに……本当に優しいのね……あなたは……』

「それはあなたも同じ筈です『……？』もし、あなたが悪い存在なら
……パルスイさんはこの場には居ませんから……。だから、そんなあなた
を、僕は信じたいんです！」

すると、彼女は憑き物が落ちたような顔で……

『はあ……興が削がれたわ……。いいこと……私（本物）？何かあったら、私
はまた出てくる……そして、次こそ、あなたを消すかもしれない……だか
ら、そうならない様に……二人でキチンと話をする事ね？……』——そし
て、碧。あなたと過ごした時間……嫌じゃなかったわ／＼／』

そう言つてパルスイさんと一つになる……。

強い光……その光が収まっていく……。

そして、目を開けたパルスイさんは——

「力が……戻つてる……？ううん……それだけじゃない……前よりも上がつ
てる……これって？」

「あの人の分の想いまで受け取つたつて事でしょ？」

「碧……そうね。私、一人で誤解して……一人で悩んで……一人で嫉妬して
た……。だから……こんな私で良ければ……ずっと一緒に居て貰えません
か？」

無垢で……そして真剣な眼差し……。

「よろこんで。さつきも言つたけど……どんな表情でも……どんな姿でも
……パルスイさんはパルスイさんだから……。僕も、これから、誤解させ
てしまう事とかあると思う……そんな僕で良ければ……こちらこそよろ
しくお願いします」

二人はそつと唇を交わした……お互いの存在を証明するように……
——もう一人の自分に見て貰うかのように……

その日の夜……僕はパルスイさんの家に泊まっていきました——

……

21話 妖怪の山く守る者達く

パルスイさんが二人に別れ…そして、再び一つになって一ヶ月…季節は初夏へとなっていた

「それで…今日は何でこんな所に来てるのかしら？」

隣に居るのはパルスイさん。いつもと違い今日は髪をポニーテールにしている。降りしているのも好きだけど――

「さつきも言ったけど、その髪型…良く似合ってたて可愛いね」

すると顔を少しだけ赤くしたパルスイさんが…

「そんなに何度も言わなくてもいいわよ…／＼／＼――まあ…言ってくれるのは嬉しいけど…／＼／＼――…ってそうじゃなくて！なんで妖怪の山に来たのかよ！」

うん、やっぱり可愛いなあ。

「ごめんね。可愛いパルスイさんが見たくてつい…。此処に来たのは、天狗の…射命丸さんに用事があったんだ」

そう、天狗で唯一の知り合い…新聞屋の射命丸さんに、お願いがあつて来たのだ。

「射命丸って…あのパラッチ天狗って言われてる妖怪よね？…何を考えてるの…？」

顔を強張らせたパルスイさんから聞かれる…――まあそりやそうだよな。

「大丈夫だよ。危ない事とか、変な事じゃないから」

「どうかしら？あなた…色々と人気だから…その…天狗とも…」

「だから、そんなんじゃないって！今日は射命丸さんに、使っていないカメラを貰えないか聞きたくてね」

すると訝しげな顔で…

「カメラ？何でそんな物を…？」

まあ、そう思うよね。

「えっと…――まあ、個人的な事なんだけど…折角だから、パルスイさんの思い出を、写真で残して…時間が経ったときに、二人で見たいな――って思ってた…ってパルスイさん!?何でちよつと涙ぐんでるの

?!」

目の前の彼女は、少しだけ瞳に涙を潤ませていた——なんで？何か悪いことしたのかな…？

「違うの…」。私嬉しくて…妖怪だから、写真で残すなんて考えも無かったし…。それに、改めて碧が私の事を想ってくれてるのが嬉しくて…ぐすつ…」

「ああもう…これくらいの事で泣かないですよ…。パルスイさん、ホントにあれから涙もろくなつたよねえ…」

そう、融合したパルスイさんは、妖怪としての力が上がった…。—のだが、同時に何故か涙もろくなってしまった。本人曰く…。『仕方がないでしょう?!あれから、碧の想いが、より一層強く感じられるようになったんだから!…その…責任はちゃんと取りなさいよね』
／／／／／

との事だった。まあ…言われなくても責任はきちん取るけど…——ってそうじゃなくて!

「これから、もつと幸せになるんだから。これ位で喜んで貰ったら涙が無くなっちゃおうよ?」

「碧…／／／——…ふえ…「だから泣いちやダメだつて!」…——そ、そうね。ごめんなさい／／／」

そうして、彼女を慰めながら山を進んで行く。

「それにしても…こうして、二人で山に来るのもいいわね。いつも、旧都でのデートばかりだったから…こういうのも新鮮で素敵ね♪」

そっか…僕は、紫さんから連れられて色々な場所を巡ってるけど…パルスイさんはいつも地底で暮らしてるから…——

「ねえ。もし良かったらなんだけど…「貴様達!この妖怪の山に何の用だ!」…——え?何?」

すると目の前…いや、いつの間にか周囲にはカラス天狗の集団が居た。この人達に聞けば分かるかな…?…でも、なんだか妙に殺気立ってる様な…?

「何の用だと聞いている!返答によつては…」「ま、待ってください!」
む?」

「えつとですね。今日は射命丸さんに用事があつて来たんです…それで、射命丸さんは？」

しかし、目の前の天狗は…。

「射命丸なら今、仕事で山の外に出ている！……貴様…怪しいな…？」
すると横から別の天狗が来て…

「隊長！人間はともかく…こいつ、地底の妖怪です！」

“地底の妖怪”その言葉に、周囲を取り囲んでいた天狗の警戒心は一層増した。

そして、運悪く、此処でさらに天狗の増援が来る…。

「忌み嫌われた、地底の…薄汚い妖怪風情が、何の用だ！返答によつては、この場で処罰させて貰うぞ！」

——?!ちよつと！どういう事なの!?

「やつぱり…面倒な事になったわね…！」

さらに増え続ける増援部隊…——

「パルスイさん！面倒な事つて?!」

「碧はあまり詳しくは知らないと思うけど…元々、地上と地底は不可侵条約が結ばれていたの！最近になつてそれが無くなつただけ…それでも地底の妖怪に対しての偏見は弱くならないのが現状なの…」

悲しそうな瞳で語るパルスイさん…。ふざけるな！

「地上だから…地底だから…そんな小さな事で差別をする…あなた達は、自分のしている事が恥ずかしくないのですか!?!」

自分が言われる事には慣れてる…でも、彼女…パルスイさんについて言われるのは別だ。

「はっ！たかが人間に何ができる？……そうだな？ここは人間を殺して今日は鍋にでもさせて貰うか！」

こいつら！

「——あら？面白いことを言うのね？」

…しかし、そんな硬直状態を破つたのは、とても…とても、それこそ、その場に居た、全ての生き物を委縮させるには十分なプレッ

シャー…

——…これは…紫さんの声…？

顔を上げるとそこには、いつもの余裕の紫さん…ではなく、目の前の敵全てを消し去ると言わんばかりに、殺意に溢れた目をした紫さんが…。

——そして、どこから現れたのか分からないけど、幽々子さん、さとりさん、永琳さん。咲夜さん。諏訪子さん。そして何より…居てはいけない人物…地獄の閻魔…映姫さんが天狗を取り囲んでいた。これって…？

幻想郷の有力者…？

「ごめんね碧君。現在妖怪の山は警戒中だつて事を伝え忘れていたの…何かされていないかしら？」

「ええ…みなさんのおかげで何とか！それと、何でこんな事に？前もって連絡はいつてる筈なのに…」

「多分、末端の方今まで情報が来てなかったのかしらね。でももう安心して頂戴？…此処から先は…地獄なのですから…ね？」

其々から膨大な妖気、魔力、神気などの力が噴き出すが…はつきり言つてそれだけで気絶してて天狗が多数…。

「私の家族に手を出そうとした事…死んでも後悔させてあげますわよ？」

「あらあら…自分の子供とお嫁さんに手を出されるなんてね…流石の私も怒るわよ？——死してなお、愉しく。覚悟の出来た者からいらつしやい？」

数多の死霊を纏い、背には巨大な扇の様な紋様が出現した。その顔にはとても冷酷な笑みを浮かべる幽々子さん…。これが…死霊の姫…幽々子さんの本気…？

「大切な親友二人を襲うとはいい度胸ですね？…私も能力を使わせて貰いましょう…そのトラウマに怯えなさい！」

普段の眠たげな目は、形を潜め…僕達の為に能力を使ってくれるさ

とりさん。

「私はもう…あの子を…失いたくない…例え自分の物にできなくても…あの子の幸せ…邪魔はさせない!!!」

弓を構え…妖気でも神気でもない、純然たる力を纏う永琳さん。

「早苗の恩人、守らせて貰うよ!とはいえ私は、戦闘は苦手だからねえ…後ろからじわじわと呪わせて貰うよ!」

外の世界でも語り継がれる諏訪の神…その神の力を解放した諏訪子さん。戦闘は苦手って…嘘でしょ?!

「私の恩人に…大切な人に手を出した。——…そう、あなた達は私の逆鱗に触れました!それだけで万死に値します!」

紫さん以上の、圧倒的な力…。そして、初めて垣間見る、映姫さんの明らかな“怒り”の感情。

「——お嬢様に代わり来ましたが…この面子だと、私…浮いてますね…。まあ…言われた分の仕事はさせてもらいますよ…ふっ!」

紅魔館の主の代わりに来ていた咲夜さん…。それでもただの人間が、できる動きじゃない…歴戦の暗殺者…そんな雰囲気に近い…。

妖怪としての紫さん…何度か見慣れているけど、それでもゾツとする表情…。それから、幽々子様も…問答無用に相手を亡霊にしている…、さとりさんに至っては相手のトラウマを刺激しまくってる。

あまり戦力としては役に立たないと言っていた諏訪子さんも…

「土着神の呪い…その身に受けるがいいさね!…自分の判断力の無さ…それを恨むんだねえ!」

永琳さんも、恍惚とした表情で敵を倒していく。

「さあ…次に撃ち抜かれない相手は誰かしら?…——くすくす♪」

映姫さんに至ってはひたすら、悔悟の棒(かいごのぼう)で相手を撲殺していた。(厳密には殺されては無いのだけれど)…ってか映姫さん…どれだけ力が強いんですか?!天狗の人、地面に埋まっていますよ?!
そして、最後に…其々の弹幕奥義を放つ…——

「美しく…そして残酷に散れ！」 深弾幕結界 — 夢幻泡影—！」

「自らの罪を悔い改めよ！」 審判『ラストジャッジメント』”

「その魂すら消して上げましょう…」 西行寺無余涅槃”…」

「この天狗は鬼が苦手な様ですね？食らいなさい！」 想起『濛々迷霧』”

「あなた達には過ぎた技だけど…これも罪ね…」 天網蜘蛛捕蝶の法”
！」

「高々呪い…されど呪いつてね！」 崇符『ミシヤグジさま』”

「やれやれ…本当にこの面子だと見劣りしますが…」 デフレーション
ワールド”」

その日…妖怪の山は、弾幕の嵐に包まれた…——

そして、カラス天狗部隊の全てを沈黙させた後、紫さんが…——

「見ているんでしょう！天魔！返答次第では…天狗という種族は、今日と言う日で、終わりを告げるのだけれど…お祈りは出来たかしら？」



一方の天魔は焦っていた…部下の部隊が人間と妖怪に接触したのは聞いていた…しかし、その二人が寄りにもよってあの二人だったなんて…。

人間の男の子の方は、各勢力の者達から保護を受けている。

八雲紫、四季映姫、西行寺幽々子、八意永琳、古明地さとり、守矢諏訪子…この幻想郷で相手にはいけない実力者…それが、寄りにもよって六人も…地底の妖怪も同妖怪の保護を受けていると聞き、天魔は目の前が真っ暗になった…——。

ああ…天狗の種族も此処で終わりだな…と思いつながら…——



しばらくすると大天狗様が目を覚まし…——只ひたすらに土下座

をしてきた。起き上がってきた他の天狗も同様にしてきた。

流石にバツが悪そうにしていると：紫さんから、立場を分からせるには良いのよ？と言われたので僕は何も言えなかった。

そして、落ち着いて来たところに：大天狗様が：――

「今回の件：本当にすまなかつた：何度謝つても許される事ではないが：申し訳ない！」

まあ、いきなり来た僕達にも非はあるので：

「顔をあげて下さい、大天狗様「天魔だ」：天魔様。不用意に僕達が入って来たのも問題があつたので、此処は、どうか痛み分けという事には成りませんか？」

すると、天魔様は少し驚いた顔をして：

「良いのか？」

「ええ：今後はこんな事の無いようにしてくれれば。それと、射命丸さんに頼みがあつたのですが：

「あ奴にか？：何？カメラ？：それに、必要に応じて現像：？ふむ：それくらいなら、わらわが用意しようぞ」

「え?!良いのですか?!」

これは渡りに船だけど：いいのかな？

「なに、気にするでない。こちらは危うく天狗の種族、其の物が無くなりかけておつたのじやかなのう：（冷や汗）」

「えっと：すみませんでした：？」

「いや：それに地底の姫も：。不快な思いをさせてすまなんだ：許してくれ：」

「私は良いですが：。そうですね、代わりにこの山の、名所等を教えてくれたらそれで：」

「それについてはお安い御用じゃ。そうじゃのう：季節も夏になるし、河童の里で水遊びなぞどうかの？」

それは：ひよっとしてパルスィさんの水着姿が見れるって事なんじゃ：？？

「碧：目がやらしーわよ：」

ジト目をしたパルスィさんから言われる：。

ばれてた…でも仕方がないじゃない。大切な彼女の…それも水着姿とか!…もちろん、その中身も知ってるんだけど…//
やっぱり可愛い姿は見てみたいからね。こんな姿でも、年頃の男なんだし…//

「ふむ…では話は決まりじゃな。河童の里にはきちんと私自ら伝えておくし…それと、保険としてこいつを持っていくと良い」

何か木で出来た手形を渡された…これは？

「これはこの、妖怪の山全てで使える交通手形じゃ。——今日の様に絡まれても、これを出せば問題なからうて。それから、この手形は河童の里でも有効に使えるから、是非使ってやってくれ」

「色々ありがとうございます。天魔様」

「なに、こちらこそ、里を滅ぼさずに済んだ…。そうだ、カメラは今から取ってくる故、少々待っておれ！」

そうして、黒翼を羽ばたかせ凄まじいスピードでその場を後にする天魔様…何だか…ごめんなさい…。

それから、カメラを持った天魔様が神速で帰って来たけど…。持ってきてくれたのは超高性能のデジカメ（充電器付）だった。…こんな良さそうな物を貰って本当に良かったのかな？

心配になって、天魔様に目線を送ると…

「なあに、わらわの昔使っておった物じゃ。気にするでない」

と、言ってくれた。それから撮った写真の現像もしてくれと言うので、こちらとしては大助かりだけど。

その後、再び、デートをしようと思ったのだけど…その前に…。「あの…みなさん、来てくれたのは非常に助かったんですが、何故此処に?。」

すると紫さんが答えてくれる。

「あら?言っただけか?前みたいに襲われても大丈夫なように、碧君とパルススイちゃんの陰陽玉には発信機のような物を付けさせて貰ってたのよ」

さらっと爆弾発言しましたね…紫さん…。

「で、今回、妖怪の山に行くって聞いたから、少し心配だね。来れる人

達に集まって貰ったのよ…何故か閻魔もいますけど（キッ！）」

「今日は偶々休暇でしたので…（二人のデートが羨ましくて見て見たかったなんて言えません／＼）」

パルスイさんも、さとりに…

「さとり…ありがとうございます…。あなたも地霊殿の仕事があつたでしょうに？」

「いえ、お気になさらず…（少しでも碧さんに会いたかったからなんですけどね…／＼／）」

そして、僕も…

「幽々子さん、永琳さん、それから咲夜さんも…忙しい中わざわざありがとうございます」

「気にしないでね。大切な子供とお嫁さんの一大事ですもの。それに前にも言ったでしょう？碧くんには幸せになって貰いたかつたんだって…ね♪」

「私も気にしないで下さい（あ、何気に会話したの初めてだ）碧さんは、輝夜が認めた数少ない人間…でしたらそれを守るのが従者の役目ですから」

「それでも…ありがとうございます、永琳さん♪」

その無垢な笑顔に永琳はその場で悶絶する…（何あの笑顔！反則でしょ！可愛すぎる！お持ち帰りしたい！）無論…表には出していないが。

「咲夜さんも…すみません…。それと、また今度、紅茶を頂きに行つても良いですか？…もちろん…彼女と一緒に？」「ふえっ？」

そうして、パルスイさんをグイッと引き寄せる（軽く抱き合つた形になつたけど）

すると、少し呆れた顔の…でも、優しい顔をした咲夜さんは…

「——もちろん、その時は最上級の紅茶を用意いたしておきますね」

「ありがとうございます」

「さあ…これで妖怪の山での問題も解決したことですし、二人のお邪魔にならない内に帰りますわよ」

そして、紫さんの一声によりその場は解散となる。

「ほんと…みんなには助けて貰ってばかりだな…。何か恩返しが出ればいいんだけど…」

すると隣に居たパルスイさんが…

「何言ってるのよ？あれだけみんな、あなたを慕ってくれているのよ（妬ましいくらいにね）、これ以上碧が何かしたら暴走しちゃうわよ？」

「そんなものなのかな？…——それよりもさ、えい！」

パシャ！

「きやつ?!ちよつと、いきなり何するのよ！」

「ふふっ♪記念すべき一枚目♪油断して可愛い顔をしてるパルスイさんの顔ゲットしたよ♪」

「ちよつと?!いきなり撮らないでよ！…——それに、始めては、碧と二人で写った写真が良かったわ…」

シユンとなるパルスイさん…——うーん、ちよつと悪いことしちゃったな…

「じゃあこれは、消して…さあ…二人で撮ろう？記念すべき一枚目を…ね？」

「碧…うん♪じゃあ…」

「ハイチーズ♪」

こうして記念すべき一枚目の写真は、大切に…大切にされるのでした——…

22話 奇跡を起こせなかつた少女の恋慕

さて、あの後僕達は当初のカメラを貰うという目的を達成したので、帰宅しようかと思つたけど。せつかなので、引き続き山デートを続ける事にした。

改めて見ても、妖怪の山は風光明媚な場所で、秋にはさぞかし美しい紅葉が見れるのでは…と期待してしまつたくらいだ。

それから、天魔様の勧めでもあつた河童の里に行つて見たのだが、哨戒天狗と遭遇した時と違い、とても交友的にこちらを受け入れてくれた。

僕の想像していた河童と違い、青い帽子にブラウスを共通とした服を着ており、常に工具等の道具が入つた大きなリュックサックを背負っている。

何でも、話を聞いた『河城にとり』さんの話では…——

「これは河童という種族…技術者としての証なんだよ。それから人間は盟友だ。何か困つたことがあつたら気兼ねなく来ておくれ」

と言つてくれた。地底の妖怪に対しても、偏見は少ないようで、これにも安心した。

——そして今は、にとりさんと別れ山の頂上近くでパルスイさんとお昼を食べている。

「よく、お弁当を持ってきてたね？ひよつとして、ここまで予想されてたの？」

すると照れた彼女が…——

「まあね、あなたとの付き合いもそこそこ長くなってきたし…その…これくらいわね…／＼／＼」

本当に良くできた彼女だ…。それにお弁当も、どこでも食べやすい様にサンドウィッチにしてくれている…。

「こんな景色のいい場所で、パルスイさんと食べる手作りのお弁当…本当に幸せだなあ…」

「ふふっ…あなたと二人だから幸せなのよ？それに…こうして手料理を作ってあげるのは、あなたにだけなのだから。感謝してよね♪」

あー、もー！…なんでこんなに可愛いの?!

それに髪型を変えてる事もあって、ちらちらと見えるうなじ…なんて魅力的なんだろう…。うなじフェチの人達の気持ちが分かった気がするよ…。

「いつでも、感謝はしてるよ？それにしても、さっきはホント驚いたよね」

「紫さん達の事かしら？…そうねえ、あれは私も驚いたわ…。というか碧、あそこに居たのって幻想郷の中でもかなりの力を持った人達よね？私達…何で、あそこまでの庇護を受けれるのかしら？」

多分、紫さんを通して、色々な方面に協力を仰いで貰ってるっていうのは分かるんだけど…——

「うーん…単純に…僕達二人に幸せになってもらいたいのかな？…さとりさんも応援してくれたし…その辺でも何か働きかけがあったのかも…ってパルスイさん？何で少しむくれてるの？」

そう、ほんの少しだけ顔を膨らませたパルスイさん…何で？

「その気持ちは嬉しいのだけど…。多分、別の理由があるわよ…。特に、閻魔様とお医者さん…それにさとりも…」

映姫さんと永琳とさとりさん？…なんだろう？

映姫さんは仕事と一緒に働いた仲で、さとりさんは話しやすい友達…永琳さんとはまともに話したのは今日が初めてなのよね？

「こっちはあんまり心当たりが無いんだけど…パルスイさんから見て、その三人はどう見えたの？…っていうか何か知ってるの？」

少しだけ考えるパルスイさん…やっぱり何か心当たりが…？

「まあ…正直に言うわね。その三人…多分…いいえ、間違いなくあなたの事が好きよ？」

「……へっ？？」

予想外の答えに変な声が出てしまう。だってそうでしょ？好きって…——

「その反応だと、全然気が付いて無いみたいね…はあ…相変わらず天然たらしの鈍感なんだから…」

て、天然たらしの鈍感……。まさか自分の彼女にそんな事を言われる日が来るなんて…。

「さとりについては…その、私があなたと初めてデートをする前に聞いていたから知ってるの。閻魔さまは…この前の…その覗き見の時にね…。ただ、お医者さんに関しては今全く分からないのだけど…心当たり…ないかしら？」

そうだったんだ…そう考えたら何だか恥ずかしくなってくる／＼
／……— 映姫さんとか思いつきり抱きしめたし…／／

「あの…聞かなかった事にしていいい…？「ダメよ」…ですよね…。もう、あの三人と顔を合わせ難くなつたじゃない／／」

「彼女の私が言えた事じゃないけど…きちんとみんなの気持ちに向き合ってあげて？私達の為に態々来てくれるくらいに、思ってくれているのだから…ね？」

パルスイさん…—

「うん、分かったよ。彼女達から何か言われたら、きちんと返せるように僕も自分の考えを出しておく。それと、安心して？僕の心はもうパルスイさんで予約済みなんだから？」

すると、顔を赤くしたパルスイさんから

「も、もうっ！そういう事じゃないの！……でも、その…—嬉しいわ
♪」

それから暫くの間、二人はゆっくりとした時間を過ごした—

「ねえ碧、この後はどうするのかしら？山の探索もある程度済ませたけど…？」

「そうだね…。あ、折角だから守矢神社に行ってみない？諏訪子さんにさつきのお礼と、早苗ちゃんに僕達の事を報告しておきたいんだ」

そう、あの後諏訪子さんだけ、いつの間にか居なくなっていたのだ

…お礼を言いたかったんだけど…まさか自分の所に来ることまで計算して？

「早苗ちゃん…守矢の巫女で、あなたの外の世界での後輩だったかしら？…初めて聞いたときは嫉妬しちゃったけど…そうね、私も挨拶したいわね」

「そうと決まれば、さっそく守矢神社に行こうか。確か、この先を抜ければ見えてくるはずだから——」

そして、僕達二人は守矢神社へと辿り着く…すると前の様に早苗ちゃんが箒で掃除をしていた。

「こんにちわ、早苗ちゃん」

こちらに気が付いた早苗ちゃん

「あ、先輩！お久しぶりです！…えっと、そちらの方は？」

そっか、早苗ちゃんとパルスイさんは初対面なんだよね…。なら、きちんと紹介しなくちゃ。

「えっと、彼女は『水橋パルスイ』さん…地底の妖怪で…その、僕のお付き合いしている人なんだ…／／」

すると驚いて、箒を手放してしまった早苗ちゃん…。あれ？そんなに変な事言ったかな…？

「…：そう…なんです…おめでとうございます先輩！…これでやっど、先輩にも春が来ましたね！」

何だか変な感じだけど…祝福してくれてるんだよね…？

「ありがとう。それと、さつき諏訪子さんに助けて貰ったんだけど…居るかな？」

「諏訪子様に…ですか？ああ…それであんな弾幕が…。でしたら、奥の部屋に居ます…：私は此処の掃除を済ませてから行きますので。先に行つて下さい」

やっぱり何だか変だ…けど…それが何なのか分からない…。

「うん…。それじゃあまた後でね。行こうかパルスイさん…？パルスイさん…？」

するとその場を動こうとしないパルスイさん…どうしたんだろう？

「碧…悪いんだけど先に行ってくれないかしら？ 私はこの子と少し話したい事があるの…」

本当なら二人で行きたいんだけど…何か理由があるんだろう…。領いて僕は先に行くことにした。



彼が行った後…私と守矢の巫女だけが、その場に残される。さて—

「あの…改めまして、紹介させて頂きます。私は『東風谷早苗』です。この神社で巫女をしています」

うん…感じのいい子ね。でも、私が聞きたいのはそれじゃない。

多分、藪蛇になるんでしょうけど—

「私は『水橋パルスィ』よ。地底の橋姫…碧の彼女。よろしくね」

「はい。よろしくお願いします…それで、水橋さん「パルスィでいいわよ」…分かりました、なら私の事も早苗とお呼び下さい。パルスィさん…此処に残って…私に何かご用でしょうか？」

来たわね…—

「ええ…。間違っていたらごめん下さい…。早苗…あなた…碧に惚れているのかしら？」

すると彼女はハツと息を呑んだ…やっぱり…間違っていないなかったのね。

「えつと…何故、そう思われたのでしょうか？」

それでも態度を崩さない彼女…。

「最初に碧から、私の事を紹介した時の態度…あれは単に驚いただけじゃなかった。そうあって欲しくない…その願望が崩された驚きだった…そう感じたのよ」

すると俯き…それから再び顔を上げた彼女の瞳には、涙が溜まっていた…。そうよね…。

「あなたに…あなたに何が分かるって言うんですか!? 先輩は、私にとっての太陽だった！ 私が居る事の証明だった！ 憧れだった！…」

それなのに……ぐすつ……」

「やっぱりね……私にとつての抛り所が彼だったように、彼女にとつての抛り所も彼だった。同じ男を好きになったから分かってしまった。」

「そうね……出会いが違えば、私と彼は結ばれてなかったでしょうね……。そして、逆の立場になってたかもしれない……」

「だったら何ですか！ 憐みですか！ そんなの……勝者の自慢にしかありません！ 「聞きなさい!!」……っ?!」

彼女としては間違つた事なのかもしれない……でも……

「私と彼は確かに結ばれたわ。でもそれが何？ 彼の事を想う人は他にも居る……そして、その人達は、それを聞いても諦めていない！」

すると、泣き顔から一転して驚愕の表情を浮かべる早苗……それでいいのよ——

「あなたの……碧に対する思いがそれまでだと言うなら、別にそれでもいいわ。単にライバルが減るだけですもの？」

すると彼女は俯き……そして、答える。

「私は……私の想いは……っ！ 先輩を諦めたくない！ もう二度と……離れ離れになりたくない！ 他にライバルがいる？……幻想郷には常識なんて無い！ なら、先輩の心をあなたから奪います！ そして……そして、私の事を一番に考えてくれる様にして見せます！ 奇跡ではなく……自分自身の力で！」

はあ……私もお節介になつたものね……。でも……

「良い顔になつたわね。でも、彼の事を想うのなら……それくらいの気概がないとね。「パルスィさん……」今日から、あなたと私はライバルね？ 私には負けないわよ？」

「わ、私だつて負けませんから……でも、ありがとう……ごぎいます／＼」

泣いたカラスがなんとやら……すっかりとその顔に、気力を取り戻した早苗と私はその後ゆっくりと奥の部屋へと向かった。

早苗と楽しく話しながら……



奥の方…本殿の裏手にある家に向かうと、神奈子さんと諏訪子さんが雑談をしていた。

「あ、神奈子さーん！諏訪子さーん！」

すると僕に気が付いた二人が…

「おや、碧じゃないか？さつきは大変だったらしいね…大丈夫だったかい？」

「あくひどいなく、私が付いてたから大丈夫だったよ！全く、失礼しちゃうよね〜」

「ええその節はありがとうございます…その事でお礼が言いたくて、こちらに来たんです」

「いいって事だよ。それよりも彼女さんはどうしたんだい？それに、早苗も居ないみたいだし…」

それについては先程の事を説明した。すると二人は何かを納得したような感じで――

「なるほどね…なら、今頃は…。ふふつ…良い彼女さんじゃないか？」

「全くだよ。大切にしてあげなよ？でも、もちろんうちの早苗の事もね？」

??二人は直ぐに理解したようだけど…。なんだろう？僕じゃ分からない事なのかな？

「えつと…まあ、早苗ちゃんは大切な後輩なので…。それから、パルスイさんも…その…お互いに幸せになるって誓ったんで／＼」

すると、少し呆れた顔の神奈子さんと、笑いを堪えてる諏訪子さんが――

「はあ…こりや早苗も大変だね…」

「ふふつ…まあ飽きなさそうで、これからが楽しみだよ♪…つと、二人も来たようだね。うん…見てごらん？あの二人の楽しそうな顔を…」

振り向くと、パルスイさんと早苗ちゃん、二人共楽しそうに話しながらこつちへと向かってくる…。まるで、ずっと前からの知り合いだったように。

「あ、先輩！お待たせしてすみません！お掃除も、パルスイさんが手伝ってくれたので、直ぐに終わりましたよ」

「そんな事無いわよ？それから…守矢の神々よ…先程は助かりました…ご助力に感謝致します」

恭しく頭を下げるパルスイさん…そうだよね。二人とも気さくだけれど…本来なら神様…会話する事すら畏れ多い存在…。

「なに、聞いていたよりも、ずっと良い女みたいでこっちも安心したよ。そうだろう？諏訪子」

「私はさっきのを見てるからね。でも、本当に…大切にしてあげなよ？」

神様二人から言われているんだ…頑張らなきゃね。

「はい！…そう言えば、さつきから二人とも、随分仲良くなったみたいだけど…あの後何かあったの？」

「せ、先輩…それはですね…」

すると指で何かを言おうとした早苗ちゃんの唇を塞ぎ…

「女同士の内緒の話よ…ね、早苗？」

とつても魅力的な笑顔でそう答えてくる。

「そう言われると、益々気になるけど…早苗ちゃん？」

するとパルスイさんと顔を見合わせた早苗ちゃんが、二人で笑い合
い…

「二碧（先輩）には、内緒よ（です！）」

そうして、境内には二人の笑い声が響き渡るのだった——ホント…
何があっただらうね？

23話 ドキドキ水着回

夏も半ばを過ぎた頃――

僕とパルスイさんは再び妖怪の山……正確には河童の里のすぐ側にある滝に来ている。

「ふう……やつと着いたね。ここがにとりさんの言ってた場所……かな？」

前ににとりさんに、水遊びをするのにいい場所はないか聞いたところ、この場所が穴場だと教えてくれた（ついでに他の河童や妖怪が行かない様にもしてくれたいらしい）

落ちてくる小さな滝の水簾（すいれん）と、程よく、日差しを遮ってくれる青々しい木々……

その景色もさることながら、水も澄みきっており、差し込んでくる光を水際が反射し、一種の芸術の様な美しさを奏でていた。

「すごい……綺麗ね……」

その光景はパルスイさんも同様に思ったようで、美しさのあまり委縮してしまっているほどだった。

「今日は……を貸切で使えるんだって……何て言うか……良いのかな？……こんなに綺麗な場所を二人占めするって……」

「ふふっ……偶にはいいんじゃないのかしら？……それじゃあ時間も惜しいし……早速着替えようかしらね？」

そう言つて、服に手を掛けようとするパルスイさん……でも、そこで止まりこちらを見てくる……

「あの……碧……いくら、全部見た間柄とはいえ……そうやってじつと見られると、恥ずかしくて着替えられないのだけど……」

あ、そういうことか……

「……つ……ごめんなさい！……ぼ、僕はそっちの岩陰で着替えますね」

そして、買っておいた水着に着替える（とはいっても、トランクスタイプの物に、パーカーを羽織っただけなんだけどね）

「あの一、まだ、着替え……掛かりそう？」

「もう少し待って頂戴。その…私もこういう水着ってあまり着慣れていないのだから…」

まあ女性を急かすのも悪いって紫さんからも言われてるし…ここはのんびり待ちますか…それにしても日差しと水の音が心地良いなあ…。

「み、碧っ…その…もう出てきて良いわよ…」

するとパルスイさんから声が掛かる…因みに今日の水着の事は聞いても教えてくれなかったので、すごい楽しみだったりする…さて、いったいどんな水着なのかな…っ!?

そこに立っていたのは…まさに女神の様な美しさの…パルスイさんだった…

「……………」

「ちよ、ちよっと！何か言ってよね！」

はっ?!思わず見惚れていた…だってそりやそうなるよ!

パルスイさんの着ている水着は、黒を基調として、白い装飾が施された最小限の布のビキニ。

そして、髪もそれに合わせて、いつものボブヘアからツールサイドアップという可愛い髪型に——これもまた、普段からクールな雰囲気のパルスイさんと違い活発的な魅力を生み出している。

改めて、パルスイさんを見ると…やっぱりすごいな…。

日の光を浴び、煌めく金色の髪。引き込まれるような緑色の瞳。

そして、布面積の少ない、ビキニタイプの水着お陰で引き立つその扇情的なボディ…

胸も大きいし、腰のくびれやおしりの肉付きなんかも、最高に色っぽい…。

照れた顔もいつもと違って艶っぽいし…これ、色々とまずいかも…

「ちよっとお…碧い…っ?」(うるうる)

「ごっつ?!…破壊力が抜群すぎる…でも、ちゃんと感想を言うてあげないと…」

「ごめんね、見惚れてて何にも言えなかったんだ。その…髪型もいつ

もと違って可愛らしいし、水着も、パルスィさんの髪と瞳の色と合つてて：模様もお洒落で良いと思う。それに：日の光の下で改めて見るパルスィさんの姿って……本当に綺麗なんだなって思った：／／

「——っ?!……そ、その……ありがとう／／／」

ちよつとだけ気まずい雰囲気……でも嫌じゃないこの時間：それから何とか持ち直し、二人で川に入ることにした。

「あ、冷たくて気持ち良いわね：それに、水が冷たすぎないからいつまでも入っていられる感じがするわ……」

パルスィさんに続き僕も川に入る：ホントだ……

「気持ち良い……でも温い訳じゃないし……これ、ずっと入っていたくなるね……」

「でしょ?……はあ……地上には、こんな所もあつたのねえ……。ふふつ……碧と一緒に居ると、色んな事を知ることが出来て……本当に幸せだわ」
♪

いつものクールな感じではなく、子供の様にはしゃいだ声を上げるパルスィさん……良かった。此処に連れて来れて。

そうして、暫くの間、二人は只水に浸かつてのんびりと語り合っていた。

「そう言えば、今日は何か持つてきていたみたいだけれど……あれは何かしら?」

ああ……ビーチボールの事だね。幻想郷には海が無いから、あまり使われる機会が無いのだけど、今日の為に紫さんから借りていたので。

「ビーチボールの事だね。これはね……こうやって使うんだよ……ほっ」

ボールをトスして、パルスィさんの方に打つ。

「え?何?」それを今僕がやったみたいに打ってきて!……分かったわ。……はっ!」

上手く打ちあがる……しかし力み過ぎて、ボールは軌道を逸れフラフラと違う場所に落ちる。まあ最初は誰だつてそうだよね。

「あら……意外と難しいのね……」

「何度かやってれば、すぐに慣れるよ……じゃあ行くよ!」

そして、何度か打つと、直ぐにラリーが繋がる様になってくる。

「パルスイさん…ほっ…上手くなつたね…!」

「ありがとう…ふっ…これ、楽しいわね♪」

ただ、ボールを落ちない様に打ち合うだけ…でも恋人同士なら、そんな事でもとても楽しく思えてくる。

しかし、ここで…ある事に気が付いてしまった…——

パルスイさんがトスをする度に、たわわな果実が揺れるのだ…。

いつもは服で隠れているそれも、水着だとモロに出してしまう…ビキニなら尚更だ。

そして、パルスイさんはそれに気が付かず…ただ夢中にボールを打ち上げる。うわっ…すごい揺れてる…／／／

それに見惚れてしまった僕はボールを落してしまった。だって…仕方がないでしょ…あんなの見せられたら…——

「もう、碧?…どうしたの?…ひよっとして、疲れちゃった?」

そっか…パルスイさんは気が付いて無い…でも、やっぱり見ちゃった事は言わないとな…。

「えっと…とっても言いにくいんだけど…ボールを打ち返す時のパルスイさんに見惚れちゃって…／／／」

たぶん…僕の視線に気が付いたんだろう。パルスイさんは慌てて胸を隠しながら…——

「碧…もう、えっち／／／」

「ご、ごめんね…／／／」

すると、照れた顔のパルスイさんが…——

「い、良いのよ…／／／…その、碧だつて男の子だもんね…／／／あ、でもちよつと恥ずかしかつたから…お仕置きをしなきゃ…っ?!」

すると、水に足を取られたパルスイさんが倒れそうになる…危ない!? そう思つて受け止めに行つただけ…——

「きゃっ!」

「むぐっ?!」

何これ、何が起こつたの?

ただ一つ分かるのは……

僕は今、ものすごく柔らかい……もっちりと……そして、すべすべとした何かに顔を挟まれている……この感触……もしかしなくても……。

「ひあつ?!……ちよつと、あつ……碧、動かないで……ひゃあん!」

そう、パルスイさんを受け止めたのは良いのだが、そのまま僕の顔はパルスイさんの胸に包まれてしまっていた……

「むぐつ……「ひゃん!」くくく／＼」

「ご、ごめんねパルスイさん」んう……いいから……あふつ……は、早く離れてよお……／＼／＼……はい……／＼／＼」

そうして、僕の顔から離れていくパルスイさんの体温と柔らかさ……うあ……気持ち良かった……／＼／＼

「……／＼／＼／＼／＼」

僕達は、お互いに顔を真っ赤にして、数秒間その場に佇んでいた。

そして、発せられた声……

「ひにやあああああ?!?!」

羞恥からなのか、パルスイさんはそのまま川に入り……

「ご、ごめんなさい碧……出来ればこっちを見ないでっ!……その、恥ずかしすぎて死んじやいそうだからっ／＼／＼」

「わ、分かりましたっ!」

こっちも、さっきまでのパルスイさんの柔らかさやら何やらで、一部が大変な事になってるから、暫くは動けないよ?!

それから、落ち着いた二人は、またちよつとだけ気まずい空気の中過ごしていた……。

そして、プカプカと水に浮かびながら時間を過ごし……日も傾いて来たので、そろそろ上がることにした。

「はあく……今日は丸一日、結局目一杯遊んだわね。その……恥ずかしい事もあつたけど……っ／＼／＼……でも、楽しかったわ♪」

「パルスイさんに楽しんでもらえたなら、何よりだよ……こっちも、久しぶりに水辺ではしゃいだし……その……パルスイさんの柔らかさとかも感じられたし……／＼／＼」

「じー……」

あ、すごいジト目で見られてる。素直に答えよう……

「えつと……本当に、目の保養になりました……。何て言うか……生きて良かったと思います……はい……」

「……」

「うぐつ……ごめんなさい……」

「碧も何だかんだで男の子だったのよね……あんなにえつちだなんて思わなかったわ……」

「……返す言葉もありません……でも……?」

「……でも、本当にあなたと此処に来られて良かったわ♪」

水が滴り落ちる金色の髪……夕日に照らされ、光輝くその笑顔は……とても、眩しく感じられた……そうだ……

「ねえ……パルスイさん。その、このまま二人で写真を撮らない?水着だと恥ずかしいって言うなら……やめるけど……?」

すると、きよとんとした彼女は……再び笑顔に戻り……

「あなたと一緒に撮る写真が、嫌な訳ないでしょ♪」

そうして、僕の隣に並んでくれた。

「じゃあ脚立を立てて……折角だから、手を組もうか?」

でも彼女は悪戯っぽい笑みを浮かべ……

「そんな事よりも……これで良いでしょ?」

僕に思いつきり抱きついて来た?!……そんなにくっ付かれると

「ぱ、パルスイさん!」

「なあに?嫌なの?くすくす♪」

もう、分かかってて言ってるよね……でも、そんな彼女が……とても愛おしかった……

「じゃあ……撮るよ……でも、やられっぱなしって言うのもくやしからねっ!」

シャッターが切られる瞬間、僕は彼女の唇にキスをした。流石の彼女も驚いたようだけど……

そうして、夕日が沈む前まで、二人はカメラで写真を撮り続けた……大切な、幸せな思い出を残す為に

24話 太陽の畑く出会うドSなお姉さんく

幻想郷には色々な名所がある。

今、僕が向かっている『太陽の畑』は夏になると、凄まじい数の向日葵の花が咲き誇る場所らしい。

折角なのでのんびり歩いて行こうと思い、紫さんから人里の出口まで送ってもらい、そのまま南の方に向かう。

他の人に聞かずとも、丁寧に標識が出ているのはこの幻想郷の良い所なのかな？

——…しかし、僕は甘く見ていた

そう、この道のり…かなり長いのだ…。

季節は夏真っ盛り。幻想郷も例に洩れず、猛暑に見舞われていた。

そんな中、日陰一つ無い平野を延々と歩き続けると…流石に気が滅入ってくる訳だ……

「念の為、水筒と帽子を被ってきて…ホント正解だったなあ…」

被っているのは、ツバの広いブラウンの帽子。紫さんのお下がりだったのを貰ったのだけど…

『あら？予想以上に似合っているわねえ。それなら服も合わせないといけないわね』

と、再び一日掛かりでコーデされたのである。

今の服装は、白いシャツに、黒いハーフパンツ——その上から白い薄手のロングコート（前を止めたら普通にワンピースに見える）を着ている。

うん…見る人が見たら…女性の服装だよ…？

「紫さん…絶対楽しんでるよ…はあ…」

笑いを堪える家族の顔を浮かべつつ、ため息をついた僕は再び道を歩き始めた。

何故、太陽の畑に行こうと思ったのか？

それは、単純にパルスイさんとのデートの下見である。

折角、幻想郷に来たのだし、今の季節でしか楽しめない場所は無いか？と紫さんに聞いたところ、『太陽の畑』にある向日葵を勧められた

いにして人形使いの『アリス・マーガトロイド』

二人が雑談をしていると、幽香は何かを感じ取ったかの様に反応する。

「……花が教えてくれているの……。……人間が……自分の目の前で倒れている?!?!この猛暑の中で!?!」

自分のいる家は、幸い魔法で、過ごしやすい温度にしてあるが、外はそうはいかない。

しかも、今日はここ数日で一番暑い……。そんな中、人間を放置していたらどうなるか……

そう思った彼女は、愛用の日傘を持ち、すぐさま家を飛び出していった。

「ちよ、ちよつと幽香?!何があつたのよ?!」

慌てふためく友人を置いて……。

私に知らせてくれた向日葵の元に向かうと、そこには少し変わった格好をした、一人の少女が倒れていた……—年齢は……十二〜十三くらいだろうか?

まだ、あどけなさの残るその顔は暑さにやられ、苦悶の表情が浮かんでいた。

すらつとした首筋に手を当てる……

「軽い熱中症ね……。急いで家に連れて行かないと!?!……それにしても——」

幽香は不謹慎ながら思ってしまった……—なんて可愛いのだろうか?……まるで人形の様……。

陶磁器を思わせる白い肌……。

それとは対照的に艶のある漆黒の髪の毛。

中性的ではあるが、綺麗な顔立ちと長い睫毛……。

か細い手足と小柄な体躯……。

それにこの甘い甘い匂い……。

このまま目を覚まさないのなら……—いつそ自分の物に……つてそうじゃない!?!

ブンブンと首を振り、邪念を追い払いつつ、そのまま家に向かった……。

家に入るとアリスが慌てふためいていた。

「ちよつと幽香！いきなり飛び出て……つて、その子はどうしたの?!大丈夫なの?!」

この子を見てさらに慌てるアリス……ああもう！

「落ち着きなさい！説明は後でするから、先にこの子の看病を！軽い熱中症みたいなの、アリスは氷水と濡らしたタオル……それから食塩水の用意をして頂戴！」

少し冷静になったアリスは……

「わ、分かったわ！直ぐに用意するから……その子の処置は任せるわよ！」

当然よ！先ずは、衣類を緩めてあげて……それから、足を少しだけ高くして寝かせて……。うん、よし！

次は少しずつ冷やして上げないと……部屋の魔法を彼女に圧縮して……これで少しはマシになったと思う……

「幽香！持ってきたわよ！」

流石アリスね、こういう時の行動は早いわ！

「ありがとう！なら、用意した濡れタオルで彼女の身体を拭くわよ。私は腋の下と首を拭くから、アリスは足元をお願い！」

「分かったわ……んしょ……この子……大丈夫かしら……？」

心配そうな声が聞こえてくる……——そうよね。

「見た所軽い熱中症みたいだから……処置はこれで大丈夫だと思うわ。後は、この子が目を覚ましてくれるのを待ちましょう？」

そうして、私達は汗だくになりながら……彼女の看病を続けたの——

でも、彼女……珍しい格好をしてるわね……それに、どうして一人でこんな所に来たのかしら？

「ねえ……幽香……この子って人里の子供じゃないわよね？それに……着ている服も変わっているし……」

アリスも同じことを思ったみたいね……

すると緑髪の女性がスプーンに水を入れて、僕の口に運んでくれる……。あ、ちよつとだけ楽になってきた。

「あなたは、軽い熱中症で向日葵に倒れていたのよ……覚えてるかしら？」

向日葵……？ そうだ……思い出した、綺麗な向日葵を近くで見ようと思つて……それから……？

「此処は向日葵畑の中にある、私の家。倒れていたあなたを運んで看病させてもらったの……それで……もう話ができるかしら？」

ゆつくりと、そしてこちらを安心させるように笑顔を浮かべる女性……見ると、汗びっしょりになっている……そっか……僕の為に必死で……。

「……っ……はい……、ありがとうございます。……僕は、大神碧……です。春頃に、幻想郷に来て……今は……八雲紫さんの元で、お世話になってます……」すると金髪の女性が……

「思い出したわ！ 確か霊夢から、話には聞いていたの。紫さんの元で保護されている人間がいるって事を……あなただったのね」

……みんなと、知り合いなのかな？

「アリス……そういう事は早く言いなさい……。……だつて、会った事が無かったから……」……まあそれもそうね……。それで、どうして此処に来たのかしら？」

そして、僕は此処に来たいきさつを話した。

幻想郷の名所を見て回りたいと言った事

紫さんから『太陽の畑』について聞いた事

そこまでの道のりを歩いて来た事

景色に見惚れて、暫く立ち尽くしてしまった事

……——そりゃ熱中症にもなるよね……。

すると、緑髪の女性は呆れたような……でも心配そうな顔をして……

「はあ……此処の景色に見惚れてくれた事については感謝するわ。でもね、それで肝心のあなたが倒れてしまつては意味がないでしょう？」返す言葉も無い……

「ごめんなさい……。……それに、僕のせいで二人にもご迷惑をお掛けし

たみたいで…本当にすみませんでした…」

それを見た金髪の女性が…

「もういいでしょ幽香？あんまり責めても、この子がかわいそうよ？

「…そうね」…それと、私の名前は『アリス・マーガトロイド』、名字は長いからアリスって呼んでね？幽香も…ほら！」

アリスさんに言われながら、緑髪の女性も…

「私の名前は『風見幽香』…この花畑の管理者よ。幽香でいいわ」

緑髪の女性…幽香さんはちよつとぶつきらぼうにな感じに言ってくる…この感じ…出会った頃のパルスィさんに似てる…？

「幽香さん…アリスさん…二人ともありがとうございました…。僕はもう、お暇させていただきますので…「待って」…え？」

すると幽香さんが心配そうな顔でこちらを向く…

「あなた、まだ体力が戻ってないでしょ？それに…その汗でべつたりの服のまま帰るつもりなの？」

そして、自分の服を見てみると、汗でシャツが軽く透ける位にベトベトになっていた…これ、ずっと見られてたんだ…／／／

「す、すみません…。あの…服が渴くまでで良いので、こちらで休ませてくださいませんか…？」

「ふう…最初からそう言いなさい。良いわよ。それから、少し温めにお風呂を入れるから、ついでに汗も流して行きなさい…いいわね？」

幽香さんはそう言うてくれた…ありがたいけど…

「…その…いいんですか…？迷惑を掛けた上に、そこまでして貰って…？」

「ええ…構わないわよ。さて、それじゃあ私はお風呂を入れてくるから、その間はアリスと会話でもしてなさい」

そう言うて部屋を出て行く幽香さん…親切な人だなあ…

「ふふっ…。幽香ったら、照れちゃって♪」

そう言いながら笑顔を浮かべるアリスさん。

「??…照れてる？幽香さんがですか？」

「ええ。碧君を怒った事と、碧君が自分の育てた花畑で感動してくれた事…その両方に照れてるのよ」

「……ますます分からない……」

「ああそうね、碧君は知らないのよね。幽香は確かに親切だけど、自分の関心の無い人に対しては怒ったりしないのよ？でもね、あなたは幽香の育てた花畑に感動して、そのあまり熱中症になってしまった。だから、あなたに関心を持ってしまった。だから怒ったの。まあ、後悔半分、嬉しさ半分って所かしらね？」

「そう言いながらクスクスと楽しそうに笑うアリスさん……。益々悪いことをしちやっとなあ……」

「そう言えば……お二人は友達なんですか？随分と親しい感じですけど……？」「碧、お風呂沸いたわよ」……あ、幽香さん」

「二人とも……随分と楽しそうだけど……何を話していたのかしら？」

「えつと……」気にしなくて良いわよ。クスクス♪」……です……」

「……??？」

「ちょっと困惑気味な幽香さん……。本当に……親切な人だ……」

「まあいいわ。お風呂場は、廊下に出て一番奥にあるから……風邪を引かない内に入ってからっしやい？」

「はい……分かりました。重ね重ねありがとうございます……」

「気にしなくて良いのよ……さあ……さっさと入って汗を流してきなさいな？」

「そうして、幽香さんに促されるまま、僕はお風呂場に向かった……」

「……あの後、まさかあんな事になるとはつゆ知らず……」

「……続く」

25話 太陽の畑くドS、此処に極るく

「ふう……。温いけど、今の僕には丁度いい温度だ……」

熱中症で倒れた僕を、太陽の畑に住む妖怪——「風見幽香」さんと、偶々遊びに来ていた友人「アリス・マーガトロイド」さんに助けて貰い、今は汗を流すためにお風呂を頂いてます。

この家…見た目と同様にお風呂も洋式なんだけど……

幻想郷に来て初めて洋風のお風呂に入ったからか、ちよつとだけ気分が高揚してる。(紫さん、さとりさん、パルスイさんの家は和風のお風呂)

だって、ちよつとしたプールの様に広い、大理石の作りの浴槽に加え、ライオンの口から流れ出ているお湯……高級ホテルもビックリな造りだ。

窓から見える、美しい向日葵の景色を堪能しながら入るお風呂……最高だね。

なんて思っていると、脱衣所の方から……

『碧?湯加減はどうかしら?あまり高い温度にはしていないのだけど……?』

幽香さんだ……こつちを気遣って、来てくれるなんて…本当に親切な人だなあ——つと

「ええ、丁度いい温度で、ゆっくり浸かれています。すみません、わざわざお湯を張ってくれて……」

『いいのよ。それに、私達も汗だくだったから、丁度良かったしね……んしょ……つと……。ふう……下着まで汗でベトベトしてるわね……』

『んっ……。はあ……ホント、ショーツが張り付いて脱ぐのも一苦勞ね……さて、じゃあ入りましょうか』

はい?……え?……入る?……どこに?……下着を脱いで?……ちよつと?!それはマズイよ!?

「ちよつ (ガラッ)」「ふう……まだ、少しだけ蒸すけど、裸の方が楽でいいわね」……?!?!」

「本当ね。とりあえず、服が渴くまで……のんびり汗を流しましょう

……って碧？何で外を見てるのかしら？」

だって見れるわけないでしょ?!この二人、完全に裸体を晒してるんだよ?!タオルで隠す訳でもなく…堂々と入って来たし!」

「え……っと、外の向日葵が綺麗で……見てたら落ち着くなくと……
／／／」

ごめんなさい：見ちゃいました…。だって、あんまりにも普通に入ってくるんだもん……。

ちよつとだけ見えちゃったけど…二人ともすごい綺麗だったなあ
…

幽香さんは、少し引き締まった…それでいて筋肉質じゃなく、グラビアアイドルもビククリなくらいに、女性的な魅力を保った肉体美。アリスさんは、スレンダーだけど全体的なバランスが取れていて…どちらかと言うと、モデルさん体型なのかな…?

そういえば、パルスイさん以外の女の人の裸を見たのって…初めてかも……ってそうじゃないよ!
「~~~~／／／／／」

「……?…褒めてくれるのは嬉しいけど…変な子ね?…それよりも先に汗を流しましょう!」

「ええ、そうだ、偶には私が洗ってあげるわね」

「あら、ありがとうアリス……って何で自分の身体にボディソープを塗りたくってるのかしら…?」

うわあ…塗ってる音がモロに聞こえてくる…想像するだけで……
／／／／／…いやいや、ダメだ、パルスイさんに怒られるから?!

「え?だって、これなら私も一緒に洗えるじゃない?ダメだった?」
アリスさん…天然でやってるんだ……

「はあ…相変わらず……。まあいいわ、あなたの好きになさい…」
少し呆れた声の幽香さん…付き合いが長くても、こういう事は少ないのかな…?

「……んっ…アリス…。少しくすぐったいわ…あ……」
／

聞いちゃだめだ……というかも大変な事になってるし……
／

「ちよつと…動かないで頂戴！…ん…ふっ…洗いにくい…でしよ?!」
そういう問題じゃ…え？何なの…いつの間にか百合時空に飛ばされたの？

「それにしても…幽香…また、大きくなったんじゃないの…コレ！
「ひゃん?!」

あ、幽香さん…可愛い声出せるんだ…っつて、そうじゃなくて?!
「ちよ、ちよつとアリス！いきなり胸を揉まないで頂戴！ビツクリしたでしよ?!」

「えー、いいじゃない。減る物なら減らしてあげたいし…このっ！このっ！」

「きやつ?!ちよつと！ひうっ…ん?!」

ああ…色々な意味でもう立ち上がれない…ナニコレ…タスケテ…。

「…んっ…こんのっ！（パコーン）「あいたー!」…はあ…はあ…アリス…あなた、私の胸に何か恨みがあるのかしら！」

「あいたた…全力で叩いたわね…。タンコブになつたらどうしてくれるのよう…。「うるさい色情魔法使い！」…ひどっ！私はただ、その胸を少しでも小さくしたかっただけよ…。幽香…正直に言っ…？…あなた…今の胸の大きさはいくつなの？」

聞きたくない…でも、聞いてしまうのが男の性なんです…ごめんなさい…。

「えつと…最期に計った時が…92のGカップだったかしらね？」

「…っな?!」え？何よ？」

パルスイさんが87のEカップだったから…それよりもさらに上…。流石幻想郷…規格外にも程がある…——それと同時に…

「天は我を見放したあ…。「何よ…？あなただつて、そこそこ大きいじゃない…」…それは持てる者の余裕と言うものよ！」

「はあ…まあいいわ。それよりも…洗い終わったなら、さっさと湯船に浸かりたいのだけど？」まだ、前が…」自分でやるわよ！全く…」

そして、身体を洗い終えた二人が、浴槽に入ってくる…っつていうか何で二人とも男と一緒に風呂に入れるの?!

「うん…：我ながら良い湯加減ね。これなら、適度に入りますれば、湯あたりも起こさずに済むわね…：ってどうか碧？さつきから何でこつちを向かないの？」

向きたくても、向けないんですよ!」

「そうよ、女同士。裸の付き合ひなんて、そんなに恥ずかしい事じゃないでしょ？…：って幽香！…：あなたの胸…：湯船に浮いてるわよ…：？
どういう事なの…：？？」

大きな胸って水に浮かぶんだなあ…：待って？…：アリスさん…：
今なんて言ったの…：？

「浮かないモノなのかしら？」「しくしく…：」…：はあ…：碧？あなたの上半身はさつき透けて見えたんだから、気にしなくても良いのよ？まあ…：
碧も…：後、二〜三年もしたら育つわよ。でもね…：女の子なのだから、最低限ブラくらいはしておかないとダメでしょ？」

うわあ…：どうしよう…：。そう言えば自分でも思ったけど…：今日の格好って、見る人が見たら女の子…：完全に勘違いされてるよ…：。
「まったく…：紫にも困ったものねえ。こんな可愛い子に、ブラも付けてあげないだなんて…：」

どうしよう…：…：とつても言いにくい雰囲気だけど…：でも、言わないともっと大変な事になりそう…：うん、言おう…：——

「あの…：——すつごく言いにくい事なんですけど…：——」
「あら？何かしら？…：というか言いたい事があるならこつちを向きなさい」

「そうよ。流石にそっぽを向いて話されると私も幽香も良い気分じゃないわよ？」

そう言つて二人から、無理やり正面に向かされる…：目の前には…：
二つの山と、それを上回る更に巨大な霊峰が…：くくく…：?!?!

「…：胸なんて見てどうしたのかしら？」
「どうせ幽香に比べたら…：しくしく…：」

そうじゃなくて?!…：ああもう！

「あの…：…：僕は女じゃなくて、男です！…：それに、これでも成人して
ますから!!」

それから、幽香さんとアリスさんはバスタオルに身を包み、再び浴槽に戻ってきた……えつと、これ素直に僕が出た方が良かったんじゃない……？

「お待たせ……って言っても……やっぱり恥ずかしいわね／＼」

「ねえ……幽香……？これ、素直に私達が出た方が良かったんじゃない……？」

「ですよ！流石は出来る女の人っぽい雰囲気のアリスさん！」

「それでも、良かったんだけど……折角だから、その……混浴っていうものに興味があつてね……／＼」

「そんな理由?!アリスさん！」

「確かに……アレはすごかったけど……／＼……碧なら顔も女の子っぽいから、そこまで抵抗もないし……良いわね」

「アリスさん……あなたもですか……」

「……まあ、私もアリスも……その……恥ずかしながら生娘だったから……まじまじと見ちゃつて……ごめんなさいね／＼」

「この人……クールな見た目と違って、すごい乙女だ……」

「でも、あなたも悪いのよ?」「へっ?」……だってそうでしょう?顔付も服装も、中性的……それでいて、汗も女性よりも良い匂いって、間違われてもおかしくないわよ?」

「ちよつと待って、見た目はともかく……汗の匂い?」

「確かに、あの匂いは反則よねえ」

「アリスさんも……?」

「……あの?汗の匂いって……?何かおかしかったですか……?」

「不安になつた僕は聞いてみる……すると――」

「そうね、私は花の妖怪だから嗅覚は良い方なの。それで、あなたの匂いなんだけど……そうね、一言で言えば良すぎるの。それこそ……普通の人間には無いような良い匂い……何か心当たりは無いかしら?香水や香料を点けているとか、普段の食事で特殊な物を食べているとか……?」

「香水は生まれてこの方、一回も付けたことが無い……食べてる物も……普通のご飯だけ……」。

「いえ……特に、何も……でも、幻想郷に来て、あそこまで汗を流す機会つ

てそんなに無かったので…誰からも、何も言われませんでしたね…」
すると幽香さんは少し考えた後に…

「もしかしたら…碧は『挙体芳香』の体質なのかもしれないわね…」
きよたい…ほうこう…?

「あの…何ですか…その…きよたいほうこうって?」

「そうね…人も妖怪も、生まれ持つての匂いっていうものを持つているの。アポクリン腺っていう…そうね…匂いを造る袋とでも言うのかしらね?…とにかく、その袋から、その人固有の匂いを生み出すのだけれど…。本当に、極稀に、全く異なる匂いを分泌する人や妖怪が居るみたいなの」

すると、アリスさんが続けて…

「それって…人間だと『クレオパトラ』や『楊貴妃』…。妖怪だと…『妲己』や『玉藻前』だったかしら?…って全部、傾国の美女って言われてる存在じゃない!」

そんな…馬鹿な…?外の世界だと…そんな事一度も指摘された事が無かったのに…。

「うーん…流石に、私も…詳しい事は分からないけど…。もしかしたら…あなたが幻想郷に来た時に、何かしら体質が変わったのかもしれないわね。それと…これは幽香の得意分野なのだけど…今の季節も関係しているかもしれないわ」

今の季節?…夏場だけ?…——すると幽香さんが納得したように答える。

「ああ…そういう事ね。あなたから香ってくる匂いは“クチナシ”の匂いに近いの。クチナシは春先から夏にかけて咲く“沈丁花”、“金木犀”と並ぶ三大香木…とても、さわやかな…でも、人や妖怪を惑わすには十分な…甘い…甘い匂いの花なのよ」

もしかしたら…紫さんが、妖怪に狙われやすい…と言っていた原因の一つなのかもしれない…。

「紫さんからは…妖怪から狙われやすいって言われています…。あの時は魂って言われてたんですけど…もしかしたら、匂いもそうなんですかね…?」

すると、幽香さんが答えてくれた。

「そうね、“魂”っていうのは表だって見えないモノ……。でもね、匂いは違う。近づくと人：妖怪：全ての存在に、無自覚にリアリティを要求してくる。そういう意味では、あなたの存在はかなり狙われやすいと思うわよ？……実際私達もそうだったから……」

……え?!…実は危なかった？

「ああ…大丈夫よ？キッチンと自制したから。それに、食べちゃってたらあなたは此処に居ないでしょ？」

こつちの考えを読んだかの様に返答してくる幽香さん…ああ…びっくりした…。

「怖がらせて、ごめんなさいね。そうね…最初は確かに、あなたの事を欲したわ…でもね、眠っているあなたを見ると…：思わず守りたくなったの…。そうね…多分、女性なら誰もが持つ…母性本能ってものかしら？——もしかしたら…あなたのその匂いは…母性本能を刺激する匂いなのかもね♪」

幸せそうな顔で語る幽香さん…。だとしたら…幽々子さんとか映姫さんのハグも、そうだったのかな？…でも、あの時はまだ春だったし…——

「今日は、特に暑い日だったから…汗も多くかいて…それもあつたのかしらね？でなきや幽香がここまで親切にするはずないし」

ちよつとだけ、からかうように言うアリスさん——そうだったんだ…。

「だとしたら…：迷惑を掛けて本当にごめんなさい…」

「碧？…さつきも言ったでしょう？私が守りたいって思ったから助けた。それは、あなたの意志じゃなく…他の誰でもない…：私が導いた答え。それに謝られても困るわよ。——それ…：アリスも同じみたいだしね…♪」

「ゆ、幽香?!…：……。——こほん、まあ…その、私も同じよ。助けていから助けた…。それに、これからも助けてあげるわ人形遣い…アリス・マーガトロイドの名においてね…：／／／」

あ、照れてる…でも、そう言ってくれるなら本当に嬉しいな……。

「もちろん、私もよ?…太陽の畑の管理者…風見幽香の名において、あなたの事は守って見せるわ」

幽香さん……………

「——っ…ありがとうございます…」そうと決まれば…」?…?…幽香さん…?」

何かとても良い事を思いついた顔の幽香さん…とアリスさん…え?…何?…

「今日の夕飯は家で食べて行きなさい?良いわよねアリス?」

「もちろんよ。紫さんへの連絡は私が入れておくから…碧は心配しないで頂戴?」

あれ…?なんだか…トントン拍子で話が進んでる…?

「さて…じゃあ碧、上がるから拭いてあげるわよ?大丈夫、お姉さんに任せなさい♪」

「今度はもつと…じつくり見れる…ハッ?!そうじゃない…何を考えているのかしら…まあいいわ」

幽香さん…それは流石に…。あとアリスさん…ちよつと目が怖いです…。

結局、その日は幽香さんの家で晩御飯を頂きました。洋食が多く…とつても美味しかったです。

あと…——幽香さんとアリスさんという、とても頼りがいのあるお姉さんが出来ました。

……………余談だけど…二人から『幽香姉さん』と『アリス姉さん』と、これから呼ぶようにと言われた。

…:…まあ…ちよつと照れくさいけど…兄妹が居なかつた僕には、少し新鮮で、それも良いかなと思つた一日でした。

26話 太陽の焔く姉と嫁の対面く

あれから、三日後……

幽香さんから、向日葵の一番の咲時期を教えて貰った僕は、今度はパルスイさんと二人でこの、太陽の焔に来ている。

流石に前回の事で懲りたので、今回はスキマで丘の手前まで送って貰ったのだけど……。

『お土産は二人の愛の結晶でいいわよ』と、凄まじい爆弾発言に二人して顔を真っ赤にしていた。

「さ、さて、気を取り直して行きましょう！この丘の先に、碧のお勧めのスポットがあるのかしら？」

そう言いながら無邪気にはしゃぐパルスイさん——今の彼女の姿は白いワンピースに麦わら帽子

——…今まで見た事が無かった姿に、僕自身かなりドキドキしている。……だつてあれ…反則でしょ？

普段着ているのは、秋を基調としたペルシアンドレス。

しかし、それは今日が一転、紫さんのお下がりとはいえ、純白のワンピースに可愛らしいミュール

麦わら帽子で分かりにくいのが、髪形も、後ろでポニーテールの様に結んでいる。ああ……本当に可愛いなあ……。

それから、僕達は熱中症にならない程度に水分補給をし、咲き誇る向日葵を見て回った。

「へえ……向日葵って、こんなに大きくなるものなのね。地底に居たら分からなかった事ばかり…ホント、碧は私を楽しませてくれるんだから♪」

始めてみる大きな…そして、圧倒的な量の向日葵…。喜んで貰って何よりだよ。

「そうだ！せっかくだからさ、丘の上から、二人で写真を撮ろうよ！」

「ええ、賛成よ♪こんな綺麗な花と写れるなんてね…幸せだわあ」

そして、カメラをセットして……よし

「じゃあ撮るよー!」

そして、二人で腕を組みながら……「ハイチーズ♪」

「うん、よく撮れてるよ……ってパルスイさん?どうしたの?」

何かあったのかな?って幽香姉さんの家を見てるな……まあいつまでも隠しておけないし……それに折角招待を受けてるんだ

「ねえ…碧、あの家って?」「実はね」…ひゃい?!」

「あの家の人とは…その……知り合い?で、パルスイさんさえ良ければ今から会いに行かない?」

ちよつと戸惑ってはいたけど……

「——うん。碧の知り合いなら、会ってみたいわ♪」

「それは良かった。それじゃあ行こうか」

そうして、二人は汗に塗れた手を気にせず、ずっと繋いだまま幽香の家に着いた。

さて、確か待ってるからって言ってたけど……?

「(リンゴーン)こんにちわー、幽香姉さんいますかー?」(姉さん…?)
すると中から凄まじいスピードで……

「——会いたかったわよ碧♪」「むぐうっ?!」…あら?そちらが例の彼女さんかしら?アリスちゃんにも教えてあげないとね♪」

そうして、僕を胸に抱いたまま居間へと向かう……この展開には、流石のパルスイさんも付いていけなかつたみたいだ。

「さて、改めて自己紹介をさせて貰うわね。私は『風見幽香』この太陽の畑の管理人で、今は碧のお姉さんなの。あなたの事は聞いてるわ。よろしくねパルスイ」

「私は、『アリス・マーガトロイド』…本来魔法の森の魔法使いなのだけど…、今日は碧が来るって聞いたから此処にいるの。あ、私も碧のお姉さんね。よろしく、パルスイ」

すごく、何かを言いたそうな瞳でこちらを見てくるパルスイさん

……

「——えっと、私は『水橋パルスイ』碧とお付き合いさせて貰っています…けど…なぜ、お二人は碧から姉と呼ばれているのでしょうか

「?」

うん、そこだよ。でもね――

「あら?・何もおかしい事は無いでしょう?恋人ではなく、別の方向で碧と一緒にいたい。そうになると、姉と言うのが一番良い選択肢だと思っただけど?」

特に悪びれた顔も無く…むしろ当たり前前のように答えてくる幽香さん。――さしものパルスイさんもこれには驚いたみたいだ。

「なら、二人は…その碧の事が好きとかは…?」「やあーん!可愛い!」むぐつ?!」

「これなら、お嫁さんじゃなくて妹でもいいわねえ…」「むぐう!むうう!」あら?・それは嫌なのね?ふふつ…冗談よ?碧のお嫁さんはパルスイさんだけですからね♪「ぷはあ…はあ…その…ありがとう…ございます…//」…碧が惚れるのも分かるわ…くすつ♪」

「そ、それはどうも…でも、いきなり姉なんて言われたら、流石にビックリしますよ…でも、私も幽香姉さんって呼ぶのは嫌じゃないです…//」

すると幽香さんが再び…

「ああもう…二人して可愛いんだから!」「むー!むー!」ってあら…くんくん…このクチナシの匂い…あらあら♪」

「ふあ…?どうしたんですか?幽香…姉さん?」

すると、パルスイさんにだけ聞こえる声で囁く…

「こんなに碧の匂いが移るくらい、毎日してるのかしら?お姉さん、ちよつと妬けちゃうわ♪ (小声)」

?!?!?!?!//

百面相をしているパルスイさん…何を言われたんだろう…?

それから、アリスさんを交え四人でお茶をする…こういうのも家族団らんって感じでいいなあ…。

「と、ところで、お二人はどうして碧の姉に?ここに来た事と何か関係があるんですか?」

「あら?・碧?・パルスイには、言わなかったの?」

ギクリ?!――するとアリスさんから…

「ごらっ!!ダメじゃない碧!……彼女に心配を掛けたくないのは分かるけど……あなた、一歩間違つてたら死んでたのよ?」

すると、それを聞いたパルスイさんが焦った表情で幽香さんに問い詰める……

「ちよ、ちよつと待つてください幽香さん!それ……どういうことですか?!」

はあ……やっぱりこうなるよね……でも、もうばれたなら仕方ないか……

そうして幽香さんの口から、初めて僕が太陽の花に訪れ、そして、熱中症で倒れていた事を話された。

すると隣にいたパルスイさんが俯いて……

「っ、うう、っ……ぐすっ……!ひつく……っ……!怖かった……あっ……!怖かったよおっ……!」

え?!うそっ?!……なんで!?

「碧を失ったらっ……!もう二度と会えなくなるって思ったらっ……!うあああつ……!」

そっか……幽々子さんから言われてたな……自分の事も大切にとって……はあ……この辺はもつと気を付けないとな……!——でも

「心配かけてごめんね……。だけど……僕もずつとパルスイさんと過ごしたい……生きて幸せになりたいから」

そして、パルスイさんが泣き止んで、落ち着くまで。

何度も、何度も「大丈夫だから」と声を掛け、頭を撫で続けた……

「お見苦しいところを見せてしまい、すみませんでした……/ / /
恥ずかしそうに俯くパルスイさん……今回は、全面的に僕が悪いんだけど……

「いいのよパルスイちゃん?私達だつて、碧が居なくなつたらと思うと胸が張り裂けそうになるもの……」

「そうね……偶々幽香が見つけたから良かったもの……もつと自分を大切にしなさいよ?」

幽香姉さんとアリス姉さんからも言われる……

「ごめんなさい…返す言葉ありません…」

紫さんや幽々子さんとも違う感情…姉に怒られるってこんな感じなんだな…。

それからしばらくの間、四人で色んな話をした。

僕と出会った時の事やパルスイさんとの馴れ初めなど…話しててちよつと恥ずかしかつたけど、同時に嬉しくもあつた――

だってそうでしょ?…それだけパルスイさんとの思い出が増えたって事なんだから。

パルスイさんも二人と打ち解け…それぞれ、『幽香姉さん』と『アリス』と呼ぶようになった

(幽香姉さんはパルスイちゃん、アリス姉さんはパルスイ…と呼んでいた)

そんな話をしていると……――

「うん、碧も反省しているようだし…そうね…罰として、また一緒にお風呂に入って貰おうかしら?」「ちよ、ちよつと待って?!」あら?どうしたのかしらパルスイちゃん?」

そうだ…その事も忘れてた…というか忘れたかつた…。

「私の聞き間違いじゃなかったら…その…『また一緒にお風呂』…と聞こえたんですが…?」

ダークなオーラを漂わせるパルスイさん…、そして少し悪戯っぽい顔をした幽香姉さんとアリス姉さん…あ、これまずい(冷や汗)

「あら?碧だったら…私達と一緒に風呂に入った事も伝えてなかったのかしら?あんなに熱い時間を一緒に過ごしたのに…連れられないわねえ」

幽香姉さん?!熱い時間って僕の看病してた時だよ?!

「そ・れ・に…私達の裸も、まじまじと見てたし…碧のいけずさん♪」
あれは無理やりそつちを向かせたからだよね?!それにまじまじと見てきたのはアリス姉さんだよね?!

「……………みくどくろく?」

後ろから、凄まじい嫉妬のオーラが……うわあ…振り向きたくない…――すると幽香姉さんが…

「嫉妬してるパルスイちゃんも可愛いわね♪」「ふえっ?!ゆ、幽香姉さん／＼／」そ・れ・な・ら・く、今からみんなが入っちゃいませうか?」

幽香姉さん?!「いいわよ:／＼」パルスイさんも?!アリス姉さんは……あ、恍惚とした表情してる……またあの辱めを受けるのか……
「……あの……僕も……ですか?」「当然でしょ?（私とは入れないわけ?）」……ですよね……」

そんな訳で、再び幽香姉さんの家のお風呂場に……相変わらず広くて、景色もいいんだけど……

「——うう……タオルで隠してるけど、やっぱり落ち着かない……つていうか何でここに来たたらお風呂に入らされるんだらう……」

『碧、もう湯船に入ったかしら? 私達も入るわよ?』

すると、幽香姉さんの声がし——

「今回は“色々”と大丈夫みたいね♪湯加減はどうかしら?」

バスタオルに身を包んだ幽香姉さん——

「全く……前にじっくり見たんだから堂々としてなさいよ?」

と、小さなタオルで前を軽く隠しただけのアリス姉さん——もつと恥じらいを持ってください／＼

「こんな明るい時間に……しかもよそ様の家でお風呂に入るなんて……恥ずかしいわ／＼」

恥じらいながら入ってくるパルスイさん……なんだろう、いつもよりも色っぽい気がする……——すると幽香さんから……

「あら?二人とも何でそんなに照れてるのかしら?二人は全部見合せた仲なのでしょう?」「くくく?!」「あらあら、可愛いわねえ♪」

そうして湯船に浸かる前に女性陣が身体を洗い始めたんだけど

……

「あら?パルスイちゃん……胸の形が綺麗ねえ?大きさも良い感じだし……肌もすべすべ……うふふ♪誰の為に磨いてるのかしらね?」

「ちよっと?!幽香姉さん?!どこ触って……ひゃうん?!……くくく」

「私よりも大きい……妬ましいわね……もう少し大きくならないかし

ら…ブツブツ……」

アリス姉さん…それキャラが違うよ……。それから幽香姉さん、前のアリス姉さんみたいになってるよ？

「ちよつと碧！聞こえてるなら助けて…きやんっ?!」「ふふっ♪（こもこも）も敏感なのね♪」幽香姉さんく／＼／＼

聞こえてるから動けないんだよ?!

「むう……。碧がそのつもりなら…こっちにも考えがあるわよ？」

え？パルスイさん？何をするつもりなの？

「幽香姉さん！アリス！三人で碧の身体をピカピカに磨いてあげましょう♪」

え？……。嘘だよね……。？

「あら？それは良い考えね♪」

幽香姉さん?!

「彼女公認なら何の問題も無いわね…今度こそじっくり…ふふっ…♪」

アリス姉さん?!その発言は色々とアウトだよ?!

「さあ…碧?…。覚悟は出来たかしら?」

パルスイさん…?…?…?あなた彼女ですよね?…?…?なんでそんなに楽しそうなんですか…?」

「さ、流石に女性から洗って貰うのは色々と問題が…」「問答無用♪」ちよつと?!」

そのまま、幽香姉さんとパルスイさんに無理やり浴槽から引っぱり上げられ、椅子に文字通り置かれた…——

…そうだよ、忘れがちだけど二人とも妖怪だから力とか僕より断然強いんだっただ…。

「さて、じゃあどう洗いましょうか?幽香姉さん?」

「そうねえ…なら、右手をアリス、左手をパルスイちゃん…背中を私…でどうかしら?」

え?…本当に三人掛かりで?…いや、流石にまずいよ…?」

「あら?…てつきりパルスイに、背中を洗わせるのだと思っただけ?」

絶対に幽香姉さん、良からぬ事を考えてるよ……。

「ふふっ……この前あなたにされた事をしてみようと思つてね♪」

幽香姉さんがアリス姉さんにされた事……? ……え……? ……まさ

か……そんなバカなね(ムニユッ)……?!?!

この……恐ろしく柔らかくて温かい感触……

「じゃあ洗うわね♪……んしょ……んっ……思つてた以上に洗いにくいわねコレ……」

動くたびにフニフニと形を変えるそれは……

「ゆ、幽香姉さん?! な、何をやってるんですか!!」

「んっ? 何……つて? この前アリスからされた……こと? ……気持ち良かつたから……んっ……してあげてるのだけど……?」

「それは色々とまずいですから!?! お願いですから普通に洗つて下さい!」

そう言つて、タオルを渡すパルスィさん……——正直危なかった……いや、今でも十分に危ないんだけど……

「……助かつたよパルスィさん……つてパルスィさん? ……なんで腕に噛みついてきてるの……? ちよつと痛いんだけど……それに、歯形が付いちやう……」

そう、幽香姉さんにタオルを渡したパルスィさんは、何故か僕の腕に噛みついていた……これって……

「むぐぐ(なによ)」「あらあらパルスィちゃんたら、大丈夫よ取らないから♪」……ぶはっ?! そ、そんなんじゃないですから……// //

「ふふっ……本当に仲が良いわね♪ 仲直りもしたみたいで安心したわ♪ (元はと言えば姉さん達が……まあいいや……)」

それから、普通に洗つて貰い(前は流石に自分で洗つたけど)、四人で湯船に入った……ああ……死ぬほど恥ずかしかった……// //

「ところで、パルスィちゃんは碧の体質について何か知ってるかしら?」

「体質……ですか? ……えっと……魂の質……四魂の一つ幸魂の特性が強いつて事は聞いてますけど……?」

ああ…やっぱパルスイさんも知らなかったんだ……

「これは、この前碧にも話したんだけど……」

それから幽香姉さんは『拳体芳香』について話してくれた

「へえ…そんな体質があったんですね…。ああ、だから碧とくっ付いてると癒されるのかしら？」

え？…それは初耳なんだけど…？

「そうね…クチナシの匂いには、リラックス効果があるから…もしかしたら嗅覚の良い妖怪は、それで癒されてたかもしれないわね♪」

知らなかった……。それにパルスイさんもなんだか納得してるし

…「それに」…幽香姉さん？

「今こうして一緒のお風呂に入ってるだけでも、その匂いが感じられるでしょう？」

うそっ?!…そうなの?!

「そうね。前の時もそうだったけど…こうして改めて匂ってみるとすごい癒されるわね」

そう言いながらお湯をすくって匂うアリス姉さん。前も…つて…それってある意味…天然の入浴剤みたいなものかな…？

「でも…。その匂いがうつるくらい、二人はいつもくっ付いてるって事よね♪「ぶっ?!」え？私、何か変な事言ったかしら？」

「アリス…そういう事は分かっても言わないのがマナーよ？（きつきこっそり言っちゃったけど…）見てみなさい？二人のあの顔を…」

そう、僕とパルスイさんは傍目に見て分かるほど顔を真っ赤にして俯いている…だつてねえ？

“ そういう事” をしてるって言われてるみたいだし…／／／
……まあ、してるけど……

「ま、まあそれは置いといて！二人は…その、碧を見つけた時に何で助けようと思ったんですか？普通、こんなに良い匂いの人間なら…」

言葉を濁しながらパルスイさんが質問する……

「ああ…その辺も説明しておかないとね。そうね…正直、最初は確かに自分のモノにしたいと思ったわ…「っ?!」…でもね…それ以上にこの子を守ってあげたいと思ったの…。苦しむ彼を助けてあげたい…

そう、母性本能が刺激されたのよね…」

それを聞いたパルスィさんは何かを納得した様に…

「なるほど、それで“姉”なんですね。…その、感謝します」

それを見た幽香姉さんとアリス姉さんは…

「くすつ…いいのよ？それが私達の選択だから。それに、あなたの事も…守らせて貰うわ「幽香…姉さん…」…ふふつ、可愛い姉妹が増えるのは歓迎よ♪」

「私としても、対等に話せる友人が増えるのは嬉しいわ。力はパルスィの方が上だけど…それでも、私も碧のお姉ちゃんとして、あなたの友人として守らせて貰うわね♪」

「アリス…ありがとう…ぐすつ…」

感極まったパルスィ…こういう関係も羨ましいな…

それから、お風呂でゆっくりした後…今回は、別々に上がり再び居間でのんびりとした時間を過ごした。

「そうだわ、良かったら二人とも晩御飯を食べて行かないかしら？」

と幽香姉さんから提案される。そういえば幽香姉さんもアリス姉さんも洋食が得意なんだよね…折角だからお手伝いしてレシピを覚えたいな…

パルスィさんの方を見ると笑顔で頷いてくれた…よし。

「あの…幽香姉さん。「何かしら？」…その、良かったら僕にも手伝いをさせて貰っていいかな？」

「今日はお客様だからゆっくりしていいのよ？」

「えつと…実はね、幽香姉さんの作る洋食が美味しくて、簡単な物で良いからレシピを覚えたいな…つて思つて…むぐつ「んく、いい子ねく♪」んく！」

「あら…ぐめんなさい。つい嬉しくなっちゃつて♪そうね…なら今日は、簡単に作れる“ハヤシライス”なんてどうかしら？」

ハヤシライス…ふと思つたら食べたくなるんだよね。

カレーやシチューとは違うまるやかさと酸味…お肉に浸み込んだ味の奥深さ…ああ…考えただけでもお腹が減ってきた…。

「うん！それでお願い！幻想郷に来てから食べてなかつたから…とつ

のかを私はずっと語った……するとアリスから……

「くすっ♪ホント、パルスイったら碧の事になると饒舌になるのね。ちよつと羨ましいな……」

……羨ましい？

「私もね……そんな風に語れる人が、いつか現れたらいいなって思ってたね……それに、ちよつとだけど、碧の事も良いかもって思ってたしね……」

「っ?!やっぱりアリスも……?」「でもね」……?」

「さつきも言った通り……碧はあくまで家族……私の大切な弟……ずっと守ってあげたい存在なの……」

アリス……

「碧と出会って、日は浅いけど……私達は彼を家族と……弟と思い、守ることにした……。だから……パルスイ、あなたにはお願いしておきたいの。碧を……私達の大切な弟を幸せにしてあげて欲しいの……頼める立場じゃないっていうのは分かってる……けどねっ……んっ?!」

言葉を続けようとしたアリスの唇に指を立て、言葉を止めた……

「——付き合いの長さも確かに大切。だけど、幽香姉さんとアリスは碧の事を本当に大切に思ってる。だから、こちらからもお願い。姉として……碧と私が幸せになる為に……手を貸して頂戴」

そうして私はアリスと見詰め合い……二人で笑い合った……

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「なんだか……二人とも楽しそうだね……」

居間から聞こえる二人の笑い声……女同士……何か通じる事があつたのかな?

「ふふっ……そうね♪あ、後五分くらい煮込んだら味見をして、仕上げるわよ「分かりました」……多分……二人の話は……くすっ♪」

……?……幽香姉さんは何か知ってるのかな?

「どうしたの?幽香姉さん?」

「何でもないわ♪」??「まあ男子禁制のガールズトークって事で……ね?」

そう言われると、何も聞けないよ……——でも、本当に楽しそう
で何よりだ……

その夜は、幽香姉さんと作ったハヤシライスをみんなで食べ、色々
な話をした……——こんな幸せな日々を……これからも歩んで行き
たいな……

27話 夏風邪と女医さんのヒミツ

朝、目を覚ますと――

「ん……なんだろう……身体が……怠い？……疲れが溜まってるのかな……？」

それから、いつも通り朝食を作るために下に降りると……

「……あれ？藍さんは……あ、そういえば……昨日の夜から橙ちゃんと用事で出かけてたんだ……」

なら、さつさと二人分の朝食を用意してしまうか……まずは、お米を研いで……

それから、料理を作っていると……何だか身体がフラフラとする……

――まだ、寝ぼけてるのかな……？

そして、紫さんを起こし……珍しく二人だけの朝食を取り始めたら……

「……うん？……碧、今日のお味噌汁……少しだけ味が濃くないかしら？」
「あれ？そうですか？……お味噌の量を間違えたのかな……すみませんでした……」

おかしいな……いつも通り作ったはずなんだけど……

「……り、碧。聞こえてるの？」

「えっ……あ、ごめんなさい……少しボーっとしてたみたいです……」「ふむ……(びとっ)」「……っゆ、紫さん?!何を!？」

そう、目の前に在ったのは紫さんの顔。相変わらずまつ毛が長くて綺麗だな……

「ん……碧君……軽く熱があるみたいね「へっ?」……気が付いて無かったのかしら?今日は藍も居ないし……そうね、碧君……この後『永遠亭』に行くわよ」

永遠亭?……あ、そうか診療所をしてるって言ってたな。しかし……こうも早くにお世話になるなんて……

――それから準備を整えた紫さんと僕は、スキマを潜り『迷いの竹林』の奥にある『永遠亭』に向かった。

あ、知らなかったって顔をしてる……くすっ♪本当に子供みたいで可愛いわね……

「碧？あなた……朝晩きちんと布団を被って寝てるのかしら？それから何か身体を故意に冷やした記憶はある？」

すると、碧の顔には思い当たる事があったみたいで……

「はい……あります……。前に熱中症になって……」

はあ……典型的な夏風邪で決定ね……まったく、心配かけさせてくれるんだから……

「成程ね。それなら薬を処方してあげたら……家族に病人食を作って貰ってゆつくりと休むこと……いいわね？……って紫さん？どうかしたのですか？」

珍しく狼狽えた様子の紫さん……一体何が……？

「えつと……実はね……私の式の料理ができる子が……今日は居なくて……あと……私もその……料理が出来なくて……ごめんなさい……／＼／＼」

はあ……こういう事は賢者様でも抜けてるんですね……

「良いですよ……そちらの家族が戻るまでの間、うちで預らせて貰いましょう……その方が碧の体調改善指導もできますしね……あ、でも彼女さんには説明をした方が良いんじゃないですか？」

「そ、そうね、ありがとう永琳。二人が帰ってくるのは明日だから、それまで碧の事を頼めるかしら？」

本当に腹黒いな……——私がここで、彼を救わないという選択肢が無いのを知っていて聞いてきているのだから……なら、少しだけ反撃させて貰おうかしら？

「まったく……そもそも賢者様さえ料理が作れ（ぐふっ……）、看病が出来ればこんな事には（かはっ?!）……どうですか？自分でも覚える気になりましたか？」

「うう……確かに出来ない私が悪いのだけど……しくしく……。以後、善処します……碧……いつもごめんなさいね……。じゃあ私は家に戻るから……何かあったら陰陽玉で呼んでね」

そう言っただけ紫さんはそそくさとスキマへと消えていく……さて、私は「私の仕事」をしますか。



ひとまず解熱剤と抗生物質を飲まされた僕は、診療所の一角にあるベッドスペースで横になりながら、忙しそうに働く永琳さんをカーテン越しに見る……

——その顔は真剣そのもの……それはそうだ、幻想郷の人達の命を預かってるんだから……でも……

——何故、あの人は僕を守ってくれるんだろう？なぜ、あの人は患者の為にあそこまで必死になれるんだろう？

医者だから？……異変を起こしたから？……いや、違う気がする……前に紫さんが言ってた……”彼女達の罪”それと関係があるのか……と。

薬のせいかな眠気が襲いそのまま僕は夢へと誘われていった……



「ふう……午前中の診療はこんなものかしらね」

いつもであればもつとゆつたりとした診察をするのだが……今日だけは違う。

早く診察を済ませ、彼の看病をしたい……という本音があったからだ（それでも、キッチンと診察と処置はしたのよ？）

カーテンを開けてみると、すうーすうーと規則的に寝息を立てながら眠る碧の姿が……

「ふふっ……本当に可愛い寝顔ねえ……」

思い起こされるのはかつての記憶……

私……八意永琳は、薬師の一族である八意家きつての天才と言われていた。

月夜見（月人の代表）らと共に月へ移り住んだ後……月の都の創設者

として、その知識を買われて宮廷で働くようになった。

一応、外の世界では神様：八意思兼神（オモイカネ）とも呼ばれ信仰されていたみたいね。

そんな時：彼に出会った。

彼はごく普通の警備兵で、最初は歯牙にも止めていなかった――

ただ、ある事から私は彼の事を意識するようになったの――

“ 八意様、いつもお疲れ様です。差し入れを用意したので良ければ食べて下さい”

そういつて差し出してきたのは温かい桃饅頭……思わず笑ってしまっただわ――

だって、今まで私に取り入ろうとした月人は様々な高級品や趣向品を持ってきたのだけど……――桃饅頭を持ってきた人は後にも先にも彼が初めてだったの……

あの時食べた桃饅頭……何周期生きてきた今なお忘れられないわ……――

それ以降、私と彼は良く会話をするようになったの。彼の優しき、思いやりの強さ……私と彼が惹かれ合うのに、そう時間は掛からなかったわ……

知識は人一倍ある私……でもその反面、常識が少し欠けていた事を、よく彼にからかわれていたのを覚えている。

でも、そんな時……とある事件が起きたの……それが『蓬萊の薬事件』『蓬萊の薬』……それは禁断の薬……飲んだ者は老いる事も死ぬ事もなくなる。

そう……たとえば身体を消し去られても、魂や細胞の一つが残っていれば瞬時に再生してしまう……人理を冒した薬……

その薬を……私は作ってしまった。私の大切な教え子……『蓬萊山輝夜』に依頼されて……

あの時輝夜は地上に興味を持っていた。停滞した今の月を出たかったのでしょうね……

案の定…作った薬を飲み…『蓬萊人』となった輝夜は、罪人となり
…地上へと流刑にされた

(地上は不浄に満ちており、そこに流刑にされることは…月人から見
たら死ぬよりも辛い罪とされていた)

ただ、輝夜の誤算は今の姿ではなく、赤子の姿にされて地上へと落
とされた事だった。

力がある今の状態ならつゆ知らず…赤子にまで戻されたら、文字通
り何もできなくなる…。

私は焦った…そして、彼に相談をしたが…結果は何も出来ないとの
事だった…

薬を作ったのは私だから、私にも罪があるのでは？とも問いただし
たが…

『作る事は罪ではない。それに、そなたの知識は手放すには惜しい』
以来、私は月の上層部から外れた。文字通り嫌気が差して…。

そして、そんな私の事を、彼は止めなかった…彼との距離も…その
まま離れていった…。

……—今思えば…あれも彼なりの優しさだったのかしらね…？

私はそれから、遠い親族に当たる『綿月豊姫』とその妹『依姫』の
教師となり、様々な事を教える事にした。

二人はかなりの才能を有しており…このまま育てば、月の有力者に
なる事は間違いないでしょうね…

そして、そんな日々を送っていたある日…とある一報が私の所に来
た。

『蓬萊山輝夜の刑期が終わる。後日、地上へと使いを出すことにする』
—生きていてくれた！私の初めての教え子…大切な子供…。

これを聞いた私はすぐさま、使いへと志願したの…そこには彼の姿
もあつたわ。

…久しぶりに見る彼の優しげな顔…—気まづくて話しかけられ
なかつた…

これが最後の逢瀬になるのだと知らずにね……

地上へと降りた私達は輝夜の元へと向かった…。

「永琳?!永琳なのね…会いたかったわ…ごめんなさい…私の我儘で…あなたに辛い思いをさせてしまつて…」

こんな輝夜は初めて…いや、自分が地上へと落とされる際に、私の顔をこんな表情で見ていたわね……

「いいのよ…あなたさえ無事だったなら…さあ迎えも来ている…月へと帰りましょう?」

しかし、輝夜の顔には陰りが見られた…輝夜…あなたまさか…?

「永琳……私はこのまま地上に残ります。ただし…この都から出て、別の地…誰も知らない土地にこうと思うの…そうすれば、ジジ様にも、ババ様にも迷惑が掛からないから……」

その眼に見られた決意…ああ…もう私じゃこの子を止める事はできないのね……

「八意様……そろそろ月へと帰る時間にごさいます…」

そう恭しく言いながら、私の元に来たのは…彼だった…。

そんな彼に私は……

「xxxx…ごめんなさい…。今からあなたには…辛い事をさせてしまつわ…でも、もし…私を信じてくれるなら…手を貸してくれないかしら…?」

私は決めた……しがらみのある月にはもう戻らない…。今度こそ

…この子を守つて見せる!…と。

彼なら同意してくれるかもしれない…しかし、それは裏切られた…。

「八意様……それは月へ戻らず…この地上に逃亡されるといふことですか…。分かりました…ですが、私はあくまでも使者…あなたが裏切るというのなら…この地で…輝夜様もろとも倒させて頂きます!」

そうして、彼が輝夜に矢を向ける…。その瞬間…私の身体は動いていた…。

「かふっ……?!」

撃ちたくなかった…出来れば彼も一緒に逃げて欲しかった…。でも、それは叶

わなかった…輝夜に向けられた矢…それを放たせない為に……—

——愛おしい者を…この手で撃った……。

正直…彼以外の使者には、特に何の興味も無かった私は、ただ無慈悲に…殺戮を繰り返した…。

「永……琳……う？」

流星の輝夜も、この時の私の残酷な表情には驚いたようだ……。でも、私は守ると決めた。それこそ…修羅になろうとも…。

さて、これで粗方片付けた…後は…「…永……琳…」…？この声は…？

「永…琳…」

そこには最初に撃ったはずの彼が…まさか、致命傷を避けていた?! いけな

い! このまま彼が生き残れば…追手が……—

しかし、そんな私の心とは裏腹に…彼はにっこりと笑ったのだ…今にも死にそうな状態にもかかわらず……。

「永…琳…。優しい、君が決めたことだ…ただ、後悔だけは…しないで…おくれ?…それから…泣かないで…ね?」

え…?…頬に触れると…そこにはボロボロと涙を流す私が居た…。なんで?…なんで泣いてるの?

「辛い思いをさせて…ゴフツ?!…本当にごめんね…。本当は君と、もつと一緒に居たかった……。ああ…今日はこんなにも月が綺麗だ…こんな日に…君に…殺されて…。あり…がとう…。それと……。」

大切な人を殺して…辛くない訳がない……—

「うあああ…ああ、あ……」

——声にならない声…。すぐにでも彼に駆け寄りたかった。でも

……—

「っ?!これは、何が起こった?!……使者たちが……。ぬっ!貴様……八意殿……裏切ったのか?!」

見回りを行っていた他の月人達がやってくる……。

そうだ……私は決めたんだ……輝夜を守ると……。私の為に……殺されてくれた彼の意志を守るのだと!

それから幾星霜……

月日は流れ、私と輝夜は幻想郷へと辿り着いた。輝夜の為に……彼の為に……私の為に……託された思いを守るために……

「ふう……柄にもなく……昔の事を思い出してしまったわね……。さて、彼の……碧の為に御粥でも作りましょうかね♪」

それから私は生薬などを使った御粥を作り、碧を起こしに行った……。

「碧、そろそろお昼の時間よ?起きなさい?」

すると彼は寝ぼけているのか……。

「ん……。まだ、眠たい……」

と言って身体を振じらせる……もう……手のかかる子ね……

「こーら、起きないと悪戯しちゃうわよ?」

ちよつとからかったつもりで言ったのだけど……。

「……いいよ……むにゃ……」

心臓を撃ち抜かれたような衝撃……何、この子……可愛すぎる……。

それに汗をかいたせいか、体から匂いが……これって、クチナシの香……かしら?ああ……そういう体質なのね……ますます可愛い……♡

私のリミッターが振り切れようとした瞬間、碧はその眼をゆつくりと開けた……

……あ、危なかったわ……

「……ん……あれ?……ここは……?あ、そうか……永琳さんの診療所の……」

「起きたかしら?少しは体調は良くなった?食べれるようなら御粥を作ったから……どう?」

すると丁度良く、彼のお腹からグーッと可愛らしい音が鳴り……

「あう……すみません…頂きます…／＼／＼」

くくく!?……今だけでいいから月の技術でこのシーンの録画を出
来ないかしら…?…つとそうじゃなくて!

「さあ、冷めないうちに食べなさい?無理はしなくていいから…あ、そ
うだわ♪」

私はレンゲを持ち御粥を一すくいし……

「ふーっふーっ…はい、あーん」

一回やってみたかったのよね♪……少し照れるけど……嫌じゃな
いわね／＼／

すると、彼も恥ずかしいのか…最初は少し戸惑っていたが…意を決
して…

「もぐっ……んっ…温かくって……とつても美味しいです♪」

幸せそうな顔でこちらに笑顔を向けてくれた……ああ…やっぱり
この笑顔…この時間…もつと彼と過ごしたい…。

それから再び薬を飲ませ、布団で彼を眠らせた後…私は午後の診療
へと移った。

夕方も過ぎ…彼に御夕食を食べさせた私は…とあることを考えた。

「今日は一日…すみませんでした…」

とシユンとして謝ってくる碧……

「いいのよ?あなたはただの人間……病気になったらきついし、心細
くもなる…それくらいは分かるから……」

「ありがとうございます…あ、そういえばそろそろ紫さんが…つて…
え?!」

何かを言いかけた彼を布団に押し倒し……

「今日一日でだいぶ汗も掻いたでしょう?今日はお風呂もやめといた
方がいいから、代わりに私が拭いてあげるわね♪」

そう、これで口実をつけて堂々と碧の身体に、直接触れる事ができ
る……そう

思っただけで私は…うん…／＼／

「あ、あの?!自分ですみますから?!」

そう言われてとても心が温かくなつた……ああ……今度は言おうかしら？” 毎日味噌汁を作らせて下さい”と？

「良いのよ……それに、あなたが悪くなつたら……悲しむ人も沢山いるのだから……それを忘れないでね？」

「はい……それじゃあ……またお会いしましょう永琳さん」

そうしてスキマの中に消えていく彼……

かつての想い人に似た彼……全くの別人と分かつていても……その魂の在り方……優しさは彼と同じだ……

碧を通して見ている彼との記憶……。でも、それは碧に失礼だ……。それに、あの日決めた事、彼に……最期に言われた事……

——”もし、君が惚れる人が現れたなら……私の事は忘れ、その人を大切にしてあげておくれ？”

「まったく……最後の最後まで見透かされてたけど……ふふっ♪……あなた……の事は

忘れない……でも、私は私なりの幸せを掴んで見せるわ……」

彼の思い出もまた彼女を形作る一つ……ならばその想いと一緒に……これからの人生を進んで行く。

「毎日……味噌汁じゃなくて、私をあなたの実験体にしてください？……とかでも良かったのかしら？……それはそれで……いいわね……／＼／＼」
——この天才……どれだけ時間が経とうとも、常識から逸脱しているのであった。

28話 夏の終わりと夜空の花

事の切っ掛けは数日前に遡る……

「あ、先輩！それにパルスイさん！今日もお二人でデートですか？…
妬けちやいますねえ」

そうして目の前の少女…僕の後輩、早苗ちゃんがいつものようにか
らかつてくる。

「いや、そうしたい所なんだけど…今日はちよつと天魔様に用事が
あつてね」

すると不思議そうな顔でこちらを向く早苗ちゃん……まあそうだ
よね。

「珍しいですねえ？差支えなければ、お伺いしても？」

別に隠すことじゃないんだけどね…

「えつと、夏もそろそろ終わるから…この夏にパルスイさんと一緒に
撮った写真の現像をしてもらおうと思つてね…ね？パルスイさん？」
すると少し照れた表情で……

「ええそうね。それに、こういう写真を残すのつて初めてだから…
ちよつと楽しみなのよ…／＼／＼」

もう…相変わらず可愛いんだから…。すると早苗ちゃんが少し呆
れた表情で……

「…あゝ、その…ごちそうさまです…(ホント…羨ましいなあ…)。あ、
夏の終わりと言えは…そうでした！」

…?!…突然大声を出す早苗ちゃんに少し驚いてしまった…どうし
たんだろう？

「あのですね！先輩達…今週末は空いてますか？」

パルスイさんと目を合わせて確認する…しかし彼女も僕も、首を
横に振るだけ…。

余程何もない限り、週末はいつもパルスイさんと旧都で、ご飯を食
べてるからね……—そんな僕達の反応を見た早苗ちゃんが—

「でしたら先輩！守矢神社で納涼夏祭りをするんですけど…良ければ

来ませんか？」

へえ：幻想郷にも夏祭りがあつたんだ……というか夏祭り自体、ここ数年行つた事が無いから……

「……いいんじゃないかしら？私も旧都のお祭り事なら見た事あるけど、地上のお祭りは参加したことが無かつたから……どう？」

その顔には、少しだけ楽しそうな顔が……もう、答えは決まつてるようなものじゃないか……。

「パルスイさん……なら参加しようか？……えつと早苗ちゃん、祭りはいつ頃始まるの？」

すると嬉しそうに……

「——ありがとうございます……えつと、そうですね。夕方には屋台も出てますし……日も暮れたら、奉納の舞もしますので……それまでにきて頂ければいいですよ？」

じゃあ少し早めに来ようかな？……後、ちよつと気になる言葉が聞こえたんだけど……

「奉納の舞？」

「ええ！毎年神社で行う秋に向けて……豊作を祈つて奉納の舞を行うんです。その舞台で……その私が舞うので……先輩に、見て欲しいなつて……」

早苗ちゃん……そんな役割もしてたんだ……。まあ巫女さんだから……それもあるのかな？

「うん、楽しみにしとくよ。「やったー！」……えつと、じゃあ少し早めに向かう事にするから、また当日に会おうね」

「ねえ、碧？」

「うん？どうしたのパルスイさん？」

無事、天魔様との用事を済ませた僕達は、現在八雲家でお茶を飲んでる。

「あの……聞きたいのだけど……地上のお祭りって、相応の服装があるのかしら？」

……服装…夏祭りだと…女性は浴衣で男性は甚平…かな？

「うーん、外の世界だと浴衣と甚平だったけど…幻想郷はどのようなのかな？」

すると隣でくつろいでいた紫さんが……

「——あら？浴衣ならあるわよ？折角の初めてのお祭りなら、キチンとした身なりで行きなさい？……それの方がより一層良い思い出になるわよ♪」

すると、パルスイさんが食いつき気味に……

「紫さん！是非、浴衣を貸して下さい！できれば碧とお揃いのやつを！！」

おお……あの紫さんが少し引いてる……ん？……ちよつと待って、今何て言った？……お揃い？

「…あの…聞き間違いでしょうか…お揃いつて…？」

「あら？碧は私とお揃いは嫌なの……そんな……ひどいわ…」

わざとらしく、およよ……といった感じの姿勢になるパルスイさん……ああ……これ絶対遊ばれてる……。そうだ、紫さんは?!

「えつと……ごめんなさい…、男性用の浴衣は無いのよ……ぷくく……でも、碧なら女性用でも問題なく似合うわよ……ぷふっ……♪」

楽しそうですねえ…紫さん……。でも、パルスイさんにも楽しんでもらいたいし……はあ…仕方がないか…。

「じゃあそれでいいのでお願いします…。あ、でも色は「私は緑色が好きだから」…緑色でお願いします…。「はいはい…くすっ♪」…まあ緑ならいいかな？」

そしてお祭り当日……

守矢神社に行く前に、八雲家で着付けをしている……のだが。

「すみません藍さん…まさか着付けがここまで難しいものだったなんて…」

浴衣を着て帯を適当に巻くだけ…と思っていた僕は、着付け開始

早々に藍さんからダメ出しされ、今はキチンと着付けをして貰っている。

「まあ、普段から着物を着ない者からしたら大変な作業だからな……つと……ちよつとこの帯を持っていてくれ……」

「あ、はい……。それにしても藍さん……手馴れてますねえ……」

すると、少し懐かしそうな顔をした藍さんは……

「まあ、昔はよく着ていたからな……。さて、これを締めて……。よし、出来たぞ」

すると、姿鏡をこちらに向けてくる……。うん、我ながら……。微妙に様になつてるのが悲しいね……。

薄い緑色をベースに白い芍薬（しゃくやく）の花をあしらった浴衣……そして、帯は青い無地の物を使用している……少しは男らしく……見えないね……。

そして髪も、いつもは降ろして二つに纏めている髪を、後ろで一つに括つて、左肩から胸に掛けて垂らしている。

うわ……これ色々と恥ずかしいな……。

「うわあ！碧お兄ちゃん、すつごい似合つてるよ！」

橙ちゃんに褒められるけど……。うーん……。どうせなら男性用の浴衣で褒められたかったなあ……。

「ありがとね。橙ちゃんはお祭りには行かないの？」

すると、楽しそうな顔で……

「ううん、今日は寺小屋のみんなと一緒に行くんだ。でも、お兄ちゃん達とも会えたら嬉しいな♪」

そっか、橙ちゃんは日中は寺小屋に行つてるから……

「そうだね、でも友達は大切にするんだよ？」「うん！……いい子だね……。そう言えばそろそろ時間になるけど……『み、碧……』……？」

パルスイさんの声……だけどそれは襖の外から……。どうしたんだろう？

「パルスイさん？……どうしたの？……ひよつとしてまだ準備が出来てないとか？」

『ち、違うわよ……ええい！女は度胸！行くしかないわ！』

そうして襖を開けて入ってくるパルスイさん……。

その姿は、いつもの姿と異なり……

僕の着ている浴衣と同じ色……だけどあしらわれた紋様は薄紅の牡丹（ぼたん）の花……それと同じくピンクの帯……嫌味の無い色合いは同性ですら憧れるだろう——

そして髪も浴衣に合わせ、後ろで纏めアップにし……僕の渡した桔梗の花の簪を付けてくれている……やばい……嬉しすぎて……——

「な、何よ？……何とか言っよう……」

はっ?!一瞬意識が飛んでた気がする……——

「ご、ごめんね……思わず見惚れちゃって……その言葉に出来ないくらい……似合ってるよ……それから、簪を付けてくれて……ありがとう／＼」

「~~~~／／／／……そ、そういう碧も……うん、似合い過ぎてなんだか冷静になれたわ……」

それって……ちよつと泣きたい……まあ身長もパルスイさんの方が高いし……仕方ないんだけどね……。

「そ、それにしても……この浴衣……本当に素敵な柄ね……紫さんに感謝しなきゃ」

柄……ふと思っただけど……——

「あのさ、女性の浴衣の柄ってどういう意味があるの？」

「ふむ……碧もまだまだ女心が分かってないなあ」

すると横に居た藍さんが教えてくれる。いや、これって女心なの？「そうだな、例えば幽々子様など、いつも蝶の紋様をあしらった着物を着ているだろう？あれには『長寿』『復活』『変化』それと『移り気』という意味が込められているんだ」

何て言うか……とっても幽々子さんらしいなあ……——

「そして、パルスイと碧の浴衣にあしらわれているのは、牡丹と芍薬……この二つは『立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花』と言う言

葉があるくらい女性の象徴として描かれる花なんだ。その意味は二つとも『幸福』……今の二人に、これほどまでに会う絵柄はないだろう?」

そう言われるとなんだか照れる……でも、そこまで考えて用意してくれたなら…嬉しいな／＼

隣を見るとパルスイさんも同様に照れた…でも嬉しそうな表情を浮かべていた。

「さあ、そろそろ祭りも始まる。今日は私が二人を転移札で送るから着いて来るんだ」

「あ、はい「お願いします」」

そうして僕とパルスイさんは藍さんに着いて札を使い移動した。

「さて、その階段を登れば境内だ。帰りは好きな時間に帰ってくると良い…パルスイも今日はうちに泊まっていけばいいさ」

そうして、その場を後にしようとする藍さんに……

「あの…色々ありがとうございます!」

と感謝の言葉を伝えるパルスイさん…すると――

「ふっ…何、家族が幸せな時間を過ごせるんだ…。二人とも…ゆつくり楽しんでおいで?」

と言つて転移していった…本当に八雲家の人達には頭が上がりないな……

「さて、じゃあ初の夏祭り…行ってみようか?」

「うん…思いつきり楽しませよう♪」

そう言つて二人は手を繋ぎ…境内へと向かった……

境内は思った以上に屋台で賑わっており、色々な場所から食べ物の良い匂いが漂ってきた……そういえば何も食べてないからお腹が…

ぐうぐう……うん減ってるね…僕とパルスイさん…二人のお腹が同時に鳴る……

「えつと…とりあえず…まずは何か食べようか？」

少し照れた表情で……

「くくく／＼／＼……そ、そうね…こんなにも屋台が沢山あるから、迷っちゃうわね／＼／＼」

「じ、じゃあさ。定番所から行ってみようか？まずはほら？たこ焼き屋さん！」

「きゃっ?!ちよつと碧?!そんなに手を引つ張らないでよ…クスツ♪…ほんと、まだまだお子様なんだから……」

お子様でもいいよ!だって今はこの屋台を、一刻も早く制覇したいんだからね!

そうして僕達の屋台回りが始まったんだけど……

「らっしやい!おや、浴衣美人が二人とは…今日はついてるねえ。たこ焼き…サービスしとくよ!」

「あ、ありがとうございます……(自分の姿を忘れてた……)」

「クスツ♪気にしなくてもいいのよ?…あそこに食事スペースがあるわね。行きましょ?」

パルスイさんに手を引かれて行く……美人て……

「ほら、元気出しなさいよ?…はい、あーんして?」

「う…流石に人前じゃ…あーん…あーん…はふっ…あっつ……でも…んぐっ…美味しい!」

「良かったわ♪ならもう一個…あーん」

「あーん……んむんむ…うん。ならお返し…はい、あーんして?」
するとパルスイさんは照れた顔で……

「わ、私は良いわよ／＼／＼「二人で楽しむんでしょ?はい、あーん…いや、でも…あーん」……あーん…んっ…はふっ…あふふいふあ……んっ…でも…美味しいわ…」

そうして、全てのたこ焼きを二人で食べさせ合った…うん…こういうのも…祭りの醍醐味なのかな?

別の店で――

「へえ…汁物もあるんだ…『牛のモツ煮込み』…ゴクツ…「良いわよ?」
…ホント!?じゃあ行くっ!」

「いらっしやいませ…ってあら?パルスイさんと碧さんではないですか?」

そこに居たのは料亭『翡翠』の女将さん…あれ…何で?

「あら?女将さんじゃないですか。どうしてこんな所で?」

パルスイさんも同様に思ったようで、女将さんに聞いていた。

「ええ、地底と地上の親交も回復したので、今年から参加させて貰うことにしたんですよ。定番のお祭りの食べ物は多いので、うちでは汁物にしたんです。良ければいかがですか?」

成程…そこまで考えてたんだ…凄いな、女将さん…。

「是非頂きます…えつとパルスイさんも、いいかな?」

「もちろん!女将さんの作るモツ煮込みなんて…楽しみだわ♪」

笑顔で応えてくれるパルスイさん…。

「ありがとうございます。では…ふっ♪お二人には少しだけサービ
スさせて頂きますね…どうぞ?お熱いので火傷には気を付けて下
さいね?」

「女将さん…ありがとうございます!」

「どういたしまして…では、引き続きお祭りを楽しんでくださいね♪」

そうして、丁寧にお辞儀をする女将さんの見送りを受け、再び食事
スペースへ…。

「じゃあ改めて…いただきます!」「いただきます!」

そうして食べ始めたんだけど…。

「あふっ…んっ…うわっ…お肉がほろっとしてて、すごく美味しいよ
これ!」

対面で食べてたパルスイさんも…

「んっ…そうね。お肉はトロツとしてるのに…全然重たくない…それ
でいて味付けもしっかりしてて、食べごたえもあるわ…こんなに美味
しい食べ物屋台で食べれるなんて…ホント、お祭りさまさまね
♪」

それから僕達は、辺りが暗くなるまで色んな食べ物を食べ歩いた……
出店の食べ物って……こんなに美味しかったんだなあ……

「あら？碧、何か始まるみたいよ？」

そんなパルスイさんの声で目を向けると……本殿の方に人が集まってる……あ、もしかして早苗ちゃんが言ってた奉納の舞かな？

「見に行くわよね？いえ、きちんと見届けないとね……私達を折角招待してくれたんですから……ね？」

そして、僕達は人垣の集まる本殿へと足を向けた。そしてそこに居たのは……

「綺麗……」

「ええ……本当に……」

いつもの白と青の巫女服ではなく……青を基調として、赤、緑、黄……様々な色の装飾がされ、巫女服というよりも姫が着ている十二単のよきな衣装。

片方を括った髪も、全て降ろしており……篝火に反射し、照らされるその姿は、彼女の幻想的な雰囲気さらに高めていた……

そうして、舞が始まる……

最初は静かに……

徐々に力強く……

緩急を付けながら……

流れる様に舞い続ける……

どれくらいの間時間が流れたのか……その幻想的な舞は終わりを告げ、観客からは拍手の嵐が巻き起こる……

——本当にすごい……舞の意味や形は分からない……でも、そんな僕でさえ圧倒された……これが巫女として『現人神』としての早苗ちゃんの顔……

舞を終えた早苗ちゃんに声を掛けたかったが、忙しそうだったので後日、改めて感想を伝える事にした。

そして、今僕達は……

「静かね……」

「うん……本当に……」

神社から少し離れた場所にある休憩場所……夜空に浮かぶ星が煌めき……さつきまでであった祭りの喧騒を忘れさせてくれる……

「今日は楽しかった？」

「ええ……あなたと初めて回ったお祭り……楽しくないわけがないわよ」

そう言ってくれると嬉しい。

「僕も……今日はパルスイさんと一緒に祭りに来れて……本当に幸せだよ……」

「ねえ……碧……」

何かを言おうとしたパルスイさん……すると、どこからともなく口笛じみた乾いた音が……これって……？

次の瞬間……それは、耳を聳する炸裂の音と共に、夢のように儚く……一瞬の花を、夜空へと咲き誇らせ。空の中に消えていった……

「花……火……？」

「これが……花火……なの……？」

「パルスイさん……花火を見るのは初めて？」

そうしている間にもまた一つ一つ……次々と咲き誇る夜空の花々……

「いえ……旧都にも、花火はあるのだけど……こんなに綺麗な花火……初めて見たわ……」

「そっか……僕も……久しぶりに見たけど……やっぱり綺麗だね……」

打ち上がる花火……その一滴一滴が息を呑むほど煌いて、大輪の雫はたちまち消えていく……——ああ……なんて綺麗な光景なんだ

「ねえ……碧……」

すると花火を見ながら、パルスイさんがこちらに寄りかかってくる

……

「うん。どうしたの？」

なんとなく……伝えてきたい事は分かる……。でも、それを直接聞き

たい。

「私ね…今までずっと…地底で暮らしていくんだって思ってたの…でも、碧が来てくれた…私の世界を広げてくれた…」

そういつて頭を肩に乗せてくる…——

「ありがとう…それと、これからよろしくね…♪…んっ…」

——こちらこそ…よろしくね…パルスィさん…

そして、乱れ咲く…夜空の花の中…二人の影は一つとなった…——

——光の花に照らされる二人の顔は、花火が終わっても繋がった

まま…——

——パルスィさんとの、幻想郷で過ごした初めての夏の思い出…嬉しくて、とつても幸せな時間になった

29話 スキマ話〜橙の一日〜

おはようございます！橙です！

今日はわたしの一日を教えたいと思います！

まず、私の朝は藍さまに起こされるところから始まります……—

「ほら、橙。朝だぞ、起きないか」

主に起こされる式神つてダメだよね…でも、どうしても朝は弱くて

…

「むにゃ……うーん…藍しやまあ…眠たいよう……」

「ち、橙……♡」

そんなハイテンションな藍さまに抱きつかれ、わたしはいつも目を覚まします。うれしいけど…ちよつとだけ恥ずかしいな／／

目を覚ました私は、家族と一緒に朝食を食べるために、居間へと降りて行きます。

「ん……眠たいわ……」

隣にいるのは…わたし以上に朝に弱く、今もスキマの上に乗るふよふよと移動してるのは…藍さまの主、紫様です。

紫様は幻想郷の設立者の一人で、『賢者』とも呼ばれる大妖怪の一人です……—わたしも早く一人前の妖怪になりたいなあ。

降りてきた今の卓上には所狭しと並べられた朝食が……ぐー

……／／／

だってどれも、すつごく美味しそうなんだもん！

炊きたての白いご飯に具沢山なお味噌汁——

生卵に納豆…そして、わたしが一番大好きな…

「はい、橙ちゃん。鮭の塩焼き…一番大きなやつをどうぞ？」

そういってお魚を渡してくれたのは、大神碧お兄ちゃん。

笑顔が素敵な、わたしの自慢の優しいお兄ちゃんだ。

「ありがとう！碧お兄ちゃん！」

そしたら、とつても嬉しそうな顔で……

「どういたしまして…沢山食べて大きくなるんだよ？」

って言うてくれたの！……でも、私…これ以上大きくなれるのかな？……胸とか身長とか小っちゃいし……。

——紫様や藍さま…パルスィお姉ちゃんみたいにナイスバディな大人になれるとうれしいな♪

それからみんなで手を合わせて、朝食を食べ始める、まずは鮭の塩焼きから……

「うん！お兄ちゃんの焼いてくれたお魚！とつても美味しいよ！橙ね、これ一番好きなの！」

すると、お兄ちゃんから……

「そっか♪橙ちゃんから、そう言うて貰えると嬉しいな。作った甲斐があるよ」

お兄ちゃんは幻想郷に来るまで、あまり料理をしてなかったみたいなの…それが今じゃ藍さまと同じくらい美味しい料理を作れるなんて…ほんと、すごいなあ…

……わたしとお兄ちゃんが出会ったのは寒い冬の日だったの。

その日、私はひよんなことから外の世界に出てしまったんだ。

人の姿だと目立つから、猫の姿になって帰る方法を探してたんだけど……

——フシャーツ!!

野良猫の群れに囲まれ足にケガをしてしまったの……。

何とか逃げ出すことが出来ただけど…でも…安心した瞬間…

轟音を上げわたしに迫ってくる大きな車……

いつもなら簡単に逃げられたんだけど、ケガをして…しかも逃げられ

たことに安心していたわたしは、その場から動けなかったの…

ああ…わたし…こんな所で死ぬんだ…

そう思ったわたしを、自分の身を挺して庇ってくれたのが碧お兄ちゃんだったの！

一瞬何が起こったのか分からなかったけど、わたし…助かったんだ

……

「大丈夫？興奮しないで…って足を怪我してるじゃないか?!…ちよつとごめん？このまま家で治療させて貰うから」

それからわたしはお兄ちゃんの家に入れていかれたんだけど…事故の恐怖と帰れないかもしれない恐怖…そんなわたしはずっと暴れていたの…

……—その時は気が付かなかったけど…暴れて爪を立てていたせいで、お兄ちゃんに一杯傷を付けちゃった…

それでも、わたしの治療をするためにお兄ちゃんは私を抱き締め、帽子の上から頭を優しく撫でくれたの…—

“あつたかい…それに、なんて優しい撫で方をするんだろう…”
その温もりに安心したわたしは、謝罪の意味を込めてお兄ちゃんの傷を舐めてあげたの…ごめんねお兄ちゃん…

手当の終わったわたしは餌をもらい、それを必死で食べたの…ずっと何も食べてなかったから…ホントにうれしかった…

それから夜も遅いので、わたしはお兄ちゃんに撫でられながら眠ったの……そしたら夜中に…

“…えん……橙!”

この声…紫様…?

「にやう（紫様、迎えに来てくれたんですね!）」

すると暗闇に浮かぶスキマから…

「しーっ…彼を起こしちゃうわよ?…でも、無事で良かったわ…橙が急にマヨヒガから居なくなつて…必死に探したんだけど…まさか外の世界に出ていたなんてね…さ、幻想郷に…私達の家に帰りましよう?」

やっと帰れるんだ……でも……

「にゃあ……」

私は紫様に話をしたの……

このお兄ちゃんに助けて貰ったこと——

傷つきながら手当して貰ったこと——

ご飯を食べさせて貰ったこと——

そして……このお兄ちゃんに何か恩返しをしたいという事を。

ダメ……かな……?

すると紫様はお兄ちゃんのことをじつと見て……?何か驚いてる

……?

「……橙……この人間はね……このままだと……幻想になってしまうわ」

???……どういふことだろう???

「簡単に言うとなね……彼はこのままでは、この世界から消えて……幻想郷に来てしまうってことよ?」

幻想郷に?……迷い込むとかじゃなくて……文字通り……忘れ去られて……?

こんなに優しいお兄ちゃんが……?そんなのは嫌だ!?

「にゃうーにゃにゃ!」

「分かってるわ。私の大切な家族を助けてくれたんですもの……この人の事は、私に任せて頂戴……ね?」

わたしには何も出来ない……でも、もしお兄ちゃんが幻想郷に来たら……頑張って恩返しをしよう!

それから紫様に連れられたわたしは、幻想郷へと帰っていきました。

これがお兄ちゃんとの出会い……

私はまだ、何もお兄ちゃんに返せて無いけど……でもいつかきつと、わたしなりに恩返しをするんだ!

「さて、準備は出来たか橙？」

「はい！今日もがんばって勉強してきます！」

そう：朝食を終えた私が向かうのは、人里にある寺子屋。

寺子屋では人間：妖怪関係なくみんなが楽しく勉強をしたり遊んだりしている。

わたしは紫様が用意してくれた：人里近くに繋がるスキマに入りそのまま人里へ向かう：――

すると後ろから：――

「あ、橙ちゃんだ！おーい！」

「ま、待ってよチルノちゃん！早いよ！」

と聞こえてきたので振り返ると……

「おはよー！今日も早いなー！」

氷の羽を持つ女の子：氷妖精の『チルノ』ちゃん――その後ろから、少し遅れて：――

「はあ：はあ……。おはよう、橙ちゃん」

チルノちゃんの隣に来たのは、透き通った羽と緑色の髪の女の子：

『大妖精』の大ちゃん：――二人とも仲良しで、いつも一緒にいるの。

「おはよう！今日も二人とも仲良しだね♪」

「おう！あたいと大ちゃんは最強に仲がいいのさ！」

「もう：チルノちゃんたら：／／／」

そうして三人で話しながら道を歩いていると……あ、あれって――

「お！ミステイアとリグル！それにあの黒いのはルーミアか！おはよー！」

再びチルノちゃんは前方へ走っていく：あ、大ちゃんも付いていった

「ん？あ、チルノちゃん達だ。おはよ〜」

「おはよう。相変わらずチルノちゃんは元気だね」

「ん〜：眠たいのだ〜：」

チルノちゃんが見つけたのは、わたし達と同じ妖怪で――

綺麗な声とピンク色の髪をした、少し大人びた雰囲気の夜雀ミスティアちゃん。

緑の髪をショートカットにしたボーイッシュな女の子、妖蟲リグルちゃん。

そして、ぷかぷかと浮く黒い球体の中で縮こまっているのが、宵闇妖怪のルーミアちゃんだ。

ミスティアちゃんとリグルちゃんは、昼はわたし達と一緒に寺子屋に通い、夜は八目鰻の屋台を出してるの……二人ともすごいなあ。

ルーミアちゃんは霊夢さんに言われて寺子屋に通ってるんだって。夜は大人の姿になるみたいだけど、いつも博麗神社で過ごしているから特に人を襲うこともないみたい。

(余談だけど大人になったルーミアちゃんは紫様みたいに背も高くスタイルがいい……羨ましいなあ……)

わたし達、妖怪(妖精)組はこうして一緒に寺子屋へ行くことが多いんだ。

「それにしても……橙ちゃん。今日は何だか機嫌が良さそうだね〜？」

そう聞いてくるのは、ミスティアちゃん……あれ？そんな顔してたかな？

「そ、そんなことないよう……あ、でもね！今日の朝ご飯、お兄ちゃんが一番おつきな焼き魚をくれたの！えへへ……美味しかったなあ♪」

すると、そんなわたしを見たリグルちゃんが……――

「また、お兄ちゃん」の話かい？橙ちゃんはホントにお兄ちゃんの事が大好きなんだね」

ふえっ？

「だね〜。機嫌が良いときは、大体お兄さんの話が出てくるもん……分

かりやすいなあ」

「大ちゃんまで?!……うーん……そんなにお兄ちゃんの話をしてたのかな?」

そして、雑談をしながら寺子屋へと着く。

「ここでは人間も妖怪もみんな平等……だから——」

「あ、橙ちゃん。おはよう」

「うん、○○ちゃん。おはよう!」

「こんな感じで妖怪だからと恐れられることなく、普通に挨拶ができるんだ!……これも全部”先生”のお陰なんだけど……——」

「今日もみんな揃ってるな。おはよう」

腰まで届くくらいの銀髪に、上下が一体になった青い服と帽子……

「おー!けーね先生おはよう!あたいは今日も最強だよ!」

「こ、こらチルノちゃん……ご、ごめんなさい慧音先生!」

「なに、子供はこれくらい元気なくらいで丁度いいんだ。気にするな」

そう言つて笑顔でみんなの頭を撫でてくれるのは、『上白沢慧音』先生。この寺子屋の先生だ。

「おはようございます先生!今日はどんなことを教えてくれるんですか!」

「おお、橙やる気があるのは良い事だな!そうだね……今日は算数の授業だ。楽しみかな?」

算数……物とかお金の数え方とかを教えてくれるんだっけ?……

——あんまり得意じゃないけど……

「は~い!私……この為に寺子屋に通ってるんですから」

わたしに代わつて答えたのはミスティアちゃん……屋台の売り上げとかを計算しないといけないから、その為に寺子屋で勉強してるんだって。

「わ、わたしもです!早く色んな事を覚えて、紫様や藍さま……それからお兄ちゃんの役に立てるようになりたいんです!」

うんうんと頷きながら笑顔を浮かべる慧音先生——

「うん、その意気を忘れずにな？…さて…それじゃあみんな、そろそろ席に着くんだ。授業を始めるぞ！」

はい！とみんなそれぞれの席に着いて授業が始まる……—
今日も一日がんばるぞ！

それから、慧音先生はそろばんを使った授業を始めてくれました：
うーん、何回やっても難しいよ……—

ミステイアちゃんを見てみると……あ、目を輝かせながら問題を解いてる…リグルちゃんは…ちよつと難しそうだけど、それでも解いてる。

チルノちゃんは……あ、寝てる…チルノちゃん数字に弱いからなく…(パアン)…あ、慧音先生に叩かれた…うん、私もがんばらなくちゃ！

「うー…あたい、数字嫌いななの…」

頭を押さえながらチルノちゃんが訴える…すると、先生が……—
「ふむ…なら、無理にそろばんを使わずに、まずは手の指を使って数えてみると良いぞ」

「えっと…これが一個あって、こつちが三個……えっと「ほら、紙に書いておくんだ」…うん…これが三つづつあるから…あ！分かった！」
とつてもうれしそうなチルノちゃん…うん、問題が解けるとうれしいよね♪

「うん。正解だ、えらいぞチルノ」

「やつぱり、あたいつたら最強ね！」

慧音先生はチルノちゃんの頭を撫でてあげてる……いいなあ、私もがんばったら…お兄ちゃんに撫でて貰えるかな？

それから、午前中の授業が終わってお昼の時間。

お昼はそれぞれ家に帰ったり、近くにあるお店に行ったりするんだけど……なんと今日は、お兄ちゃんの手作り弁当があるんだ！

「じゃあ、いただきますーすー」

「あれ？橙ちゃん、今日はお弁当なんだ？いつもは家に帰ってるのにな？」

「んぐんぐ…ホントだ。藍さんが作ってくれたの？」

「いつもお弁当を作ってくるミステイアちゃんと一緒に食べるリグルちゃん——」

「えへへ〜♪今日はね、お兄ちゃんが作ってくれたんだ！」

私は自慢げに、そのお弁当を見せた——。

お弁当の中身は……—

梅しそ、鮭、高菜のおにぎり——

「おかずは牛肉の甘辛炒めとポテトサラダ——うん！とつても美味しそう！」

「へえ…シンプルに見えるけど…これ、結構手が込んでるんだね〜」

「いつも作るミステイアちゃんには分かるんだね〜」

「そうなんだ…これ良い匂いがするな〜」

「あ、あげないよ!?!これはお兄ちゃんが橙の為に作ってくれたんだから！」

「そしたら、慧音先生がこっちの机にやってきたの…先生もお弁当なのかな？」

「みんな、私も一緒に食べていいかな？」

「あ、やっぱりそうなんだ…」

「あ、先生！どうぞ！」

「そして、先生は私の隣に座り…お弁当を広げただけど……—」

「先生のお弁当、すっごく綺麗ですね〜」

「ミステイアちゃんが反応する。だよね〜…バランスの良い配分、野菜も飾り切りされてて、普段料理をしないわたしでも手の込み具合が分かった。」

「さすが先生！お弁当もすごい！これ慧音先生が作ったんですか？」

「うん、そうだぞ。まあ大人の女性の嗜みというやつだな」
するとリグルちゃんも感心して……

「先生なんでもできるんですね……でも、先生は誰か作ってくれる人はいないんですか？」

その言葉に先生は苦虫を噛んだ顔になって……

「それを言われると……はあ……誰か良い人いないかな……」
なんだか聞いちゃいけないことだったんだね……大人の女性って難しいなあ。

「まあいいさ。それよりも橙がお弁当とは珍しいな？」

「うん！今日はね、お兄ちゃんがお弁当を作ってくれたんです！」

すると、慧音先生は……

「お兄ちゃん……ああ……春先に幻想入りした人間だったな。会った事は無いが……橙がここまで懐いているなんて……きつと良いお兄さんなんだろうな♪」

そっか……慧音先生はお兄ちゃんに会った事なかったんだ……あ、でもこれは言つとかないと——

「慧音先生。お兄ちゃんにはもう恋人さんがいますから、狙ったらダメですよ？」

パルスィお姉ちゃんから言われた。碧お兄ちゃんの事を聞かれたらこれを伝えておいてくれって……—という意味があるんだろう？

「ぐふっ……ち、橙？……それは誰かに言われたのかな……？」

むせる慧音先生……どうしたんだろう？

「うん！お姉ちゃん……あ、お兄ちゃんの恋人さんに言われたの！」

そしたら、慧音先生から……

「そ、そうか……まあ……流石に彼女がいる男を狙ったりしないから安心しておくれ……（はあ……私にも春……来ないかな……）」

「??？」
大人ってむずかしいんだね……。

そして、楽しい昼食も終わり……午後の授業が始まったんだけど……

「うう…眠たいよ…」

お腹がいつぱいになったせいで、すっごく眠たいの…このまま寝ちやいたい……—

「こら橙！眠たいのは分かるが、そんな事じゃ八雲家の方々に笑われるぞ？」

はっ?! そうだ…がんばって授業を聞かなきゃ!

それからわたしは、必死で眠気と戦いながら午後の授業を受けたんだ…こんな時、眠気を操る程度の能力とかあれば…と思っちゃったけど…。

「よしっ！今日の授業はここまでだ。みんな気を付けて帰るんだぞ！」

慧音先生の掛け声と共にみんな帰宅を始める。わたし達も人里の入り口までは一緒に帰るから、そのまま慧音先生に挨拶をして寺子屋を後にした。

「うーん…今日も疲れたね〜」

と背を伸ばす大ちゃん

「ミステイアちゃんとリグルちゃんは、この後から屋台なんですよ？すごいよね〜」

そう、ミステイアちゃんとリグルちゃんはこの後八目鰻の仕込みをして、屋台を開ける…二人ともすごいな〜…。

「んー？入り口に誰がいるぞ？あたい見てくるね！」

チルノちゃんが文字通り飛んでいく…あれ？ひよっとして…—

「おいお前！あたいのなわばりに何の用だ！」

「ん？ああ、邪魔になってたのかな？だったらごめんね。人を待ってるんだけど…あ、いたいた。おーい橙ちゃん」

やつぱり！碧お兄ちゃんだ！……—わたしは駆け足でお兄ちゃ

んのところまで行き…

「お兄ちゃん！」

思わず飛びついちゃった…——だってお兄ちゃんがここにいるなんて思わなかったもん！

「おつと?!…ここらこら、いきなり飛びついて来たら危ないでしょ?」

うう…怒られちゃった…——「でもね…」…??

「橙ちゃんが一直線に来てくれて、嬉しかったよ♪」

そんなこと言われたら…——

「碧お兄ちゃん!!」

私はそのままぎゅつと抱きついた……えへへ♪こうしているとあの時を思い出して落ち着くなく…——

すると後ろからみんなが追いついて来た…。

「橙ちゃん、この人がお兄さん?あ、私ミステイアって言います。よろしくお願ひしますねお兄さん♪」

「へえ…何て言うか…あんまり私達と背…変わらないんだね?…私はリグルです。橙ちゃんと一緒に寺子屋に通ってます」

「り、リグルちゃん?!すみません!私は大妖精って言います!よろしくお願ひします!」

「あたいはチルノだ!最強なんだぞ!今からあたいと弾幕勝負…ひつ?!…なんでもない…です…ごめんなさい…」

(?…なんでチルノちゃん怯えてるんだろう?) ↑碧の後ろに閻魔、賢者、月の頭脳、亡霊姫の幻影が見えたからです。

「ルーミアだよ…お兄さんは食べちゃダメそうな人間だね…」

「もう!ルーミアちゃん、また霊夢さんに怒られるよ!」

そして、お兄ちゃんも自己紹介する。

「みんな橙の事、いつもありがとうね。僕は大神碧。橙ちゃんの兄だよ……ね?橙ちゃん」

うれしいなあ…。

それから、通りの邪魔にならないように移動して雑談をしたんだ

「そういえば、みんなはどうして寺子屋に行ってるの？」

と碧お兄ちゃんから質問が来る…やっぱり気になるのかな？

「あたいは最強の天才になるためだ！」

「チルノちゃんたら…あ、私はチルノちゃんの保護者みたいな感じですよ…／＼／＼」

「私は将来、キチンとした自分のお店を開きたいからですかね〜」

「私はその手伝いだね…ね？ミステイア？」

「私は巫女に言われて無理やり…でもみんなで過ごすのは嫌いじゃないのだ〜」

そう、みんなそれぞれ目標があったり…楽しくて寺子屋に行ってる

…

「なるほど…なら橙ちゃんは？」

え？わたし？…どうしよう…言うのは恥ずかしいけど…

「わたしはね…いつか、紫様や藍さま…それから、お兄ちゃんやお姉ちゃんみたいになりたいんだ…／＼／＼」

照れながら言うわたし…でも、そんなわたしの頭をお兄ちゃんは優しく撫でてくれた…

「橙ちゃんなら…必ずなれるよ…うん…」

優しい眼差しで、そんなこと言われたら…恥ずかしいけど…うれしいな…えへへ♪

「なんだか橙ちゃん幸せそうだね〜」

「うん。私達も撫でて貰おうか？」

ミステイアちゃんトリグルちゃんから言われる…

「だ、ダメー！！お兄ちゃんに甘えていいのは橙とお姉ちゃんだけなんだから!!」

そしたら、みんな笑いながらこっちを見てくる…ひよっとしてからかわれたの？

「むー…みんなしてからかわないでよ！」

そんなこんなで話してたら夕暮れ時になったので……

「それじゃあ今日はここまでだね。みんな、気を付けて帰るんだよ？」
　　っていう碧お兄ちゃんの声で解散したんだ。

「さ、橙ちゃん。僕達も家に帰ろうか？」

　　そしてお兄ちゃんはわたしの手を握って……——

「お兄ちゃん……うん！」

　　その日の晩御飯は、わたしの大好きなお魚料理のフルコースでした

……今日は良いことがいっぱいあったなあ♪

番外編 バレンタインデーと共通ルート編

寒さも薄れてきた二月の上旬のある日――

パルスイは、紫にこっそりと呼び出された。

そう…これは、幻想郷で起こった…歴史に名を残さなかった異変……。

後に、バレンタイン異変と呼ばれ、歴史の闇に埋葬された異変の始まりであった……。

「紫さんだったら……急にどうしたのかしら？」

水橋パルスイは困惑していた――

何故なら、普段彼女が呼ばれる際は、ほぼ必ずと言っていい程、碧とセツトで呼ばれるからだ。

それが今日は、碧には内緒で……絶対にバレないように来て頂戴と言われた。

勘ぐらない方がおかしいと言うものだ……

そして、呼び出された場所に着く……

ここは、旧都から離れた場所にある小さな喫茶店。

辺鄙な場所にあるので、そこまでお客が多いわけでは無く、マスターの趣味で成り立っているお店だ。

「さて、紫さんとの待ち合わせ場所はここだから……「ようこそパルスイちゃん」きやつ?!ゆ、紫さん!?急に現れないで下さいよ!」

「あら、ごめんなさいね…ふふっ♪」

相変わらず人をからかってくるのが好きなようだけど、それも含めて紫さんの良い所だから仕方がないのかしら。

「さて、それじゃあパルスイちゃん…中に入りましょうか？」

そう言つて、手慣れた様子で店の中へと入っていく……ひよつとして常連さん？

店の中に入ると、レトロな雰囲気漂う、とても落ち着ける内装だった…今度碧と一緒に来ようかしら？

「いらつしやいませ…あら？紫様…ようこそ、いつもの席でよろしいでしょうか？」

店内にはマスターが一人だけ…予想してたよりもずっと若々しい女性のマスターがフォーマルな服を着てグラスを磨いている…何と言うか…とても様になっているわね。

「いえ、今日は連れがいるから…そうね、一番奥のカウンターでいいかしら？」

「はい、かまいませんよ。ではどうぞ奥へ…」

そして、紫さんに案内されるまま奥へと通される…あ、ここだと外からも姿が見えないし、こつそりと来たい時には良いかもしれないわね。

それから、マスターがおしぼりと水を持ってくる。

「紫様はいつもので？」

「ええ、お願い。パルスイちゃんは どうする？」

「えつと…そうですね…マスターのおすすめは何でしょうか？」

色々と目移りするメニューだけど、ここは素直にマスターに聞いた方が良いと思う。

「そうですね。当店ではストレートの紅茶…アツサムになりますが…そちら等がおすすめとなっております」

「なら、それでお願いします」「かしこまりました…少々お待ちください」「…ふう…それで紫さん、こんな遠くまで来て、何の用時なんでしょうか？」

すると、隣で水を飲んでいた紫さんから…

「パルスイちゃん…一週間後、何があるか分かってる？」

一週間後…あ、もしかして…

「ひよつとして…バレンタインデーのことですか？」

「正解よ」

そう、隔絶した世界であるこの幻想郷にもバレンタインデーという習慣はある。

人や妖怪……種族を問わず、女性が意中の男性にチョコレートを渡し、想いを伝えるという一大イベントだ。

無論、私も知らなかったわけではない。

去年まではそういった相手がいなかったただけなのだから。

でも、今年は違う。私の大切な彼氏……碧がいる。

想いは伝えあつた仲だけど、普段の感謝も込めて彼にはチョコレートを贈るつもりだ。

「えつと……もちろん、碧にはチョコレートを贈るつもりですよ。あ、紫さんや八雲家の方も贈るんですか？でしたら別に私に言わなくても……」「甘いわよー！」「ひゃい?!……え？紫さん？」

するとおしほりを握り絞めながら言葉を発する……

「甘い……甘いわ、シUGARTOSTにハチミツとシロップをかけるよりも甘いわよパルスィちゃん！」

珍しく力説してくる紫さん……というか胸焼けしそうな組み合わせですね……

「えつと……甘い……といえますと？」

「ふう……良い事パルスィちゃん。確かにあなたと碧君の関係は幻想郷の誰もが認める仲……でもね、これを見てもそう言えるかしら？」すると、紫さんはいくつかのスキマを開き、そこに映像を映し出す……

「って紫さん!?これつてのぞき」特別編だからいいのよ」……あ、はい」といいう事なので、大人しく映し出された映像を見ていくと……



東風谷早苗はウキウキしていた。

無論、碧にあげるチョコレートを作っているからだ。



彼女にしては珍しく、鼻歌を歌いながらチョコレートをボールに入れてかき混ぜている。

思っているのだ。

そんなわけで、今まではバレンタインとは無縁だったのだけど……。

「えつと…幻想郷にもバレンタインがあるんですね」

すると紫さんから――

「そうよ。まあでも碧君には本命がいるから……私達からは普段の感謝を込めてのチョコを贈ることにするわ」

そして、藍さんと橙ちゃんもそれに続く――

「そうだぞ。碧にはいつも助けられているからな……さあ、受け取ってくれ」

「いつもありがとうね、おにいちちゃん♪これ、紫さまと藍さまと橙で、がんばって作ったの！パルスィお姉ちゃんチョコの後で良いから食べてね♪」

と、嬉しい事を言ってくれる。

「橙ちゃん、藍さん……それに紫さん。ありがとうございます！本当なら早速食べたい所ですけど……」

すると紫さんがほほ笑みながら――

「いいのよ…さつき橙も言ったけど、最初に食べるのは本命のチョコからが良いわよね♪」

「すみません。そっか……今年パルスィさんがいるんだ…初めて本命チョコを貰えるんだ、楽しみだなあ」

しかし、ふと考える。

今日はパルスィと会う約束はしていない……あれ？本当に貰えるのだろうか？

「ふふっ♪心配しなくても大丈夫よ？パルスィちゃんは準備に時間が掛かるから、出来次第、碧君を自宅に送るように頼まれてるの……そうねえ…夜には準備ができるんじゃないかしら？」

夜か……楽しみだな♪

すると、陰陽玉から連絡が来る（連絡手段として一部に普及してい

る)……?誰だろう?

映像を映し出すと――

『あ、先輩!お久しぶりです!元気にしてましたか?』

早苗ちゃんからだった。

「うん、久しぶり。最近そっちに行けなくてごめんね。僕は元気にしてるけど、早苗ちゃんは元気かな?」

『はい!守矢の巫女は、いつでも元気です!えつと…それですね、先輩…今日、この後ってお時間ありますか?』

この後……パルスイさんから連絡が来るのは夜って言うてたけど…早まったら悪いし…。

少し考え込む僕を見て、早苗ちゃんから――

『あ、無理にとはいけません。お時間が無ければ、別の日でも構いませるので。良ければ、この後、守矢神社に来てください…それでは失礼します!』

そういつて通信が途絶えた……うーん、どうしたんだろう?つと、また通信が来た。

『あ、碧さん。この前はお仕事の手伝い有り難うございます。少々お時間宜しいでしょうか?』

映姫さんからだ。珍しいなこんな時間に……いつも、仕事の連絡だったら、夜か朝に来るのに。

「映姫さん、いえこちらこそ、色々勉強になってます。それで、今日はどうされたんですか?」

すると、通信越しに少しだけ言いよどみながら……――

『えつと…その……よし!碧さん、この後なんですけど、お時間はありますか?良ければなのですが、無縁塚まで来てほしいのです。都合が悪ければ来なくても大丈夫ですので…そ、それでは、失礼しました…』

と、慌てて通信を切る映姫さん。

そして、続けざまに再び通信が来る。

『こんにちは、碧君。体調は崩してないかしら?』

今度は永琳さんから……まさか…?

「え、ええ……おかげ様で、元気ですよ。それで、永琳さんから連絡つ

て珍しいですけど…どうされたんですか？」

すると何となく予想はしていたけど――

『そう言えばそうね。えっと…この後、時間を貰えないかしら？碧君の都合が悪ければ別の機会の良いのだけれど…そうね…着て貰えるなら診療所まで来て頂戴。それじゃあね♪』

うーん…ここまで来ると作為的な物を感じる…ってまたか！

『あ、碧さん…今、お時間よろしいでしょうか？』

さとりさんからだ。地底と行き来する関係上、さとりさんと連絡を取ることも少なくはない。

でも、この流れだと……。

「はい、大丈夫ですよ。それで、どうしたんですか？」

すると、照れくさそうな顔をして――

『えっと…碧さん、この後少々お時間頂けないでしょうか？良ければ地霊殿でお待ちしておりますので…では／＼／』

……もう、これって間違いないよね？

紫さんの方に視線を向けると……――

「えっと……まあ、その…何の用事か言ってなかったから…遅くならないなら、行ってみるのも良いんじゃないかしら？パルスィちゃんには私から伝えるから…選ぶのは碧君次第って事で…ね？」

若干苦笑いをしているが……まあ紫さんだし…仕方がないのか…

さて、色んな人達から連絡が来たけど……どうしようか？

↓守矢神社へ向かう。(早苗ルート)

↓無縁塚へ向かう。(映姫ルート)

↓診療所へ向かう。(永琳ルート)

↓地霊殿へ向かう。(さとりルート)

↓どこにも行かず家で待つ。(パルスィルート)

僕は……――

番外編 バレンタインデー〜東風谷早苗編〜

僕は――

「守矢神社に…早苗ちゃんに会いに行こうと思います」

すると紫さんから――

「あら？それは何故かしら？」

「早苗ちゃんは、僕の大切な後輩なんです。だから僕を呼んだのには、よほどの理由があるんだろうと思ひまして…ダメでしょうか？」

顎に指を当てて考える紫…何かをブツブツと言いなながら…――

「うん、良いんじゃないかしら？パルスイちゃんには伝えておくし、守矢神社へのスキマは開けておくから好きな時に行きなさい」

そして紫さんは部屋へと帰っていく…うーん、どうしたんだろう？

因みに紫は…――

「これで巫女さんルートが確定したわね……婿養子にするのだけは阻止しなくちゃね」

と一人で決意をしていたらしい。

さて、準備も出来たし…あまり待たせる訳にはいかないから行く。う。

そして、スキマを潜り守矢神社へと着く――

「早苗ちゃんは……本殿の方かな？」

階段を上り、鳥居を潜った先に彼女は立っていた。

しかし、目を惹いたのはその衣装だった。

それは、いつもの巫女服ではなく…高校の時の制服だった。

早苗ちゃんは僕に気が付いたみたいで――

「あーせんぱーいー来てくれたんですね♪」

とつても嬉しそうな声を上げてこちらに来てくれた…でも…

寒空の下、どれだけ待っていてくれたのか……彼女の頬は寒さで赤くなっていた。

「早苗ちゃん……待たせてごめんね……「いいんですよ。待つのも楽しみでしたから♪」……そっか、それと……何で制服なの？」

ふとした……いやかなり気になった事を聞いてみた。

「えっと……そうですね。先輩は、今日が何の日かはご存じですよね？」

「うん、バレンタインだね」

「そういえば……」

「先輩……高校の時、私がチョコレートを渡したのを覚えてますか？」
「うん、覚えている。高校の時に唯一貰ったチョコだったから……義理でも嬉しかったなあ「違うんです！」……？早苗ちゃん……？」

彼女にしては珍しく、強い物言い。

「あのですね……あの時、私はもう幻想郷に行くことが決まっていたから……だから本当の事を伝えられなかったんです……」

早苗ちゃんは俯きながら語る。

「だから、先輩とこの幻想郷で再開出来た時……本当に嬉しかったんです！だから……」

そして、深呼吸した早苗ちゃんは――

「先輩！私は先輩の事が大好きです！あの時渡したチョコレートも、義理ではなく本命だったんです！だから……だから、私と付き合ってください！」

頭がフリーズした――

え？誰が？

好き？誰を？

義理じゃなくて本命？

そして、そんな混乱している僕に――

「先輩……失礼します！んむっ！」

急に来た衝撃と、唇に感じる柔らかい感触。

いつまでも堪能したくなるような感触だったが、やっと混乱が収まってきた僕は――

「…ぷはっ?!…ちよ、ちよつと早苗ちゃん?!」

それでもなお、抱きついてくる早苗ちゃん。

「私じゃダメですか?…先輩?」

うるうると涙を溜めた瞳で見つめられる……――

「そ、その…早苗ちゃんの事は嫌いじゃないよ。でもね、僕にはパルス伊さんが…「知ってます!」…早苗ちゃん…」

「それでも好きだから…抑えきれないから…んっ!」

まるで言い訳を許さないというように、再びキスをしてくる早苗ちゃん。

「んんっ…ん…んはっ…」

そして離れていく唇…少し名残惜しいと思った自分を少しだけ恨みたい……

「いいですか先輩?」

???

「ここは日本じゃないんです…幻想郷なんです!」

うん…それは知ってるけど…?

「幻想郷では常識に囚われてはいけないんです!そして、ここでは重婚なんて当たり前なんです!」

色んな意味で驚きが続く…そんな時、陰陽玉から連絡が来る…なんだろう…嫌な予感がする…

『あ、碧…準備が出来たから家に来てほしいんだけど?』

案の定パルス伊さんからだった…というか紫さん…説明してなかったんですか?

「えっと…その、ちよつと待ってね…」

非常にマズイ…早苗ちゃんは心配そうにこちらを見てくる。

うん、正直に伝えよう。

「あの…パルス伊さん…実は……」

そして、今起こった事を全て伝える……――

『はあ…紫さんから聞いてたけど…やっぱりこうなったのね……いい

わ、二人とも…今から私の家に来て頂戴』

そして通信が切れる……——普通に怒られるよりも怖いんですけど…。

「あの…先輩…今更ですけど…大丈夫…なんででしょうか…？」

それはこつちが聞きたいよ…でも今は直ぐに……——

「とりあえず、直ぐにパルスイさんの家に行こう？話はそれからだから……」

「そ、そうですね……」

若干重い足取りで、パルスイさんの家に向かったのだった。

地底、パルスイ宅——

時刻は夕方を回った頃、僕と早苗ちゃんはパルスイさんの家の前に来ている。

「さて…いつもならスツと入れるんだけど……」

「うう…すみません…先輩…」

すると中から——

「誰かいるのかしら？…ってあら、二人とも来てたのね？……入りなさい」

僕達二人だと分かれると、途端に冷めた視線でこちらを見てくる。

そして有無を言わさない声……——ああ…とっても怒ってる…。

早苗ちゃんも先程の大胆さから一転して委縮してしまっている。

「そ、それじゃあ。お邪魔します…ほら、早苗ちゃんも……」

「は、はい……失礼します」

そして、居間へと通され席に着かされたのだが……——

いつもは隣り合って座っているパルスイさんと今は対面で座っている……なんだろう、とっても居心地が悪い。

「さ、お茶でも飲みながら……”ゆっくりと”聞かせて貰いましょうかね？」

パルスイさんから放たれる、無言の威圧感……そして――

「二人とも……私の言いたい事は分かるかしら？」

発せられる言葉……そして、それに対して答える早苗ちゃん――
「パルスイさんの言いたい事……分かります。だから私も……私の本心を語らせて頂きます！」

そして、早苗ちゃんはゆっくりと語り始める。

「あの日……パルスイさんから神社で言われた事……」

あの日？……前に何かあったのかな？

「幻想郷に来る前に……先輩に想いを伝えたかった……でも、それができない自分が……別れる事を恐れていた自分が……とても恥ずかしかった……」

その言葉に、思う事があったのだろう……パルスイさんは黙って聞いている。

「だからこそ、先輩と再会できたとき、今度こそ気持ちを伝えようと思った……思いました……」

俯く早苗ちゃん……。

「でも、それよりも早く……先輩にはパルスイさんという彼女が出来ました……でも、あの日……パルスイさんはそんな私を鼓舞してくれました……！」

「別に……そんなつもりじゃなかったのだけれどね……」

バツが悪そうにするパルスイさん……本当に何が？

「そして、今度こそ自分の気持ちをキチンと伝えようと思いましたが……でも、先輩はいつもパルスイさんと一緒に……全く付け入る隙も無かったです……」

まあ……確かに外出するときには殆どパルスイさんと一緒だったからなあ……。

「だからこそ！今日、この日……バレンタインデーに……積りに積もった私の想いを伝えようと決意したんです！」

そして、早苗は立ち上がりパルスイさんをしっかりと見据えて宣言した。

「あの日言ったように……パルスイさんに負けるつもりはありません！」

私もパルスイさんと同じ……ううん、それ以上に、もつともつ……先輩の事を幸せに見せます！だから！」

そう言つてパルスイとしつかりと目を合わせる。

そして、どれだけ見詰め合つていただろうか……

「はあ……参つたわ。降参よ」

パルスイさんがため息を吐き、それから言葉を発し始める。

「ほんと、あなたの行動力には驚かされるわね。まあ、私が願うのは碧と私の幸せ……そこにあなたが加わつて、もつと幸せにしてくれるなら……願つたり叶つたりよ？」

その言葉を聞いた早苗ちゃんは、涙を浮かべ……

「パルスイ……さあん……ぐすつ……ありがとう、ぐございますっ！」

たどたどしい言葉で……感謝を伝えていた。

「さて、色々とおつたけど……今日はバレンタイン……折角作ったチョコが無駄にならないように、二人で碧に食べさせてあげましょうか？」

へ？……いや、え……？「いいですね！」……?!早苗ちゃん!?

そして、二人は用意したチョコプレートを開け、それを手で持ち……

「さあ碧……初めてのチョコプレート……食べてくれるわよね？」

「せ、先輩……これからもよろしくお願いします／＼」

そして二人から同時に……

「はい、あーん」

口に入ったチョコプレートは……とっても甘く、とっても幸せな味があった。

大切な恋人が二人に増えたけど……きつと大丈夫。

これからどんな物語が紡がれていくのか……

それはIF……有り得たかもしれない話……。

歴史に埋もれた一端の出来事。

番外編 バレンタインデー〜四季映姫編〜

僕は――

「無縁塚に…映姫さんに会いに行こうと思います」
すると紫さんから――

「……あら？四季映姫に？それは何故かしら？」

怪訝そうな顔でこちらを見てくる紫さん。

「理由ですか……なんでしょうか？……あえて言うなら…何というか…
ほっとけない感じがして…」

すると顎に指を当てて考える紫……何かをブツブツと言いながら
……――

「なるほどね……もしかしたら…でもあの閻魔に限って……」

そして紫さんは部屋へと帰っていく……うーん、どうしたんだろう
？

そして紫は……――

「もし碧が、本能的に気が付いて向かうのだとしたら……任せるしか
ないのね……」

暗い表情を浮かべ、そのまま一人…スキマの中に消えていく――

さて、準備も出来たし…あまり待たせる訳にはいかないから行こ
う。

そして、スキマを潜り無縁塚へと向かう――

無縁塚に着くと、そこには映姫さんが立っていた。

そして、僕が来た事に気が付いた映姫さんが手を振ってくる……の
だけど…。

「碧さん、こちらです。良かったきて頂けて……碧さん？」

あ、いけない思わずフリーズしてた。

それもそのはず、今日の映姫さんの服装はいつもの仕事用の服では

なく――

白のアルパカニットワンピースという、背が高くスタイルの良い映姫さんの魅力を、さらに引き立てる服装。

それに加え、同じく白のニット帽子を、少しだけ斜めに被っているのもまた、アンバランスでもとても可愛らしい。

ワンピースの下から覗く、ダークブラウンのロングブーツも、大人らしさを醸し出している。

肩からかけられた、ブラウンの小さなバッグは、全体的に白いコーデをより一層引き立たせている。

そう、恥ずかしながら普段とは全く姿の違う映姫さんの大人の魅力に、思わず見惚れていたのだ。

「す、すみません。思わず見とれてしまって……。その……とつても良く似合っています」

すると、照れくさそうに俯く映姫さん。

「あ、ありがとうございます。お洒落なんてしたのが久しぶりでしたので、少々悩んだのですが……。そう言っただけで良かったです♪」

何だかこっちまで照れてくるな……。／／

「えっと……それで、映姫さん……今日は、どうしたんですか？」

何となく……予想はしているが……

恥ずかしそうに、言葉を紡ぐ映姫さん……

「そ、その……今日はバレンタインデーですよね？……ですので、残りの半日……私とデートして貰えませんか？……でしょうか？」

あまりの単刀直入な要件に、思わずあっけにとられてしまった。

これは、何て答えたらいいんだろう？

早く返事をしないと……。映姫さんも顔を真っ赤にしたまま待っているんだから。

しかし、その表情は長くは続かなかった。

僕が返事を決めかねている様子を見て、映姫さんの表情がどんどん曇っていき、とても寂し気な表情になってしまった。

いつも、整然としている映姫さんの、そんな表情を……

こんな弱々しい姿を見せられたら、断れるはずも無く……

「分かりました。残りの半日……僕で良ければ……その、お相手させて頂きます」

すると、一転して花が咲いたような笑顔になる映姫さん……その笑顔は卑怯だ。

とはいえ、今から……しかもこの季節にデートなんてどこに行くんだろう？

すると、映姫さんから――

「あの……デートの場所なのですが、ここから少し歩いた場所に、私のお勧めのスポットがあるので……その一緒に来てほしいのです……」

なるほど、この近くならそんなに問題も無いか。

「えっと……じゃあそこまでの案内をお願いします」

「任せて下さい……あと……その、折角のデートなので……手を、繋いでも良いでしょうか？」

おずおずと確かめてくる映姫さん……。

こちらは付き合うと決めただ――なら、答えは一つ。

「どうぞ？・足元は石が多いので気を付けて下さいね？」

そして、映姫さんと手を繋ぐ。

映姫さんの手は冷たく……この寒空の下、どれだけ待たせてしまったのかと心が痛んだ。

それでも映姫さんは、笑顔で――

「さあ、行きましょう……碧さん♪」

うん、とりあえず行こうか。

しばらく三途の川のほとりを歩き進んだ先にあったもの……それは――

「うわあ……綺麗な花が沢山……凄い……」

川のほとりから、見渡す限り一面に咲き誇る色とりどりの花々……なんて綺麗なんだろう。

すると、映姫さんから――

「ふふっ…驚いて貰って何よりです。ここが私のお気に入りのスポットで…偶に休憩に来る場所なんです」

なるほど…確かにこれはすごい…あれ？そういえば前に花の異変があつたつて言つてたけど…？

「大丈夫ですよ。ここにある花は全て自然の物…人の魂で咲いたものではなく、純粹にこの河原に生えている物ですから」

こちらの考えを見透かしたかのようなやり取り…やっぱりこの人も紫さんみたいに頭が良いんだ。

「ここにある花はですね、様々な種類があるんですけど…特に私の気に入った花があるんですよ」

映姫さんの気に入った花？

「あの、それって？」

すると、映姫さんはしゃがんで一輪の花を摘む。

「この花はガーベラ様々な色を持ち…そして、その色によって花言葉を変える不思議な花なのよ？」

そして、また一輪…花を摘む。

「赤は『神秘』、ピンクは『愛情』、白は『希望』、黄色は『親しみ』、オレンジは『我慢強さ』…とそれぞれの花言葉があるんだけど…私が特に好きなのは白とピンクかしらね？」

そう言いながら、映姫さんは一輪、また一輪と花を摘んでいく…???…何をしているんだろう？

「ふう…これで十二本ですね。碧さんはダズンフラワーというものをご存知ですか？」

ダズンフラワー…？…聞いたことも無いけど…――
「いいえ、その…どういったものなんですか？」

すると映姫さんは嬉しそうに語り始める。

「ダズンフラワーはね、個人が見繕った十二本の花に『感謝・誠実・幸福・信頼・希望・愛情・情熱・真実・尊敬・栄光・努力・永遠』という意味を込めた特別な花束の事なの…そして、これらを束ねたもう一つの意味…『すべてをあなたに誓う』」

そして、それまでの饒舌が嘘のように沈黙する映姫さん……？

「ねえ…碧さん。今日はバレンタイン…本来であれば、私にはまったくと言っていいほど無縁の日なのです」

確かに映姫さんのそう言った話は聞いたことが無いけど……。

「それどころか、バレンタインで浮かれる女性にお小言を言う、まあ所謂空気の読めない者でした……」

自虐気味に苦笑する映姫さん——

「でも、今年は違いました」

そして、こちらを振り向く……（ぞくつ）?!…なんだろう今の感覚は……？

「最初は、普段から仕事を手伝ってくれているお礼でも…と思い、渡そうと作りました」

その表情が暗くなる——

「でもですね…そう思いながら作ったチョコレートは…どれも美味しくなかったんです…何度作っても…何度も…何度も…数えきれないくらい作っても……」

俯いている映姫さんの表情は分からない……—そして、言葉が続く。

「何故だろう?…と考えたんです…考えて考えて考えて……そして、やっと…たどり着いたんです、その答えに……」

そして、顔を上げた映姫さん……っ?!

「あの日……碧さんが初めて私の手伝いに来てくれた日……。あなたに抱きしめられた時から、私の身も心も……全てあなたの“モノ”なんだ……」

そして、一呼吸置き……——

「碧さん……私はあなたに惚れています」

「あなたの事を想いながら作ったチョコレートは…とても甘く…とても

も満足のいくものになっていきました」

「作っていて充実した気持ちになりました」

「ですが、私はお菓子など、殆ど作った事が無いので不格好になってしまいました……」

「碧さん。あなたの事を考えながら作ったチョコレートと……このダズンフラワーを……受け取って頂けませんか？」

矢継ぎ早に飛んでくる言葉に、僕は正直驚きを隠せなかった。

自分の知る限り、幻想郷で一番毅然とした彼女から告白されたこともそうだったのだが、それ以上に、彼女の異常性についてだ。

映姫は自分の憧れの一人であり、自分に指標を示してくれた大切な人。

その気高い心の在りように、幾度となく助けられた……。

だからこそ感じた、この異質さに……。

「映姫さんの気持ちは嬉しいですが……僕には……っ?!」

断ろうと思った。

でもできなかった……。

目の前の彼女は……大粒の涙を流し……そして……

「ふふっ……やはり、碧さんは優しいですね。そして、私はあなたのその優しさを利用しようとしている……汚い女なんです……」

普段なら目の前で知り合いが泣いていたら、大慌てで慰めに行くだろう。

でも、この時だけは違った——

そして、気が付いてしまった。映姫さんの心の歪みに……。

映姫さんの心は強いんじゃない……どうの昔に壊れていたんだ……。

いくらここが幻想郷で、どんな不思議な力があつたとしても。

自身に干渉を受けない力なんて、本来ならば“ありえない”のだから

ら。

そして、そんな状態が長く続けば、例え妖怪であろうと……その心は自然と壊れてしまう。

ああ、そうか……だからこの花が好きなんだ……

白いガーベラは希望を表す――

ピンクのガーベラは愛情を表す――

そして、自分の壊れた全ての心を表す……ダズンフラワー……

何故、映姫さんがこれを選んだのか……今ならその意味が分かる。

もし……もし、僕が……僕の行動で、壊れていた映姫さんの心を守れるなら……

……――ごめんねパルスィさん……。

僕は、差し出された花束とチョコレートを受け取る……。

それが意外だったのか……映姫さんは僕を、驚いた顔で見つめてくる……。

うん、ここからだ……覚悟を決めろ……大神碧！

そして、自分よりも背の高い映姫さんを抱き締める。

そして、その大きいのに、小さな背中を……優しく優しく……ぽんぽんと叩いてあげる。

僕は……結局自分の理想を押し付けるあまり、本当の映姫さんを見ていなかったんだ……。

前の一件で、一番辛いのは映姫さんだと理解していたのに……気づくことが出来なかった……――だから！

「……映姫さん」

「……み、碧さん？」

驚いた様子の映姫さん――そして、僕も言葉を伝える。

「こんな僕で良いなら……いくらでも支えにしてください」

すると、映姫さんから返ってきたのは――

「で、でも…碧さんにはパルスイさんが居ます…今更私の入る隙なんて…」

僕はその言葉を断ち切るように――

「今、この場には…僕と映姫さんだけしか居ません…だから大丈夫です」

（それに…パルスイさんも分かってくれる…僕の信じた彼女なら…同じ苦しみを見た、彼女なら…）

「碧さん…」

まるで、小さな子供がすがりつくように――

映姫さんが僕を、ぎゅつと抱き締め…そして静かに目を瞑る…。

「…分かっていきます。分かっているんです」

それは自分に言い聞かせるように――

「碧さんが、とても優しいから…」

それはまるで言い訳のように――

「私を、こんなにも優しく…甘やかしてくれている…」

声を震わせ…力なく、首を振って嘆く…。

「…それでも」

とめどなく溢れ出す涙――

「分かっているから…苦しいんです…!」

今にも嗄れそうな声で――

「こんな弱くて、どうしようもない私の事を…」

自嘲気味に泣き、笑いながら――

「碧さんが…私の否定したその優しさで、赦して、受け入れてくれて

いるのが分かるから……!」

そして紡がれる言葉——

「……だから、お願いです……」

その声に感情は無く——

「今日だけで良いから……」

その瞳に光は無かった——

「私の恋人になつてください……」

僕を抱き締めていた手が、徐々に解けていく——

「映姫さん……」

僕はその手を——

これ以上……心が壊れないように……優しく握って、ゆっくり……そして小さく囁く——

「……映姫さん」

びくつと体が動く——

「……そんなこと、言わないで下さい」

彼女は今、何を思うのか——

「僕は、そんな薄っぺらい優しさで、映姫さんを助けたい……求めたいなんて思いません」

今にも消えてしまいそうな映姫さん——

その存在を呼び戻すためにはつきりと言葉にする。

「僕はあなたを……映姫さんを守ります」

たどえ他の人に何を言われても――

「……映姫さんが不安なら、僕がずっと傍にいます」

たどえそれが茨の道になろうとも――

「映姫さんが求めてくれるなら……僕はあなたの為に生涯を尽くします」

そしてもう一度言う……

強く、自身へと……映姫さんへと言い聞かせるように――

「僕と……映姫さんの約束です」

映姫さんの瞳に光が戻る――

そして少しずつ……言葉が紡がれる――

「私は……その……融通も利かないし、頭も固いです……そして何より心が壊れています……かなりめんどくさい女だと自覚しています……」

そんな事……しかし、それを言おうとする前に――

「でもですね……。その分、愛情は倍に……いいえ、それ以上にして返しますから……」

そして照れた……でもどこか、晴れやかな美しい笑顔で――

「………大事に、してくれると嬉しいです／＼／＼」

そんな少し不器用な彼女を――

愛おしさを込めて――

そつと、抱き締める。

「もちろん、大事にします……約束です」

返ってきた彼女の言葉は――

「はい♪碧さんのこと…信じます♪」

二人の間に流れる風は……どこまでも幸せに満ち溢れていた――
――。

これからどんな物語が紡がれていくのか――

それはIF……有り得たかもしれない話――。

歴史に埋もれた一端の出来事。

番外編 バレンタインデー〜八意永琳編〜

僕は――

「診療所に……永琳さんに会いに行こうと思います」
すると紫さんから――

「……あら？永琳に？それは何故かしら？」

不思議そうに、こちらを見てくる紫さん。

「理由ですか？永琳さんには病気の時にお世話になってますし、それを無下にはできませんから……」

すると顎に指を当てて考える紫……何かをブツブツと言いながら

……――

「……あの時、私が料理できれば……いえ仕方がないわね。碧……くれぐれも気を付けてね？」

そして紫さんは部屋へと帰っていく……うーん、どうしたんだろう？

そして紫は……――

「永琳が何もしてこないはずがない……でも、前に借りもあるし……手を出されたらどうしましょう……」

と、珍しく頭を抱えて焦っていた――

さて、準備も出来たし……あまり待たせる訳にはいかないから行く。う。

そして、スキマを潜り診療所へと向かう――

さて、入り口に来たけど……永琳さん、いないな。

「とりあえず、声を掛けてみよう」

そう思い何度か声を掛けたけど、中から反応はない。

流石に不思議に思い入り口に手を掛けてみると――

「あれ？空いてる？もしかして中で何か……？」

そのまま中に入ると――

「うわっ?!…何この甘ったるい匂い…もしかして永琳さん…この奥に…?」

僕は匂いの発生源?と思われる場所へと進んで行く…この部屋…永琳さんの実験室?

「永琳さん?…いるんですか?」

そうして部屋の中に入ると…中に人が倒れていた…っ?!
慌てて駆け寄ってみると――

「え?…これって…誰?」

そう、倒れていたのは一人の女性…いや、女の子だった。
ブカブカの服と白衣…特徴的な銀髪…もしかして?

「あの…大丈夫ですか?!起きて下さい!」

すると女の子は軽く身じろぎして――

「う、ううん…碧…くん…?」

僕の名前を呼んだ…ということは間違いない。

「あの…永琳さん…ですよ?」

おらずと聞いてみると――

「?…変な事を聞くのね?どこからどう見ても…ってあら?」

起き上がろうとする永琳さんは自身の体の状態に気が付き――

「これは…やったわ!実験は成功よ!」

喜びの声を上げる永琳さん…いや、それよりも実験て?!

「あの…今、実験って言いましたよね?」

すると喜んでいた永琳さんから――

「ええ。自分の肉体を過去の物に戻す…まあ、所謂…年齢詐称薬?みたいなものかしらね。あく、懐かしいわ…この体の感じ♪」

喜びを越えて浮かれきっている永琳さん――いや、その前に…。

「えっと…それは分かったんですけど…何でそんな実験を？」

すると永琳から返ってきたのは意外な答え――

「えっとね…その、笑わないで聞いて欲しいのだけど…」

と、永琳さんにしては珍しく言いよどみながら…――

「…その…今日はバレンタインデーでしょ？それで碧君にチョコレートをあげようと思ったの」

なるほど、でもそれとその姿の関係は？

「でもね、普通にあげるのも面白味に欠けるかな？って思ってた…」

いや、普通で十分ですから?!

「…それで、碧君に近い背丈の頃の自分に戻って半日過ごしてから渡したいなって思ったのよ…」

なんというか…どこかずれてるなあ…――

「それで薬がやっと完成して碧君に連絡した後にすぐ飲んだのだけど…副作用でそのまま気絶しちゃって…迷惑掛けてごめんなさい…」

シユンとする永琳さん。

だけど今の永琳さんは僕よりも背の低い中学生くらいの女の子……罪悪感がすごいんだけど……

「い、いえ…無事ならそれで良かったですよ。それにしても…永琳さんの作る薬って、本当にすごいですね…」

今僕の目の前に立っている永琳さんは、身長が140cmくらいの女の子。

普段の永琳さんの身長が170cmくらいだったから、その差は歴然だ。

その証に、着ていた白衣は当たり前として、いつも着ている衣類もぶかぶかになり、今にも脱げそうになっている（まあ30cmも身長差があればそうなるよね）

しかし、そうならない理由として体の一部の大きさが成長後と殆ど変っていない。

その一部とは…まあ、胸である。

大人の姿の時より多少は小さくなっているものの、今の背丈に対してはかなりの大きさを誇っている。

まあ、いわゆるロリ巨乳と呼ばれる部類に入るんだと思うけど……。

「まあ、でも実験に成功したし…後は碧君とデートをするだけね♪」

「え?!ちよ、ちよつと待って下さい!デートって?!」

すると可愛らしく首をちよこんと傾け――

「だって、ただチョコレートを渡すのも味気ないでしょ?それに、私もこの姿で碧君と過ごしてみたいし…」

うーん……まあ夜になる前までだったら良い…のかな?

「分かりました。デートって言って良いのかは分かりませんが…夜になる前まででしたらお付き合いします」

「本当!?良かったわ♪……あ、それなら碧君。お願いがあるんだけど……」

お願い?何だろう?

「えつとね……折角、碧君と同じくらいの見た目になったんだから…その、できれば友達と接するみたいに話して欲しいの」

まあ自分より年下?の女の子に敬語で話すのも…変なのかな?

「はい……じゃなくて、分かったよ。これでいいのかな?永琳?」

すると嬉しそうにする永琳さ…永琳。うん、何だかこういうのも良いな「それと…」…?

「あとね…永琳って堅苦しい感じじゃなくて……その…、えーりん”ってフランクな感じで呼んでくれると嬉しいな♪」

うっ…ちよつと発音が変わっただけなのに…なんだろう…かなり照れくさい。

永琳の方をちらりと見てみると……上目使いで、しかも少しうるうるとした瞳で見てる……ああもう!

「え、えーりん……っくくくく／＼／＼」

うわあ……これ凄い照れるんだけど……肝心のえーりんは…?

「み、み”ど”り”くつ!」

突進するような勢いで抱きついてくるえーりん——

「ごふっ?!」

いくら自分よりも背が小さいとはいえ、女の子の全力タックルは中々ダメージが大きい……。

「ありがとうー！碧君……ううん、碧！」

そのまま喜んだえーりんから抱きつかれる……こ、これはっ?!

いつもであれば、自分よりも背の高い人に抱きつかれる為、抱き合う……というよりも胸に顔をうずめている状態になるのだが、今のえーりんの身長は碧よりも低い。

その為、碧の胸元よりも下に……その大変ご立派なモノが押し付けられる体勢になる。

「こうやって男性の胸に包まれるっていいわね♪……ってあら？碧……ひよっとして照れてるのかしら？」

ワザとか?!えーりん、ワザとやってるのか?!

でも、このムニユムニユつとした、マシユマロのような感触には抗えないのが男の性……。

「ふふっ♪碧も立派な男の子ですものね♪」

楽しそうに、上目使いでこちらを見てくるえーりん。

「もう！えーりん！分かってやってるでしょ！」

「バレちゃったわね♪そしたら着替えてくるから少し待っててね？」

そう言っただけに奥の部屋への扉を開き——

「あ、覗いちやダメよ？まあ碧にならないかしら？」

「えーりん！」

「ごめんなさい♪」

そして今度こそ扉の奥に入っていく……。

「はあ……色んな意味で疲れるなあ……。でも、あんな楽しそうなえーりんを見るのも、何だか新鮮でいいかも」

それから待つことしばらく——

「ごめんなさい。待たせたわね」

扉からえーりんが出てきたのでそちらを見ると……」
「ううん、女性は着替えに時間が掛かるか……うら？」

「ど、どうかしら？こういう服を着るのは初めてなんだけど、似合ってる……かな？」

思わず思考停止してしまった。

それくらい、今のえーりんの姿は綺麗だったから。

「…あ、あの…碧？」

今のえーりんの服装は、ワインレッドと黒を基調とした所謂ゴスロリ風の服で、胸元に黒いリボンがあしらわれている。

また、髪形もそれに合わせているのか、いつも三つ編みにして束ねている長い銀髪を、一部サイドテールにして赤と青の長めのリボンで括り、残りは全て下ろしている。

まるでビスクドールを思わせるその姿は、今の…子供体型（一部を除く）になったえーりんには、似合っている……いや、怖いくらい似合いすぎている。

「…え……ねえ…碧ってば！「はいっ?!」…もう、人が感想を求めているのに、ポーっとしちやって…」

しまった、それは悪い事をしたな——

「ごめん！その……こう言ったら変かもしれないんだけど……今のえーりんの姿と服装が、怖いくらい似合いすぎてて…思わず見惚れてしまったんだ…／＼／」

じっくり見たい衝動を抑え、軽く目を反らしながら頬をポリポリとかく……うーん、我ながらボキヤブラリーの無さに呆れてしまうな。
「そ、そうだったの……えへへ♪うれしいわ♪」

あ、でも満足してくれたみたいで良かった。

「実はね……こういう服には少しだけ興味があっただけど、大人の姿の私じゃ似合いそうにないから…」

ちよっと想像してみる……いや、普通に似合うと思うんだけど……その内見てみたいと思ったのは内緒にしておこう。

それにしても服を着替えたことで、より一層強調される胸部の大き

さ……この位の年でこの大きさだったんだろか？

ちよつとデリカシーに欠けるけど、気になるな……

「えつと……えーりんは子供？の頃から、そんな体型だったの？」

するとえーりんは自分の体を触りながら――

「ええそうよ。確か……普通の人間で言う13〜14歳くらいの頃の体型かしらね？」

そして、僕の聞きたい事についての意図が分かったのか、ニヤリと笑い。

「あ、そういうことね？それでさつきから胸に熱い視線を感じると思ったわ♪「ごめんなさい……」……くすっ♪正直でよろしい」

悪戯な笑顔を浮かべながら、たわわな果実をその手で持ち上げる……これがリアル乳袋の破壊力？!

「そうよ。この胸もちゃんと天然ものだから安心して頂戴♪確かに周りの娘に比べたらかなり大きかったわね……というか、その辺の大人よりも大きかったわね……」

ですよねー。

「まあ、そのせいで周りの男子からはからかわれるし、女子からは妬まれて……まあ大変だったわねえ」

あつけらかんと答えるえーりに、碧は少し驚いてしまった……そして続けるように――

「でも、碧は……この胸をちゃんと魅力的に感じてくれてるんでしょ？」

答えが分かかっていて聞いてくるえーりん……いや、直接聞きたいのかな？

「う、うん……。その……とつても魅力的で、ずっと見ていたくなるよ……」

「ふふっ♪その答えが聞けただけで十分だわ♪」

そして、居住まいを直し――

「さて、じゃあ改めて……本日のデート……よろしくね♪」

そう言いながらえーりんが僕の手を引き、無邪気な笑顔で診療所の外へと向かった。

「そういえば、今日はどこに出かけるの?」

二人で手を繋ぎ、迷いの竹林を歩いて行く。

(薬の副作用で空を飛ぶことができなくなっている為)

「そうね…まずは…「あれ?お客さんですか?」…ってあら?」

すると少し先に居たのは優曇華さん。

いつものように人里に薬を売りに行ってたのかな?

「あ、優曇華さん。お仕事お疲れ様です」

「碧さんでしたか、お気遣いどうもです。えっと…そちらの女の子

はどちら様でしょうか?」

え?優曇華さん気が付いてないの?

「えっと…優曇華さん、この人は…」初めまして!私はリンネと申しま

す…っえ!」

えーりん?何を?それにリンネって…ああ、えーりんのアナグラ

ムか…。

「リンネちゃんですか、私は優曇華といいます。よろしくお願いま

すね」

そう言ってリンネ(えーりん)の頭を撫でる…えーりんって気が

付いたらどんな顔になるんだろうか?

「よろしくね!うどんげお姉さん♪」

うわあ…えーりんも楽しんでるよ…まあ特に実害がある訳じゃ

ないからいいかな。

「えっと、それで碧さん。リンネちゃんとはどういう関係なのでしょう

うか?」

え?そう聞かれると…何て答えれば?

するとえーりんは何か悪戯を思いついたようで…

「私はね、外の世界から来た碧の元恋人よ♪」

は?

「はい?」

その言葉に場が凍った。

いやいやいやいや！何言ってるのえーりんさん！ああ、優曇華さんからの視線が冷たいものに……。

「えっと……紫さんからは特に何も聞いていなかったのですが……碧さん……そういう趣味だったんですか？」

あ、これ完全にロリコンと思われてる。

優曇華さんの視線が絶対零度に……。

「うどんげさん！酷いわ！私はこれでも碧と同一年なのよ！」

その言葉に固まる優曇華さん。

そしてえーりんからさらなる追撃が——

「確かに身長は低いけど、胸はうどんげさんよりも全然大きいでしょ？ほら？」

と乳袋を持ち上げて、優曇華さんに見せつける。乳袋って持ち上げられるんだ……。

そして自分の胸をペタペタと触る優曇華さん……あ、優曇華さんの目から光が消えた……

「うう……どうせ私の胸なんてまな板ですよ……自分よりも年下の娘にま言われるなんて……しくしく……」

ああ！優曇華さんがどんどん縮こまっていく……ん？えーりんさん？

「そんな訳で、今から私達は再会を喜んでデートに行くの。くれぐれも言いふらさないでよね？」

「はい……分かりました……しくしく……」

鬼だ……天使の笑顔で、悪魔の所業をいとも容易く……怖いよ。

「えっと……そ、それじゃあ優曇華さん……僕達はこれで……」

気まづくなっただので先に進むことにしたんだけど——

「……しくしく……。あ、碧さん……その……色々と自重しないとうちの師匠から襲われますよ？」

「え？……それってどういう……」さ、行きましょー！碧ー……っと、すみません！今日はこれで！」

そう言つてえーりに腕を引っ張られて行く。

それを優曇華は呆然とした顔で見えていたが、ふと思った。

「さっきの娘……どこかで見たような……？でもすごい胸だったなあ……」
彼女がリンネの正体に気が付く日は来ない……多分。

駆け足で竹林を進んで行くえーりんと碧。

そして急にえーりんが止まり、碧もそれに合わせて止まる。

「はあ……はあ……あははっ！さっきのうどんげの顔見た？私だっけ気が付かずに、ホント笑いが止まらないわ♪」

えーりんは、見た目相応の無邪気な笑顔で、先程のやり取りを思い出していた。

「でもあれはやり過ぎ！優曇華さんへこんでたし……それに元カノとか言っただけで、変に広まったらどうするの?!」

流石に洒落にならない気がする……。

「大丈夫よ。うどんげにはきちんとフォローを入れておくわ……それよりも、目的地が見えたわよ」

そして、竹林を抜けた先は……人里の入り口だった。

「ここは……人里。迷いの竹林からここに出れるんだね」

そのまま見上げてくるえーりん。

「そう、そして今日のデートの最初の目的地よ。自分の足で……しかも急患以外で人里に来るのなんていつ以来かしらね？」

感慨深そうな顔をするえーりん。

そっか、いつもは診療所もあるし……薬は優曇華さんが売りに行くところから、じっくりと人里を歩き回るなんて事、そんなにないいよね。

「それにしても……私がこうして男の子と、白昼堂々と手を繋いで人里を歩ける日がくるなんてね」

少し影のある笑みを浮かべるえーりん……彼女の過去で何か思う事があるのかな……。

でも、せめて今だけは、そんな顔をしてほしくない…だから——
「行こう！えーりん。今まで楽しめなかった分…今日は存分に楽しまなきゃ！」

「え?!碧?」

そう、えーりんの影の払うように僕が取ったのは、彼女の手をぎゅつと握ってあげる事。

「それに、今日のえーりんは僕の元カノのリンネでしょ?だったら…立場を忘れてしまなきゃ…ね?」

僕の言葉を聞いたえーりんは、花が咲いたような笑顔で——

「碧…:うん!なら今日は、きちんとエスコートしてよね?」

そう言って僕の腕に抱きついてくる…:ちよ?!胸の感触が腕に?!
というか腕が完全に胸で隠されてる?!

「え、えーりん?!流石にこれは恥ずかしいから離れて…」ダメ…:なの…?
?…:はあ…:分かったよ…:じゃあ行こうか?」

「うん!」

そうして二人は寄り添いながら人里の中に入っていく。

人里に入って少しして…:うん?気のせいかな?

そして、呉服屋や装飾品屋を回り、今は再び表通りを歩いているのだが…:。

「ねえ碧…:なんだか私達…:注目を集めてないかしら?」

えーりんも気が付いてたみたいだ。

「そうだね…:うーん、そうだ。あそこのお団子屋に入ろう。丁度休憩もしたかったし…:いいかな?」

「ええ、私も少し疲れていたから…:丁度いいわ。ふふっ♪ありがとう、碧…」

うつ、さりげなく気を遣ってみたけど…:バレバレだったみたいだ…:…:まだまだ精進が足りないなあ。

そして、僕達は近くにあったお団子屋に入っていく。

幸い席も空いていたので、ゆっくりできる奥のスペースに座らせて

貰った。

「ふう…それにしても、やっぱり碧って注目を集めやすいのねえ」
へ？僕？

「いやいや、普段はこんなことないから！というか今日のは間違いないくえーりんのせいだから！」

そうしてお互いが主張する中、団子屋の店員は思った。

あんた達二人が目立ってるんだよ……と。

二人とも変わった服装…そして、二人とも人目を惹くような美少女（のように見える）…注目されないはずがない。

そして、注文した団子とお茶のセットが届いたんだけど、ここで――

「ねえ碧。せつかくなんだし食べさせ合いつこさせない？」

「はい？……え？……食べさせ合いつこ…？」

「ええ…誰かに食べさせて上げることはあったけど、食べさせて貰う事ってなかったし……それに…デートならこれをしなきゃって……ダメだった？」

流石にそれは恥ずかしいんだけど……――

「お願い…このお団子だけでいいから…ね？」

そんな顔をされて断れるわけないじゃないか……。

「分かったよ。それじゃ…あーんして？」

「むう…なんだか慣れてる？まあいいけどさ…あーん……んむんむ……ん〜♪おいしく♪こんな美味しいお団子食べたの初めてだわ♪」
なんだろう……えーりんの無邪気な笑顔を見ると、心が温かくなる。

「じゃあ次は私の番ね？…はい…あーん」

「あーん……んぐ…んぐ…ふう……うん、恥ずかしいけど…照れるね
／／／

そんなやり取りを店の奥……人目に付かない場所ですばらく続け

ていた。

結局全ての団子を二人で食べさせ合っただけだね。

それから人里を離れ、えーりん以案内されるまま移動し、霧の湖へと来た。

普段にも増して人気のない場所を選び、目の前に広がる湖を、二人並んで眺める。

夕焼けを浴び、その湖面には煌びやかな光が、波によって散りばめられ、とても幻想的な雰囲気を出していた。

「今日はありがとう、碧」

僕の手を握ったまま、視線は湖を見ながら話す。

「本音を言えばね…こんなデートに憧れていたの…」

そして語り始める――

「私の家系はね…代々続く薬師の家系だったの。だからかな、子供の頃からいつも自分の家でひたすら薬学の勉強をさせられていたの」

「それから、宮廷へと使えるようになり…月へ行つてからは……いえ、なんでもないわ…」

多分、僕には想像できない事が沢山あったんだろう。

そして、暗い雰囲気を振り払うように立ち上がり――

「じゃあ、今日一日付き合ってくれた最後の締め…。私が作ったこのチョコレート…受け取って頂戴」

夕日のせいか顔を真っ赤にしながら、僕にチョコレートを差し出してくるえーりん。

「その……こういう経験も、今までしたことが無かったから……お願いします…／／／」

僕は立ち上がり、そのチョコレートを受け取る。

「ありがとう、えーりん。大切に…食べさせて貰うね」

そして、少しの沈黙の後…嬉しそうに笑顔を浮かべたえーりんが僕に近づいてくる……？

「ありがとう、碧…これは私からのお礼…」

そのまま抱きつかれ、顔を掴まれ…え？これってひよつとして…キスされようとしている？

「ちよ?!えーりん?!これ以上は流石にマズイから!」

しかし僕の顔を固定する彼女の手の力は緩むことが無く…そのピンの唇を真っ直ぐに僕の方へと向けてくる。

あと10cm…そこで異変が起こった。

気のせいかな。えーりんの顔が上に行ってる？

いや、違う…体が元の大人の姿に戻ろうとしているんだ。

えーりんも目を瞑っているので気が付かない。

そして、えーりんの体が元に戻ると同時に、その音は聞こえた。

(ビリィッ)

その音と同時にえーりんの着ていた衣類が全て脱げ落ち…目の前には一糸纏わぬ彼女の姿が。

そして音に気が付いたえーりんは目を開け、自身の姿を見てフリーズした。

数秒の沈黙…そして――

「ひにゃあああああ?!」「むぐう?!」

とても可愛らしい悲鳴を上げると共に、えーりんは僕に抱きついてくる。

いや?!なんで?!てか肌が…生の胸が顔に?!

身長差のあるえーりんに抱きつかれたら、こうなって当然。

僕は、急いで離れようともがくが…。

「むぐっ!むー!むー!!」

「んひゃん?!み、碧…それ、だめえ…ひゃん?!」

逆効果だった…。

これはもう、えーりんが落ち着くのを待つしかなかった。

そして裸のえーりんに抱きしめられて少しの時間が経った…。

正直かなり辛い…顔を挟むのは柔らかくて暖かい感触の巨大なモノ。

そして、えーりんからもとてもいい香りがしてクラクラする。

これはマズイと思っていると……。

「ご、ごめんなさい…私つてば慌ててしまつて…えっと、ちよつと服を直すから目を瞑つてて頂戴…／＼／」

そして、離れていく人肌……正直かなり名残惜しいけど…いや…やめよう。

「ごごそと音が聞こえてきて——

「み、碧…もう良いわよ…」

そして、目を開けると……ぶっ?!

「え、えーりん?!なんでそんな格好に?!」

そう…今のえーりんの格好は破れた服を胸元と下半身に巻きつけただけのもの、正直目のやり場に困る。

「仕方がないでしょ?!どう頑張つても入らないんだから!それよりも、誰かに見つかる前に急いで診療所に帰るわよ!」

そういつてえーりんは僕を抱きかかえる。

「え?!ちよ?!」

「最高速で飛ぶから舌を噛まないでよ!」

思いつきり抱き寄せられる。

うわっ…また柔らかな感触が…／＼／

そして、高速で…かつ誰にも見つからずに診療所へと無事に帰ることが出来た。

うん…見られなくて良かったよ。

そして着いたそのまま部屋へと駆けこむえーりん。

僕はとりあえず別の部屋で待たせて貰う事にした。

「ふう…しかし、最後の最後で凄い展開だったなあ…」

薬の効果が切れて…なんて、マンガの中だけだと思つてたけど…なんて思っていると、えーりんが部屋へと入つて来た。

「えっと…その、色々ごめんなさいね…」

恥ずかしそうにするえーりん。

「まあ…あれは流石に予想外だったから…」でも、しっかりと見たわ

よね?」…ごめんなさい…見ました…」

いくら事故だろうと女性の裸は安くはない。

「本当にごめんなさい…。できる謝罪なら何でもしますから…」

すると悪戯な笑みを浮かべるえーりん——なんだろう、嫌な予感がする。

そう言えば出がけに、紫さんから気を付けるようにって言われてたけど……。

「碧。謝罪の方法は一つだけ……責任を取って、私を…その…お嫁にして頂戴♪」

「ええっ?!いや、流石にそれは!」嘘…だったの…。なんでもするって言ったのに…」…いや、確かにするって言いましたけど?!」

「私の裸ってそんなに貧相だった?…そう、やっぱり碧の好みじゃないから…くすん…」

「いやいや?!そんなことないよ!えーりんの裸はとっても綺麗だったし、何より魅力的だったから…」

「なら、決まりね♪これから私は、あなたのお嫁さんを名乗る事にするわね♪」

「……はあ…えつと…えーりんがそれで良いなら……大事にします」その答えに満足したえーりんは——

「やったあ♪よろしくね…旦那様♪」
と言って僕に抱きついてきた。

余談だが、最初に診療所に倒れていた時から、薬の作用の切れる時間に至るまで、全てえーりんの計算のうちに入っていた。

これが月の頭脳の無駄に有効な無駄な使い方である。

本人が満足しているから良いのだが。

なお、この後パルスイや紫を巻き込んでもう一悶着あったが、全てえーりんの策略により解決してしまった。

これからどんな物語が紡がれていくのか——

それはIF……有り得たかもしれない話——。
歴史に埋もれた一端の出来事。

番外編 バレンタインデー〜古明地さとりに編〜

僕は――

「地霊殿に……さとりにさんに会いに行こうと思います」
すると紫さんから――

「……あらっさとりに？それは何故かしら？」

不思議そうに、こちらを見てくる紫さん。

「理由ですか？まあ地霊殿なら、そのままパルスィさんの家にも行けますし、さとりさんは僕とパルスィさんの事を良く知ってますから」
すると顎に指を当てて考える紫……何かをブツブツと言いながら……――
「なるほどね。なら、さとりによろしく伝えておいて頂戴」
そして紫さんは部屋へと帰っていく……さて、こっちも準備をしないとな。

そして紫は……――

「さとりになら変な事はしらないと思うのだけれど……まさかね？」

と、のんびりとお茶を飲みながら思っていた――

さて、準備も出来たし……あまり待たせる訳にはいかないから行く。
う。

そして、スキマを潜り地霊殿へと向かう――

さて、入り口に来たけど……いつもならお隣さんが迎えに来てくれるんだけど……いないな？

すると陰陽玉に通信が入り――

「はい……あ、さとりさん。地霊殿の前まで来たんですけど……」

『あら、来てくれて嬉しいわ。そのまま客間まで来て頂戴』

そのまま通信が切れる――ふむ、行ってみるか。

言われたままに地霊殿へと入っていき、中へと進んで行くのだけど……。

「あれ？今日はペットを一匹も見かけないけど……どうしたんだろう？」

そして客間の扉の前に来てノックをする

(コンコン)

『あ、碧かしら？どうぞ入ってきて頂戴』

促されるまま扉を開けると――

「あちやー……来ちゃったかあ……」

と、うなだれているパルスイさんと。

「ふふっ♪これで賭けは私の勝ちですね♪」

と、笑顔を浮かべるさとりさん……え？？どういう事？

全く状況が飲み込めない中、さとりさんがこちらに来て――

「ようこそ碧さん。えつと……そちらのソファーに掛けて下さい。それから、説明させて貰いますね？」

そしてさとりさんが今の状況を説明してくれた。

なんでもさとりさんとパルスイさんの二人で賭けをして、さとりさんの誘いを受け、地霊殿に来たらさとりさんの勝ち、誘いを断るか後日に後回しにしたらパルスイの勝ちというものだった。

そして、その景品なのだが……。

「これで碧さんには私の作ったチョコレートを最初に食べてもらいますからね♪」

と嬉しそうに言うさとりさん。

「はあ……敗者は大人しく従うわ。碧の初めてのバレンタインチョコレート……食べさせてあげたかったわね……」

明らかに落胆しているパルスイさん。

「そうとは知らずに、ごめんね……僕もパルスイさんのチョコを楽しみにしてたんだけど……」

「いいわよ。さとりには色々借りもあるし、誘われたら無下には出

来ないから仕方がないわよ」

「フオローしてくれるパルスイさん……うん、相変わらず出来た彼女だ。」

しかし、そんな状況を楽しむようにさとりさんが――

「ふむ…で、本音はどうですか？」

それを聞いたパルスイさんは一度俯き――

「悔しいに決まってるでしょ！家族の紫さん達ならともかく、何で初バレンタインで彼女の私が最初にチョコをあげれないのよ！おかしいでしょ!？」

ムキーっ！といった感じで怒るパルスイさん。

そしてそれに対して――

「ふふっ♪そんな顔してたら碧さんに嫌われてしまいますよ?」

二人とも、相変わらず仲が良いなあ…。

「という訳で碧さんには私からのバレンタインチョコを食べて貰います」

隣から、妬ましそうな視線を向けてくるパルスイさんが怖いが…。

「えつと…じゃあ頂きます。それで…チョコレートは…?」

するとさとりさんは箱を取りだし、それを開ける。

「おお?!これって!」

「ふふっ♪驚いて頂けましたか?」

そう、箱の中身に入っていたのは何とトリュフチョコ、見てるだけでも美味しそうだ。

この出来にはパルスイさんも感心していて、目を見開いていた。

「さて、じゃあ早速食べて頂きましようかね」

そう言つてトリュフチョコを一つ持ち、僕の目の前へやつてくる――

「碧さん…はい、あーんして下さいね?」

「へっ?!いや、でもそれは……」

心配になりパルスイさんの方を見ると……。

「気にしなくて良いのよ……賭けに負けたのは私なのだから……」
と悔しそうにしていた。うーん……やっぱり悪い事をしてしまったなあ。

「さて、という訳ですので……はい、あーん」

「……あーん……んぐんぐ……んっ？」

チョコレートを食べるとほんのりとした苦味と、今まで食べたことの無いような甘み。

「何これ、美味しすぎる?!それに何だろう?少しだけ体が熱くなったような……?」

「碧さん、いかがですか?私としては上出来だと思っておりますが……」

「そうだ、ちゃんと感想を言わないと。」

「お世辞抜きに、とっても美味しいです!……その……変な表現になるかもしれないですけど……怖いくらい美味しいってこういう事なんだなって……」

「ふふっ♪そう言っ頂けて何よりです♪」

すると一部始終を見ていたパルスィさんが……

「……ねえ。そんなに美味しいの?」

「うん、これ……今まで食べたチョコレートで一番美味しいよ!」

「沢山作っていますし……折角なのでみんなで食べてしましましょう」

さとりさんのその言葉に……

「いいの?碧の為に作ったんじゃ……?」

「ええもちろんです。碧さんは大切な友人ですが、パルスィ……あなたも私の……大切な友人なのだから、気にしないで頂戴?」

それを聞いたパルスィは照れくさそうに――

「……あ、ありがと……／＼／」

と小さな声で感謝していた。

そしてみんなでチョコレートを食べ始めたんだけど……――

「何このチョコレート!?美味しすぎるわよ!」

「満足いただけたかしら?」

「ええ。ほんのりとした甘さと、丁度良い苦味…全部が調和していて…とにかくすごいわよ!」

はて?自分の時と味の感想が違うような…?

そしてさとりさんも一口食べる…。

「うん…私の物は苦味と甘みが半々のようですね…美味しい♪」

流石に、それぞれの味の違いに疑問を持った僕とパルスイさんは、さとりさんに聞くことにした。

「ねえさとり。このチョコレートって何か特別な調味料でも入ってるの?」

「食べる人によつて味が変わるなんて…流石に気になるんですけど…」

「ふふっ♪そうですよね。実はですね、このチョコレートを作る時に、翡翠の女将さんから隠し味に特別なモノを頂いたんですよ?」

特別な…隠し味…?

「ねえさとり…それって一体何なのかしら?普通の隠し味程度じゃ、こんな不思議な事にはならないわよ?」

そして、さとりさんが教えてくれる――

「そうですね、このチョコに入っているのは女将さんの秘蔵のお酒で、何でも…飲んだ人によつてその味を変える特殊なお酒らしいのです」

ああ…それでみんなの感想がバラバラだったのか。

それに体が少し熱くなったのも、お酒が入ってたからなんだなあ。
「なるほどね、それなら納得だわ。それにしても本当に美味しくして止まらなくなるわねえ」

「でしよう?…私も初めて食べた時はそうになりましたから」

そうしてみんなで大量にあるチョコレートをどんどん食べていく。

しかし、このお酒には注意する事があった。

実はその事を女将さんは前もつてさとりに伝えていたのだが、碧に

食べて貰えた嬉しさのあまり、さとりは忘れてしまっていたのだ。



それは数日前に遡る――

「あの…女将さん、これは？」

調理場でチョコを作ろうとしていたさとりの元に、大きな瓢箪を担いで来た女将さんが――

「私の秘蔵のお酒です。入れると、それだけで料理が美味しくなる優れものなのですが……」

「……ですが？」

「これはですね、神酒『神殺し』という非常に強いお酒なのです。その名の通り、飲み続ければ神すら簡単に酔い潰すくらい強いお酒です……」

それを聞いたさとりは流石に動揺した。

「…え？それは使つても大丈夫なのでしょうか？」

しかし、さとりの心配を余所に女将さんから――

「ええ、強いですが…依存性や副作用、二日酔いなどには一切なる事がなく、むしろその逆…健康促進や滋養強壮。それから…このお酒をお風呂のお湯として使えば、それだけで肌が瑞々しくなります。これが神酒と言われる由縁でもあります」

「そんな効果が?!…あの…女将さん…お願いがあるのですが…」

「ふふっ…分かっていますよ。当日、浴槽で使う分のお酒は用意いたします」

それを聞いたさとりは心の中で歓喜していた。

「その代わり、先程も申しましたが…非常に度数が強いのでチョコレートに入れて食べるのであれば…そうですね、人間の碧さんでしたら3つほどで止めておいて下さい。あ、さとり様でも7個も食べると完全に酔いが回ってしまいますので……」

その時、さとりは神酒の効果を聞いていたのだが、同時にそれを食べた碧の喜ぶ顔を浮かべていたので、実は半分くらいしか聞いていな

かった。



そして、今…三人の食べたチョコレートのはそれぞれ10個をゆうに超えていた

この神酒…単純な度数で言えば、チョコレート1個辺り、90度のお酒をコップ一杯分飲んでるレベルと言えば分るだろうか？

そんなレベルの物を大量に食べればどうなるかは分かるだろう…。

今ここに――

三人の酔っ払いが誕生した。



先程までのお茶会のような雰囲気から一転――
その場は酔っ払いの語り場になっていた。

「ねえ、パルスィ？…いつつもいつつも…二人の仲の良さを見せつけられるう、こっちの身にもなっちゃようらいよね」

呂律の回っていないさとりがパルスィに絡む。

「なあにい？妬いてるのお。でもお、さとりも美人だからあ…男なんてよりどりもどりじゃにやいのよお」

こちらも同じくへべれけになっているパルスィ。

そしてパルスィの言葉に、さとりは言い返す

「わらひが好きにやのは…みどりさんだけなのよ！そう思うならみどりさんを渡さないよお」

そう言っつて碧を自分の胸元に抱き寄せるさとり。

因みにこの段階で碧は思考が上手く回っておらず、置物のようによーっと座っていた。

「ふにゆ……いい匂いがする〜」

甘えるように、さとりに抱きつく碧を見たパルスィは――

「あんた〜！にやにしてんのよ！みどりはねえ…わたしのものなのよ！」

そうして今度はパルスィが碧を自分の胸元に抱き寄せる。

普段から抱きなれた感触に碧は――

「ん〜…これ、すき〜…もふもふ〜…」

「んひゃん?!…も〜、みどりったらあ…さとりが見てるのに大胆ねえ〜」

わざとらしく見せつけてくるパルスィにカチンと来たさとりは――

「そつちがその気ならあ…えいつ！」

着ていた上着とブラジャーを脱ぎ捨て、再び碧を強奪。

「ふにやあ…すべすべして、やわらかい…ん〜♪」

肌のダイレクトな接触により、碧の顔がふにやつとした笑顔になる

(注意：碧は生の胸に触れているという自覚がありません)

「……ふっ…(どやあ?)」

さとりのドヤ顔にイラツときたパルスィが、今度は対抗して脱ぎ始める。

「わたひの方が…気持ちいいんらからねっ！……ふう…どうよ？この大ききあ〜」

そして再び碧を奪い返すと共に自身の胸へと顔を押し付ける。

「ほおら、みどり〜。大好きなやわらかおっぱいですよ〜♪…(ちらっ)…くすっ♪」

自身の方が胸が大きいと主張するように、ドヤ顔で返すパルスィ。

そして追い打ちとばかりに――

「さあ、いつもみたいにい…好きにしてもいいのよ〜♪」

そう言いながら、マシユマロのような「それ」で碧の顔を挟んだりし始める。

それを更なる挑発と見たさとりは――

「あくもう！パルスィ……あなた、いつまでそうしてるのよ！こうなったらあ……」

そして、さとりが取った行動は、パルスィと向かい合うように碧を挟み込み――

「大ききわあ……んしよ、負けるけど……形はわたひの方がきれいにやのよ……！」

そう言つて碧の顔の半分は乳房を押し付ける。

ここまで来ると、最早単なる痴女なのだが、それをさせるのが神酒の魔力……神殺しの名は伊達ではないのだ。

「う……ん……すべすべ……（すりすり）」

子供のよう甘える碧

「んっ……はあ……みどりつたらあ……。やっぱいい、わらひの……おっぱいが好きなのね……」

そして再び勝ち誇るような顔をするさとり。

二人の目が交差し、お互いに火花が散った。

これは負けられない女の戦い――（ただし酔っ払い）

「ふっ……いいわよお。こうなったらお風呂場でちよくせつたいけつよ……」

「いいですねえ……今日のお風呂はとくべつなんれふよ？なのでえ……こちらにも負けませんですよ……」

そして酔っ払い二人は、半ば寝ぼけている碧を引きずりながら浴場へと向かった。

脱衣所にて――

さとりとパルスィは黙々と服を脱いでいた。

だがここにきて、二人とも若干酔いが醒めてきていた。

しかし、あそこまで啖呵を切ったからには後に引けず……とりあえずいそいそと服を脱いでいく。

（どうしましょう……今更ながら私ったら凄いな……）

そんなパルスイの思考を遮るように、魔の手が伸びてくる——
「(もにゆん)……んひやああ?!え?!何?!(むにゆむにゆ)……ひゃんっ?!つてさとり!」

そう、こっつそりとパルスイの後ろに回ったさとりがそのたわわな果実を揉んでいたのである。

「ちよ、ちよつと?!何してるのよ!」

しかも性質が悪い事に……上手いのである。

(なんでこんなに上手いのよ……このままじゃ……くくつ／＼)

因みにその理由として、大きくするために自分で揉んでいるからなのだが……。

「んくつ……ちよつと……さと……んひやつ?!」

「……むう……本当に大きいですね……何故ですか……私の努力は報われていないのでしょうか……妬ましい……」

(んんっ……こ、これ以上は……ダメえっ!)

そして脱衣所に響き渡るパチーンという音。

「きやうん?!……いったく……」

額を抑えてうずくまるさととり……そう、パルスイは、幽香直伝のデコピンを発動させたのだ。

「はあ……はあ……さと……あんた、いつから色情魔になったのよ!」

すると涙目で立ち上がり——

「うう……ちよつとした冗談じゃない……。あくもう、痛かったわ……」

「まったく……自業自得よ」

「ふう……それにしても、いつも碧にもまれているからそんなに大きくなつたのかしら?」

「なッつ?!……ち、違うわよ!……たぶん……」

そして、服を脱ぎ終わった二人の視線は脱衣所の椅子へと向かった。
そこには、ぼんやりとした碧が座っていた。

「ねえ……寝てるわけじゃないから無理やり引っ張って来たけどさ……こ

れからどうするのよ?」

「ん〜:さつきも言いましたが:折角の特別なお風呂なので、碧さんにも堪能してもらいたいのですが…」

するとパルスィが動きだし——

「なら話は早いわ。さつきと脱がせてさつきと入りましょう」

そうしてパルスィが碧の服を脱がしにかかったところで——

「ちよ、ちよつと待つて頂戴!?!え?脱がすんですか?」

慌てるさとり。

「何よ?脱がさないとお風呂に入れないでしょ?ほら碧上着を脱ぐから手を上げてね:んしよつと…」

さとりが慌てふためいている間にどんどん脱がされていく服。

そしてぼんやりとした碧は、二人と同様に裸にされる。

「こ、これが:碧さんの:裸……きやあ:／／／」

手のひらで目を隠しながらも、指の間からチラチラと碧の裸を堪能するさとり。

「なにやってんのよ:アホなことしてないで入るわよ?」

そして、パルスィが何事もなかったかのように碧の手を引き、お風呂場へと連れて行くこうとすると……

「ねえ:パルスィ。あなた、なんでそんなに慣れてるの?」

すると一瞬止まり——

「:えつと:二人で飲んでて、碧が酔い潰れた時はいつも私が着替えさせてるからよ?」

しかしその答えに納得していないさとりは——

「それだけじゃないでしょう?」うつ:「:あなた達:もう一緒にお風呂に入るのが当たり前になってるんじゃない?」

その言葉を肯定するかのように、顔を赤くしてそっぽを向くパルスィ。

「はあ:羨ましい:良いですよ。どうせ私も今から一緒に入るんですしね」

そして、二人は碧の手を引きお風呂場へと入っていく。

「うわあ…何これ…お湯が金色に光り輝いてる……」

その光景に驚きを隠せないパルスィ。

「ふふっ♪どう？女将さんからお風呂用に神酒を貰ってたの…入れるのは今日だけだから…じつくりと堪能して頂戴？」

「その…今更だけど、お酒のお風呂に入っても大丈夫なのかしら？」

「ええ、もちろん大丈夫よ。むしろ健康促進や美容の効果があってすごいんだから！」

その言葉に反応するパルスィ。すぐにでも入ってみたい…しかし

「まあ…まずは身体を洗ってからね…とりあえず碧を座らせて…と」

ぼんやりとしている碧は――

「ん…何するの？」

「身体を洗ってあげるから…ほら、まずは髪を洗うから、目を瞑って頂戴…そう、いい子ね…」

甲斐甲斐しく世話をするパルスィ…一方、それを見ていたさとりは――

「やっぱり…慣れ過ぎじゃない…。はっ?!ひよっとして…いつも…?」

「なっ?!くくくっ／＼…悪い？恋人なんだからお互いの裸なんて見慣れてるし、身体の洗いつこなんて日常茶飯事よ？ふふっ…羨まし〜」

その言葉を聞いたさとりは――

「その挑発…乗らせて貰うわ……」

と言ってタオルを持って碧の前へと居座る。

「え？ちよつと？何をするつもりよ？」

「折角の機会ですから…私も慣れさせて貰います…えいつ！」

そう言つて碧の身体を洗い始めるさとり。

普段ならひっぱたいてでも止めるパルスィだが…お酒が抜けきつておらず、判断の鈍った今は…

(まあ…いいかしら?)

くらいにしか思つておらず、そのまま頭を洗い続けた。

「んしょ…んしょ…つと…ふう…（これが碧さんの身体…白くてきめ細かい肌…ウエストも細いですし…）」

自分の体型と見比べても、細いそれを羨ましく思いながらも…視線はある一部へ——

「うわあ…（これが碧さんの…流石にここは女性とは違いますね…）
…っ／＼／＼」

そしてふと思う。

身体を洗うということは、当然そこも洗うという事…。

「（え？洗ってもいいんでしょうか？というか、どうやって洗えばいいのでしょうか？）」

混乱するさとり。それを見たパルスィは悪戯な顔で——

「さとり「ひゃい?!」くすっ♪…ちゃんと綺麗に洗って頂戴ね？」

普段なら絶対にそんな事を言わないパルスィも、流石の神殺しの効果には勝てなかった。

そして許可を貰ったさとりだが、そこをじっくりと見ようとしては目を反らし…を繰り返していた。

「（うう…無理です。どうすればいいんでしょう…）」

「あらあら？情けないのねえ…私が代わるから…ほら、碧足を開いて…ん、じゃあ洗うわよ…」

そう言いながら手際よく洗っていくパルスィを見ながら、さとりは…——

「（くっ…これが彼女として付き合ってきた時間の差なのですか…）」

そして、碧の身体を洗い終えたパルスィは、沈まないように碧を湯船へと浸ける。

「さ、じゃあ私達も身体を洗って、湯船に入りましょう」

そう言っさとりの隣で身体を洗い始めるパルスィ。

さとりは思った——

碧と付き合い始めて、パルスィは本当に綺麗になった。

スタイルも良くなったし、何より顔が明るくなった。
羨ましい…そんなことを思いながら、自分の胸ももつと大きくなら
ないかと考えていた。

そして身体を洗い終えた二人は、碧の両隣へと座る。

「このお湯…いえ、お酒かしら？…本当にすごいわね…」

パルスィが感嘆するのも無理もない。

湯船に浸かって少しして、身体の奥から力が湧いてくるし、何より
女性として嬉しいのが、肌のハリや瑞々しさが全然違うのだ。

「本当に…女将さんには感謝ね…」

そして、二人は沈黙する。

天井から滴り落ちてくる水滴の音だけが響き渡る静かな世界――

「ねえ…パルスィ」

「何かしら？」

「あの時…あなたが碧さんと付き合う前…私は言いましたよね？私は
…彼の事が好きだと」

「ええ…聞いたわ」

「あの気持ちは…今でも変わらず…いえ、さらに強く…碧さんの事
を思うようになりました」

さとりの言葉を黙って聞くパルスィ。

「でも、碧さんはあなたと付き合っています。…ですが、それでも私
は…碧さんと一緒に生きたいと…生涯を添い遂げたいと思っていま
す…」

「さとり…」

「そして…パルスィ…あなたともです。「へっ？」あなたは私大切な友
達…いえ、親友以上の存在です」

今までの酔いの回った目ではなく、真摯な目でパルスィを見る。

「だから私は…パルスィ…あなたと碧さん…三人での明日を見たい…
幸せを見つけないんです」

その言葉を聞いたパルスイはさとりと目を合わせる……。パルスイが口を開こうとした、次の瞬間。

「ん〜ダメだよ、二人とも……けんかしちゃダメ……」

トロンとした瞳の碧が、二人の間から言う。

それを聞いた二人は目を丸くし……そして――

「くすっ♪」

「ふふっ♪」

「全く……碧だったら……。さとり……あなたの想い……十分に伝わって来たわ。私もあなたの事は大切に思ってる。それこそ……家族みたいに……だから、これからは幸せになりましょう？ 私達……三人で……ね？」

「パルスイ……ありがとう……私の大切な人……ぐすっ……」

「こらこら、泣かないの。そんなんじやダメよ？ 幸せになるために……支えていきましょう？ 少し頼りなくて……可愛らしい……私達の旦那様を……ね？」

それから二人は、碧を挟んで抱き合い、暫くの間……湯船の中で語り合った。

そして、お風呂から上がった三人はさとりの寝室へと向かう。

「お風呂の影響かしら？ 身体の芯から火照りが収まらない……」

「パルスイも……よかった、私だけじゃなかったのね……」

「そういうえば、あのお風呂って他にも効能があったの？」

「ええ……その……女将さんの話だと……殿方に対して絶大な効果を発揮する……と」

「ああ……それでお風呂から出た時から、あぁなつてたのね……」

二人の視線はベッドで横になっている碧へ……いや、正確には下半身の方へ……。

「あのお酒には……その……夜の営みを円滑にする効果もあるそうなので……それで私達も火照っているのかと……／＼／＼」

「ふうん……まあ碧もあんな風になっているんだし……」

そう、お風呂から上がった三人は、服を着ず……全裸のまま寝室に入った。

つまりはそういう事だ。

臨戦態勢の碧と、火照りを通り越して発情の域に達している二人。

「さあ…夜はまだまだ始まったばかりよ♪」

「私の初夜…お願いしますね…♪」

そして二人はベッドで寝ている碧の元へ向かって行った。

その眼は肉食獣のそれを彷彿とさせた。



顔に当たる光…ん…もう朝なのかな…?

起きようと思いい体を動かそうとするが、両隣に感じる暖かな感触がそれを阻止する。

そして碧は左右を見る…右にパルスィさん…左にさとりさん…
そして二人とも裸。

既に起きていた二人から――

「あら?ようやく起きたのね碧?」

「ふふっ♪可愛らしい寝顔でしたよ?」

これは…もしかしなくても……。

「昨日は…その…優しくして頂いてありがとうございます／＼」

「お酒のお陰かしらね?初めてであそこまで乱れるなんて「ちよつとパルスィ!」…くすっ♪」

だんだんと思いだしてきた。

みんなでチョコレートを食べ、酔いの回った状態でハメを外してはしゃいで……。

お風呂に入って身体を洗われて……。

さとりさんの告白を聞いて……。

そして……この部屋で…結ばれたんだ…／＼／＼

「さとり、身体は大丈夫かしら?」

「少し違和感がありますが…まあ…これも幸せの一つかと…／＼／」

幸せそうなさとりさんの顔…見ていっただけで、こちらまで幸せになっってくる。

「ねえ碧。「はい?!」…そんなに驚かなくてもいいでしょ。全部…思い出したかしら?」

ニヤニヤとこちらを見てくるパルスイさん。

むう…これは完全に分かってて言ってるな。

「しつかりと…お風呂に引きずられていった事も、この部屋に裸で連れて来られたことも、パルスイさんが一番乱れて「わあー?! ストップ! お願いだからストップ!」…とまあ全部見てたんで、大丈夫だよ」

「そう、それなら良かったわ。それとね、碧…さつきあなたが寝ている間にさとりと話したんだけど…」

「ん? どうしたの?」

「あのね…これからは夫婦三人で、この地霊殿に住もうと思うのよはい?」

「実は、さとりのペット達がみんな灼熱地獄の方へ転居してしまって、部屋がだいぶ余るみたいなのよ…それで…」

「妹もいるのですが殆どここに帰ってくることは無く…一人で住むのも寂しいですし…その…お二人さえ良ければなんですけど…」

「ねえ碧…答えは決まってるわよね?」

そんな顔をされたら答えは一つしかないじゃない……

「うん。一緒に住もう。この地霊殿に…ね?」

「碧ならそう言ってくれると思ったわよ」

「ありがとうございます。それと…紫さんには私達から改めてお話をさせて貰いますので…それと…」

はにかみながら…彼女は告げる――

「これから、よろしくお願いします…私達の…旦那様♪」

恋人と親友…傍から見たら不思議な関係かもしれない

それでも…僕達三人なら…——
きつと、幸せな明日を掴むことが出来る…そんな確信があつた。
だって…こんなにも素敵なお嫁さんがいるんだから
ね——

これからどんな物語が紡がれていくのか——
それはIF……有り得たかもしれない話——。
歴史に埋もれた一端の出来事。

番外編 バレンタインデー〜水橋パルスイ編〜

僕は――

「このまま家で、パルスイさんを待ちます」

すると紫さんから――

「ふふっ♪やっぱり碧君ならそう思うと思っていたわ」

嬉しそうに、こちらを見てくる紫さん。

「僕が幻想郷に来て、初めてのバレンタインデー。他の方には申し訳ないですが、大切な彼女からのチョコを一番に食べたいんで」

「そう。いい彼氏さんね♪それじゃあ私は部屋に戻るから、移動する際は教えて頂戴」

そして紫さんは部屋へと帰っていく……さて、こっちも準備をしないとな。

部屋に帰った紫は思った。

「いい出会いがあつて良かったわ……この分だと、二人の子供の姿を見るのもすぐなのかしら?……そうなる私は何て呼ばれるのかしら?……碧の保護者……まあ母親みたいなものだから……え?……おばあ……いやいや……それは流石に……」

と、一人で悩んでいたそう。

準備をしていると、パルスイさんから予定よりかなり早い時間に連絡が来た。

今から自分の家に来てほしい、との事だったので準備を済ませ直ぐに向かう。

「さて、予定よりかなり早いな。良かった、他の人の所に行かなくて……さて……」

そして入り口をノックすると中からパルスイさんが出てきた。

「あ、パルスイさん。おじやま「みどりく」むぐつ?!」

あれ?パルスイさん…だよな?

この声と柔らかい感触は間違えようもないし——

「ぶはっ…:…こんにちは、お呼ばれされたから来たけど…今日は随分と激しいお出迎えだね」

すると子供のような無邪気な笑顔で——

「ええーそれだけ、あなたに…碧に会いたかったから♪んちゅっ…」

そのまま顔を掴まれキスをしてくる。

???

え?何か悪いものでも食べたの?

でもこんな積極的なパルスイさんもいいなあ。

そして二人で家へと入っていく。

いつものように居間の扉を開けると、そこには——

パルスイさんが居た…:…え?なんで?僕の隣にいるのは?

すると僕の隣にいたパルスイさんは可笑しそうに笑い、ソファーに座っていた方のパルスイさんが、ぷくーつと可愛らしく頬を膨らませてジト目でこちらを見てくる。

ああ…把握した。

そういえば前にパルスイさんが二人になった事があった。

あの時は抑えきれない嫉妬の感情がスペルカードに移り、それが具現化した。

無事に解決し、その一件以来もう一人のパルスイさんが出てくることは無かったから、あまり気にしてなかったんだけど…:…。

「分身のパルスイさん…だよな?えつと…何で出てきてるの…?」

『あらあら、バレちゃったわね♪』

楽しそうに言う隣にいるパルスイさん(分身)。

そして、ソファーに座っているパルスイさん(本体)に聞いてみる

と……。

「えつとね…実は今朝、あなたの為にバレンタインの準備をしていたんだけど…」

『楽しそうだから、出て来ちゃった♪』

「違うでしょ!」

『ごめんなさい♪実はね、碧の為に頑張る私(本体)を見て、私も何かしてあげたかったのよ…あなたには色々と助けられたから…迷惑だったかしら?』

そんな風に言われたら何も言えないよ。

パルスイさん(本体)も同様だったらしく、やれやれといった顔で頷いている。

「まあ、そんな訳で二人で話し合ったの。それで、やる事と準備が出来たから碧を呼んだのよ」

『もし、どこか他の女の所に行ったら、ちよつとだけ大変な事になってたかもね♪』

ああ…他の人の誘いに乗らなくて良かった…本当に良かった…。

「まあまあ…今、こうして来てくれているのだからいいでしょ?」

『まあちよつとした悪戯よ♪それに、来てくれたからキッチンとご褒美を上げないとね♪』

ご褒美?なんだろう…気になるな。

「うん、じゃあちよつと着替えて岩盤浴スペースに来てくれるかしら?」

パルスイさんの家には備え付けの岩盤浴が出来るスペースが置いてある。

(実はかなり広い家なんだよね)

「分かったよ。えつと…いつもの服でいいのかな?」

「ええ…着替えたら寝て待っていて頂戴?」

『ふふっ♪楽しみにしててね♪』

そして準備の為、二人は出ていき…僕も着替えを済ませて横になる。

「ふう…今日は少し温めだけど…相変わらず気持ちいいなあ。でも今日は何をしてくれるんだろう?」

すると入り口が開き、二人のパルスイさんが入ってくる…来たんだけど…。

「お、お待ちせ…／／／」

『ふふっ♪この衣装…どうかしら?』

そう、今のパルスイさん達の衣装は――

本体が白スクで分身は旧スクを着ている。

開いた口が閉じなくなった。

「うう…な、なによ…何とか言いなさいよ…／／／」

照れくさそうに身体を隠す本体。胸元に書かれたネームの「ぱるぱる」が歪んで目のやり場に困る。

『ねえ、感想は?似合ってない?』

スク水に抑えきれない豊富なボディを堂々と晒し、胸を張る分身。

あまりの予想外の衣装に、驚きながらも…何とか声を出す。

「えっと…二人とも良く似合ってます…けど、その衣装は?」

「えっとね…今日の為に、紫さんから色んな服を用意して貰っていたの」

紫さん…グツジョブです!

「ねえ、パルスイさん『何かしら?』…うっ…えっと本体の方のパルスイさんで…」

「二人いるからややこしいわね…どうしましょう?」

『あら?簡単でしょ?私そのままパルスイさんって呼んで、本体の方をパルスイって呼び捨てにすればいいじゃない』

「な?!ちよ、ちよっとそれは流石に…『じゃあ逆でもいいのかしら?』

…いいえ…」

『まったく…素直になりなさいな。本妻のあなたが、いつまでもさん付けなのはいけないでしょ？それに、私が呼び捨てで呼ばれたら…あなた、嫉妬しちゃうでしょ？』

「うう…流石私…おつしやる通りです…」

『そうそう、素直な事は良い事よ♪』

同一人物のやりとり…見てて面白いなあ。

(でもスク水だけ)

「えつと…じゃあ、パルスイさん『はい♪』…それから、パルスイ…は、はい／＼／」…うう…こつちまで照れてくるね／＼」

二人の距離が、少しだけ近くなった気がする…もしかしてここまで見越してたのかな？

そして、そんな甘い雰囲気を通り切るように――

『全く…いつまでも初心なんだから、もつとすごい事を何度もしてるんだから今更でしょう？』

それを言われ、ゆでだこのように真っ赤になる僕達…。

『はあ…まだまだかしら？それよりも、時間も押してるから始めるわよ？』

そしてパルスイから仰向けに寝る様に指示される。

寝ころぶと、必然的に二人を見上げる体勢になるのだが…そこに刺激的な光景が――

「うう…これは…／＼／」

いつもの服ではなく、スク水という一種のコスプレ…流石にじつと見るのも悪いと思いい目を逸らす。

『ふふっ♪見てもいいのよ？』というか見てくれないと衣装を貰った意味がないでしょ？』

それなら…と改めて見させて貰う。

スク水は本来、高校生くらいまでが着る水着…それを大人の色気のあるパルスイ(と分身)が着る事によって、凄まじい破壊力を出している。

対して、パルスイの方は白スクに慣れていないのか胸元を隠しながら僕の横に来る。

でも寄せられてる分、余計にエロイとは言えない…。

「それじゃあ説明するわね。今から碧にはリンパマッサージをしようと思ってるの」

「リンパマッサージ…？聞いたことはあるけど、体験したことはないからなあ」

外の世界じゃ、あつても基本的に女性メインだったから縁も無かつたし。

『リンパマッサージはね、特製のオイルを使って、身体中のリンパ管を刺激して身体の不純物を流しやすくするの』

「それに碧は冷え性でしょ？この時期は辛いと思つたの…だからね。少しでも解消してあげたらな…って」

その言葉を聞いて嬉しさがこみ上げてくる…。

「二人とも…ありがとう」

「ふふっ♪今日はまだまだ始まったばかりだから…期待しておいてね♪」

そして二人のスク水パルスイさんによるマッサージが始まる。

二人のパルスイはそれぞれ用意してあつた瓶詰のオイルを手に取り動き出す。

パルスイさんは上半身に、パルスイは下半身に来る。

そして胸元と、足裏へとオイルを塗りつけられる。

程よく暖められたオイルは、何というか…不思議な感じがした。

二人の温かい手で、オイルを丁寧に伸ばしていく。

さらさらとした粘度のそれは、二人の手で伸ばされていくたび、その手の温もりを感じられ、触れられた部分が熱くなっていくのを感じる。

「じゃあ始めるわね」

下半身は、まず足裏かららしい。

「自分の身体だから、なまじ悔しいんじゃない！」

『はあ…仕方がないわね…このまま顔を続けるわよ?』

そうして頬やエラの部分を丁寧にマッサージしてくれる。

すると今度は下半身担当のパルスイが――

「――?!…ちよ、ちよつとパルスイ?!何してるの?!」

足裏のマッサージを終えたパルスイの手は、徐々に…もも、太ももと上へと移動していく。

しかし問題なのは、その腕使い…。

マッサージというには、その手の動きは艶めかしく、背筋のぞくぞくがさつきから止まらない。

びつくりして起き上がろうとするが、顔をパルスイさんに抑えられて起き上がれない。

そんな僕の反応を楽しんでか――

「ふふっ♪まだ、時間は早いけど…ここでそういう事を…しちゃう?」

悪戯そうな顔で言ってくるパルスイ。

全く…分かって聞いてくるんだから。

僕は誘惑に惹かれつつも――

「今は、マッサージだけでお願い…お楽しみは、これからなんでしょ?」

「くすっ♪そうね、後で…ね?」

そしてそのまま、パルスイさんは上半身…胸元やお腹周りを。

パルスイは下半身を中心に尻や股の付け根に至るまで、様々な場所をマッサージしてもらった。

特製オイルとマッサージのお陰か、身体がすつきりと…それからポカポカとする。

でも、股関節をしてもらってる時に、局部にギリギリ当たるか当たらないかのマッサージで、正直に言って反応していたんだけど、何とか耐えた…バレバレだったんだけどね。

でも、なんであんなに直ぐに反応したんだろう?

※実は、このオイルには多少の媚薬と塗る精力剤が仕込まれていた（パルスイ作）のでむしろ反応しない方がおかしいのだが。

そして、身体の癒しと目の保養という至福の時間は終わりを告げた。

パルスイに聞いてみると、またやってくれらると言うので期待しておきたい。

マッサージの終わった僕は、再び居間のソファで座っている。何でも、二人とも着替えがあるから待っていてくれと。

まあ女性の着替えには時間が掛かるから仕方がない…それにしても本当にさっきのマッサージは気持ち良かったなあ。

そんな事を考えていると、扉が開いて二人が出てくる。

「み、碧…お待ちせ…／＼／＼」

『違うでしょ？お待ちせしました、ご主人様』

恭しく頭をたれながらこちらを見てくるパルスイさん。

今の二人の服装…それは……。

「メイド…服？」

そう、メイド服なのだ。

パルスイは黒を基調とした、ミニスカートでフリルの多めなデザインの物。

対するパルスイさんは、ブラウンを基調とし、ロングスカートでフリルも少なめな物に伊達眼鏡を掛けている。

「えつと…なぜ、メイド服？」

すると、ミニスカートを隠すように下へと引っ張るパルスイが――

「その…紫さんから、外の世界にはメイド喫茶ってあるんですよ？それをやってみようかなって…／＼／＼」

それを言ったら紫さんは、喜んで衣装を貸し出してくれた。
(さっきのスク水と良い…なぜ持っていたのか…)
そして、そのまま後ろにあったお茶セットを机に持ってきて僕の目の前に置く。

その流れで二人は僕の両隣へと座り――

「それでは……」

『本日は……』

『よろしくお願ひしますね、ご主人様♪』

二人から向けられる笑顔は、とつても眩しかった。

「で、ではご奉仕の方を…『ダメですよ』…へ？」

『そんなことでは立派なメイドになれませんよ？』

このやり取りはいったい…？

『あ、これも様式美ですのでお気になさらず』

何だか本物のメイドさんに怒られそうな気がする……。

紅魔館の廊下にて――

「つくしゅん?!……風邪でも引いたのかしら?……しっかりしませんとね……」

と本職の人が反応していた。

お昼は食べていたので、紅茶とお菓子のクッキーを頂くことに。

『紅茶の方、お代わりはいかがですか、ご主人様?』

「えっと…いただきます…」

『くすっ♪…ではどうぞ…ご主人様♪』

そう言っ手慣れた手つきで紅茶を入れてくれるパルスイさん。

それを一口飲み……。

「…うん、美味しいよ。パルスイ」

『それは何よりです。では次はお菓子をどうぞ』

そう言つてパルスイさんが、パルスイに目配りをする。

「あ、は、はい……えっと……それでは……失礼します……んっ……」

一瞬躊躇いながらも、パルスイがクツキーを手に持ち、口に啜える。
え？この展開はもしかして……？

そのままパルスイの顔が僕の目の前に来て——

「ちよ、ちよつとパルス……んっ?!」

口に、クツキーと柔らかい唇の感触が当たる。

僕の口に半分クツキーを入れ、残りの半分は二人で器用に口の中で分け合いながら食べる。

「んぐっ……うん……んちゅっ……あむっ……ん」

クツキーが無くなり、それでも二人はお互いの唇を貪り続ける。

そして、名残惜しくも離れていく、その柔らかな感触。

「……ぷはあ……はあ……はあ……。いかがですか、ご主人様？」

「あはは、正直ドキドキして味が分からなかったよ……でも……気持ち良かった／＼／＼」

「~~~~~／＼／＼」

そんなやり取りをしていると——

『では、今度はキチンと味わって頂きませんか……あむっ……ろうろ(どろぞ)……?』

今度はパルスイさんの方がクツキーを啜え、こちらに顔を寄せてくる。

眼鏡越しにも分かる、妖艶な微笑み。

パルスイの照れた表情とは一転、どこまでも食らいつくされそうなその緑色の瞳。

そして、触れ合う唇。

『……あむっ……はむっ……ふふっ……んちゅっ、はぶっ、……んじゅるっ……』

先程よりも長く……濃厚なキス……僕の口に残っていたクツキーは、全

てパルスイさんの舌に絡め取られ、そして、その後も口の中を舐めまわされていく……。

脳が痺れるようなキス…例えるならそんな感じなのかな？

それを見ていたパルスイは、啞然とした顔でこちらを見ていた。

そして、パルスイさんの白い手が、僕の胸元を撫で始める。

いや、胸元だけじゃない。

その手はどんどん下へと降りていき、今度は太ももを撫でまわされる。

何故かマッサージの後から身体が敏感になり、一部が完全に反応してしまっている今の状態はかなりマズイ。

※ちなみに、このクッキーと紅茶にも媚薬と精力剤が入っています。

そして僕は思った。

これはメイド喫茶じゃなくて、完全にそっち系のお店だ……と。

そして、慌てて唇を離す。

「——つぶはっ?!…はあ、はあ…ぱ、パルスイさん…?」

するとシユンとしたパルスイさんが——

『ご満足……ただけませんでしたか、ご主人様…?』

と、しなだれ掛かってきながら聞いてくる。

いや、正直かなり嬉しいんだけど……。

「いや…その、かなり満足してます…はい…『よかったです♪』…じゃなくて、これ…誰から習ったの?」

そう、流石に紅魔館のメイドさんはこんな事しないだろうし……しないよね?

となると…誰なんだろう?…さっきのマッサージの件もあるし、心当

たりが多すぎる。

すると、立ち尽くしていたパルスイが――

「あ、えっと……紫さんから、外の世界の本を渡されて……それを参考にしたんだ……ですけど……」

神隠しの主犯……紫さんか……。

「えっと……ちなみにどんな本なの？」

すると、僕にしなだれかかっていたパルスイさんが立ち上がり――

『それは、こちらになりますわ。ご主人様』

と言つて本棚から一冊の本を引っ張り出してきた。

正直あまり、良い予感はないけど、そのタイトルを確認する。

「私が仕えるのはあなただけ……ご奉仕メイドのレッスン日記……」

まあ……いわゆる、大人の本……エロ本だ。

しかもご丁寧にしチュエーションや、展開まで懇切丁寧に書いてある。

これで定価1000円……地味に安い……のか？

まあとにかく言いたい事はただ一つ……。

紫さん……グッジョブです！

なぜか、優しい笑みを浮かべた紫さんが見えた気がするが……多分気のせいだろう。

「まあ……ほどほどでお願い……」

『かしこまりました♪』

楽しそうな彼女達の顔を見ると、何も言えないのが男の性なんです。

「さ、じゃあ次は、こちらへどうぞ？」

そう言つてソファアに座ったパルスイが自分の膝をポンポンとする。

「えつとパルスィ…これって？」

「ええ…膝枕ですよ。さ、どうぞご主人様♪」

そうして誘われるがまま、パルスィの膝に頭を乗せる。

普通に嬉しい行為なのに、今日はさらにメイド服という素晴らしい特典つき…抗えないです。

頭を乗せると、ミニスカニーソという姿なので、必然的に絶対領域にも顔が当たる。

「なんだろう…気持ちいいし…いつもと違う…いい香りがする…」

「ええ。今日だけ特別な香水を付けてみましたの、喜んでいただけましたか？」

「うん…なんだか落ち着く…それに…えいつ「ひゃん?!」肌の感触も楽しめるしね」

張りのあるすべすべとしたパルスィの肌が、頬に当たりとても気持ちが良い。

なのですりすりした僕は悪くない。

「も、もう…ご主人様ったら♪「足もすべすべ」やん?!いい、いけませんよご主人様♪」

何だかんだでノリノリのパルスィ。

なので、僕もさらに調子に乗り、太ももの内側をゆつくりと撫でてみる。

「んひゃつ!?!…んっ…ご主人さまあ…そ、それは…いけません…っ!…あふっ…」

本気で感じ始めるパルスィ。

すると、今度はそれを見ていたパルスィさんが――

『あらあら、一人だけご主人様の寵愛を受けるだなんて…妬ましいですわね。では…私はこうしましょう…』

パルスィさんは、その豊満な胸を僕の顔に押しつけてきた。

あれ?…この感触って…?

「…パルスィさん…ひよつとして、ブラジャーつけてない?」

『あら?…ばれてしまいましたか。ふふっ♪そうですよ。ですので存分

に楽しんで下さいね?』

そう言つてさらに胸を押し付けてくる。

いい香りがするし、何より柔らかくて気持ちが良い……。

そんなご主人様とメイドプレイをしばらく堪能した。

「ねえ碧、こうして奉仕してくれるってどう? やっぱり男として惹かれる?」

確かにこういうのも良い……けど……。

「確かに嬉しかったし、優越感があった……けど……やっぱりパルスイとは対等な関係が……お互いが気を遣わない……いつもの関係が良いかな?」

「碧……／＼／＼」

『あらあら、愛されてるわねえ♪』

「碧が望むなら……偶にならこういう事も、してあげるわね♪」

よくできた彼女を持って、本当に幸せだなあ。

それから時間は少し経ち、夕食の時間になった――

二人は晩御飯の用意があるからと言って再び着替えに向かった。

そういうのこそメイド服じゃないのかな? と思つてしまったけど、やぼつたい事は抜きにしておこう。

そして扉から二人が出てきた。

その二人が着ていたのは……アオザイ?

アオザイは、もつとも美しいと言われるベトナムの民族衣装。

そしてパルスイが着ているのは、白のシースルーのアオザイに自分のスペカの花の紋様が付いている。

パルスイさんの方は色違いの黒いアオザイを着ている。

白と黒、対照的な色の二人に見惚れてしまう。

アオザイはメイド服と異なり、身体のラインがもろに出る。
二人とも良く似合っている…と感想を言おうとしたら…。
あれ?…気のせいかな?

服はかなり薄手のアオザイ、じつと見てしまうのも仕方がない
…つて…ん?
そして気が付いた。

二人の胸元…白のアオザイを着ているパルスイの胸元には、ピンク
色のモノが…。

「あの…二人ともひよつとして…。」

『上も下も着けてないわよ♪「ちょ?!何で言うのよ?!」どうせ教える
し。どうかしら?』

感想だよね?

「えつと…二人ともすごく綺麗で…似合ってるんだけど…」

下着を着けていないと分かると、流石に恥ずかしい。

そして、近くで見ると胸元にはぶつくりと自己主張しているモノも
見える。

涼しい顔してるけど、二人とも興奮してるんだ…。

普通の民族衣装、今はそれが、どんな服よりも扇情的に感じた。

「も、もう!そんなにじつと見ないですよ。穴が開いちやいそうじゃな
い!」

『あら?もう開けられてるからいいじゃない?「何いってんのよ!」こ
れは失礼、くすっ♪』

「あはは…と、とりあえず夕食は何かな?」

すると気を取り直したパルスイが――

「えつと、今日のメニューはね――」

- ・ 牡蠣とひじきの炊き込みごはん
- ・ あさりのお味噌汁
- ・ 鰻とゴーヤの素麺チャンプル
- ・ 山芋のとろろ

・にんにくの醤油漬け

どれも美味しそうな料理。

なのだけど…なぜだろう、そのチョイスに作為的なものを感じるんだけど…。

するとパルススイさんから――

『ああ、これ全部精力のつく食べ物だから、今夜は朝までオールで楽しめるわよ♪』

やっぱりか!?パルススイを見てみると…恥ずかしそうに俯いていた。

『まったく。紫さんも、そろそろ子供が見たいって言ってたじゃない？頑張りなさいよ?…くすっ♪』

流石に堂々と言われると照れるものがあるけど…。

今夜は頑張ろう。

そう思いながら夕食はがつつりと…おかわりまでして食べた。

美味しかった夕食、全てを堪能してしまった。

そして夕食後は、お風呂に入ること。

脱衣所で服を脱ぎながら、二人が入ってくるのを楽しみに待っている。

今まで色んなサプライズがあったから、ここでも何かあるのかと期待しない方がおかしい。

すると入り口の扉が開く音が聞こえる。

気になった僕はそちらを見てみると…ふあっ?!

声が出ない。

その思いもよらない姿に。

その予想外の姿に。

今の二人の姿……それは――

俗にいうマイクロビキニと言うやつだった。
いや、もはやそんなレベルじゃない。

パルスイが着ているのは、Vバックフロントのブルーの水着

パルスイさんが着ているのは、極細ストリングのマイクロワンピースビキニのレッドの水着

文字通り言葉が出ない。

必要最低限の布で、局部のみを隠し、残りは紐に近いもの。
胸元を見ると、ぷっくり自己主張した蕾が丸分かりになっている。

少し動いただけで、全てが曝け出されてしまうような水着。

そんな二人の姿から目が離せなくなる。

そして、視線を感じた二人は――

「うう……やっぱりこれは恥ずかしすぎるわよ……／＼／＼」

とパルスイは身体を隠そうとするが、そうやって身体をよじると、色々と見えそうになり、逆にエロさが増してしまうのを自覚している。

それに対して堂々としたパルスイさん。

グラビアアイドルが顔を真っ青にして逃げ出すレベルの身体つき。

そして、その身体をより一層魅惑的に見せる、暴力的なまで凶悪な水着。

『まったく、碧も喜んでくれてるんだから良いじゃない。それに……全

部見せ合ってるのに今更水着くらい大丈夫でしょ?」

確かに全部見ているが…この世には着エロという言葉がある。

場合によっては裸よりもエロさが増す…：僕は今、その言葉をかみ締めている。

「そういう事じゃなくて!…もう…さっさと浴室に行くわよ!」

『はいはい…それじゃあ、行くわよ碧♪』

そして二人は、僕の両腕にたわわな果実を押し付けながら浴室へと向かって行った。

既に少しだけ水着がずれて、桜色のモノが見えていたのは内緒の話。

お風呂に入る前に身体を洗おうとしたら、二人から椅子に座ってじっとしててと言われる。

そして椅子に座って待っていると――

後ろからパルススイさんが来て…。

『シャンプーと背中には任せて頂戴♪』

そして程良い力加減で頭を洗ってくれる…：ん…：幸せ…(むにゅん)…？

『じゃあこのまま、背中も洗っちゃうわね♪』

するといつの間にかボディソープを胸で泡立てていたパルススイさんが、その胸で背中を洗い始めた。

むにゅむにゅと、動かすたびに形を変えるソレ。

『ん…意外と上手く洗えないわねえ…：んっ…』

流石に洗いなれていない事もあり苦戦している。

が、これをずっと続けられるのは色々とマズイ。

そして足の方はパルススイが洗ってくれてるんだけど…。

ピンと伸ばした足を片方ずつ洗われていく。

しかし、前かがみで洗っているせいで、V字の水着が完全に片方ず

れてしまつて、桜色の蕾が完全に見えてしまつている。

先程食べた料理（他にもオイルや紅茶、お菓子に入れられた媚薬と精力剤）のせいで一部が完全に反応してしまつているのを見たパルスィは――

「ふふっ♪こんなに元気に…うれしいわ♪…この後のお楽しみだから…待つてね♪」

上目使いでそんな事を言われたら、理性が飛びそうになつてしまつた。

そして、無事に？身体を洗われて、今は浴槽に入っている。

その間に二人は水着を脱ぎ、お互いに身体を洗い合つているのだが…。

「うん…同じ人が身体を洗い合つてる光景つて…すごいな…」

『ふふっ♪この胸で楽しませてあげるんでしよう？しっかりと洗つとかないとね♪』

「ひゃん?!も、もう！サイズは同じでしょ！えいつ！」

『きゃっ！…流石私ね…弱い所を良くしつてるわね…んっ…。ならこれで洗いっこしましょうか？』

そして、お互いに身体を向け合い、お互いの胸で洗い合つている。

正直、エロ過ぎてのぼせあがつてしまふそうさ。

そして、二人とも身体を洗い終え、湯船に浸かると思いきや――

「じゃあ碧、上がるわよ」

「あれ？二人とも湯船には浸からないの？」

「ええ、これ以上入つて、碧がのぼせたら元も子もないから」

正直、ちよつとのぼせそうになつてたからありがたんだけど…。

「二人はいいの？」

「ふふっ♪良いのよ♪それよりも着替えるわよ？」

そして二人から――

『メイドのお仕事です、ご主人様のお着替えをお手伝いしますね♪』
と身体の隅々まで拭かれ、服を着せられた。

うう…これは恥ずかしすぎる…／／／

そして、パルスイさんから髪を乾かして貰っていると……。

「ねえ…パルスイさん…こんなに幸せな思いをして…いいのかな？」

『碧……』

すると、パルスイさんが後ろから僕を抱き締めてきて、耳元で……。

『私達はあなたに救われたの。今ここで、こうしていられるのは、あなたのお陰…だからあなたには、私…本物のパルスイと幸せになっ
ていいのよ？』

「そつか…うん、ありがとう。それにパルスイが幸せだと、パルスイ
さんも幸せなんだよね？なら頑張る…頑張つて…ちやんと」二人と
も「幸せにするから」

僕の言葉に満足したのか、パルスイさんは笑顔で頷き、再び髪を乾
かすのに戻ってくれた。

お風呂場を後にした僕達は、再び居間のソファへ。

『さて、今日の最後のご奉仕を…あら？』

するとパルスイさんの身体が少しずつ消えていく…え？なんで
？

「タイム…リミット…ね」

悲しそうに言うパルスイ――

『まあ、十分持った方じゃないかしら？』

そんな二人を見て、僕は――

「どういう…ことなの…？」

するとパルスイが……

「そもそも、スペルカードの分身が自我を持つこと自体がイレギュ
ラーだったの」

『でも持ってしまった。それが前の事件の時の事』

「そして今日、もう一人の私が出てきたのも…私の心が不安定だったからなの…」

『誰かの所に行くんじゃないか？誰かを救う為に自分の優しさを使うんじゃないか？最初にチョコを食べたいのに…』

「そんな感情の揺らぎが…」

『再び私を生み出した』

「だから私はもう一人の私と相談したの…どうするかって」

『まあ、私は水橋パルスイの本心に近い場所にいつもいるから、答えなんて決まっていたのだけどね。碧が来たら、碧の為に精一杯の感謝の気持ちを伝えるって』

「ええ…そして彼女は私…だから彼女にも、一緒に碧と楽しんで欲しかった」

『そういう事。まあ、私がこうして消えるって事は、水橋パルスイの心が満たされたって事だから…安心して頂戴…だからそんな悲しそうな顔をしないで…ね？』

優しく微笑みながら、消えていくパルスイさん――

「うん…また…会えるかな…？今度は、不安な気持ちじゃなく…三人で楽しむために…」

すると、パルスイさんはふつと笑い――

『ええ…きつと会えるわ。…だからその時まで…いえ、これからも…私達の事を…幸せにしてね？』

そうして消えていくパルスイさんが、最後に僕の前に来て――

『ありがとう…楽しかったわ…んっ…。それじゃあ、またね…』

優しく口づけして消えていくパルスイさん……。

その顔には、一切の悲しみは無く…ただ笑顔で満ち溢れていた。

今日の事は、泡沫の夢みたいな体験だったけど…彼女と…パルスイさんと過ごした時間は嘘じゃない。

そう思い、おやつの際に三人で撮った写真を見る。
そこには、笑顔で写るパルスイさんが居た。

それから、しばらくしてパルスイから――

「ねえ碧…あの子の想い…受け取ってくれた？」

その答えに僕は……

「……うん、もちろん！」

「……そう…ふふっ♪」

嬉しそうに、笑うパルスイ。

うん、やっぱりパルスイには笑顔が一番似合ってる。

「碧…次は、私からの想い…受け取ってくれる？」

「もちろん…ずっと待ってたよ」

大切な人から初めて貰うチョコレート…様々な期待が僕の中を駆け巡る。

「じゃあ、準備してくるから…先に寝室で待っていて頂戴」

少し照れた顔をしながら部屋を出ていくパルスイ。

「うん、楽しみに待っとくよ」

そう言っ僕も寝室へと向かった。

寝室で待っていると、扉をノックする音が聞こえてきた。

パルスイなんだろうけど…なぜか、中々入って来ない。

「パルスイ?どうしたの?」

『えっと…ちよつと待ってね……すー、はー……うん…入るわよ…』

そして入って来たパルスイ。

その姿は、裸にリボンを巻きつけ、液体チョコレートの入ったガラ

スの器を持っていた。

開いた口が塞がらない……。

だって、今日一日……色んなパルスイを見てきて……最後の締めがこの姿……。

「あの子から勇気も貰った。だから——」

そう言つて、顔を真っ赤にしながらも、器に入ったチョコレートを少しだけ指に付け、それを唇へと塗っていく。

ただ、チョコレート唇に塗るだけ……それだけの行為が、凄く官能的に感じる。

ゆっくりと、焦らすようにチョコレートを塗り……指に付いたチョコレート唇を自ら舐め取る。

そして——

「碧……バレンティンチョコレートは……私自身……だから、さあ……召し上がれ♪」

照れた顔とは違う、艶やかな表情。

そんなパルスイの元に僕は向かい……

「それじゃあ……大切に、頂きます……パルスイ」

そう言つて唇にキスをする。

「んちゅっ……うあ……あっ……はむっ……れろっ……ちゅっ、じゅるっ……」

唇に付いたチョコレートが無くなっても、ただひたすらにお互いの唇を貪る。

パルスイと過ごす初めてのバレンタイン——

大切な彼女から貰ったチョコレートは、とっても甘く…少しだけ淫靡で…でも…とっても幸せな味だった。

たとえこれが泡沫の時間、胡蝶の夢であっても——

二人の、これからの時間は、幸せなものになっていくだろう——

これはIFの話…でも、もしかしたら——

そんなに遠くない、未来の話かもしれない。

コラボ企画 敵か味方か、もしくは悪夢か?! 謎の仮面のヒーロー現るゝ

ここは忘れ去られたモノ達の楽園——幻想郷

——だが、この幻想郷は碧達の住む幻想郷ではない

——幾重にもあるとされる平行世界、それはこの幻想郷でさえ例外ではない

——そして、ここに…その世界の主人公「エルム街の悪夢」

——その名は、フレディ・クルーガー

「ふわあゝ…今日は平和でいいねえ。ここ(幻想郷)に来てから立て続けにいろんな事件があったからな。ま、偶にはのんびりするの悪くない」

特徴的な、焼きただれた顔

赤と緑の横縞セーター、焦げ茶色の帽子

右手に手製の鉤爪を付けたその人物は博霊神社の階段でのんびりしていた。

彼にとつて戦いは日常茶飯事、何も無い事の方が稀なのだ。

しかし、その平穏もすぐに崩れることになる。

そしてこれが、彼の二度目の異世界への旅になるということを…彼はまだ知らない。

「フレディー！いる！いるなら自爆して頂戴！」

意味の分からない事を言いながらスキマから現れたのは、スキマ妖怪の八雲紫。

「うおっ?! って紫か!? びつくりさせるとやねえ! それと自爆ってなんだこら! 人を殺す気か!? (いや、ある意味死んでるようなものだけだ)」

「ああ! いたのね! 良かったわ!」

こいつが焦る姿なんてかなりレアだ……全く、面倒な予感がヒシヒシしやがるぜ…。

「ああ、それでどうした？お前が焦るなんて何があった？妊娠でもしたか？」

焦る紫と正反対に気楽な態度で応えるフレディ。

「したいけど相手がいないわよ！悪かったわね!!! ってそうじゃないの！真面目な話よ！」

「つたく、ならそう言いやがれ。んで、どうしたんだ？」

すると紫が――

「このままじゃ幻想郷が減んじゃうの！」

一瞬フリーズするフレディ。流石の彼も事態が読めないようだ。

「は？幻想郷が？おいおい、ジョークにしちやブラツクすぎるぜ？」

「ああ…言葉が足りなかったわね。正確にはこの幻想郷じゃない、平行世界の幻想郷よ」

紫の言葉に再びフリーズするフレディ。

「あー…その、紫…お前…疲れて「真面目な話って言ったでしょ！」…お、おう」

「いい？あなたがこの幻想郷にやって来たように、別の世界っていうのは存在するの。似ているようで似ていない、近いようで遠い世界が…それを私達は平行世界って呼んでるの…ここまではいい？」

紫の剣幕と物言いに、うなずく事しか出来ないエルム街の悪夢（それでもいいのか悪夢…）

「続けるわよ。その平行世界の幻想郷に、外の世界で生まれた妖怪……いえ、この場合「怪人」って言った方がいいかしら？…それが入り込んだの」

「怪人…ねえ…。そんな奴、その平行世界の連中で何とかできるんじゃないのか？」

普通に考えたら、神や悪魔…それに近い存在がうじゃうじゃいる世界だ。そうそう勝てる者がいるとは思えない。

「そいつにはね、スペカや能力が一切通じないの…さらに性質の悪い事に、その数をどんどん増やしていく…下手をしたら増えたそいつら

が、この幻想郷にまでやってくるかもしれない…そうなる前に手を打ちたいのよ」

紫の物言いに気が付くフレディ。

「おいおい、その言い方だと、こっちの幻想郷には対抗できる手段があるみたいじゃねえか？」

「ええ、あるわ。それがこのベルト…『ゲーマドライバー』よ！」

見た所、奇妙な装飾がされた機械のベルト。

「冗談きついで？こんなベルトで何ができるってんだ？それに、その幻想郷にもこれがあるんじゃないかねえのか？」

だが、紫の顔は厳しい。

「これは何とか一つだけ入手したレプリカ。向こうの幻想郷とは時系列が違うから…まだ、このベルトは無い。そして、その幻想郷にいる重要な人物。物語の要になっている人間がいるの」

「物語の要？そいつはいったいどういう事だ？」

時間も惜しいのか、早口の紫は語る。

「平行世界が成り立つ前提として、その世界の物語の要になる人物が必ず出てくるの。そう…例えば、私達の世界なら、フレディ…あなたがそうよ「俺が?!」そう、そしてその人物が万が一にも殺されたなら……その幻想郷は滅んでしまう…物語が終わってしまうの」

「なるほど、ロープレの主人公みたいなもんか…まあ、穏やかな話じゃねえってのは分かったが…なぜ俺だ？」

すると待っていましたとばかりに――

「前提として、平行世界に存在する人物…まああなた以外の幻想郷の住人ね。その人が行くと平行世界に同じ人物が二人いる事になって、世界に歪みが生じる。外から来たフレディなら、それに当てはまらないし……何より、あなたの力なら問題なく解決できるわ」

「はっ！言ってくれるねえ。いいぜ、あなたに頼まれるなんて滅多にない事だ。さくつと世界を救ってきてやるよ！」

「そう言ってくれると思ったわ。それじゃ早速、このベルトの使い方の説明するわね」

——少女？説明中（うわ何をする?!）

「なんか変な声が聞こえなかったか？「気のせいよ」いやでも…「気のせいよ？」…お、おう…」

「それじゃあ早速スキマで向こうの世界に送るわね。帰りはベルトに付属しているワープガシャットを使って頂戴」

「オーケーこいつだな。…それじゃあさくつと送ってくれや」

そして、フレディの足元にスキマが開き——

「ふあっ?! やっぱりこれかあああああ………」

スキマに響く声が聞こえなくなり。

「キチンと落ちは付けないとね?」

そしてフレディは平行世界へと旅立った。



——ここは地底の果て——

碧とパルスィはいつものデートと趣向を変えて、鉱山地帯に来ていた。

元々、旧都か地上で買い物でもしようかと思っていたのだが、前にパルスィから地底の果てに鉱山の採掘跡地があると聞き、男なら一度はそういう場所に憧れると言い、急遽デートの場所を変えたのだ。

「うわあ…すごい、本当にこんな場所があったんだ！あ、あつちには採掘場…あつちにはトロツコもある！」

子供のようにはしゃぐ碧。まあ見た目は子供に近いのだが——

「あんなにはしゃいじやって…もつと景色の綺麗な場所とかあるでしょうに…。碧、あんまり奥に行ったらダメよ?」

恋人同士というよりは、姉と弟（この場合妹にも）見えなくない。しかし、その時間は長く続かなかった——

「碧！待ちなさい！……何か、変な気配を感じる……出て来なさい！」

すると採掘場の洞窟からぞろぞろと鬼が出てきた。

「碧、あの鬼達って……？」

「うん……間違いないと思う……あの時全員消えたと思ったんだけど……」

それは以前、旧都で碧達を襲った鬼達だった。

襲撃犯の大半は、勇儀と女将の活躍により壊滅したのだが、生き残りがあったようだ。

「こんな辺境の地へようこそ。いや、よくぞ来てくれた……お前達のせいで、俺達は酷い目にあつたんだ……それがこんな所で恨みを晴らせる機会がやってくるなんてなあ」

「相変わらず腐ってるね、逆恨みすることでは、自分達の体面を取り繕えない……相変わらぬクズだね！」

「あの時は旧都の中だったから全力が出せなかった……それに、私の力もあの時の比じゃないわ！逆に、ここで全ての遺恨を断ち切つてあげるわ！」

そう言つて臨戦態勢に入るパルスイさん。

僕も、足手まといにならないように、うまい事逃げ回らないと。

するとリーダーと思わしき鬼が――

「ふん、舐めているのはそつちだ。俺達は最強の力を手に入れた！そう、この幻想郷で俺達に勝てる奴はいないんだよ！うおおおおお！！！！」

すると、鬼の体の変容していく。

体は一回り大きくなり、オレンジ色の頭部に、黒い異形の体。

鬼でもない、かといつて他の妖怪でもない……まさしく怪人と言え

る姿だった。

「な、何なの…あの姿?!」

「分からない…でも、やばい感じがする…」

そして他の鬼達も次々と姿を変えていく…改めて見ても何て数だ…。

軽く見ても30体はいる怪人。

そいつら自我を持っておらず、目の前にいる僕達を襲う事だけを考えているようだった。

「碧!離れてて!一気に決めるわ!恨符「丑の刻参り七日目」!」

以前よりも数倍強力になったスペルカード。

そのエネルギー弾の直撃を喰らえば、普通の妖怪ではひとたまりもない…。筈だった。

凄まじい弾幕の奔流、それらが、全て直撃する。

激しい爆音を立て、土煙が立ち上る。

これだけの弾幕なら…。

煙の晴れた先にあつた光景——

「う、嘘でしょ…?」

そこには、無傷の怪人がいた。

「あの弾幕に耐える…いえ、無傷なんて…それに、能力も通じていない?!」

先程から嫉妬を操り同士討ちをさせようとしていたらしいが、その作戦も崩れ去る。

「パルスィさん!これ、かなりマズイよ!ご丁寧に、この前よりも強力な結界も張ってあるし…」

ゆつくりとした…でも、じわじわとこちらを追い詰めてくる怪人。

「くっ!このままじゃー!」

その瞬間――

「火符「ファイアボール」」

どこからともなく無数の火球が現れ、怪人達に直撃する。

え？……一体何が？

呆然としている僕達に聞こえてきたのは――

「おいおい、随分と楽しそうな展開じゃねえか？」

小高い丘になった場所にその人物はいた。

焼きただれた顔、赤と緑の横縞セーター、焦げ茶色の帽子、右手に手製の鉤爪の男。

どう見ても普通じゃない事は分かるけど……この状況ならありがたい。

すると男はこちらに来て――

「大丈夫だったか、お嬢ちゃん達？」

そう言いながら僕とパルスィさんの前にその人は立ち、怪人達を警戒する。

「ふうむ……金髪の娘は正直好みじゃないが……「なっ?!」どういうことよ！……こつちの黒髪の子供は……あと少し小さかったらストライクなんだがな……」

え？この人……ひよつとしてロリコン……？

「……えつと、あなたは？」

「俺の名前は……おつと、それよりも先にあいつらだ。こいつも食らつとけ！刃符「ナイフハンド」」

すると彼の鉤爪が紅く光ったかと思うと、そこから刃の形をしたエネルギー弾が放たれ、次々と怪人に襲い掛かる。

圧倒的な量の弾幕、明らかにオーバーキル……そう普通なら……だ。

しかし、煙の晴れた先にいた怪人はまたしても無傷だった。

一体こいつらは……？

すると男性が――

「ちつ…やっぱスペカは効かねーのか…、このまま戦つても分が悪そうだ…なら、こいつを使うしかねーなあ!」

そう言い、どこからともなく取り出した、機械のベルトを腰に巻く……ベルト?」

「さあ…『Welcome To My Nightmare!』…じゃねえな。今日の俺は…『GAME START!』だ!」

そう言つて、ゲームのカセットに持ち手を付けたような物をベルトに差し込む。

「行くぜ! 『変身!』」

【ガシャット! レッツゲーム! メツチャゲーム! ムツチャゲーム! ワツチャネーム! アイム ア カメンライダー!】

謎の音声と共に男性の姿がまばゆい光に包み込まれていく……そして――

「ノーコンティニューでクリアしてやるぜ!」

と決めセリフ? と共にポーズを取る男性……だが、その姿は。ずんぐりとした白い何かだった……え? 本当に何……あれ?

そして変身した当の本人も――

「つて、なんじゃこりやああ?!」

うん、本人すら予想外だったみたいだ。

決め台詞に決めポーズまで取っていただけに、その絵面はとてもシニールだった。

「ま、まあいい! とにかく! 見た目だけで判断するな! 行くぜ!」

そしてどこからともなくハンマー? のような物を取りだし――

「ガシャコンブレイカーハンマーモード! 叩き潰してやんぜ!」

武器を構えた男性……いや、仮面の戦士。

「オラオラ、あめえ！オラオラオラオラオラオラオラ!!!」

その鈍重な見た目とは裏腹に、機敏な動きで大勢いる敵を翻弄している。

しかし、それよりも気になる事が――

「ねえ…碧。あれ、私の見間違いかしら？」

仮面の戦士が怪人に攻撃する度に――

「おらあ！」【HIT!】

「そこだあ!!」【GREAT!】

と、いった文字がテレビのエフェクトのように浮かび上がってきている。

僕も見えてるんだけど……それよりもさっきのベルトの音声と言ってた、〃仮面ライダー〃って言葉…

「仮面…ライダー…」

「碧？心当たりがあるの？」

おっと、無意識に声に出てたみたいだ。

「うん、外の世界にいた時に聞いたことがあるんだ。それは、人知れず悪の組織や怪人を倒して町の平和を守る…謎の多い仮面の戦士たちの話」

「そんな人たちがいたの？っていうか悪の組織に怪人って?!」

「いや、流石に見た事もないし……なにより仮面ライダーの話自体が都市伝説みたいなものだったから…かなり眉唾物だったんだけど……」

そう言つて、目の前で戦う仮面の戦士を見る。

「ちっ、やっぱ俺には鈍器は似合わねえな！」「ジャ・キーン！」お、これこれ！さあ！切り刻むぜ！」

ハンマーの形が変化し、剣の形になる。

そして仮面の戦士はそれで敵を切り刻んでいく――

切り刻まれた怪人達は爆発し、消えていく。

大勢いた怪人達の全てを倒してしまった……すごい…これが仮面

ライダー…。

すると鉾山の奥から、何者かの声が聞こえてきた。

『まさか、こちらの世界でも邪魔をされるとはな…：「エグゼイド」！』

エグゼイド？それがあの仮面ライダーの名前なのかな？

そして、奥から出てきたのは全身を緑色の甲冑で覆われた、先程の怪人よりもさらに一回り大きな別の怪人だった。

「エグゼイドお？なんのことだか分からねえが…：てめえがこの事件の犯人って訳か！なら、さっさと倒させて貰うぜ！」

剣を構え、勢いよく突っ込んで行く仮面の戦士…エグゼイド。

しかし、それと同時に怪人の両手にある双刃が赤く光る。

「ふんっ！中の人間が違うようだが…舐められたものだな！ふんっ！「激怒竜牙」！」

双刃に込められたエネルギーが赤いX字の斬撃となりエグゼイドに向かって行く。

「なっ?!ぐわあああ?!」

その衝撃は凄まじく、先程まで、無双を誇っていたエグゼイドを、容易く返り討ちにした。

「エグゼイド!」

「ちよつと！あれ大丈夫なの?!」

ダメージが大きかったのか、起き上がろうとして、手を付くが、力なく倒れ伏す。

「パルスイさん！少しでも良いから時間を稼いで！」

「ちよつと碧?!あーもー！分かったわよ！嫉妬「ジェラシーボンバー」

！」

パルスィの放つ弾幕が怪人の目をくらませる。

「くっ?!こしやくな真似を！」

今だ！倒れ伏すエグゼイドに近づいて行き——

「大丈夫ですか!?!しっかりとってください！」

そういつてアーマーをゆする……すると。

「……っく……流石に今のは効いたぜ……。全く、子供に心配かけるとは……俺も落ちたもんだな……」

「良かった……立てますか！」

「問題ねえ！しかしこのままじゃ埒が明かねえ……嬢ちゃん！アブねえから離れてな！」

「は、はい！パルスィさん！もう大丈夫だから！離脱するよ！」

そういつてパルスィさんと距離のある岩陰へと離れる。

「ねえ。大丈夫なの？あいつ、けた違いに強いわよ？」

「大丈夫……あの人が仮面ライダーなら……きつと何とかしてくれる！」

「ふっ……恐れられると力を増す俺が、まさか心配されて力を増すなんてな……絶対に負けられねえな！」

するとエグゼイドは大の字を作りポーズを取った後——

「行くぜ！『大変身！』」

掛け声と共にベルトに付いていたレバーを開く、すると——

「マイティジャンプ！マイティキック！マイティマイティアクションX！」

先程とは違う音声が流れだす。

すると、ずんぐりとした全身の白いアーマーがパージされ、中からマゼンタに近い色の仮面の戦士が現れた。

「銃弾より速く、イカれ野郎より強い。スーパーフレディだ！——
——ってマンガの見すぎだバカ！」

何だか、セルフツツコミをしているが触れてはいけなのだろう。

「ごほん…とにかく…これでちったあ動きやすくなったぜ！さあ…
悪夢の始まりだあ！」

「Welcome To My Nightmare！」

その掛け声と共に駆け出すエグゼイド。

何だあのスピード?! さっきのも十分速いと思ったのに、比べ物にならないくらい速くなった?!

そのまま怪人に詰め寄り剣で何度も切りつける。

「オラア！オラア！オラア!!!」

【GREAT!】【GREAT!】【GREAT!】

「くっ…こしやくなー！」

そして双刃でエグゼイドに向かって切りかかる。

しかし――

「速さが足りないんだよ！」

エア噴射による滞空により、攻撃を回避し落下タイミングに合わせて怪人の顔面にキックをお見舞いする。

「ぐ、ぐおおっ?!」

さらにエグゼイドは二段ジャンプからの超高度からの切りつけてダメージを与えていく。

「オラア！さっきのお返しだ！」

すごい！あんな動きも出来るんだ！

「くっ…まさか、こちらの世界でも再び屈辱を味わうとは…あつてはならぬのだ!!」

闇雲に双刃を振り回す怪人。

「はっ！そんなノロマな攻撃じゃ俺には着いて来れねえぜ？」

そう言いながら、怪人の刃を躲し、腹部に強烈なボディブローを叩きこむ。

「ごがああああ?!?!」

悶絶しながら吹き飛んでいく怪人。

「さて、それじゃあこれで決めるぜえ！」

エグゼイドは先程のカセットに息を吹きかける仕草をし、そのままベルトの左に差し込む。

【ガッシュアット！キメワザ！】

再び流れる音声。

そして、しやがむような構えを取る。

よろよろと立ちあがる怪人。

それと同時にエグゼイドの右足が光輝き、怪人に向かい飛び上がる。

「くっ！認めん！俺はこんな結末…認めんぞ！」

怪人の最後の嘆き……

「てめえが認めなくても、俺の知った事じゃねえ！」

【マイテイクリティカルストライク！】

流れる音声と共に、怪人に向かい、何度も何度もキックを蹴り込んでいく。

そして――

【CRITICAL FINISH！】

【会心の一発！】

という音声と同時に、怪人は爆発し消えていった。

「次に会う時は……悪夢で会おうぜ……？」

【GAME CLEAR！】

「ん？どうやらこれでこの世界の異物は排除したらしいな……なら、俺も帰らねえとな」

そして、エグゼイドが別のカセットをベルトに差し込むと

【ガッシュアット！ワープ！】

目の前に空間の歪みができる。

「まったく…別の世界にまで来て人助けとは、俺も丸くなったもんだぜ……まあ、これも全部あいつらと出会ったからか…はっ！らしくねえぜ」

そして空間の歪みに入ろうとするエグゼイドの元に碧とパルスイがやってくる。

「あのっ！本当にありがとうございまして！おかげで助かりました」
「なあに、気にすることはねえぜ。ん…ひよつとしてこいつが紫の
言っていた物語の要か…成程な」

…物語の要？

「えつと…もう…帰るんですよね？最後に、あなたの名前を聞かせて
くれませんか？」

すると、男は仮面越しにフツと笑い――

「俺の名は『フレディ…フレディ・クルーガー』…通りすがりの…悪夢
だ。覚えておけ」

そう言い残したフレディさんは歪みの中へと消えていった。

「ねえ碧…今の人って…？」

「うん、紫さんの事を知ってたみたいだけど…まあおかげで助かった
んだから」

それにしても、フレディ…どこかで聞いたことが……

「あっ！…どうしたの？……何で忘れていたんだろう…あの焼けただけ
た顔、右手の鉤爪…」

「碧…知ってるの？」

知ってるも何も……

「思い出した、フレディ・クルーガーって言ったら、『エルム街の悪夢』
に出てくる殺人鬼だよ」

「ふーん……って殺人鬼?!そんなに怖い人だったの?!」

怖いなんてもんじゃない、子供にとってはトラウマになるレベルだ
よ。

「うん、でもそれ以前に『エルム街の悪夢』は外の世界の映画…お伽噺
みたいなものなんだけど…」

「実在してたんだ…。まあかぐや姫やら、神様がいるから今更な気も
するけど…」

昔、映画で見たフレディの残酷さは、子供ながらにトラウマになっ

30話 紅葉デートと神々との遭遇

日本には、「四季」という独自の概念が存在する。
それはこの幻想郷も例外ではない――

「うわあ……間近に来ると本当にすごい！この山だけ一際鮮やかに色付いてるよ」

季節は秋……山の葉は赤や黄色に色付き、時候的にも過ごしやすいこの季節。

僕とパルスイさんは妖怪の山に来ている。

「ええ……。これは何て言うのかしら……圧倒されるくらい、綺麗な紅葉ね……まるで、山そのものが色絵錦の陶器のような感じ……」

僕達二人は、秋の妖怪の山に初めて来たのだけど……その紅葉の余りある美しさに魅了されていた――

「……うん、これもデートだし……山を背景にして二人で写真を撮ろうよ」

「……ええ、賛成よ。でも、この“せるふしやったーりもこん”？だったかしら、便利で良いわね」

そう、実は天魔様に貰ったこのカメラ……かなりの高性能なデジカメラで様々な機能が付いていたりする。

何でもカメラを集める事と、自撮りをするのが密かな趣味らしい……部下には絶対に黙っていてくれと頼まれたんだけど……――

「じゃあ山を背景に……パルスイさん、もう少し左に「この辺かしら？」……うん、オツケー。後は僕が隣に行つて……」

位置につくとパルスイさんが僕に抱きついてくる……ある意味お約束みたいな感じになつてるけど……――そうだ……

「パルスイさん。すっかり抱きつくのに慣れたね」「へっ？そ、そんな

ことないわよ?!…恥ずかしいけど…落ち着くっていうか…／＼／＼「えい！」

慌てふためくパルスイさんを写したくて、そのままシャツターを押す。

「え?!ちよつと!今の撮ったの?!…うう…碧のいじわる…」

それでも、写真を消してと言わないのが、彼女の可愛らしい所…

——それだけ、一つでも沢山、僕との思い出を作ろうとしてくれると思うと彼氏冥利に尽きるなあ。

「ごめんね。可愛いパルスイさんを撮りたかったんだ「くくく／＼／＼」さ、じゃあ次は普通に撮ろうか?」

こく…と頷き、何も言わず抱きついてくるパルスイさん…——この人と出会えて本当に良かった。

それから何枚か写真を撮り、僕達は山の方へと入って行った…もちろん手を繋いで。

「こうして、山の中に入ってみると本当にすごいわね…」

さつきまでは山の赤、空の蒼…とそれぞれの色が際立って見えたが、今は見渡す限りの赤一色…——

——いや、赤を基調として、様々な鮮やかな色が無駄なく入り混じり、それぞれを引き立たせている…。

「うん…外の世界でも紅葉を見た事はあるけど…ここまで綺麗な景色は初めて見たよ…」

外の世界…いや、幻想郷の中でもさらにこの妖怪の山の紅葉は美しいと思う…何かここだけ違うんだろうか?

それから、しばらく歩いていると…——

「あら?碧さんにパルスイさんじゃありませんか?」

と木々の奥……川沿いの方から声が聞こえてくる……この声は…

「雛さんじゃない、今日も厄々しいわね」

パルスイさん…それ褒めてるの？

「パルスイさんこそ……—そんなに嫉妬心がありませんね？…まあデート中ですし…むしろこつちが妬ましいと言うべきでしょうか？」
エメラルドグリーンの髪を胸元で一つに束ねた独特のヘアスタイル—

全身を包むのは真っ赤なドレスのような服—

彼女の名前は『鍵山雛』

種族は“厄神様”で、この妖怪の山に入ってくる人間に注意を促す、親切な神様の一柱だ。

「あら？”妬ましい”は私のアイデンティティなのだけど？」

こうして、憎まれ口にも聞こえる会話だが…実はこの二人、とても仲が良い。

「くすっ♪ごめんなさいね。あんまりにも二人が楽しそうだったから…嫉妬しちゃったわ」

“嫉妬心を操る”パルスイさんと“厄をため込む”雛さん—

負の念と関わっているのか、二人は初対面でシンパシーのようなものを感じていたらしい。

「まったく…。あ…そうだわ、この山で秋を楽しむのに良いスポットを知らないかしら？」

すると雛さんは…—

「—なるほど、紅葉デートですか。羨ましいですね♪」

僕達を見てとても微笑ましそうな顔をしていた……—まあそうなんだけどね。

「雛さんも女性的な魅力は高いんだから、その内良い人が見つかるわよ？」

すると、妖しい目をした雛さんが……

「お世辞でも嬉しいわね。……そうですね…私の全てを受け入れてく

れる殿方……どこかに居ませんかねえ？」

——そこで、こつちの方を見られても……痛つ?!……パルスイさん……つねらないですよ……。

「くすっ♪冗談ですよ?……秋……そうですね、私は管轄外なのですが、秋の神様に直接聞いてみるのはどうでしょうか?」

——秋の神様?

「そんなものもあるの?今まで会った事がなかったのだけど……」

僕も知らない……一体どんな人なんだろう?……すると雛さんが……

「今から案内するから着いて来て頂戴?あの二人に会うには、特殊な道を通ってしか行くことができないのよ」

まあ、神様だし……そんなに簡単には会えないよね。そしてそのまま雛さんの案内で、紅葉に彩られた木々の中を進んで行く——

「あの、雛さん……秋の神様って……どんな人なんですか?……やっぱり神様って言うくらいだから、カリスマに溢れた人なんでしょうか?」
すると、雛さんはクスリと笑い……

「いえ、あの二人はカリスマ……まあ、良い意味ではあるのでしょうか、そんなに恐れる必要はないわよ」

この答えにはパルスイさんも予想外だったみたいで……

「そうなの?それに二人って……一人じゃないの?」

そう、それも気になった。秋を司る二人の神様……。

「まあ、それは実際に会ってみてのお楽しみね♪……ん、この先ね……」

そして、木々を潜り抜けた先には……——農園?

え、ここ山だったよね?……それがいきなり農園?

「パルスイさん……」

「ええ……。ここって……どう見ても……農園よね?」

面喰ってる僕達を見た雛さんは……——

「ふふっ♪驚いてくれたみたいで何よりだわ……さて、二人は……あ、居

たわね」

すると、雛さんは農園の方に進む……僕達も続いて行き……
あ、農作業をしてる二人組がいる……もしかしてこの二人が……？

「静葉、穰子……お邪魔するわよう？」

作業をしていた二人が振り返る……

ウエーブのかかったボブの金髪に、同じく金色の瞳の女性――

「あら雛？珍しいわね、それに……お客さんかしら？」

帽子を被り、前の方向にカールしたボブの金髪に、こちらは赤い瞳の女性――

「ん？どうしたのお姉ちゃん？あ、雛さんだ！」

そして、二人がこちらにやってくる……

「雛、久しぶりね。元気にしてたかしら？それと……そちらの方達は？」
すると、雛さんから目配りされる……

「初めまして、僕は大神碧って言います。雛さんの友人で、今日は秋の妖怪の山のオススメの場所を教えて貰いたくて、ここまで連れてきてもらいました」

同様にパルスイさんも自己紹介する――

「初めまして、水橋パルスイです……地底の妖怪で、こちらの彼の……その、恋人です……／＼／＼「クスクス」何よ雛さん……ったくもう……あ、よろしくお願いします」

すると目の前の二人も自己紹介をしてくれた。まずは、ウエーブがかかった髪的女性から……

「ああ、そういう事ね。……私は『秋静葉』雛の友人で秋を司る神の一柱よ。秋の魅力ならたつぷりと教えてあげるわ♪」

続いて帽子を被った女性が……

「次は私だね。私は『秋穰子』同じく秋を司る一柱で静葉お姉ちゃんの妹だよ。よろしくね、碧、パルスイ！」

大人しい姉と活発な妹……とても仲の良い姉妹みたいだ……。あ、でもちよつと気になる事が……

「あの、不躰な質問なのですが……季節を司る神様って何人もいますんですか？」

すると、お姉さんの……静葉さんの方から答えが返ってきた。

「そうねえ、古来より八百万の神様って概念があるでしょう？一つの季節を取ってみても、その中には様々な事象が複雑に絡み合っているの」

??? どういう事？

「うーん…何て言えばいいのかしら…？たとえば夏で言うと、“日差しを強くする”、“気温を上げる”、“夏しか咲かない花の成長を促す”…挙げればキリがないのだけど、そういった事象…全てが一つになつて“夏”という季節を形作っているの…理解できたかしら？」

ああ、そういう事か…。

「はい、つまりそれらの役割を担っているのが、最初に出てきた八百万の神様って事でいいんでしょうか？」

すると、静葉さんは笑顔で……

「はい、よくできました♪…それを踏まえた上で私達の事について説明するわね。まず私の能力なのだけど…“紅葉を司る程度の能力”…まあ書いて字の如く…なんだけど、この幻想郷、全ての紅葉は私の意志で彩られ、形作られたの」

なるほど……確かにそれは神様にしかできない事だ。

「次に妹の方ね…こちらは“豊穰を司る程度の能力”…幻想郷の農作物、全ての出来不出来を自在に操る事ができるの…まあ秋限定なのだけだね」

あ、そういえば前に夏祭りやってたのは豊穰祈願の舞…つまり、あの舞はこの二人に向けられたものだったのかな？

「そんな訳で、秋を司る神様の代表として私達が祀られているの。他に何か聞きたい事はあるかしら？」

うーん、大丈夫かな…？あ、でも…

「あ、なら…ここに来た目的…その、秋の楽しみ方について教えて貰えませんか？「秋の楽しみ方だね！オツケーだよ！」っ?!びっくりした…」

いきなり声を上げられたからびっくりした…。

「碧さん、ごめんなさいね。うちの妹…秋の…自分たちで創り上げた

物がとっても好きなのよ……まあ、それは私でもですけどね♪」

そう言つて優しい目をして妹を撫でる静葉さん……人も神様も……
こういうやり取りは変わらないんだな……「ところで」……？

「ここに来るまでに、秋の代表……紅葉を目にしたのでしよう？……その、良ければ感想を聞かせて欲しいのですが……」

そっか……自分の創り上げた物……人から見たらどう感じたか……なら思つた事を素直に伝えるだけだね……

「稚拙な言葉で申し訳ないのですが……——木という木が銅色や金色、燃えるような朱色に染まる美しい秋の森……こんなにも美しい紅葉を見たのは生まれて初めての経験でした……視覚から入る秋……その一歩目としては十二分すぎるくらいに素敵な紅葉です」

どうだろうか？自分の感想……思いは伝えられただろうか？……静葉さんの方を見てみると……

「そっか……君がそう感じてくれたのなら……良かったわ……でも……クスツ……そんなセリフをいつも彼女さんにも言つてるのかしら？」

自分で言つた事を思いだしてみる……——うん、我ながら恥ずかしいセリフを言つたなあ……

「大丈夫ですよ静葉さん。言葉に出さなくても、私には彼の伝えたい事……思い……きちんと伝わってますから……。それに……」

パルスイさんは一呼吸置いて……
「そんなセリフを言われるのも、女冥利に尽きるつてものですから……

……
照れながらも、堂々と答えるパルスイさん……なるほど、恥ずかしいけど……心地良いな……

「アツアツね♪聞いているこっちが照れちゃったわ……
「~~~~~」

それを聞いた僕とパルスイさんは二人して照れてしまう……これじゃ単なるバカツプルだ……まあ間違つてはないんだけど。

「いいわ、あなた達の事は信頼させて貰うわ。それに、もつと色んな秋の魅力を楽しんでもらいたいし……そうね、二人さえ良ければ、ここで果物狩りなんてどうかしら？秋の果物は格別よ♪」

それはとつても魅力的な提案だ……けど……。

「嬉しいんですけど……いいんですか？」

すると、静葉さんは……—

「ええ……素敵な秋を求めて、ここまで来てくれた……そうね感謝の気持ち……持ちつてところかしらね？」

むしろありがたいのはこつちなのに……パルスイさんも同じみただ……でも、折角ならご厚意にあずからせて貰おう。

「ありがとうございます……じゃあ……その、おすすめの果物って何がありますか？」

すると今度は穰子さんが……

「梨、桃、メロンとベリー系なんて今がまさに旬だよ！あとは、うちの果樹園自慢の葡萄酒もオススメだね！」

へえ……葡萄酒も造ってるんだ……。

「なら、良ければ果物狩りの後に……それを飲ませて貰ってもいいですか？」

それを聞いた穰子さんは……

「ぜひぜひ！良ければ持ち帰り分も用意させて貰うから！」

何から何まで、至れり尽くせりだな……。

それから、穰子さんの自慢の果樹園に案内して貰った。

あの後、雛さんは帰っていった。そして僕達はどうと……—

「じゃあまずは秋の味覚の代表、梨からだね！」

そういつて案内された梨園には所狭しと、多くの梨の樹が栽培されていた……へえ……樹に生ってる梨を見るのは初めてだ……。

「うちで栽培してる梨はどれも美味しいけど……そうだね、折角だから

良い物を食べて貰いたいから……うん、見分け方を教えとくよ！」

やっぱりそういうのもあるんだ……分かるかな……？

「なに、そんなにも難しいものじゃないよ？形がよく果皮に張りがある物……果皮に色ムラがなく表面がツルツルとしたものが熟した梨だよ」

それなら……これとかかな？

さっそく一つ取って……うん、どうせなら今すぐ食べたいよね。――

——という事で穰子さんからナイフを借り皮を剥きその場で実食してみたが……

「っ?!……んぐっ……。なにこれ?!すごいシャキシャキしてる！それに瑞々しさもすごいし、何より甘みが段違いだ！今まで食べた梨とは比べ物にならないくらい美味しい！」

うんうんと頷く穰子さん……——あ、そうだパルスイさんにも……

「パルスイさんも食べてみてよ……切り分けたやつを……はい、あーん」

パルスイさんの小さな口に梨が入っていく……しやくしやくと音を立てて食べていき……——

「?!……ほんと！こんなにも美味しい梨……初めてだわ……ここに来て良かったわね♪ほら、碧も食べなさいな？あーんして？」

そうして梨を食べさせ合う僕達……すると――

「あー……お二人さん……仲が良いのは分かったから……程々にしてくれろと助かるんだけど……／＼／＼」

あ……いつもみたいにしてたけど……穰子さんと静葉さんも居たんだ……人前で……くくく?!

「二人の季節はいつでも春みたいに穏やかで夏みたいに熱いのねえ♪」

うん、人前では気を付けよう……。

それから、他の果樹園を回り色んな果物を食べて回ったけど、どれも美味しかった……

その後は紅葉のスポットに行くため穰子さんとは別れた……別れ際に大量の果物と自慢の葡萄酒を頂いた。帰ってからが楽しみだなあ。

「ふふっ♪あの子つたら久しぶりの来客でよっぽど嬉しかったんでしようね」

前に行く静葉さんから声を掛けられる……

「そうなんですか？いつも明るそうな感じに思えましたけど？」

すると立ち止まる静葉さん……— 静葉さん？

「あの子にとって……人間からの感謝っていうのは、されて“当然”の事なの……。豊穰を司る……人の生活を豊かにするのも苦しくするのも自由自在……」

ああ……そういう事か、人は豊穰を祈願するために神へと祈りを捧げる……でも、それはあくまで……こちらの願いの押し付け……

「あの子の機嫌を損ねれば、人は貧困に陥る……だから決してそれはしない。そして作物が出来た事だけを喜ぶ……」

そして、再び歩き始める静葉さん……もしかしたら、穰子さんは……— そんな僕の考えを見透かしたかの様に……

「多分、あなたの考えてる通りよ。……あの子はね、ただ……自分の育てた食べ物を……美味しいと言って貰いたいだけ……そこに余計な能力が入ったせいで……あの子は自分の心の在りようを変えなくてはいけなかった……。さて、この先にお勧めのスポットがあるのだけど……」

立ち止まり、僕達を進ませるように促す静葉さん……？

「ここから先へは二人で進んで下さい」

「それは……どうしてですか？」

すると少し寂しげな表情を浮かべた静葉さんは……

「私がいる事で、紅葉達も一層その輝きを強くするでしょう。ですが、

それ以上にあなた方には幻想郷の、妖怪の山の、私の培ってきた……
ありのままの紅葉”をその眼で見て欲しいんです……それが、私の……神
としてではなく『秋静葉』としてお願いします」

その言葉を言い、静葉さんは去っていききました……僕達は静葉さんに
目札をしつつ木々の先へと進んで行った……。

「これは……」

パルスイさんも思ったようだ……

「……言葉に出来ないって……こういうものなのね……」

夕暮れに照らされる紅葉、凋落の時まであと幾日かと思えば、こち
らまで紅く染まりそうな色にもひとしお、感慨深いものがあつた。

「ねえ……碧……」

なんとなく……言いたい事は分かる……

「うん……さっきの話……だよね……」

「ええ……人と妖怪……神は全然違う考えを持つものだと思つてたわ
……。でも違うのね……その根本はみんな同じ……ただ、立場に縛られて、
在りようを変えなければならぬ……でも、そうしなければ世界は回
らない……悲しいわね……」

それも世界の在り方……どうしようもない事……だけど……

「ただ、それを選ぶのは僕達じゃない……彼女達なんだ。彼女達は選
択した……だから僕達にできる事は、ひと時でもいいから……そんな彼女
達を、縛られた鎖から解放してあげる事じゃないのかな？」

自分でも分からない……ただ、誰かが笑顔でいられる最善の選択が
あるなら……その選択をする。

四季が移れば、彼女達の在りようもまた変わるだろう。

同じ季節、同じ時間でも、同じ景色なんてものは存在しない……。
僕達も変わっていくだろう……だけど……それは何も悪い方向にじゃ
ない。

僕が幻想郷に来たように、パルスイさんと出会えたように……出会
えたことで、二人が変われた様に……。

沈む夕焼けに照らされる燃えるように真っ赤な紅葉……ああ……何
て美しくも哀しい季節なんだろう……残酷なまでに……。

……——完全に夕日が落ちるまで、その日はそこに二人で佇ん
でいた……。

やがて来る冬……それは“静寂”を連想させる季節……

そして、秋……色鮮やかな景色が見える反面……その先にある“静寂”
を一番に感じる……哀しい季節……

秋の哀しさを知ることまた、秋の魅力を本当の意味で知ること
に必要な事なのだろう……——

31話 食欲の秋〜家族団欒〜

その後、秋の神様二人に見送られ八雲家へと帰って来た僕達。その手には野菜や果物、秋の味覚が山ほどあった。

「こんなに貰っちゃって本当に良かったのかしら？」

隣で果物の入った袋を持ったパルスイさんが言う…そうだよね。

「だね、何だか悪い気もするけど…折角だから美味しく頂く？それが、あの神様への感謝になると思うから…ね？」

スキマを抜け、八雲家の玄関へ入っていく…

「ただ今帰りました」

すると奥から藍さんと橙ちゃんが迎えに来てくれた。

「おお、二人ともお帰り。今日は一日楽しめたかい？」

その言葉に、パルスイさんが笑顔で答える。

「ええ、おかげさまで…秋の綺麗な風景も堪能できましたし…それから、こんなにお土産も貰ったんですよ？」

両手に抱えた袋を掲げて見せる…

「わ〜！なんだか一杯食べ物があるね〜。お姉ちゃん、何を貰ったの？」

その言葉に笑顔で…

「ふふっ♪秋の美味しい食べ物よ♪そうだわ、良ければ今日は私に晩御飯を作らせて貰えませんか？」

藍さんは、少しだけ驚いた顔をして…でも嬉しそうに…

「いいぞ。ふむ…折角の良い食材だ、私にも手伝わせてくれないだろうか？」

するとパルスイさんも嬉しそうに…

「いいんですか!?藍さんと料理ができるなんて…ふふっ♪」

そんなやり取りをしていると…奥の方から、ふらふらと紫さんがやってきた。

「ふああ〜…二人とも、おかえりなさい。妖怪の山…秋の魅力は堪能できたかしら？」

食材を受け取った藍さんと橙ちゃんは、先に台所に向かった。

「あの…紫さん、実は今日…」

それから、僕とパルスイさんは妖怪の山であった事を紫さんにありのままに話した……。

「そう…それで、あなた達二人は何を思い、何を感じたのかしら？」

それは……

「…綺麗だけが秋じゃない…抽象的にはなりますが…美しさの裏にある物哀しさについて、色々と考えさせられました…」

隣のパルスイさんも同意見のようで、一緒に頷いていた。

「そうね、それが分かったのなら、あなた達もまた成長したと言うことよ…その心、考え続ける事を忘れないで頂戴？」

やっぱり紫さんには全てお見通しなのかな？……本当にこの人にはかなわないなあ…。

「ふふっ…さ、二人とも。折角、秋の神様のおすそ分けを貰ったのだから、新鮮なうちに食べてしましましょう…ってあら？これは……」
袋の一つの中を見て止まる紫さん……何かあったのかな？

「秋の神様も、中々粋な事をしてくれるわね…碧、パルスイ…これが何なのか分かるかしら？」

これ……野菜でもないし……草花？パルスイさんの方を見てみただけど、流石に分からなかったらしい。

——こんなとき幽香姉さんなら知ってるんだろうけど…。

「これはね、秋の七草と言われる植物よ」

秋の七草？…春の七草なら聞いたことがあるけど……秋にもそんな物があったのか…。

「秋の七草は、それぞれ……女郎花（おみなえし）、尾花（おばな）、桔梗（きぎよう）、撫子（なでしこ）、藤袴（ふじばかま）、葛（くず）、萩（はぎ）とあるの」

聞いたことのない物もあるな……。

「春の七草は知ってるわよね？七草粥なんて言われるけど……あれは本来、正月で荒れた胃腸を整える為に食べる物なのよ」

それはなんとなく聞いたことがある……。じゃあ秋の七草は……？

「そして秋の七草なんだけど……これらは全て、観賞用として使われるの……見て秋を感じる……さつきあなた達が感じた事にも通じるわよね？」

なるほど………それを見越して静葉さんと穰子さんはこれを持たせてくれたのか……やっぱり神様……こっちの考えは、お見通しって感じだったのかな？

「さて、鑑賞用と言っても尾花の根には解熱や利尿作用、撫子はむくみや高血圧に、藤袴はお風呂に入れると肌のかゆみをとる、桔梗や萩の根には咳止めなど、色んな効果があるのよ？特にクズから作る葛根（かっこん）は、風邪薬としても仕えるから、保存しておきましょう」
そんな効果もあるのか………凄いなあ……。

「さて、じゃあパルスイちゃん。藍も待ってるみたいだし台所に行ってお手伝いして頂戴？」

ハツとした表情で……—

「は、はい！すぐに行きますね。頑張って作ります…碧？楽しみにしておいてね♪」

ちよつと顔を赤くしながら台所へと向かうパルスイさん……—

「ふふっ♪愛されてるわね〜」

悪戯そうな顔で笑う紫さん……。

「まあ……少し照れますけど………その、嬉しいですから……／／／

そういえば他には何を貰ったんだろう……？

「袋には松茸、栗、サツマイモ、カボチャ、新米、銀杏、柿、秋茄子……

それに果物が梨、ブドウ、リンゴ、桃…良いチョイスね」

ナチュラルに心を読まないで下さい……。

どれも美味しそうだけど……茄子って夏場のイメージがあるけど…？

「紫さん、秋茄子ってそんなに美味しいんですか？なんだか夏野菜ってイメージがあるんですけど？」

「そうね、基本的には夏野菜に分類されるんでしょうけど、本当に美味しくなるのは秋になってからのよ」

そうなの？初めて知ったよ…。

「茄子はね秋にかけてその旨味や栄養を凝縮する性質があるの、だから見た目は皮が柔くなつて見えるけど、食べると本当に美味しいのよ？」

へー…普段そんなに茄子を食べないから知らなかったよ…「あ、それとね」…？

「秋茄子は、嫁に食わすな…って言葉があるの、知ってたかしら？」

そんな言葉が？

「いえ、初めて聞きました…ちなみに…どうしてですか？」

すると、再び悪戯そうな顔をした紫さんが……

「くすつ…秋茄子はね、体を冷やす作用があるの。子供を産む大事な嫁が体を冷やささないようにっていう戒めね…。パルスイちゃんにはあまり食べさせない方が良いかしら？…ふふっ♪」

顔が真っ赤になる……／／

「ゆ、紫さん!?!気が早いですよ!」あら？何度かお泊りしてるのに、まだそういう事はしていないのかしら?」……ノーコメントで……」

もう言ってるようなものだよ……うあー…恥ずかしい…／／

女の子が親に赤飯を炊かれるって、こんな気分なのかな…？

そんな風に紫さんに、からかわれながら喋っていると……

「…でも、ほんと…いつか二人で…新婚生活みたいなのも憧れますね…」

すると、少し考える仕草をした紫さんが……

「ねえ、碧君？あなた：「碧、ご飯が出来たから一緒に運んで貰っていかしら？」：行ってあげなさい？」

なんだろう？何か言おうとしてたのかな？……まあいいか、人数分運ぶのは大変だし急いで行こう。

それから出来上がった料理を次々と運んでいき、食卓には多くの秋の味覚が並んでいた。

一際いい香りをしているのは、松茸ご飯、栗ご飯：松茸とか生まれ初めて食べるけど：楽しみだなあ。

それから、サツマイモの味噌汁、カボチャの煮つけ、焼き茄子、銀杏と椎茸を使った茶わん蒸し等、神様から貰った食材をふんだんに盛り込んだ料理が所狭しと並んでいた。

そして、どこからともなく紫さんが調達してきた秋刀魚を使った塩焼き……うーん、やっぱり秋って偉大だね。

準備もでき、みんなが席に着き紫さんの掛け声で……

「じゃあみんな、秋の神様と食材に感謝を込めて……」

「いただきます」

それから並べられた料理を食べたのだが……

「んんっ?!うまー！これが松茸ご飯なんだ：新米と合わせてこんなに美味しい物だったなんて：外の世界じゃ絶対に食べられないよ！」

その美味しさはパルスイさんも例外ではなかったみたいで……

「碧、こっちの栗ご飯もホクホクで美味しいわよ。それからほら：この焼き茄子も美味しさが詰まってて、いくらでも食べられそうね」
すると、さっきの話を思い出した紫さんが……

「あらあら、パルスイちゃん。程々にしておきなさいな？」

何の事か分からないパルスイさんは、首を傾げながらも了承していた……
「うあー／＼／これは内緒にしとこう：うん。」

「藍しやまーこのお魚も、脂がのってて、とっても美味しいですー！」

秋刀魚を食べていた橙ちゃんも、とっても喜んでる：うん、和むなあ。

「ごらごら、きちんとバランスよく食べなさい。ほら、この茶わん蒸しも美味しいぞ?」

そんなこんなで、思い思いの感想を言いながら食事は進んでいく。

すると、紫さんから……

「——そう言えば、もう何度か、こうしてパルスイさんと一緒に家で食卓を囲んでいるけれど……もう、家には慣れたかしら?」

カボチャの煮つけを食べていたパルスイさんは、一旦箸を置き……

「……ええ。八雲家の方々には色々として貰って、本当にありがとうございませ……その、私も何か……お礼が出来ればいいんですけど……」
その言葉を聞いた紫さんが……

「気にしなくてもいいのよ?——そうね……なら、あなたは碧と一緒に幸せになって頂戴?それが一番の恩返しよ?できるかしら?」

すると、パアツと表情を明るくしたパルスイさんが……

「——はい!絶対に碧と幸せになります!」

その答えに紫さんは満足そうに笑みを浮かべ、うなずいていた……
本当に頭が上がらないなあ。

そして藍さんからも……

「あとは橙と遊んであげてくれ。パルスイなら良い姉役になってくれる……な?橙?」

藍さんの横でご飯を頬張っていた橙ちゃんが……

「うん!わたし、お姉ちゃんと一緒に過ごすの……大好きなんだ!だから、これからもよろしくね!パルスイお姉ちゃん!」

その言葉を聞いたパルスイさんは、少しだけ涙ぐみ……

「……橙ちゃん……ありがとうね……。うん!橙ちゃんの為にも、良いお姉ちゃんになるわね♪」

笑顔のまま食事を終え、デザートに果物を食べ……その日はお開きになった。

こうして秋を堪能するための一日が終わった……でも、秋はまだまだ始まったばかり、もつともつと……色々な事を楽しみたいな。

32話 スポーツの秋く魅惑の衣装く

「ねえパルスイさん、秋と言えばスポーツの秋って言葉もあるよね？」
と、朝食の準備をしながら、隣で目玉焼きを焼いているパルスイさんに言ってみる。

「そうなの？初めて聞いたわね…ちなみに、何でスポーツなのかしら？紅葉や食欲なら理由は分かるのだけど…？」

「そういえば、何でスポーツの秋なんだろう？一般的に言われてるだけで、深く考えたことは無かったなあ…。」

すると、のそのそと（珍しく自分から）起きてきた紫さんが――
「それはね…秋は四季の中で最も過ごしやすい季節で、運動をするのに丁度いいのよ…zzzz」

ああ…でも眠そうだ…――

「紫さん、おはようございます。もう少しで朝食ができますから…それにしても、色んな事に詳しいんですね」

半分寝ぼけながらも、きちんと答えてくれる辺り流石は賢者だ…。

「おはよ…碧君…パルスイちゃん…。それからね…んくつ…」

パルスイさんが用意した水を飲み干す…――それから？

「ありがとう。おかげで目が覚めたわ。それからね、秋はエネルギーの消費量が増えて基礎代謝が上がりやすいの…まあ…早い話、ダイエツト効果もものすごく高くなるのよ…「ホントですか?!」…くすつ♪ええホントよ♪」

ダイエツトという言葉に、すかさず反応したパルスイさん。

「パルスイさん…そんなに気にするような体型じゃないの？（ポッコ）…あいたつ!?!…え？何で？」

照れた顔をしたパルスイさんから無言で頭を叩かれた…ホント…何で???

そんな僕達を見た紫さんが…――

「くすっ♪いいこと碧君？乙女心は複雑なのよ？それと…女心と秋の空って言葉もあるくらいだから、気を付けなさいね？」

むう…本当に難しいなあ…。そんなやり取りをしながら準備を進めて、いつものように朝食を食べる。

「さて、さっきの碧君の話なんだけど…秋はね、来るべき冬に備えて、色々体の準備をしていく時期でもあるのよ」

動物だと冬眠とかしないといけないからね。だからこそ秋に一杯食べておくのかな？

「ただね…食べ物が美味しすぎて、思わず食べる量も増えてしまうのよ…その辺は分かるわよね？」

ああ…そういうことか…。すると紫さんの言葉に思い当たる事があるのか…パルスイさんが……—

「紫さん！是非スポーツをしましょう！今から！直ぐに！」

そこまで気にしなくても…いや、藪蛇かもしれないからやめておこう。

でも、パルスイさんとスポーツか…うん、それはそれで楽しみだな…—。

「あらあら、いいわよ？場所の用意はさせて貰うわ…それで、どんなスポーツをやりたいのかしら？」

パルスイさんは少し考えた後…こちらに顔を向けてくる…ああ、そういう事か。

「二人で楽しめるものだと…ウォーキング、サイクリング、水泳、マラソン…後は…テニスとか…かな？」

その中のあるものに、パルスイさんは反応した。

「あまり聞きなれないものもあるのだけれど…テニスってどんなものかしら？」

そっか、テニスをするのは初めてなんだ…なら簡単に教えてあげなきゃね。

「えっと、簡単に言うとラケットって言う…羽子板みたいなものか

な?…その道具を使って、小さなボールを二人で打ち合うスポーツかな?」

我ながら分かりにくい説明だと思っけど…伝わったかな?

「なんとなくだけど…分かったわ。紫さん、その…テニスをしたいのですけど…?」

すると分かっていったかのようには紫さんは…

「了解したわ。ラケットとボール…それ…から…テニスウェアも用意してあるからね…くすくす♪」

…なん…だと…?

今、何て言った?テニスウェア?…あの男子なら誰しも一度は憧れる衣装…?

紫さんの方を見ると…サムズアップしてた…紫さん…グツグツです!思わずサムズアップし返した僕は悪くない…はず。

そのやり取りを見ていたパルスイさんは何が何やら、よく分かっていないようだったけど…。

「さあ、パルスイちゃん。そうと決まればこっちの部屋でお着替えしませうね?」

「へ?着替えですか?この服のままじゃ?」

「何言ってるの?テニスをするには決まった衣装があるのよ?それを着ないとテニスは出来ないんだから?」

紫さんナイスです!そして、慌てるパルスイさんを連れ紫さんが隣の部屋へと入っていった。

『へえ…これがラケットとボールですか?思ったよりも大きいんですね』

『そうよ。それと、これが衣装ね』

『へえ…はへっ?!ちよつと、紫さん?!これ、何だかスカートが短くないですか?!それにノースリーブだから腋とかモロに見えちゃいますし?!』

『まあまあ。まずは着替えて頂戴…着方は分かるかしら?』

『えつと……はい。んしよ……あ、ウエストはアジャスターで調整できらんですね……上着は…ブラ以外脱がなきゃ…いけないのね……』

『あら？相変わらず綺麗な肌ねえ……えいつ♪』

『ひゃん?!ゆ、紫さん！どこ触ってるんですか！』

『いいじゃない？お嫁さんの身だしなみをチェックするのも保護者の役目よ？…それっ♪』

『んひゃ?!だから、いきなりそんな所を…ひゃん?!…』

『これは…碧君が夢中になるのも納得ね…さて、じゃあそろそろ着替えの続きをしましょうか？』

ああ……良かった終わってくれて……声だけとはいえ…いや、声だけだからこそ、色々とやばかったよ……

『スカートはこれでいいのね……って、これスカートの中…丸見えなんじゃないですか?!』

『ああ忘れてたわ。ショーツの上から、これを穿いて頂戴？』

『何ですかこれ？…ヒラヒラの多いショーツ…？』

『アンダースコートって言って……まあ、簡単に言えば見られても良いショーツ…ドロワーズを少しだけ動きやすくしたものよ？』

『見られても良い?!これ普通にショーツと布面積が変わりませんよね?!え？これが普通？外の世界って……』

そんなやり取りを暫くして、着替えが終わったのか、紫さんが部屋から出てきた。

『碧君、準備出来たわよ♪ほらパルスイちゃん、いい加減覚悟を決めて出て来なさい？』

『うう…紫さん…でも、これ…とっても恥ずかしいですよ……』

『全部見た間柄なんでしょう？なら別に今更良いじゃないの？』

その言葉に僕も顔が赤くなる…／／

襖越しに、パルスイさんも悶えてるのが分かるし…。

『もう、いい加減にしないとスキマで無理やりこっちに出すわよ？』

『わ、分かりました！……うう…碧…笑わないでね…？』

そうして、襖を開けておらずおすとパルスイさんが出てくる……ここ、これは!?

スカートを下に引つ張りながら胸元を手で隠すパルスイさん……か、可愛い……

全身白でコーデされたテニスウェアだが、短すぎるスカートからは動くたびに、アンダースコートがちらちらと見えている。

上着の方もノースリーブで腋だけではなく横乳がモロに見えるタ イプだった。

それから、白+薄手の生地なので、うっすらとピンクのブラが透けて見えている……まあ……有体に言えば……とてもエロイです……ごめんなさい……。

でも、紫さん……グツジョブです!

そう思いながら紫さんにサムズアップすると……紫さんもととても良い笑顔でサムズアップしてくれた……流石は賢者……色々と分かってらっしやる。

それから、恥ずかしがるパルスイさんを二人で説得して、外に連れて行くことにした。

「そういうえば、幻想郷にテニスコートつてあるんですか?」

するとスキマを開こうとした紫さんが……

「ええ、実はこんな事もあるうかと思ってこっそりと作っておいたのよ。場所も、めつたに人が来ない上に人目に付きにくいから、パルスイちゃんの姿を見るのには最適よ♪」

「……あの……私がこの衣装を着ないという選択肢は……?」「ないわよ(ないけど)」「……ですよね……しくしく……」

と、そんなパルスイさんを連れてスキマを潜った先にあつたのは……霧に包まれた……湖……?

「……ここに来たのは初めてかしらね?……ここはね、紅魔館の近くにある『霧の湖』名前の通り、一年の大半が霧に包まれた広大な湖なの。

場所も選んだし、これなら目立つことはないでしょうパルスイちゃん？」

まだ、恥ずかしさで悶えてるパルスイさん…まあ、流石に外で着るのは恥ずかしいよね…まあ、そんな所も可愛いんだけど。

「うう…確かにこれなら人はあんまり来ないでしょうし、霧で目立ちにくいですけど…はあ…もう諦めてテニスを楽しむことにします……」

それから、パルスイさんにラケットの持ち方や、ボールの打ち方、テニスコートの説明などをした。

「それじゃあ私はのんびりと見てるから、二人は楽しんでちょうだいね♪」

紫さんはスキマの上に器用に寝そべて眠り始めた…朝早かったからねえ。

「さて、じゃあまずは準備運動からしようか？何にもしないと怪我しちゃうからね」

「そうね、ところで準備運動はどんな事をするのかしら？」

うーん…普通にアキレスを伸ばしたり、屈伸や前屈とかかな？…あ、そうだ。せつかく二人いるんだし…。

「まずは僕がやって見せるから、それに合わせて動かして。その後は二人で出来る運動があるから、それをやろうよ」

そして、アキレスを伸ばしたり、屈伸や腕を回したりした。

「うん、なんだか温かくなってきたわね。次はどうするのかしら？」

そう、僕がしたかったこと…それは……

「まずはパルスイさん、こっちに来て「ええ…」…それから、背中合わせにくっついて…「ふえ？」腕を組んで…いくよ？」

何をされるのか理解していないパルスイさん…そのままゆっくり持ち上げる。

「ちよ、ちよつと碧?!これって?!」

「じたばたしないで!こうやって背中を伸ばしてるの!ほら、体を楽

にして？何となく気持ち良くない？」

すると落ち着いたパルスイさんが……

「……ええ。なんだか不思議……こういうのも良いわね」

そう、どうせ運動をするなら良くあるこういうものもしてみたいと思っただのだ。

「ゆつくり降ろすから、そしたら、次はパルスイさんが持ち上げてね？」

「んっ……ええ……分かったわ。ゆつくりと……あら？……碧って……思った以上に軽いのね？」

まあ……背も低いし……。

「この体勢だったら尚更そう思うよ。これを後2〜3回繰り返したら次の運動をしよう」

そして、背中を伸ばし終わり……次は……

「——次は、地面に座って？……うん、そのまま足を開いて「へっ？……流石にこの時間からは……／＼／＼」違うよ?!えっと……前屈するの、僕が背中を押すからパルスイさんはそのまま地面に頭を付ける感じで体を伸ばしてって事だよ」

「ああ……そういう事ね……もう!そういう事は先に言っただけ……／＼」

それからゆつくりとパルスイさんの背中を押していく……けど……

「パルスイさん……体、とっても柔らかいね」

——そう押していったら、なんとビツクリ頭が地面に着くという柔軟性……新体操選手になれるんじゃないや?」

「んっ……そう……かしら……?でも……こうしてると……っ……碧の体温とか、匂いが間近に感じられて……それに……抱き締められてるみたいで……いいわね♪」

うっ……そう言われるとちよつと照れくさいな……ん?待てよ……この流れは……。

「じゃあ次は私が碧を押してあげる番ね。さ、碧……準備はいいかしら

？」

ああ…そうなるよね。いや、まあ楽しみなんだけど…僕、体が硬いからなあ…。

体勢を入れ替え、今度はパルスイさんから押ししてもらおう…けど…

「ねえ？碧…なんで前に倒れないのよ？」

「えっと…柔軟性が…ないんです…あいたた…」

すると、パルスイさんが一度力を抜き…

「ふうん…だったら…これならどうかしら♪」

背中にあつた手が、僕の胸元を抱き締めるように回される。

そうなるど必然的に、背中にはパルスイさんの…たわわなあれが押し付けられるわけで…

「あら？どうしたのかしら？クスクス♪」

うわあ…絶対に楽しんでる…とかさっきの仕返しか？…でも、良い匂いするし…柔らかいし…うん、このままでいいや。

そんな感じでイチヤイチャしながら準備運動？をしていると…

「——あら？こんな所で皆さん何をなされているのですか？」

とコートの外から声がかかります…この声って…。

「美鈴さん？ご無沙汰しています…あれ？今日は門番のお仕事はお休みなんですか？」

緑色を基調とした中華っぽい服装に、腰まで伸ばした紅い髪…スリットから覗く健康的な足。

「ええ、今は休憩中だったのでお散歩をしていたのですよ。しかしまあ…相変わらず仲が良いみたいですなあ」

ハツ…と我に返る。今の体勢は、パルスイさんから抱き締められているような恰好…うわあ…

慌てて元の体勢に戻り…

「すみません！お見苦しい所を…

「いえいえ、お二人が幸せそうで何よりですよ。二人を見ていると私

も幸せになりますから」

相変わらず出来たお姉さんだなあ…。

「しかし、いつの間はこの場所にテニスコートを作られたんですか？
これなら私も毎日通いたいくらいですよ」

「紫さんがこつそり作ってみたいなんです。良ければ美鈴さんも使ってください」

「それは感謝します。ふむ……ここならば……」

どうしたんだろう？何か考えてるみたいだけど…？

「碧さん。良ければ後程紅魔館へいらっしやいませんか？少々頼みたいことがあるのですが…」

？…唐突だなあ…まあ美鈴さんから頼まれ事なんて滅多にないから……—

「——いいですよ。えつと少しここで体を動かした後でも構いませんか？」

「はい、構いません。それでは私は仕事に戻りますので…後程、またお会いしましょう」

そう言つて立ち去っていく美鈴さん…なんだろう…つてこの視線…。

「あの…パルスイさん？…どうしたんでしょうか？」

「むく…。今のつて紅魔館の人…よね？何だか妙に仲が良くなかった？」

ああ…そういえば美鈴さんとは初対面なんだっけ？

「えつと、美鈴さんとは、紫さんの仕事の手伝いで紅魔館に行ったときに、門で世間話をするくらい仲だよ？」

ふーん…と言つた顔でこちらを見てくるパルスイさん…。

「……相変わらず年上キラーなのかしら？」

「え？なにそれ?!初めて聞いたんだけど?!」

「まあ、この話はその内ね。今日はテニスをしに来たのだから、始めましょうっ。」

すごい気になるんだけど……まあ時間も限られてるし、始めるかな。

そうして、さっそくコートに別れてテニスを始めたんだけど……
「いくわよ〜…はい〜……………当たらないわ……。もう一回！たあっ！
(ベチツ) ……?!~~~~」

今度はボールごと自分の手をラケットで叩いてしまった……。
パルスイさんて、なんでもできそうなのに変な所で不器用なんだよ
なく…まあ、そこが可愛いんだけど。

「パルスイさん、いい？最初はゆつくりでいいから。まずはボールに
きちんと当てるところから…ラケットがボールに当たるまで絶対に
目を離さないでね？」

「う、うん……。せーのっ (ポーン) あ！当たった！当たったわよ！
やったー♪」

ボールは山なりにこちらのコートに飛んできたので……………

「その調子だよ！じゃあ次はこれを打ち返してきて…ねっ！」
取れるくらいに軽く返す……………いけるかな？

「…しっかりとボールを見て……………えいっ！」

おお、ちゃんと帰ってきた…やっぱリセンスがいいなあ。

それから、ラリーが続くようになり、ようやくテニスらしくなっ
てきた頃…とある事に気が付いてしまった。

「それっ！」

(ぽよん)

「あ、そんな所に?!間に合え！」

(ひらっ)

「あ、いいボール…これやってみたかったのよね！せーの…スマーッ
シュー！」

(ふわっ……………ぽよん)

うん……………さっきから、胸の揺れとか、少し汗ばんだ生足とか、スカ
トから覗くアンスコとか……………色々とまずいです。

「??…ちよつと碧?どうしたの?折角ラリーが続くようになったのに
?」

軽く汗をかいて、頬を赤らめたパルスイさんが近づいてくる……しかも、本人気が付いて無いのか、ブラがずれて……その……ピンクのあれが見えてるんだよ……／＼／

そして、そんな僕の視線に気が付いたのか……パルスイさんは自分の格好と今までの動きを思い出し……慌てて胸を隠し……。

「くくく／＼／……碧のえっち……ぐふっ」……スケベ……「かふっ」……まあ気が付かなかった私も悪いんだけど……／＼／

二人して顔を真っ赤にして照れていると……

「あらあら？…本当に仲がいいのだから♪」

あ、そういえば紫さん居たの忘れてた……というか全部見られて……「くすくす♪」……やっちゃった……。

その後はお互い恥ずかしさもありません、テニスはそこでお開きにした。

「ねえ……パルスイさん……／＼／」

「なにかしら？」

「次からは、無難にウォーキングとかにしようか？」

「そ、そうね……／＼／」

あ、でも……。

「ねえ……碧？……この格好……また見たい？」

?!……読まれてた……。

「はい……とつても、見たいです……」

すると、顔を赤らめたパルスイさんが、耳元で……

「なら……二人っきりのときに……ね？」

破壊力抜群の言葉……それが聞けただけでも今日は満足な体験だった。

「さて、二人とも……良い雰囲気だけど……美鈴にも言われているでしょ？私も用事があるし……紅魔館に行くわよ？」

あ、そうだった。パルスイさんを見てみると……。

「私は少し休ませて貰うわ。この場所は空気が澄んでいて、とても過ごしやすいの……だから気にせずいつてらっしゃい？」

なら、お言葉に甘えて…。

「じゃあとりあえず用事？を早めに終わらせて戻ってくるよ…じゃあ紫さん…行きましょう」

そうして僕と紫さんは紅魔館へと向かって行った。

余談だが、パルスイさんが残った理由に、テニスウェアを他の人に見られたくなかったというものがあつたらしい。

確かに、本人恥ずかしがってたから仕方がないよね…――。

333話 読書の秋?〜大図書館と秋の大敵〜

その後、紫さんに連れられて紅魔館までやってきた。

テニスコートから歩くと少々遠かったので、紫さんに抱えられ移動した……相変わらずのお姫様抱っこ……恥ずかしい……／＼／

「あの……紫さん……いつも思うんですけど……なんでお姫様抱っこなんでしょうか?流石に照れるんですけど……／＼／」

そんな僕の心境を知ってか知らずか……

「あら?碧君は私に運ばれるのが嫌なのかしら……お姉さん……悲しいわ……よよよ……」

確信犯だ……確かに身長的にも運びやすいんだらうけど……はあ、もう少し背が高かったらなあ……。

そんな風に思っていると、紅魔館が見えてきた……うん、相変わらず……紅いね。

「あ、紫様!……と、碧さん……えっと……相変わらず……可愛らしいですね?」

美鈴さん?!やめて!そんなフォローはいらないです!

「うう……紫さん、もう降ろしてください……「はいはい♪」……ふう……先程といい……お見苦しい所をお見せしてすみません……」

すると……

「いえいえ、私も一度あんな風に碧さんを運んでみたいものですね♪」

まさかの追撃……美鈴さん……わざとですか?

「そ、それよりも……何か用事があるみたいですけど……どうされたんですか?」

「ええ……実は碧さんに頼みたい事がありました……紫様も付いて来て貰えませんか?」

美鈴さんの言葉に紫さんも首を傾げる……本当に何なんだろう?

それから美鈴さんの案内で紅魔館にある大図書館…に案内された……そういえば読書の秋って言葉もあつたなあ…機会があればここで読書もいいかもね。

「失礼しますね……あ、小悪魔さん、パチュリー様は相変わらずですか？」

美鈴さんが図書館に入り、受付に居た小悪魔さんに声を掛ける……相変わらず？

「ええ……変わらさず……ですね。あら？紫様に…碧さんではないですか……ああ、そういう事ですね」

すると、何かを理解した小悪魔さんはこちらに来て……。

「紫様、碧さん……ご無沙汰しております」

相変わらず綺麗なお姉さんだ……でも、こちらを見てくる目がちよつと怖いのはなぜだろう？

「久しぶりね、小悪魔……それで、何となく話は見えてきたけど、あなたのご主人様はどこかしら？」

え?!紫さんもう話が見えたの?!……流石賢者様……すると、少し困った顔をした小悪魔さんが……

「えつと、そうですね…見て貰えば分かると思いますんで…いいですよね美鈴さん？」

「はい。その為に連れてきたわけですから。その方がパチュリー様にとってもよろしいかと……」

そして、小悪魔さんが……

「ではこちらの部屋へ来てください」

しばらく図書館の中を進んで行く……本当に沢山の書物があるんだな……こんな図書館見た事ないや……そして、一番奥に扉が見えてくる……あそこにパチュリーさんがいるのかな？

「(コンコン)…パチュリー様…お客様がお見えです。最低限の身嗜みを整えますか？」

『ふえっ?!小悪魔?!何でここに……それよりもお客様って何よ?!』

そんなパチュリーさんの声を無視するかのよう……

「では開けますよ。『ちよ、ちよつと待つて！せめて服を着るまで待つて?!』…早急にお願いしますね……という訳で、少々お待ちください…」

ホント、何が起こってるんだろう？前に会ったときは普通に受付で本を読んでたよね？

横に居た美鈴さんは苦笑いをして……紫さんは……呆れていた……

???

しばらくして……『ど、どうぞ……』と声が聞こえてきたので部屋へと入る……とそこには……

「パチュリー……さん？」

「え？碧？それに紫様？…小悪魔…どういう事?!」

慌てふためくパチュリーさんは珍しい……のだが……それ以上に気になった事……。

「パチュリー……あなた……太ったわね……「うぐつ?!」……はあ……そんな事だろうと思つたわ……」

紫さんは齒に物着せぬ言い方で、パチュリーさんに言った……でも、本当にそうだ。

前のパチュリーさんも確かに美鈴さんや小悪魔さんのように引き締まった体型ではなかったものの、多少女性らしい丸みを帯びたラインだったと思う……。

しかし、今のパチュリーさんは……その……明らかに……太っている……。

顔つきに代わりは無いのだけど……いつも着ているゆつたりとした服の上からでも分かるくらいに出た、お腹のお肉……ロングスカートから少しだけ覗く足も、心なしかむっちりしている……。

ゆつたりした服の上からでも分かるくらい、むっちりとしたパチユリーさん……成程……美鈴さんの頼みたい事が分かった……。

「パチユリーさん……なんで……その……こんな事になったんですか？」

他の人は分かっているようだったので、事情が呑み込めない僕は聞いてみる事にした……。

「うう……絶対……笑わないでくれるかしら？」

「はい。パチユリーさんの事です、きつと何か事情があるんでしょう？……僕は絶対に笑いませんから……ね？」

その言葉を信じてくれてか、パチユリーさんはゆっくりと話してくれた。

「その……今年の秋は、食べ物が増え、例年にも増して、とても美味しくてね……。ついつい食べ過ぎちゃったの……」

ふむふむ……まあそれは仕方がない……のかな？……すると小悪魔さんから。

「パチユリー様……続きがあるでしょう？」

「うっ……えつとね……私、動くことが苦手なの……それでね、ずっと図書館で本を読んで、眠くなったら寝て……その生活を繰り返してたら……こうなっちゃって……／＼／＼」

それで恥ずかしくなって、引き籠りになっていた……と……。

「なら、パチユリーさん……折角の運動の秋なんですし……暫くの間、僕達と一緒に運動をしませんか？」

多分、美鈴さんが僕を連れてきた理由がこれなんだろう……でも……でも……

「嫌よ……。動きたくない……それに、私……あんまり動けないし……」

成程……これで美鈴さんも苦労してた訳だ……でも……でも……ここで……

「パチユリーさん……僕も無理強いさせたくはないです……でも、何でも……何でも頑なに動きたくないんですか？」

すると、少し考えて…ゆつくりと話し始めた…。

「私ね…生まれつき体が弱くて、それに…喘息を持ってて…動くときに息切れしたり、咳が出たりして…自分にも…それから周りにも迷惑を掛けちゃうの…だから、私の事は放っておいても…「ダメです!」…?…碧?」

僕も生まれつき体が弱くて、喘息持ちで…苦しい思いをしてた…だからこそ、パチユリーさんの気持ちがよく分かる。

誰かに迷惑を掛ける位なら、何もしない方がいい……だけどそれは違う!

「パチユリーさん…僕も、生まれつき体が弱くて、今でも偶に喘息が出たりするんですよ?」「…えっ?」…そうは見えないでしょう?」

予想外の答えだったのだろう。パチユリーさんは驚いた顔でこちらを向いてくる。

「それこそ、生まれてすぐに高熱を出して死に掛けたり…学校の授業で倒れたりすることなんて日常茶飯事だったんです…だから、最初は思いました。パチユリーさんと同じように…みんなの迷惑になるなら…このまま何もしない方がいいんだ…って」

悲痛な空気を感じたのか、周りの人達も少しだけ雰囲気暗くなってる…でも、それを変えるように…

「でも!それは違うんだ!確かに迷惑はかけてしまう…でもね、掛けた迷惑は別の恩で返せばいい!その為には少しでも自分の体調を良くしないと何もできないから…だからパチユリーさん…ゆつくりでいいから…僕と一緒にがんばりましょう?」

そう言って僕はパチユリーさんに手を差し出す…——この思いが…届いてくれると信じて



最初は単なる同情かと思った…。

大神碧：私よりも遥かに年下で、背も低い：弟のような存在。
普通の人生を送ってきた人間……だと思ってた。

でも違った。彼も私と同じだった……いや、魔法使いという種族である以上、私の方がまだマシな方だ……。

でも彼はそれを乗り越えた……。

そして言ってくれた：掛けた迷惑は別の恩で返せばいいと……。

差し出された手……そして、柔らかな優しさ……でもその瞳に宿る強い意志。

この人と一緒なら……私も変わる事が出来るのだろうか……？

いや、変わって見せる！……ここまで私を思ってくれる人の為に！

そして、私は彼の……碧の手を取った……ああ……温かい……。



パチュリーさんが手を取ってくれた……良かった……。

「その……碧……。一杯迷惑を掛けると思うけど……しばらくの間……よろしくね……」

パチュリーさん……

「こちらこそ……至らぬ事もあると思いますが……よろしくお願いしますね」

そして、握手をした僕達だったが……。

「ごほん、話は纏まったみたいね」

あ、他の人も居たんだった……うわあ……また、やつちやった……／

「とりあえず……パチュリーの準備をするから、碧は先に美鈴と一緒に門で待っていて頂戴」

「あ、はい紫さん。じゃあ行きましょうか美鈴さん」

「ええ……では、パチュリー様……後程……それから紫様も……ありがとう
ございます」

そして、僕と美鈴さんはひとまず門へと向かう事にした。

「碧さん…本当にありがとうございます」

??…美鈴さん?

「いえ、僕は何も…でも、レミリアさんや美鈴さんが言ってもダメだったんですか?」

「ええ…私や、お嬢様…いえ、この紅魔館の住人は、軒並み運動能力の高い人が集まっているんです。ですので、言ってもかえって逆効果になってしまつて…」

そっか、それでただの人間の僕なら…つてことか。

「御察しの通りです。本当に感謝しています」

「ちよ、ちよつと美鈴さん?!頭を上げてください!…それに、やつとスタート地点に立つたんです。感謝の言葉は…成果が出てからつてこつてお願いします」

流星に、これで何も成果が出ませんでした、とかなつたら申し訳ないし…。

「ふふつ…そうですね。その時は紅魔館でパーティーでも開きましようかね♪おや、準備が出来たみたいですよ?」

そして、現れたのは…手提げバッグを持ったパチュリーさん…だけ…?…あれ?紫さんは?

「ごめんなさい、待たせたわね。ああ…それと紫様なら、レミイに用事があるみたいだから、先に行つて頂戴つて」

ああ…そういうえば用事があるつて言つてたなあ。

「じゃあ早速テニスコートまで行きましようか…あ、でもかなり遠いみたいですけど…」

そう、来るときも思つたけど、コートまでは少し距離がある…どうしようかと考えていると。

「えい♪「ふえ?」…こうして私が抱えて行けば何も問題ないですよね?」

来たとき同様に、美鈴さんにお姫様抱っこされていた…え?…え?

「しかし、本当に軽いですね。きちんとご飯を食べてるんですか?」

「いやいや?!そうじゃなくて?!なんでこの格好なんですか?!」

すると、悪びれた様子も無く……

「いえ、先程も言いましたが、こんな風に碧さんを運んでみたかったのですよ……しかし、これは殿方がしたくなる気持ちの方が分かりますねえ」
うん、本来逆なんだけどね……しくしく……

するとパチュリーさんも何かブツブツと言っていた……

「……むきゅー……私だって、体力が付けば……うん……いいわね……」

聞かなかったことにしよう。そして、そのまま僕達はテニスコートに向かった。

「あら、碧。おかえり……なさい……?」

パルスイさんからの出迎え……でも、その顔には困惑が……

まあ帰ってきたと思つたら人が増えて、しかもお姫様抱っこされて帰ってくるなんて……ねえ。

「えっと……これは、どういうことなのかしら?説明をしてもらえると助かるんだけど?」

そして、紅魔館であつた事を簡単に説明した……納得してくれるといいんだけど……

「……はあ……あなたらしいわね……。というか、紫さんが許可した段階で既に私は何も言えないわよ」

「うっ……そうだね……ごめんね……」

「まあ……いいわ……。えっと、自己紹介させて貰うわね。私は『水橋パルスイ』地底に住む妖怪で、碧の彼女よ。気軽にパルスイって呼んで頂戴」

すると続けて……

『紅美鈴』です。紅魔館の門番をしております。今回の件……引き受けて貰い感謝いたします。それと……パルスイさんの事は碧さんから聞かされておりましたので……「えっ?!」……良い関係のようで何よりです」

そして、最後に……

「今回はごめんなさい……『パチュリー・ノーレッジ』よ、紅魔館の図書館の司書をしているわ。……迷惑を掛けると思うけど……その……よ

ろしくお願いします」

各々、自己紹介を終えたので、パチュリーさんは更衣室に着替えに行った：そう言えば紫さんが準備をするって言ってたっけ？

ちなみに美鈴さんはいつもの服装だ。本人曰く、これが一番動きやすい：との事。

「それにしても、紫さん：どんな服を用意したのかしら？」

とパルスイさんが言ってくる…。??：普通に動きやすい服なんじゃないの？

「多分、それなりに動きやすい服なんじゃないかな？」「本当に？」：え？」

すると、自分の服を指さしながら……

「私に、こんな：は、破廉恥な服を用意した紫さんよ？何もしていないと思う？」

いや、それはパルスイさんがテニスをしたいって言ったから……

「：待たせたわね」：ほら、普通の……ぶっ!」

「ちよ?!え?うそ?!」

「これは：まあ：動きやすいのでしょうけど……」

と各々が感想を述べていく……

「~~~~／／……あの……やっぱり……変かしら……？」

そう言つて現れたパチュリーさんの服：それは……歴史と伝統に裏打ちされた衣装：半袖体操服にブルマだった：ブルマだった……

真つ白な半袖体操服に、赤いブルマ：そして白いニーソックス……テレビとかアニメでしか見た事が無かったけど……何この破壊力……？

ソックスで抑えきれないむっちりとした生足、サイズが合っていないのか体操服からはみ出る、ぷにっとしたお腹……そして、一番目を引かれるのが：今までゆったりした服で隠されていた、恐ろしい質量を持った胸……これは：色々な意味でマズイ……

そんな僕の考えを読んでか……パルスイさんがほっぺたを思いつきりつねってきた。

「いひゃい?!いひゃいひよ?!」「むく……」「ご、ごめんにゃはい……」

だって男の子だもん……って……ん？

「あの…パルススイさん…何かしら?」……気のせいならいいんだけど…あれ…」

そうして、目線をパチュリーさんの胸元に……うん、見間違えじゃない…あのピンク色の物は……—

「?!ちよ、ちよつと?!パチュリーさん!何でブラを着けてないのよ!」

あ、やっぱり着けてなかったんだ…。

「むきゅー……サイズが合うブラが無くて普段からしてないの…それにいつも服で隠してるから…。だからちよつと…形がだらしくなっちゃって……」

声色から、しゅんとしているのが分かる…けどそこは流石にパルススイさんが言ってくれた。

「私の知り合いに下着の補整とかできる人がいるから!その人に頼んで作って貰います!」

(ああ…アリス姉さんか…姉さん衣装関係だと本当に職人だからなあ)

「で、でも…「でもじゃない!」…ひうつ?!」

「いい?折角そんな立派な物を持っているんだから!維持する事も女の務めよ!」

何だかお姉さんと妹のやり取りみたい……。

でも、男としてはこの場に居るのはかなりきつい……—

というのも、パチュリーさんがだらしないと言う胸も、その柔らかさは一目瞭然で、張りは少ないけど、代わりに少し身じろぎするだけで、プリンみたいにプルプルと揺れている…って見ちゃダメだよ!」「とはいえ、このままじゃ擦れて運動にもならないでしょうし…あ、そうだわ。確か紫さんからニップレスを貰ってたからそれを着けてくるわね」

そう言ってパルススイさんはパチュリーさんを引きずりながら更衣室へと向かって行った…。

「はあ……色々と心臓に悪い…」

「でも、眼福だったでしょう?」

「それはもう…って美鈴さん！からかわないで下さいよ！」

「男の子ですから♪…しかしあの衣装…本当に危険ですね…殿方ならイチコロなのでは？」

「……否定はしません…はい…」

「ふふっ♪今度は私が着てみましょうか？」

「美鈴さん！」

そんなやり取りをしていると、二人が戻ってきた…ああ…助かった…のか？

「むきゅー…色々とごめんなさい…」

まだ少ししよんぼりとしたパチュリーさん…。

「いいのよ。こんな衣装を用意した紫さんが悪いんだから」

そして、僕の方に近づいてきて…？…どうしたんだろう…？

(ねえ…パチュリーさんの胸…本当にすごいんだけど…何あの触り心地…反則じゃないの？)

と、小声で言ってくる…同性すら魅了するパチュリーさんの胸…すごい…。

そして、ようやく準備が出来たので軽い柔軟体操から始める。

この辺は運動のプロ…美鈴さんが色々と教えてくれた。その内拳法とかも習ってみたいかも…。

一人で出来るストレッチが終わったので、二人一組になり続きを始める…のだけど…、何故かパチュリーさんと僕。美鈴さんとパルスィさんの組になってしまった。

なんでも、殆ど体の動かせないパチュリーさんには美鈴さんの指導はきついみたいで境遇の近い僕が適任だったそうな…。

そして、まずはパルスィさんとやっていた背中合わせになり背筋を伸ばすストレッチを…とはいえパチュリーさんの腕力では、僕を持ち上げる事は出来なかったもので、僕がゆっくりとパチュリーさんを持ち上げて背筋を伸ばして上げている…のだが――

「ねえ…碧…私…重くないかしら…？」

「だ、大丈夫ですよ…?」

まあ軽くは無いけど……それ以上に……背中に当たる感触がマズイ……。

体操服が薄いのと、パチユリーさんの肉付きが良いのが合わさって、常に背中にむにゅむにゅとした感触が……うう……精神がゴリゴリ削られていく……。

そして、背筋を伸ばした次は前屈……。

パチユリーさんはそこまで体が柔い訳ではなく(むしろ運動していないから仕方がないのかな?)前屈をするだけで肩で息をしていた。「むきゅー……ごめんなさい。ここまで体が動かないなんて思わなかったわ……」

「いえ、気にしないで下さい。さつき始めたんです、早々動くなら苦労はしませんから」

さて、そしたら次は……軽くウォーキングでも……(チョイチョイ……?)

「あの……碧の背中も押させて欲しいんだけど……ダメかしら?」

座っているパチユリーさんはいつもと違い上目使い……いつもは身長差があっても見下ろされる形になるから新鮮だなあ……。

「えっと……いいですよ。やり方は今僕がやってみたにお願いします」

そうして地面に座り足を開く、後はパチユリーさんが背中を押してくれればいいんだけど……。

「行くわよ……えい……ってきや?!」

背中を押そうとした手はすべり、僕に抱きつくような形に……しかも、このほっぺたに当たってる柔らかいもの……?!?!? 考えるよりも先に行動してしまった……?!?!?

「あ、あの……僕、ちよつとジョギングしてきます!パルスイさん!パチユリーさんをお願いします!でわ!」

そして煩惱を払うために全力でその場を後にしたのだった。



「はあ……まああれは男の子には辛いわね……」

「ですね…パチュリー様はそういう所には少し無頓着ですから…尚更ですね…さて、私は碧さんの護衛に行きますので…パチュリー様の事を頼めますか？」

一緒に運動している事で、お互い打ち解けて普通に話せるようになってきた。

「ええ、こちらは任せて頂戴。碧の事…お願いね？」

確かに…碧が信頼するのも分かるわね…誠実で面倒見のいいお姉さんタイプだもの。

「はい。頼まりました…では…」

そうして凄まじいスピードで碧を追う美鈴さん…本当に運動能力が高いんだ…。

さて、私は取り残されたパチュリーさんの元に行きますか。

「パチュリーさん。もう少しストレッチした後、コート内をゆつくりと歩きましょうか？」

すると、少しだけ寂しそうな顔をしたパチュリーさんが――

「ええ…。あの…私…碧に何かしたのかしら…？だとしたら…謝らないと…」

本当に無頓着なのね…。

「あれは男の子なら仕方がない事なの…だから気にすることはないわよ」

「そう…じゃあ続きを…お願いしてもいいかしら？」

そうして、私達は二人でストレッチをするのだが…私は気が付いた。

この人…パチュリーさん…今は少しだけふくよかな体型になつてるけど…顔つきはかなりの美人だし、髪もとっても綺麗。体型も私の胸はこんなに大きくも柔らかくもないし…。

少し絞つたらもろに碧の好みのタイプじゃない…？

そして、何より…パチュリーさんの碧に対しての視線…うん、女

は度胸、聞いてみるしかないわね。

「ねえ…パチユリーさん。単刀直入に聞くわね、あなたは…碧の事…どう思ってるのかしら？」

するとパチユリーさんから帰ってきたのは意外な答えだった。

「えつと…ごめんなさい。実は私も良く分からないの…」

そ、そうなの…でも——

「でも、あなたの碧を見る目…妙に熱が籠ってたから…」

「そう…なのかしら…。彼の…碧の目…私の境遇を聞いて、真剣に私の事を考えてくれた目…。嫌いじゃない…むしろ、好き…」

また、落としたのかしら…でもそれにしては…？

「…ああ…でも、これは恋心じゃないと思うの…そうね、私に兄がいたらあんな感じなのかしら？」

兄……これまた斜め上を行ったわね…。

「ねえ…失礼かもしれないけど…身長も…それから年もパチユリーさんの方が上よね？それなのに、何で兄なのかしら？」

すると少し考えたパチユリーさんが…

「確かに、身長も年齢も、私の方が遥かに上だけど…あの瞳…それからあの私を引っ張っていてくれる感じ…年下なのに頼れる存在…何て言うのかしら…精神的兄？」

また、面白い表現を…——すると。

「ねえ…パルスイさん…良ければなんだけど…碧のどこが好きになったのか…聞かせて貰えないかしら？」

え…？その返しは予想してなかったわね…でも…——

「そうね…長くなるけどいいかしら？」

こくつと頷くパチユリーさん…うーん…——

「——まずは、優しいところ。誠実なところ。真面目なところ。行動力があるところ。さりげない気遣いができるところ。弱音を吐かないところ。年下で、私と違う、力のない人間なのに、私を護ろうとしてくれる男らしいところ」

それに…——

「一緒にいて安心するところ。しつかり者なところ。いつも私を引っ

張ってくれるところ。なのに、逆に頭を撫でてあげたら子犬みたいに甘えてくるところも好き」

言って顔が赤くなってくるのが分かる…でも止まらない…。

「他にも、一緒に怒ったり、喜んだりしてくれるところ。意地を張った私を甘えさせてくれるところ。気が合うところ。話をして楽しいところ」

ああもう…言葉が止まらない…。

「はにかんだ笑顔が可愛いところ。声が綺麗で、甘いクチナシの匂いも大好き。本人は気にしてるけど、中性的で少し幼げな見た目の可愛いところ。ああ、もう。他にもいっぱいあるんだけど、言い出したらキリがないわ…ってあら、どうしたの?」

「えっと、何て言うか…ごちそうさま?…甘いケーキをホールで食べて、砂糖たっぷり紅茶を飲んだ時よりも、胃もたれが…いえ、パルスイさんがどれだけ碧の事を想っているのかよく伝わって来たんだけど…」

うわあ…やっちゃった…

でも、彼の事についてなんて聞かれたら…止められなくなるわよ…。

「ご、ごめんなさいね…／／その…どうしても…悪い癖なのは分かっているんだけど…」

「いえ、いいのよ。…うん、これで分かったわ。やっぱり私のこの気持ちは恋心じゃなくて妹が兄に甘えたい心なんだって…」

「そ、そう…それは良かったわね…」そこでなんだけど…?何かしら?」

恥ずかしそうに俯くパチュリー…

「えっと…碧の事を…その…兄様って呼んでも良いかしら?」

はい?…え?この人…何て言ったの?

「あの…聞き間違いかしら?…兄様って?」

「ええ、この気持ちを確かめるためにも、そして、私自身が兄様に甘えてみたいという気持ちがあるから…ダメかしら?…姉様?」

?!姉…様…?

「えつと…兄様は分かるとして…その…姉様って…?」

不思議そうな顔でこちらを見てくるパチュリーさん。

「だって兄様の彼女なら、それは姉様でしょ?それに姉様は私に色々教えてくれたから…」

うそでしょ…まあ、私も満更でもないし…

「—はあ…こんな姉でいいなら…良いわよ?でも喋り方はそのまま
でお願いね…気を使われるとちよつとだけ寂しいから…ね?」

するとパアツと笑顔になったパチュリーは…

「ありがとう!パルスィ姉様♪」

思いつきり抱きついて来た…うわあ…すつごい柔らかいし、良い匂い…そつちの趣味はないのだけど…。

それから少し休憩した私達は碧が戻ってくるまでの間、軽くウォーキングをして歩いた…手を繋いで…／／／



「すみません美鈴さん…」

あれからすぐに美鈴さんが追いついてきて、一人だと危ないからと言うこともあり一緒にジヨギングをしてくれた。

「いいんですよ。男の子なんですから…無理もありませんよ?」

「うう…すみません…。あ、コートが見えてきましたよってあれ?二人で歩いてるけど…手を繋いでる?」

美鈴さんも気が付いたようで…。

「あら、本当に…ふふつ…流石は碧さんの彼女さんですね♪」
???…どうということだろう?

僕達は二人に近づいていき…すると、こちらに気が付いたパチュリーさんが…

「あ、碧お兄様。ずいぶん遅かったのね」

ん?…気のせいかな?…今、さらつと恐ろしい言葉が聞こえた気がする…。

「えつと…ちよつと遠くまで行つてましたから…それよりも…二人とも随分と仲良くなつたんですね」

すると嬉しそうな顔をしたパチュリーさんが……

「ええ…お姉様とゆつくりとお話しながら運動ができたから…」

お姉様……？パルスイさんの方に視線を向けると……あ、顔を反らした…美鈴さんは…固まつてる。

「あ、あの…パチュリーさん、気のせいでしょうか？お兄様とお姉様つて…？」

「ええ。私はこれから、お兄様とお姉様の義妹として生活することにしたから。あ、安心してね、二人の邪魔をするつもりはないから」

幻聴じゃなかったらしい……再びパルスイさんに顔を向けると…ふるふる…と顔を振っていた……え？…本気なの…？

「あの……身長も…その年もパチュリーさんの方が上だから…どちらかと言えば僕が弟になるんじゃないや…？」

すると少し真面目な顔になり……

「そんな些細な事はどうでもいいのよ。たとえ年齢が上でも、動かない大図書館とまで呼ばれた私を兄様は動かしてくれた。そんな頼れる…甘えられる兄様だからこそ、私はあなたを兄と…兄様と呼びたいの……ダメ…かしら？」

そんなうるうるした上目使いで見られて断れるわけじゃないじゃないでしょ!?

パルスイさん……ああ…もう諦めてるんだね……。

なら美鈴さんなら?!…そうして目を向けると……サムズアップして

「これでパチュリー様も健康な生活を送れますね♪」

逃げ場がない……はあ…覚悟を決めよう…。

「えつと……こんな兄で良いなら…お願いします…パチュリーさん「パチエ」…へ？」

「パチエって呼んで、本当に親しい人にしか呼ばせていない名前…兄様と姉様には呼んで欲しいの…（再び上目使い）」

／＼／＼／

「分かりました……えつと……よろしくね……パチエ？」

すると今まで見た中で一番の笑顔で……

「はい♪末永く……よろしくね……碧お兄様♪」

こうして、事情のよく分からないまま、パチユリー……パチエが妹になった……後でパルスイさんに詳しく聞かなくちゃ……

そして、みんなでウォーキングをしたのだけ……パチエはパルスイさんと僕を挟んでずつと歩いていた……きちんと手を繋いで……

照れるけど……あんな笑顔されたら……ねえ？

そして日も暮れる前に紅魔館へと戻ったんだけど……

帰りに紫さんとレミリアさんにみんなで報告したところ、レミリアさんから盛大に笑われてしまった……

あの咲夜さんですら固まっていたし……でも、あまりに笑うレミリアさんは、とても良い笑顔をした。パチエの魔法で遙か上空に吹き飛ばされていた……パチエ……それは怖いからやめようね？

そして、それから約一ヶ月間パチエと一緒にコートに通い軽いウォーキングや、調子の良い時はちよつとしたランニングなどをして過ごした。

その結果、パチエのスタイルは元のスタイルに戻った……でもそれだけじゃなく、なんと喘息のも少しづつだけ良くなっていった。

これには僕も驚いたんだけど……パチエ曰く……

「これが兄弟の絆の力なのね……なんてすばらしいんでしょう。これからも、よろしくお願いね……兄様♪」

まあ……パチエが幸せそうならいいのかな？

「これからも、時には厳しく……時には優しく……私の事を導いてね……兄様♪」

まさか、自分よりも年上の妹が出来る日が来るなんて、思いもしな

かったけど……

——家族が増えるって……何だかいいなあ……。

あ、今度幽香姉さんとアリス姉さんにも報告しないと……——
人共……大丈夫だよね？

34話 十五夜の月く月下に佇むかぐや姫く

秋と言えば紅葉、食欲、運動もあるが、もう一つ、中秋の名月という言葉もある。

幻想郷でもそれは例外ではなく、月の位置が十五夜に差し掛かる頃、永遠亭から一通の連絡が来た。

「碧、あなた宛てに文が来ているわよ?」

「僕宛てに? 珍しい…: というか初めてじゃないだろうか? いったい誰から…: ?」

「これは…: 永遠亭…: しかも主直々の文みたいね…: どうしたのかしら?」

紫さんでも分からなかったらしい…: うーん…: 永琳さんなら分かるんだけど…: 輝夜さん?

…: 何かしてしまったのかな?…: ちよつと怖いけど…: とりあえず開封してみた。

「えつと…: これは…: ——」

大神 碧殿

拜啓、元気になっているかしら?

突然の事で申し訳ないのだけど…: 明日、十五夜の夜に、永遠亭にてお月見の席を設けようと思っているの。

そこであなたに参加して欲しいのだけど。

一人で来るのが心配なら、あなたと親しい人を連れてきてくれても構わないわ。

もし、来てくれるなら夜八時頃に永遠亭の前に来て頂戴。

優曇華に対応させるから。

良い返事を待っているわ。

敬具。

蓬萊山 輝夜

お月見の誘い…確か、明日は特に予定は無かったけど……

「あの、紫さん…実は……」

手紙の内容を紫さんに説明する。

「ふむ…なるほどね…となると…ええ、私は参加できないけど、あなたを永遠亭に送る事はできるから…折角だから行つてらっしゃいな?」

何か考えていたけど、普通に許可を貰えた。なら、後はパルスイさんに連絡を取るか……

「……と、いう事なんだけど…参加できそうかな?」

陰陽玉を使い、パルスイさんに連絡を取る。しかし……

「えつと…ごめんなさい…。明日は地底の…さとoryや勇儀達との飲み会があるの…だから、申し訳ないのだけど碧だけで行つてくれないかしら?」

それなら仕方がないか……でも、よく一人で行くのを許可してくれたなあ……「あ、そうそう」……?

「いくら永遠亭の人達が美人揃いだからって……絶対浮気はしないでよね?」

「ぶっ?!…しないから!?!……それよりも、パルスイさんの方こそ酔つてハメを外さないようにね?」

すると少しムツとした声が聞こえてくる。

「…何よ?私はこちらまでハメを外すことなんてないわよ?……そりや…最初に碧と再会した時は…／＼／＼」

うん、可愛い……ってそうじゃなくて。

「この前さとりさんから言われたよ?…お酒が入ったパルスイさんののろけ話は留まる事を知らないって。「ふえっ?!」…自覚なかったの?…いくら辛い酒を飲んでも胸やけが止まらないって、偶に愚痴られるんだから……」

「えつと……気を付けます……」

そんなやり取りをして、パルスイさんに許可を貰い、翌日の夜。紫さんに永遠亭まで送って貰って……。

「なら、碧。遅くなるな…とは言わないけれど、飲み過ぎは程々にね？」

「ええ、承知しました。それじゃあ行ってきますね」

そして、スキマの中に消えていく紫さん…さて、僕も永遠亭に行かないとね。

移動は直ぐに終わった、スキマで移動してきた場所が永遠亭の目と鼻の先だったからだ。

そして、門に向かうと…あ、優曇華さんだ。

「こんばんわ、優曇華さん。本日はお招き頂きありがとうございます」
すると、こちらに気が付いた彼女が…

「あ、碧さん！ようこそおいで下さいました。本日は…お一人でしょうか？」

「ええ…他の人達が、みんな都合が悪いって事だったので…すみません」

「いえ、いいですよ。それではご案内させていただきますので、私に付いて来て下さいね？」

そして、優曇華さんに続き永遠亭へと入っていく…こうして永遠亭に入るのって二回目だけど…立派なお屋敷だなあ…。

長い板張りの廊下と障子、美しい装飾がされた襖が続く空間…なんだろう…ここだけ時間から切り離された感覚になる…。

「あの、今日は永琳さんとしてるさんはどうされたんですか？」

すると、優曇華さんは少し困った顔をして…。

「あ、はい…師匠は、診療所の方で泊まり込みですることがあるそうです。てゐは…どこかに遊びに行きました…」

相変わらず…苦労してるんだな…。

そして、案内される事しばらくして、一際大きな襖の部屋の前に来た…

「姫様…碧さんをお連れ致しました」

すると、襖の奥から…

『ありがとう、優曇華。そのまま奥に通して頂戴』

そして、優曇華さんが襖を開き……

「失礼いたします……さあどうぞ、奥で姫様がお待ちです」

と、奥へと通される……何だか緊張してきたな……そういえば、輝夜さんと二人つきりになるのって初めてなんじゃ？

そして……畳の張られた床を進んで行く……井草の匂いがとても落ち着くな……。

部屋には灯は無く……ただ月明かりが窓から差し込むだけ……月見を楽しむ為の場……静寂の満ち溢れた空間に彼女は佇んでいた……。

「こんばんは。ようこそ、碧……お久しぶりね。初めて挨拶に来たとき以来だけど……元気にしていたかしら？」

永遠亭の主……竹取物語のお姫様……『蓬萊山輝夜』

ストレートで腰よりも長い艶やかな黒髪。

大きめの白いリボンがあしらわれたピンク色の上着に、月、桜、竹、紅葉、梅と、日本情緒を連想させる模様が金色で描かれている赤い生地のスカート。

掌から足先まで……一切の肌の露出の無い服装は、文字通り箱入りのお姫様を連想させる。

「こんばんは。本日はお招き頂きありがとうございます……お陰様で、元気にやっています。夏場には永琳さんにお世話になりましたが……ありがとうございます。生憎、僕一人で申し訳ないのですが……本日はよろしく願います」

「あなたは普通の人間……怪我もするし病気にもなる……仕方がないわ。ねえ……こちらに来てくれないかしら？」

??……なんだろう？輝夜さんに言われるまま近くに行く……なんだろう……お香の匂いかな？……凄い良い匂いがする……。

「そのまま、顔を見せて頂戴……うん、やつぱりあなたは顔を見せた方が良いわ……良い出会いと、良い環境があなたをそうさせたのかしらね？」

柔らかな微笑みをしながら、僕の頬を優しく撫でてくる……流石に照れくさいな……

「あ、あの！ところで、何で今日は一緒にお月見をしようと誘ってくれ

たんでしょうか…？」

すると、それまで柔らかな笑みを浮かべていた輝夜さんの顔が、少し寂し気な表情になり……

「そうね……その前に……優曇華、月見団子とお酒を用意して頂戴？」

すると部屋の外に控えていた優曇華さんが……

「はい……こちらを……足りなくなりましたらお呼び下さい……失礼します」

既に用意していた団子とお酒を軒先に置き、そのまま部屋から出て行った。

「さて、碧……なぜ十五夜……中秋の名月はこうしてお団子とお酒を用意するのか知っているかしら？」

そういえば……改めて聞かれると考えたことが無かったな……。

「えっと……月が綺麗だから、それを肴に一杯飲む……という感じですか？」

すると輝夜さんは少し笑い……

「くすつ……まあ普通は気にしないわよね。十五夜は秋の美しい月を感謝すると共に、秋の収穫に感謝をする行事なの……そうね、月見酒についても……芋類の収穫祝いを兼ねているため、『芋名月』なんて言われる事もあるのよ？」

へえ……そんな意味があつたのか……

「そして、月見団子も単に月に見立てた丸い物を用意して食べるのではなく、お月様に感謝の気持ちや、祈りを伝え、それに対して供えられた物を頂く……という作法があるのよ」

輝夜さん……なんでも知ってるんだな……流石は月のお姫様……でも、それと今日、僕が呼ばれた事と何が関係あるんだろう？

「そうね……少し、昔話をしましょうか……」

そして、輝夜さんは語り始める……永遠と須臾の物語の一端を……

「そもそも月人ってどういう存在か…碧は詳しく知ってるかしら？」

「いえ、単純に月に住む人を差すんじゃないんでしょうか？」

「実はね…今から数億年前…この地球上には、今よりさらに栄えた文明があったの」

数億年?!…話のスケールが違い過ぎる…そんな時代から人間がいたなんて…でも、世界遺産になってる物や、オーパーツとして発掘されている物…確かに今の技術でも作れない物は沢山存在する。

「その文明を築いたのが原初の人…後の月人になるのだけど…ある時、彼らは地球を離れたの。文明の全てを放棄して…ね」

「なぜ?…そこまで繁栄した文明があったのに?…」

「私も直接見たわけじゃないけど…確か、巨大な隕石による文明の崩壊が理由だったらしいわ」

「そして、人の時代は一度終わりを告げたの…でも、その避難に合わなかった人たちの怨念が地上には蔓延したの…それが、月人達が嫌うもの…『穢れ』と呼ばれているものよ」

「穢れ…ですか…」

「ええ、穢れは死の象徴。月人は穢れを恐れた…だから、穢れの蔓延する地上を放棄し、月へと居住を移したの…これが月人についてね」

なるほど…元を辿れば地球に住む人達…でも、穢れを恐れた一部の移住者が月人って感じか。

「次に、私の身分について話させて貰うわね。何度か聞いていると思うけど…私は今も、姫と呼ばれている…。それはあながち間違いではないの」

帝の元に居たから…——という訳ではなさそうだ。

「私は、月人の中でも権力を持った貴族の娘。だからその頃から、私は姫と言われていたわ。それこそ、月の頭脳とまで言われた永琳が家庭教師にあてがわれる位にはね…」

やっぱり……それだけ高貴な身分だったんだ。

「続けるわね…。月での生活は何一つ不自由なく、穢れという概念の無い…まさに楽園とすら言える空間だったの…でもね、私はそれが嫌だったの。やること全てに停滞感を感じ…やがて、青く輝く地上へ

の興味が湧いてきたのよ」

「地上には穢れがある……だから、行くことは禁じられている……でも、私は行きたい……ならどうすればいいか？……そこで思いついたのが、禁じられた薬の使用だったの」

禁じられた薬……それって竹取物語にも出てきた……」

「『蓬萊の薬』……飲んだ者を強制的に蓬萊人……老いる事も死ぬことも無い身体に作り替える禁断の秘薬……」

「でも、私には作ることは出来ない……だから、天才と呼ばれた永琳に造らせた……それが、永琳を苦しめる原因になってしまったのだけど……」

「結局、薬を飲んだ私は罪人となり……地上への流刑が言い渡された……そして、地上へと追放されたのだけど……そこで、私にも予想外の事が起きたの」

予想外？

「子供……いえ、赤子の姿に戻され地上へと送られたのよ。死なない……死ぬことが出来ない蓬萊人に対する罰……それが生き地獄……」

なんて酷い事を……

「そして、私が地球へと落とされたのが十五夜の夜だったわ……。赤子ながらにして思った……ああ……離れて見る月は、こんなにも綺麗なものだったのだと……」

近すぎて見えないものもある……か……」

「赤子の私は、とある竹林に落とされたの……そして、ただひたすらに泣き続けたわ……助けを求めて……」

もし、誰も気が付かなかつたら……もし、来たのが人食い妖怪だったら……そう考えるとゾツとする……

「でもね、そんな私を見つけてくれたのが、竹取に来ていた……おじじ様だったの」

輝夜さんの育ての親……竹取の翁……

「おじじ様は家に連れて帰り、どこの子供か分かるまで、おば様と二人で育てようと言ってくれたの……」

……ここは竹取物語そのものだ。

「子供の居ない二人は、私の事を本当の子供のように育ててくれたわ……ただ、そこでまた、問題が出てきたのだけど……」

また問題？

「元来、私は成人した存在を無理やり赤子に戻されたの……有体に言えば、他の子供よりも成長が早く、精神も大人のそれだったのよ」

そういうことか……確かに物語でも三ヶ月で成人したっていう話があったと思うし……。

「普通なら、そんな奇妙な子供を育てようなんて、誰も思わないわよね……でもね、おじじ様とおば様は違ったの……何も聞かず……何の奇忌の視線も向けず……ただ一心に、私に愛情を注いでくれたわ」

「だからこそ、私は二人を信じて自分の身の内を話したの……たとえそれで関係が変わってしまっても、二人に嫌われてしまっても……私はこれ以上二人に隠し事をしたくなかったから……」

良心の呵責……いや……これは輝夜さんの心の在りようが本当に、優しい物だったからなんだろう……。

「でもね、そんな私の事を、二人は言ってくれた……『どんな理由があつても、輝夜は私達の可愛い子供だよ。何にも心配しなくていいからね？』……って、あの時ほど嬉しいと思つた事は無かつたかもしれないわね……」

その時を思い出したのか……優しい笑顔を浮かべる輝夜さん……。

「そんな二人の役に立ちたくて、私は二人の手伝いをするの……家事や買い物……時には山菜取りなんてね……ふふっ♪……楽しかったなあ……地球に落とされて、本当に良かったなあ……思つたの……あの時まで……」

表情が暗くなる……何があつたんだろう？

「私が表に出始めたせいで……その、自分で言うのも何だけど……その当時ではありえない顔つき……まあ美しい娘として、周囲から注目されるようになったの」

なるほど、そりゃ輝夜さんくらいの美人になれば噂にならない方がおかしい。

「そして、その噂を耳にした五人の貴族から求婚をされたの……もちろん

ん普通に断れば、相手の面子を潰してしまう…だから条件として、いくつかの難題を出したの」

ああ…それが有名なあれか。

「自分で言っておいてなんだけど…あれは完全に求婚を受ける気は無い難題だったわ。実際、本物を取りに行つた人達は探している最中に難に遭い、偽物を用意したものは、それを看破し、二度と私に近づくなど言つて去つていったわ…あの時は爽快だったわね」

この人…やっぱり楽しんで…？

「それから、私の元に求婚してくるものは居なくなつたの…でも、安心したのも束の間で、私の噂は当時の最高権力を持つていた帝の元に届いたの…」

たしか帝は、普通に輝夜に会えないから狩人に扮して通つたんだっけ？

「帝は直ぐに私の元に使者を送つて来たわ…そして、使者たちはこう言つたの…『帝様の元に来なければ、輝夜殿の祖父母にも何かしら被害があるぞ』…と…まあ暗に…いえ、権力を使つて堂々と脅迫してきたのよ…」

そんな事実があつたの?! 物語の帝は優しい性格の持ち主だつたのに……。

「おじ様とおば様は気にしなくて良いと言つてくれたけど…それは私が許さなかつたわ。そこで、私はいくつかの条件を付けて帝の元に召し抱えられる事にしたの」

- ・ 祖父母を私の専属の侍従として常に側に控えさせる事
- ・ 二人の生活を何不自由なく過ごせるようにする事
- ・ 自分はあるまで、宮廷に居るだけで、決して手出しはしない事
- ・ 以上の条件が守れなかつた場合…私に舌を噛み切つて自害するという決意

「まあ、帝はあくまでも宝の一つとして自分の元に置いておきたかつただけみたいだから…その条件を飲んでくれたわ」

「自分の知つてる竹取物語とは…その全然違ふんですね…帝とか…輝夜さんにはお忍びで会いに行き、文を交わすうちに仲良くなつたっ

て書かれてましたし…」

すると、皮肉めいた笑いを浮かべた輝夜さんが……

「あの男が、そんなに出来た人間だったらなら、私は素直に都に残って
いたわよ……そして、都での生活が始まった……あれは本当にきつかつ
たわね……」

「私に向けられるのは、貴族からの劣情……身体目当ての視線。そして、
女官からの敵意……唯一信頼できるのが祖父母だけだった……」

悲しそうな瞳を浮かべる輝夜さん……

その瞳には心当たりがあつた、初めて此処で会つたとき……瞳の奥に
見えた、悲しみと……どこか哀愁を漂わせた色……

「それからは、ある程度碧も知ってるかもしれないけど……月からの使
者が来て、その人達を殺し……私と永琳は二人で逃亡した……そして、
この幻想郷に流れ着いたの……」

自身の我儘から始まつた一連の行動……そして今に紡がれる物語……
どんな思いがあつたのか……どんな悲しみがあつたのか……僕に理解す
ることは出来ない……でも、月に照らされ……物思いに耽る彼女
の顔からは、それをうかがう事は出来なかつた。

少しだけ重くなつた空気……それを払拭するように、輝夜さんは明る
い声で言つてきた。

「ねえ碧、あなたは音楽は好きかしら？」

??…音楽……?

「えつと……人並みには好きだと思いますけど……「良かったわ!」……??」
すると、輝夜さんは……

「私がね……おぼば様に習つた、得意の琴を聞いてほしいの……いいかし
ら？」

「ええ……是非……お願いします」

「ありがとう……そう言えば、碧は何か楽器は弾けないのかしら？」

えっ……僕……一応あれが弾けるけど……

「二胡(にこ)……であれば、拙いですが……弾くことはできます」
すると、輝夜さんは少々驚いた顔をして……

「二胡…珍しいわね？…独学で学んだのかしら？」

ううん…僕が二胡を弾くのは……—

「いえ、まだ母親が生きていた頃に習ったんです…だからですかね、そういう気分になったときは偶に弾いていたんです……」

すると、輝夜さんが優しい微笑みを浮かべ……

「そう…なら、直ぐに準備させるから……一緒に弾きましょう？」

そして、輝夜さんの前には立派な琴が…僕の手元にも煌びやかな装飾がされた二胡が届けられた。

「あの…弾けると言っても、特にこれと言って決まった音色があるわけじゃないんですけど……」

「いいのよ…碧は自分の思ったとおりに弾いて頂戴？私がそれに合わせるから…ね？」

そう言ってこちらを向いてくる輝夜さん…なんだろう…とっても心強い……よし！

そして、演奏を始める……楽譜があるわけでもなく…決まった音程があるわけでもない…ただ、心のままに……—

その音に合わせ、輝夜さんが琴を奏でる……最初はバラバラだった二つの音が…時を…音色を刻むごとに一つになっていく……—

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

一番近い場所……部屋の前で待機していた優曇華は、その旋律に心を魅了された……。

「これは…姫様の琴と…碧さんの奏でる音楽……なんて心地いいんだろう……月の同胞達が聞いたら…どう思うのだろう？」

診療所で研究をしていた永琳にも、その旋律は聞こえてきた……—

「ん？……この音楽…姫様と……この優しい音色……そっか、碧……。彼なら姫様の……」

お世辞にも輝夜の演奏技術には程遠い拙い演奏……。

しかし、そこに込められた心は何よりも気高く感じられた…。

場所は移り…永遠亭の上空

歌の練習をしていた夜雀のミスティアと、伴奏をしていた騒霊楽団の三人…。

「何？この旋律…：綺麗…：」

「技術は拙いけど…：何だろう、聞いていて心が優しくなる…」

「うん、満たされていくってこんな感じなんだね…」

「私達も、いつかこんな音楽を奏でてみたい…でも今日は…」

ただ、この音楽を…ずっと聞いていたい…：その場に居た誰しもが、そう思った――。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

楽器は、技術で奏でるものではない…：心の、いや…：想いで奏でるもの…。

幼いころ母親から習った事…：今なら分かる…、母親の伝えたかったことが…――

そして、こうして協演している輝夜さんの思いが…：――。

どれくらいか時間演奏しただろうか…：軽く汗がにじむくらいには熱中していたらしい。

こんなに楽しく楽器を弾けたのはいつ以来だろうか？

輝夜さんを見ると…：多分、似たような思いをしているのだろう…：その顔には、先程の悲壮感はなく…：満足そうな笑みが浮かべられていた。

楽器を片付け…：僕と輝夜さんは二人で月を見上げる…。

「私はね、月の都にいた頃から現在までずっと退屈を感じていたの…：でもね、ここで生活していく内に気が付いたの…：何事も環境のせいにする心が退屈さと窮屈さを生むってことに…」

それが、彼女の…：輝夜さんの思い…。

「ぎ、折角の団子…美味しいうちに食べてしまいませんか？今、こうしてあなたと過ごせることに感謝をして…ね？」

それから数秒…月を見上げた僕達はお互いに団子に手を伸ばし…同時に食べ始めた…うん…美味しいな…。

お酒を飲みながら、団子を食べる…それを見るのはお月様だけ…。「私達蓬萊人に、終わりはない…自分が不変の存在である為に過去は無限にやってくる、よって今を楽しまなければ意味が無い…。一瞬でも過去の事より今現在や未来を重要視する…それが今の私の目標なの」

お酒を飲み…少しだけ頬の紅くなった輝夜さんは語る…。

「碧…あなたの優しさは何事にも代えがたい…とても尊いもの…初めてあなたと会ったとき…あなたの瞳を見て…私は、あの二人を思い出したの…」

そっか…それで、今日…僕を呼んで…語ってくれたのか…。

輝夜さんは一度月を見上げる…そして、一息ついて…。

「——ねえ…碧。お願いがあるの」

「何でしょう？」

「私と…対等な友人…いえ、親友になってくれないかしら？…ううん…なって欲しいの」

そう言つて真摯な目でこちらを見てくる。

「あなたが嫌なら、断ってくれてもいいわ。私は…その、少し常識はずれなところもあるし…人付き合いもあんまり上手くないから…でもね…」

再び…一呼吸置く——

「でもね…月を離れ、幻想郷で生活をするようになった私は自分の本当にやりたい事を探すことに決めた。そして、これからも探し続ける…あなたには…それを一緒に探して…見守って欲しいの…これが、今の私の一番やりたい事」

外の世界に居た親友を思い出す…茜ちゃん…祥華さん…僕にもまた…。

「ええ…よろこんで。こちらこそお願いします、輝夜さん」

するとパアツと花のように笑顔が咲き誇る……。

「ありがとう…碧…勇気を出して、あなたを誘って…本当に良かったわ…。これからは親友同士、言葉に気遣いはいらわないわ。…それとね……」

もじもじと何かを言いたそうにしてる輝夜さん…???

「…折角親友になれたのだから…その…親友同士の愛称をつけてくれると嬉しいんだけど…ダメかしら…／＼」

少し、照れくさそうに言う輝夜さん…そっか、なら期待に応えないとね。

「僕もあんまり慣れてないけど…そうだね…。あ、我ながら単純かもしれないけど…「かやちゃん」…なんてどうかな？」

かぐやの「か」と「や」…それから大人びていた彼女の印象とは正反対のちゃんという呼称…どうだろうか？

「かやちゃん…ふふっ…良いわね。なんだか不思議な感じ…なら、私もあなたの事を…そうね、「みーくん」って呼んでも良いかしら？」

「みーくん…そう呼ばれるのは初めてだけど…うん何だか親友同士って感じで良いかも。」

「うん…これからもよろしくね…かやちゃん」
「こちらこそ、よろしくね…みーくん♪」

それから僕達は、お酒と団子を食べながら、当時あった事や、今の生活の事…他愛のない話をずっとし続けた…それこそ、夜が更け…月が消えてもなお…

たぶん、見ている人がいたら、こう思うんじゃないかな？…長年連れ添ってきた、仲のいい幼馴染みたいな雰囲気だって…。

こうして、永遠亭でのお月見は終わった…幻想郷に来て初めて出来た大切な親友と一緒に…。

翌朝……

結局、ほぼ徹夜で飲み明かした僕は早朝に八雲家へと帰宅した……が、その玄関先に立っていたのは……

「あら？碧、朝帰りとは良いご身分じゃない？」

笑顔なのにとても怖い……まるで能面のような顔をしたパルスィさんが仁王立ちで待つてくれていました。

「えつと……パルスィさん……これには事情があつてですね……」

「言い訳は後で聞かせて貰うわ……それに、何かしら？お酒の匂いだけじゃなくて……他の女の匂いもするのだけど…………そんなに近くでずつと一緒に居たのかしらね？」

もはや、何を言つても無駄だ………こういう時は……素直にあやまろう……うん……

結局、その日はパルスィさんのお説教で一日が過ぎて行つた……

途中、紫さんが助け舟を出そうとしてくれたが……笑顔のパルスィさんに気圧され、そそくさと去つて行つた。

大妖怪を威圧するつて……パルスィさん……どれだけ恐ろしい事に………

余談だが、後日……陰陽玉を使つて連絡をしてきた、かやちゃんから、
“みーくん”とフレンドリーに呼ばれた際に、その場にいたパルスィ
さんともう一悶着あつたのは別のお話。

35話 秋の終わりと一つの転機

秋も終わりに差し掛かろうとする頃……

「ねえ碧……あの事なんだけど……?」

仕事終わりのパルスイさんと家で晩酌をしていると、その話は持ちかけられた……

「うん、そろそろ……だよ。季節が変わる今だからこそ……僕達も変わらないとね……」

そして数日後……

八雲家の夕食後……紫さんに話したい事があると言って時間を取って貰った。

「それで、私に話って何かしら?」

緊張する……でも、これはキチンと伝えないといけない……家族だからこそ……今まで見守ってきてくれた人だからこそ……——僕は意を決して、口を開いた。

「えっと……端的に言いますね。実はここを……八雲家を出て、本格的に働き口を探そうかと思ひまして……」

すると、紫さんの目が細くなる……

「……なぜ、そう思ったのかしら?……今の生活に不自由でもあったのかしら?」

そんなわけない!

「違います……紫さんが……八雲家の人達が、僕の事を迷惑に思っていない……むしろ家族として受け入れてくれる事も知っています……」

でも、それじゃダメなんだ……

「……でも、幸せすぎるから……それに甘んじていたら、ダメなんじゃないかって思っただけです……」

前に手伝いをしていた時に映姫さんから言われた。

——……幸せを掴むには、ただそれに甘んじていてはダメだ、自

分から動いてこそ、本当の幸せを掴むことが出来る……って。

「……なるほど、碧君も成長したのね……くすっ♪保護者として……とても嬉しいわ♪」

それまでの厳しい表情から一転して……笑顔を浮かべる紫さん……

……。多分、僕の心は見透かされてるんだろう……。

「そういえば……」？「前に、パルスイちゃんとの新婚生活に憧れるって言ってたわね。もしかして、それと関係してるのかしら？」

くくく!!!この人絶対分かってる……はあ、本当に敵わないなあ……。

「ええ……実は……その……パルスイさんから、同棲しないか……って相談されていたんです……／＼／＼」

そう、今の状態……お互いが自分の家に通うのも悪くはない……でも、どうせならもつと二人の時間を取りたいって言われてしまったのだ……まあ、僕もそれには同感なんだけど……

「あらあら♪あの子もやるわねえ……。そうね、女にそこまで言われたなら応えてあげるのが男の子の役目ですね♪……それ……に……今のままだと、二人っきりの時間も取りにくいでしょうしね♪」

うあ……色々とばれてる……——ただ、これも伝えないと……。

「確かにそれもあります……。でも、それだけじゃなくて……自立して働けるようになれば、僕自身の成長に繋がるかなって思ってます……」

すると、紫さんも納得した顔を浮かべ……。

「自己研鑽……あなたの思い……確かに伝わったわ。良いわ、あなたの為に、ひと肌脱いであげる……そうね、数日ほど、待って貰えるかしら？」

そして……数日が過ぎた夜、紫さんから呼び出された。

「碧君。明日の朝、地霊殿に行くわよ」

「急ですね？……それに地霊殿ですか？」

多分この前話した事だろう……でも何で地霊殿に？

「まあその辺は明日説明するから。今日は早く休みなさい？」

そして、翌日…地霊殿に連れて行かれると……

「あ、碧さん…お久しぶりですね。お待ちしておりました」

入り口に居たのはさとりさんと…パルスイさん？

「お久しぶりですさとりさん。中々顔を出せなくてすみませんでした
…あと、何でパルスイさんも？」

すると、隣にいたパルスイさんから…

「ええと…多分、この前相談したことだと思うわ。その…ありがとう
うね…碧／＼」

相変わらず可愛い彼女……

「お礼を言うのはまだ早いよ？それに、言うなら紫さんとさとりさん
に…ね？」

そんなやり取りをしていると……

「ふふっ♪相変わらず仲が良さそうで…少し、妬けちやいますね／
／」

うっ…／／

「そうです、ところで…どうして今日は地霊殿に？」

「あ、そうでしたね。紫さんからお話を伺いまして、私の仕事の一つ
に、人手不足の店に仕事を斡旋するという仕事があるの。それで碧さ
んにぴったりの仕事場に案内をしようと思ひまして」

なるほど、それでか…なら、パルスイさんは？…ちらつと目を
向けると……

「えっと…その、ちよつとだけ心配になって…ね？」

そっか…うれしいな…。そうして、見詰め合っていると……

「こ、コホン。あの、二人とも…仲が良いのは結構ですが…その…今日
の目的を忘れられては困りますよ？」

あ…またやってしまった……どうにも最近こうなることが多い気
がするなあ…

「す、すみませんでした…／＼／＼ご、ごめんなさいね／＼／＼」
すると、さとりさんが何とも言えない顔で……

「まったく…少しは自重してくださいね？(でない)、私も羨ましくて
…／＼／」

「重ね重ねすみません……えつと、じゃあ案内をお願いできますか？」
ハツとした顔をしたさとりさんが……

「あ、はい！そ、それでは参りましょうか。あ、紫さんとパルスイさんはお留守番をお願いしますね？」

あれ？紫さんとはかく…パルスイさんはお留守番なんだ？

「碧の言いたい事は分かるわ。でも今日の目的はあくまであなたの仕事の話…私が出る幕はないの…だからせめて、ここで碧の帰りを待ちたくて…」

嬉しい事を言ってくれるね…なら、なおさら頑張らないとね。

「さて、これ以上先方を待たせてもいけませんので、参りましょうか？」

そして、さとりさんに連れられ、幹旋先の店に向かった。

「あの…さとりさん？今から行くお店ってどんなお店なんですか？」

自分が働く店だ…気にならないと言ったら嘘になる。

「ふふつ…安心して下さい。碧さんも良くご存じのお店ですから…ほら、見えてきましたよ？」

すると、目の前に見えた店は……翡翠？

「えつと……こつと？」

するとさとりさんはにこつと笑い……

「ええ…碧さんもご存じ…料亭『翡翠』です。では、参りましょう…失礼しますね」

そして、扉を開け中に入ると……—あ、カウンターに女将さんがいる。

「あら、さとり様…それに…碧さん。本日はようこそおいで下さいました」

いつもと変わらないはんなりとした雰囲気……でも、今日は……—

「女将さん、人材の件…連絡していた通り彼を連れてきました。さて、後は女将さんの方から説明をお願いします」

すると、女将さんがこちらを向き……。

「はい。では碧さん、ご説明させて頂きますね。実はこの料亭は私と板長の二人で切り盛りしているんです」

あの客をたった二人で?!

「そこですね、そろそろ人員を増やしたいと思いきとり様に相談したところ…丁度、あなたが仕事を探しているとお聞きしたので、本日来て頂きました」

なるほど、本当にタイミングが良かったんだな……。

「さて…碧さんさえ宜しければ、当料亭で働いて頂きたいのですが……」

「?……何か問題があるんでしょうか?」

すると、女将さんは目を細め……

「ええ……人員を増やすと言っても碧さんお一人…碧さん、今までにこういったお店で働いた事はございますか?」

「…いいえ、ありません」

ふむ…と言った感じでさらに目を細める。

「正直、他のお店で働くよりも厳しいかもしれませんが。お客様への対応、料理の支度、片付け…さらには、ここ最近お客様も増えてきております…。その分、忙しさも尋常ではないでしょう…それでも…ここで働く意志はありますか?」

いつものはんなりとした雰囲気は形を潜め…纏った空気は少しだけピリピリとしたものに……。

多分…いや、実際に僕が想像している以上にきついのだろう……

——…でも、それくらい乗り越えられないと…パルスイさんと幸せを掴むなんておこがましい

なら、僕の答えは一つだ!

「はい!……もし、僕が足手まとい…店にとって不利益だと感じたなら、直ぐに切って頂いても構いません!……ですので、どうかお願いします!僕をここで働かせて下さい!」

こちらの目をじっと見つめてくる女将さん……一店舗の経営者としての目……初めて見せるその瞳…全てを見透かされているような

目……でもここで目をそらす訳にはいかない！

そして、少しの間……沈黙が続く……そして――

「ふう……いいでしょう。碧さん、あなたの思い……覚悟……見せて貰いました。当店としても、あなたのような誠実な方に働いて頂くのは願ったり叶ったりです……今後は従業員として……よろしくお願いますね？」

柔らかな笑み……良かった……認められたんだ……

「ありがとうございます。誠心誠意……頑張らせて頂きます」

すると、女将さんから……――

「良いお返事です。仕事の方は、基礎を覚えるまではビシビシといかせて貰いますので……とはいえ最初から無理はさせません。それでは、仕事内容や勤務時間、日数、お給金等のお話をさせて頂きますね？」

それから、女将さんから仕事の内容等の説明を受けた。お給金としてはかなりいい方だ。

「碧さん……良かったですね」

一部始終を見守ってくれていた、さとりさんが声を掛けてくれる。

「さとりさん……こちらこそ、こんな良い所を紹介して貰って、本当にありがとうございます」

「それも、私の仕事ですから……ね？……女将さんも……ありがとうございます」

すると女将さんから……――

「いえ、彼の人となりは良く知ってます、後は碧さんご本人の意思と覚悟を確認したかっただけです。それと碧さん、いつからこちらで働かれますか？」

引越しもあるし、八雲家の人達への話もあるから……――

「そうですね……週を開けて、月曜日からでいいですか？」

今日が金曜日、数日の余裕はあるからその間に色々と準備を済ませないと……

「はい、構いませんよ。ふむ……でしたらそうですね……今から板長とご挨拶しておきませんか？」

板長さんど？それは願ったりだけど……どんな人なんだろう？

「板長。新しい従業員が決まりました、こちらに来てくださいな」

女将さんが厨房の方に声を掛けると、奥から……

「おや、女将さんが見初めた従業員……どんな方でしょうか？」

この人が板長さん？

桃色の髪の毛をシニヨンキャップで纏め、赤いエプロンをつけた背の高いお姉さん。

右手は包帯のような物が巻かれているけど……この人が板長さん？

「ふむ……見た所、ただの人間のようなのですが……成程、確かに真面目そうな方ですね」

そして、僕の目の前に女性が来る……勇儀さん程じゃないけど……この人も背が高いなあ……

「初めまして、私の名前は『茨木華扇』この料亭の板長をしています。それとこう見えても女将と同じく鬼の種族です。普段は『華扇』……仕事中は板長と呼んでください」

この人……妖怪……しかも鬼だったんだ?!……でも、角とか見当たらないけど……深くは聞かない方がいいかな？

「初めまして！僕は『大神碧』と言います。普通の人間です……碧と呼んでください。これからよろしくお願いします」

そして握手を交わす。すると女将さんが……

「ふふっ……お互い自己紹介は出来たみたいですね？……板長は私の古い知り合いで、この料亭を開く際に板長として雇ったのですよ」
なるほど……そんな経緯があつたんだ……

それから板長さんを交え、少しだけ話をした後……

「では、月曜日……そうですね、碧さんには夜から入って貰いたいのですが……いいですか？」

「はい、大丈夫です！」

「ふふっ♪良い返事です。でしたら、夜の開店の準備を始める夕方……そうですね、四時頃に来て貰っていいですかね？」

夕方か……なんだか今からドキドキしてきたな……

「はい！では月曜日の夕方から……よろしくお願いします！」
こうして僕の仕事先は無事に決まった。

そして、女将さんと板長さんから見送られ料亭を後にした僕達は……
「本当に……よかったですね碧さん？」

さとりさん……
「いえ、さとりさんや紫さん……それから女将さんのおかげです……ありがとうございます」

「ふふっ♪いいのですよ？でも……これで堂々とパルスイと同棲できますね♪」

「えつと……まあ……そうですね……／／／／」

改めて言われると照れるなあ……／／／／

そんな碧を見ながら、さとりは……

（ふふっ……碧さんが地底で暮らすなら私にもチャンスが多くなる……頑張りますとね♪）

なんて思っていた。

そして、地霊殿についた僕達は真つ先に紫さんとパルスイさんに報告に向かった。

「という訳で、無事に仕事が決まりました」

地霊殿に着くと、紫さんとパルスイさんが待っていてくれた。二人に報告をして……。

「おめでどうー！良かったわね……碧♪」

と喜んでくれるパルスイさんと……。

「そう、それは良かったわ。これからはパルスイちゃんの家から店に通うって事でいいのかしら？」

お祝いと、これからの事を聞いてくる紫さん……。

「はい。そうしようかと思えます。仕事は月曜日からなので、それま

でに準備をしたいなど思ってるんですけど……」

すると、紫さんは少し考えて……——

「なら、必要な物だけスキマを使ってパルスィちゃんの家に移動させましょう。それと……碧君の部屋はそのまま使えるようにしておくから、家に泊まる事があつたら使つて頂戴」

紫さん……。

「……ありがとうございます。さとりさんも……」はい?」「……色々のご助力頂き、感謝します……それから、今後ともよろしくお願いしますね」
これから地底に暮らすんだ……迷惑にならないように頑張らなきゃ。

「碧さん……はい。歓迎いたします」

笑顔で握手をする。うん、これからの生活が楽しみだな……——
そして、僕達は地霊殿を後に八雲家へと戻った。

八雲家へ帰ると、藍さんと橙ちゃんが待つてくれていた。結果を伝えると……——

「そうか、良かったな碧。うん、今夜はごちそうを作らないとな!」

「良かったね、お兄ちゃん♪ちゃんとパルスィお姉ちゃんを幸せにしてあげるんだよ?」

と、言われた。——うん、こうして思つてくれている家族がいる……ありがたい事だよ。

そして、みんなに手伝ってもらい、必要な荷物を纏め、パルスィさんの家へとスキマを通して送つていく。

パルスィさんの家は橋から少し離れた場所にあり、近所にはヤマメさんとキスメさんも暮らしている。

(所謂、郊外みたいな場所なのかな?)

旧都へのアクセスもそこまで遠くないので、仕事に行くときは重宝する。

僕の荷物をパルスィさんの家に置いていく……何度かお邪魔しているけど、こうして僕の荷物が運ばれていく……。

改めて、一緒に暮らす……二人っきりの同棲生活が始まるんだと思うと、ドキドキしてくる……／＼／

そして、荷物を運び終え（一部の荷物は帰ったときの為に残しておいた）その日は一日、新居のレイアウトを二人で決めて夜になった。八雲家に帰ると、藍さんが晩御飯の準備をしていた。

手伝おうとしたら……——「主賓に作らせる訳にはいかないだろう？」とやんわりと断られてしまった。

そして、料理が完成して運ばれる。どれもこれも美味しそうだなあ。

紫さんの音頭で、パーティーが始まる。

「さて、それじゃあ碧君の就職祝いと、パルスイちゃんとの同棲生活をお祝いして……かんぱーい♪」

それから、みんなで色々な料理を食べる。

「しかし……碧がいなくなると、家事や料理が大変になるなあ」

「いえ、藍さん……今まであまりお役に立てませんでしたから……」

「そんな事はないぞ。碧の家事スキルはかなり上達してくれた。お陰で、かなり助かっていたんだぞ？だから、謙遜することはない。自信を持って良い！」

普段、あまり大きな声を出さない藍さんがここまで褒めてくれる……嬉しいなあ。

「そうだよ！お兄ちゃんのお焼いたお魚さんは、藍さまのお焼いたやつよりも美味しいんだよ！」

橙ちゃんが嬉しそうに言ってくれる……でも、直ぐにその顔がシュンとなってしまふ……どうしたんだろう？

「明日から……お兄ちゃんはいないんだよね……ぐすつ……さみしくなるよお……えつぐ……」

橙ちゃん……僕は……大切な妹を、そつと抱き寄せる……——

「——大丈夫。暮らす場所は別々になるけど……橙ちゃんが僕の大切

な妹って事には変わりはない……それに……」

一呼吸置いて、橙ちゃんとしつかり目を合わせて……

「……ここは……八雲家は、僕にとつての実家みたいなものなんだ……だからちゃんと帰ってくるよ……ね？」

そうして、橙ちゃんの頭を撫でてあげる……。泣いたカラスが一転……笑顔で甘えてくる……。

「うん、橙ちゃんはいつもその笑顔を忘れないでね？」

そして、楽しい宴会も終わり、その日はお開きになる……。――。
自分の部屋に戻ると、直ぐに睡魔が襲ってくる……。

――この部屋で寝る事も暫く無くなるのか……寂しいけど……これが最後じゃない。

そうして、その日は眠りに就いた……。少しの寂しさと、明日からの期待を胸に秘めて……。

翌日――……

「じゃあ、みなさん……今までありがとうございました」

「寂しくなるな……だが、いつでも戻ってきてても良いんだぞ？」

「橙も待ってる。でも、心配しないで！お兄ちゃんの方まで橙が藍さまのお手伝いをがんばる……」

頼もしくなった妹……そして……――

「……碧君。あなたを幻想郷に連れてきて……この家で一緒に過ごした事は、とっても楽しかったわ……でも、あなたの意志……そして、パルスィちゃんの意志……二人の幸せが私の幸せだから……。これは選別よ、持って行って頂戴」

そして、紫さんから幻想郷の地図が描かれたカードを渡された……

――これは？

「それは、私のスキマの力を込めた特殊な転移札……幻想郷の地図の中から場所を選択することで、今まであなたが行った場所へ転移することが出来る……それと、これから訪れる場所を記録することで、その場所への転移もすることが出来る……これはあなたが……いえ、あなた達が作っていく地図……私からのプレゼント……受け取ってくれる

かしら?」

僕とパルスイさんが作っていく地図……これから歩む道……。

「紫さん……ありがとうございます」

思わず涙が出そうになる……あ、パルスイさんは泣いてる……。

すると、紫さんが……

「……碧君。たとえ離れていても、あなたは私の……いいえ、私達の大切な家族だから……いつでも帰って来てね?」

そう言っつて、僕の側に来て……ゆつくりと、そして優しく抱きしめてくれた……。

そして、藍さんと橙ちゃんも抱きついてくる……ああ……僕は本当に思われてるんだなあ……なんて、嬉しいんだろう……それに、心が温かくなる……帰る場所があるっていいな……。

みんなに別れを告げて、地底にあるパルスイさんの自宅へ移動する。そして、家の前に二人で立ち……

「今日から、私達の……二人だけの生活が始まるのね……」

改めて言われると、実感が湧いてくる……それと同時に、嬉しさや……少しの恥ずかしさも出てくる。

「うん……。今日からよろしくね……パルスイさん」

そして、扉を開き家に入ると……???:……——パルスイさん?

何故か、こちらを向いたまま、何かを待っている……??:

「扉を開けたら……言うことがあるでしょ?」

言うこと……?

「えつと……お邪魔しま「ちくがうー!」……?」

えと……なんだろう?

「あのね、碧は今日からここで暮らすんですよ?なら、言うことは一つでしょ?」

ああ……そっか……ホント、良い彼女を持ったなあ。

「うん。ただいま、これからよろしくね……パルスイさん♪」

「おかえり♪よくできました♪」

それから、二人で部屋のレイアウトを変えたり、晩御飯の買い出し

に出かけたりもした。

「ふう……ちそうさまでした。こうして、二人で作ったご飯と一緒に食べるって……やっぱりいいね」

「ふふっ……そうね♪……でも、紫さんにも……八雲家の人達にも……さりにも……色んな人達に迷惑を掛けちゃったわね……」

確かに……今回の同棲の件で、色んな人達にお世話になった。だけど

……

「——うん、だからさ……その人達に……ううん、今まで出会った人達……これから会う人達……みんなが羨むような……幸せな関係を作ろう？……それが一番の恩返しになるんじゃないかな？」

「ええ……そうね。……うん、しみりした空気はここまでね……えつと……じゃあ……その……お風呂に入りましょうか？……／＼／＼」

その言葉に抗えるはずもなく、こくりと頷き、二人で仲良くお風呂に入り、その日は疲れもあってか、すぐに眠ってしまった。

因みに寝室には、紫さんから選別にキングサイズのベッドが送られたので、二人で一緒に、寝る事にした。

少し照れるけど……これからはこれが当たり前になるんだね……—

——明日から、仕事……頑張らないとな。

36話 二人の生活の始まり

朝――

自分とは違う体温を感じて目が覚めていく…………――

(ぶにぶに…)

んう…………(ぶにぶに)…なんだろう?…さつきから、ほつぺたに何か当たる…………――

うつすらと目を開けてみると…………――

「ふふっ♪可愛い寝顔ねえ…ほつぺたも、子供みたいに柔らかいし♪」
パルスイさんがとても可愛らしい笑顔で、僕のほつぺたを突いていた…そっか、昨日は一緒に寝たんだ。

「これから毎日、碧の顔を見ながら起きれるなんて…幸せね…♪」
そう言われると、こっちも照れてくる…それに、いつまでもぶにぶにされるのも恥ずかしいし…よし、反撃するか。

そして、僕は油断していたパルスイさんを抱き寄せてキスをする。

「きゃっ?!…んむっ?!…んっ…うん…………」

最初は驚いていたパルスイさんも、僕の悪戯と気が付き、それに乗ってくる。

「んむっ…んはあ…………んちゅっ…………れろっ…………」

?!…仕返しだとばかりに舌を絡めてくる…………。自分からしておいてだけど…………自制心が持たない…。

そして、そんなやり取りをした後、お互いに我に返った僕達は、いそいそと服を整え、少し遅めの朝食を作ることにした…………――これは気を付けないとなあ…。

「…………えっと、昼も近いし…軽めにトーストとスープでいいかな?」

「え?!…ええ。私はコーヒーを用意しておくから…頼めるかしら?」

少し、照れくささの残る僕達のやり取り…………。でも、こういうのって…何だかいいなあ。

そして、ソファアに並んで座り、二人っきりの朝食を取り始める……。

「こうして、二人で並んで食べる朝食って…格別ね♪」

「そうだね。でも、朝からあれはちよつとやりすぎたかな…／／／」

すると、隣でトーストを頬張っていたパルスイさんも赤くなる…。

「うう…／／／…だつてしかたないじゃない…あんなにも無防備な碧がすぐ側で眠ってたなら、悪戯の五つや六つくらいしたくなるわよ…／／／」

多いよ?!…というか、起きるまで何をされてたんだろう…?

「なら、僕が先に目を覚ましたら、パルスイさんに悪戯しても良いってことだよね?何をしようかな?」

これで、少しは自重してくれるかな?

「~~~~／／／…その、いくらでもして良いわよ…／／／」

自重するどころか、頬を染めて期待する目をしてこつちを見てきた……。

これは…色々な意味で、試されているのだろうか?

朝食も食べ、片付けも終わり…昼にはまだ時間があるということ、二人つきりでまったりとした時間を過ごす。

「そうだわ、碧。久しぶりに耳かきをしてあげましょうか?」

二人暮らしの始まりと、魅力的な誘い…それに抗う術も無く……。

「お願いします」

すると、笑顔でパルスイさんが……

「じゃあ、こつちに来て頂戴♪」

そして、ゆつくりと、パルスイさんの膝の上に頭を乗せる。

うん…何度かしてもらったけど…むにゅつてしてて、柔らかい。

それでいて、適度に反発もあるから…このまま寝てしまいたいそうになる…それに――

「――相変わらず、良い匂いだね」

「?!~~~~／／……もう、急に変なこと言わないでよね！」

だって…パルスイさん、今まで出会った誰よりも良い匂いがするもん。

それを言うなって方が無理な話だよ。

「まったく…じゃあ、始めるわよ？」

かりかりと耳かきが動く……うあく……気持ち良いなあ……。

「この前してあげたから、割と綺麗なままね……お風呂上りとかもキチンと掃除してるのかしら？」

「うん、なるべくするようにしてるよ」

「えらいえらい♪……んっ……少し固まったのがあるわね。動かないでね？」

少しだけくすぐったいけど、我慢をする。

「……うん、ばっちり取れたわ。じゃあ、反対側もするから……向きを変えて頂戴？」

向きを変える……つまりパルスイさんのお腹の方を向くことになる。

体勢を変え、上を向くと、こちらを見下ろすパルスイさんと目が合う……。

「くすっ♪……じゃあ始めるわよ？」

「うん。お願い」

正直、こんなに密着していると照れくさいものがある……でも、それだけパルスイさんを身近に感じられる幸せもある。

そして、幸せな時間が続き……

「それじゃあこっちも終わるわね……最期に……ふうっ……」

パルスイさんの優しい吐息が耳を駆け抜ける……ぞくつとするけど……でも気持ちいいんだよね。

「いつもありがとう。今度はお礼に僕がしてあげたいんだけど……」
「？」

すると、照れた表情で……

「もう、前も言ったけど、それは恥ずかしいからダメよ／／……で

も、他の事でなら何かして欲しいかもね♪」

「そうして、二人の時間……初めての同棲生活が進んで行く……しかし、楽しい時間というものは過ぎるのも早い物で……」。

「あら？もう、こんな時間なのね？……碧、そろそろ準備をして翡翠に向かわないと」

「そう、今日から料亭『翡翠』の従業員として、働くことになった……初日から遅刻はしてられない。」

「うん、とりあえず必要な物はあつちで用意してくれてるみたいだから、持っていくものは特にないみたい」

「そう、なら送っていくわね」

「そして、玄関に……あ、そうだ。」

「ねえ、パルスイさん……お願いがあるんだけど……」

「？……何かしら？」

「えつとね……僕が行ってきますって言うから……その……」

「くすっ♪……そういうことね……分かったわ」

「流石出来た彼女……分かってくれたみたいだ。」

「じゃあ、パルスイさん。行ってきます」

「すると、少し恥ずかしそうにしながら……」

「ええ……行ってらっしゃい……あなた／＼」

「このやり取り……憧れていたとはいえ、実際にやってみると恥ずかしいなあ……でも。」

「うん！それから……ちゅっ……くっく?!」……これもやつとかないとね♪」

「男の憧れ……うん、良い物だ。」

「ふえ……／＼……こ、今度からは私がするからね？……いい？（これじゃ年上の面目が丸潰れじゃない……）」

「期待してるよ♪じゃあ時間もおしてるから、行ってくるね」

「ええ……気を付けてね？」

「そして、パルスイさんに見送られながら旧都へと向かった。」

パルスイさんの家から、翡翠までは大体、徒歩二十分程度…少し遠いけど、運動には良いかな？

「さて、女将さんからは裏口から入ってくれて言われたけど…ここかな？」

そこには従業員専用と書かれた扉があり、一応ノックをしてから中に入る。

「こんにちは。失礼します、大神碧です」

すると、奥の方から女将さんと板長さんがやってくる。

「あらあら、碧さん。ようこそおいで下さいました。本日からよろしくお願ひしますね」

「時間前行動…いい心がけですね。大変だと思いますが、共に精進致しましょう」

「はい！至らぬ所は多々あると思いますので、ご迷惑をおかけしますが…よろしくお願ひします！」

そして、僕の初めての本格的な仕事が始まる。

「それでは…まず仕事の説明からさせて頂きますね。本日から暫くの間、碧さんにして頂く仕事は、私と共にお客様への挨拶回り、調理場での皿洗い…それから、手の空いたときはお客様へのお酌等もしていただきたいのです」

なるほど…まずは、出来る範囲で…それから挨拶回りも大切な事だ……うん、頑張ろう！

こうして、夕方の開店に合わせ、僕の初めての仕事が始まった。

店が開店してから、しばらくはお客様が入ってくることは無かった。

というのも、この翡翠は知る人ぞ知る名店、そして立地も路地裏にあるので普通に辿り着くのは難しい。

なので来るのは自然と常連さんが多くなる。

そして、第一号のお客様が入ってくる。

「いらっしやいませ…あら、八百屋の店主さん…今日は早いですねえ」
八百屋の店主さん…前にパルスイさんと買い物をしていた時に、声

を掛けてくれた気の良い鬼のオジサンだったかな？

「おお、女将さん。今日は客の入りが少なくてねえ。早めに切り上げたのさ……ん？そっちの坊主は確か……」

「い、いらつしやいませー！本日からここで働かせて貰う大神碧と言います。この前はお野菜をおまけしてくれて、ありがとうございますました」

すると、思い出した店主さんが……――

「おおー！パルスイ嬢ちゃんの旦那さんかい！（まだ、違うんだけどなあ……）そうか、ここで働くことにしたのか……そいつはいい事だ！女将さん、あんまり旦那さんを虐めてくれるなよ？」

背中をバシバシと叩いてくる店主さん……――痛いけど、ありがたいな。

「くすくす……大切な従業員に、そんなことはしませんよ？それで、ご注文はどうされますか？」

そうして、女将さんが注文を取り、その間に僕がお通しを用意する。

注文を聞き終えた女将さんは厨房へ向かい、入れ替わる形で僕がお通しを持って、お客様の元に向かう。

そして、空いたお皿や酒瓶があれば、お下げして良いかを確認して、そのまま厨房に持っていき、洗浄する。

最初はお客さんが少なかったので、何とか回せていたのだが、九時を過ぎた頃からお客様の量が一気に増える……なるほど、これがあから人を雇ったのかな？

とはいえ、その忙しさの中……それを全く顔に出さず、かつ完璧に対応していく女将さん……百人力という言葉はこの人の為にあるんじゃないかと思ってしまう。

そして、女将さんから手招きされ、同時に板長から料理を渡される……運んで挨拶をしろってことかな？

襖越しに挨拶をし、料理を女将さんへと渡す。

配膳に関しても、見て学んでいってほしいと言われたので、女将さんの手元や、配膳の仕方を見る。

無駄な所作がなく、料理の並べ方もその美しさを損なわないように……そして、お客様が食べやすいように、さりげない気遣いがされているのが分かる。

「相変わらず、女将さんの配膳は見事なものだねえ……それにしても、女将さんが従業員を雇うなんて珍しいじゃないですか?」

お客様の一人からそう言われる……そうなの?

「うちも、そろそろ人手が欲しくなりまして……そんな時、丁度彼が紹介されたんですよ……。良い子ですので、今後ともよろしくお願いいたしますね♪」

女将さんの言葉に、その場にいたお客様は……

「ははっ、女将さんが認めた子だ、大事にしてやらんとな。それに、君はパルスイちゃんの旦那様だろ? なら、尚更さ」

「あの……パルスイさんを……存じなのですか?」

「ああ、あの子がここに……地底に来たときから知っているさ。まあ……親心にも近い感情も……多少はあるなあ」

そうだったんだ……

「あの子は最初……この地底の誰とも、話そうとはしなかった……今でこそ、仲の良い友人はいるが、ずっと昔の失恋を引きずって……いつ消えるか分からない、危うい状態だったんだ」

妖怪でも、例外なく消える……それは世界に絶望した時……つて紫さんも言ってたっけ?

「……さとり様を始め、勇儀さん、ヤマメちゃん、キスメちゃん……色々な人達の協力があつて、今のパルスイちゃんがいる……」

感慨深そうに語るお客様……女将さんも、静かにお酌をしてあげている。

「そんな時だよ、君と出会って……明るくなったパルスイちゃんを見たときは……本当に涙が止まらなくなつたよ……だから、パルスイちゃんの事……頼んだよ? 大丈夫、君ならできるさ」

そう言いながら酒を飲みほし、からからと笑うお客様……良かった。パルスイさんの事を思ってくれている人も沢山いるんだ……

そして、閉店時間になり……………

「ふう……………最期のお客様もお帰りになりましたねえ」

「ええ。碧さん…本日働いてみてどうでしたか？」

うん、正直に答えよう。

「正直……………かなり疲れました……………でも」

女将さんが普段、どれだけ気を使って接客していたか、食事ペースの違うお客様に合わせて調理をするのがどれだけ大変な事か……………、今まで良く二人で切り盛りできていたなど感心すると共に……………

「でも、こうして……………この料亭の一員として働けることが……………嬉しいんです」

「なるほど……………やはり、私の目に狂いは無かった……………ということですか……………ね？板長さん？」

すると、後ろから板長さんが……………

「そうですね。正直こちらでも驚かされましたよ……………皿洗いの手際も良かったですし、状況に合わせて動いてくれて……………初日にしては十二分ですよ？もしかして……………以前、どこかでこういった仕事をされていたのですか？」

仕事の経験は無いけど……………あ！

「えつと……………多分、八雲家でお世話になっていた時に、家事をしていた事と、偶にですが……………映姫さんのお手伝いで裁判所で働いていたので……………それですかね？」

「なるほど……………良い環境に恵まれて……………いえ、それもあなたの努力の成果なのでしよう……………ね？女将さん？」

「そうですね。さて、それでは今日のお給料です……………こちらになりますのでご確認下さい」

この料亭では、月給ではなく日払いの歩合制の給料体系が取られている……………まあありがたいのだけど……………

そして、袋の中を確認すると……………え?!……………うそ?!……………こんなに?!

「あ、あの?!……………こんなに頂いても良いのですか？」

すると、女将さんは……………

「ええ……………あなたが働いた……………正当な報酬です。きちんと受け取って下さ

い。もつとも…本日は、夜だけでしたので、半額程ではありませんが…半額でこれって…うん、がんばろう！

我ながら現金だとは思ったけど、やはり嬉しいものは嬉しい。

「さ、じゃあ今日は片付けは良いので、明日はお昼の営業からお願いしますね？」

折角だから、お言葉に甘えさせてもらおう

「すみません、ではお先に失礼します…明日からもよろしくお願いします！」

そして、女将さんから見送られ裏口に出ると……

「あ！碧、お仕事終わったのね？」

え？…パルスイさん？…女将さんの方を見てみると……

あ、この顔は知ってた顔だ。

「パルスイさん、こんばんは。相変わらず仲が良さそうで何よりです」

女将さんからからかわれながらも、パルスイさんの隣に行く……

「えつと…迎えに来てくれたんだね…ありがとう／＼／＼」

「勘違いしないでよね？碧の初仕事が気になっただけなんだからね？」

そう言いながらも顔を赤くして、そっぽを向く…うん、相変わらず可愛いなあ…。

「女将さん…今日は、碧は上手く仕事は出来ていましたか？」

まあ…心配になるよね…。

「ええ。碧さんなら、この料亭で十二分に働いてくれますよ。さて、だいぶ寒くなりましたので、風邪を引かれる前にご帰宅を…良かったですね碧さん…こんなに彼女から思われていて♪」

女将さん……

「ええ…自慢の彼女ですから」

「碧…も、もう…／＼／＼…行くわよ」

そして、パルスイさんに手を引かれながら翡翠を後にした。

「ねえ碧…お疲れ様…初仕事…大変だったでしょ？」

腕を組みながら、こちらに顔を向け、心配そうに聞いてくるパルスイさん……。

「まあ…正直、かなり疲れたけど……でもね……」

「……でも？」

「とつても充実感があつたんだ…。それに…こうして、パルスイさんが迎えに来てくれたから…疲れなんて吹き飛んじやったよ」

すると、照れくさそうにそっぽを向く……

「も、もう！…それにしても…こうして、あなたと一緒に家に帰れるなんて…何だか不思議な感じね…」

「そうだね……くしゅん?!」「大丈夫？」…うん。誰か噂でもしてるのかな？」

すると…パルスイさんが息を吐く……。

「はあ…うん。息が白い…もう、秋も終わって…冬になるのね……ねえ？寒くなつたから…もつとくっ付いても…いいかしら？」

そんな事…言わなくても……。

パルスイさんをぐいっつと抱き寄せる「きやつ?!み、碧？」

「こうすれば、寒くないよね？…これから…もつと寒くなる…でもさ…こうして二人でくっ付いてたら…温かいよね？」

「そ、そうね…／／…くすっ♪…なら、帰ったら…もつと温まりましょうか？」

???…それって？

「こ、こほん…／／…えつと、ご飯にする？それとも…私と一緒に風呂にする？／／」

ああもう…こういう事を誰から教わるんだ?!（※だいたい紫とさとりです）

「えつと…じゃあ…お風呂で…／／」

そして、冷たい風が吹く中…顔を赤くした二人は、早足で家へと帰っていった。

37話 白銀の世界と思い出

いつもよりも寒さのキツイ朝方——
お互いの温もりを求めるように、パルスィと身を寄せ合いながら目を覚ました。

「——んっ…(ぶるっ)…何だろう、いつにも増して今日は寒いな…」
それでも……。

「ふふっ…隣にパルスィさんが居なかったら、もっと寒かったのかもね。まだ時間も早いし…もう少し寝ても良いんだけど」

今は目の前にある、最愛の人の寝顔を楽しんでいた。

そう思いながら、パルスィが目を覚ますまで、その頬を撫で…時折くすぐったそうにする彼女との時間を過ごした。

「もう！起きてたなら教えて頂戴よ。私だけが恥ずかしい思いをしたじゃない／＼／」

「あはっ、前にされたお返しだよ」

そんな会話をしながら、いつものように朝食を取る。

今日は、お味噌汁を僕が作って、魚の塩焼きと、ホウレン草のお浸しをパルスィさんに作って貰った。

最初はどちらか自分が作るから、と言いつつ合っていたのだけど、こうして二人で作る事で解決した。

——むしろ、そのお陰でより、充実した朝食が取れるようになったのかな？

「それにしても、今朝は一段と寒いわね…：碧がいなかったら、もっと寒かったんでしようけど…」

あ、パルスィさんも同じように思ってくれたんだ。

「そうだね。いくら地底でも、ここまで寒くなるものなんだね……
やっぱり幻想郷は奥が深いなあ」

そうして朝食を食べ終わった頃、陰陽玉に連絡が来た……こんな朝
から誰だろう？

「碧、出ましようか？」

「ううん、僕が出るよ。——はい、碧です……あ、紫さん！おはようござ
いますー！」

『おはよう碧君。パルスィとの生活には慣れてきたかしら？』

「ええ、お陰様で。仕事の方も頑張らせて貰ってます」

翡翠での仕事は大変だけど、やりがいはあるし、何より自分が気に
入っている。

『そう、それはよかったわ♪』

「えっと……それで、今朝はどうしたんですか？こんな時間に……珍しい
ですね？」

いつもなら、無理やり起こされて朝食を食べた紫さんは再び部屋で
くつろいでいるんだけど……？

『ええ、その事なんだけど……なんと、幻想郷に今年初雪が降ったのよ』

初雪？……ああ、それで今朝はこんなに寒かったんだ。

「そうなんです、地底だと流石に分からなかったんですが……それで
今朝は寒かったんですね」

『ええ、それでなんだけど……かなりの量の雪が積もったから、地上に
来て、幻想郷の雪景色を見てみたくはない？』

あ、それは気になる。

外の世界でも雪は降っていたけど、住んで居たのがそこまで雪の積
もる地域じゃなかったから、なおさら気になる。

パルスィさんも同様のようで、見たそうにそわそわとしている。

なら行くしかないけど……その前に。

「ぜひ……と言いたいですけど、仕事が入ってまして、ちよつと女将さ

んに聞いてからでもいいですか？」

『そうよね、ふふっ♪何だか碧君も大人になってきたのねえ…なら、後でまた連絡を頂戴ね。それじゃあまたね♪』

そうして、通信が切れる——さて。

「それじゃあ、女将さんに連絡してみるよ」

「ええ、女将さんなら、半日くらいなら休みをくれるんじゃないかしら？」

「うーん…そうだとありがたいけど…急な話だからね…とりあえず連絡してからだね」

それから、続けて女将さんに連絡を入れる（余談だが、女将さんも陰陽玉を持っている）

「女将さん、おはようございます。今、お時間大丈夫でしょうか？」

『あら？碧さん。珍しいですね？こちらは大丈夫ですが…どうされたんですか？』

そして女将さんに、紫さんから誘われたことを伝える——どうだろうか？

『なるほど、それで今朝はこんなに寒さが強かったんですね。……ふむ、では、碧さんお昼の営業だけで良いので来ていただけでしよるか？お昼も少し早めに上がって貰って構いませんので…そうですね、良ければパルスィさんと来られてうちでお昼を一緒に取られては如何でしょうか？』

こちらとしては、とてもありがたいけど——

「あの、いいんですか？…ここまで甘えてしまって…？」

そこまでして貰うと、流石にちよつと気が引けてしまう。

『ええ、構いませんよ。碧さんにはいつも頑張って働いて貰ってます

し…幻想郷に来て、初めての雪でしょう？パルスイさんと一緒に、楽しんできてください』

「女将さん…ありがとうございます！」

『いえいえ。それではお昼の営業の際にまたお会いしましょう。パルスイさんにもよろしくお伝え下さいね？では…——』

そして、通信が切れ——

「と、いう訳でお昼は翡翠で食べて、そのまま紫さんの所に行こう」
「ええ、本当に…女将さんには頭が上がらないわね」

そして、その連絡を再び紫さんに伝え、僕達は準備をして翡翠へと向かった。

お昼の仕事を早めに切り上げさせて貰った僕達は、今は翡翠の一室でお昼ご飯を食べている。

「今日は、チキン南蛮か。僕ここの大好きなんだよね〜」

見た目は外の世界で食べていたものと基本的には変わらないのだが、味は段違いなのだ。

お肉はお箸で掴んだ瞬間に、その柔らかさが分かるくらいの上質なお肉を、硬くならないように丁寧に揚げ、これまた丁度いい塩梅の甘酢に絡めている。

特製のタルタルソースとの相性もバツグンで、いくら食べても胸焼けの一つもしたことがない。

これだけでご飯を軽く3杯は食べれてしまうくらいに美味しいのだ。

「むう…私もここまでの物が…流石に無理ね…」

同じものを食べているパルスイさん…ただ、その味に打ちのめされている。

「確かに、僕は翡翠のチキン南蛮も好きだけど、パルスイさんの作ってくれる料理はもつと好きだよ……その……愛情とかが沢山詰まっているのが分かるから……／＼／＼」

「碧ったら……もう……／＼／＼」

「愛情に勝る調味料はないという事ですね。ふふっ♪相変わらず仲が良さそうで何よりです」

すると、ご飯のおかわりを持ってきてくれた女将さんから言われてしまった。

「お、女将さん?!……うう……聞かれてしまったのね……／＼／＼」

「すみません……今のはちよつと忘れて頂けると……」

「大丈夫ですよ。むしろこちらこそご馳走様でしたと言いたいくらいですので♪」

「あう……／＼／＼」

本当に……女将さんには絶対に勝てないなあ。

それから昼食を済ませた僕達は、前に貰った転移地図を使い、マヨヒガへと向かった。

「よつと。ふう……マヨヒガ……半月ぶりだけど……何だか懐かしい感じがするなあ」

「それだけ地底での生活が濃密だったのかしら?えつと……紫さんは……?」

すると扉が開き、中から紫さんがすごいスピードでやってくる。

「碧君!パルスイちゃん!会いたかったわよ!」

そう言いながら、僕とパルスイさんを二人纏めて抱擁してくる紫さん。

「ちよ、ちよつと紫さん?!苦しいでむぐっ?!」

パルスイさんが何かを言う前にさらに抱き寄せる。

そして僕はというと――

「むぐーっ?!んー!」

最早、何一つ言えない状態……有体に言えば、紫さんの豊満な胸に
圧迫されて呼吸すらままならないでいた。

ああ……息が……

そう思った所で、紫さんが気が付き、解放してくれる。

はあ……助かった……。

流石に女性の胸で窒息死は……世間の男性ならむしろご褒美なの
かな？

「ぶはっ?!はあ、はあ……お、お久しぶりです……紫さん……」

「ご、ごめんなさいね。碧君とパルスイちゃん与会うのが久しぶりで
……つい」

怒られた子供のようにしよんぼりとする紫さん、こんな姿を見るの
も久しぶりだなあ。

「いいんですよ。流石に今度からは手加減して欲しいですけど……ね？
パルスイさん？」

「ええ、私も会えて嬉しいです。……それと、今日は招待して貰ってあ
りがとうございます」

マヨヒガは特殊な空間にあるため、天候の影響を受けないから分か
らないけど……。

「二人ともありがとう。じゃあ、早速だけど行きましょうか？今、幻想
郷で一番綺麗な雪原に……ね？」

そしてスキマを開く紫さん。

あれ？そういえば――

「あの、紫さん「何かしら？」……藍さんと橙ちゃんの姿が見えないんで
すけど？」

「ああ、そういえば言っただけ無かったわね。二人とも朝早くから、別の雪
原地帯に遊びに行ってるのよ」

そうだったんだ……あれ？でも橙ちゃんって寒さは……まあ妖怪だから大丈夫なのかな？

「ということで行きましようか……さ、二人とも、準備は良いかしら？」
「楽しそうに聞いてくる紫さん。」

「はい！（ええ）」
「よろしい。じゃあ行くわよ」

そして、紫さんを先頭に、スキマを潜っていく……この先に……どんな光景が広がっているんだろう？

暗いスキマを潜り抜け、開けた先は……一面の銀世界だった。

太陽の光を浴び、光り輝く白銀の雪原。

あまりの眩しさに、最初は目を開けるのが辛いくらいだった。

だんだんと目が慣れていき、その景色をキチンと見る事が出来るようになり――

「――すごい……」
「……ええ……本当に……」

雲一つない青い空の下に広がる景色は、地面から山……その全てが真っ白に染められた世界だった。

そして、その美しさもさることながら……その積雪の量も凄まじいものだった。

碧が暮らしていた場所では積もっても10cmくらいだったのが、今この場所ではゆうに1mを越える積雪量だった。

「こんなに積もった雪……初めて見た……」
「私もよ……地底に住んでたら分からなかった……これが地上の……ううん……幻想郷の本当の冬景色なのね……」

見渡す限りの雪景色、少し離れた場所には小高い山も見える……歩いたら行けそうだし……あそこから見る風景は綺麗なんだろうな……。

「二人とも、気に入って貰えたかしら？」

「紫さん……はい！こんな景色……生まれて初めて見ます！」

「私もです、住んで居たのに知らなかったこと……本当にありがとうございます……ございます」

「喜んで貰ったなら何よりよ……き、それじゃあ後は好きに遊びましよう？」

それから僕達は、まずこの雪景色を写真に撮りたいと思い、持ってきたカメラで色んな場所を撮影した。

「ふふっ♪碧君ったら、はしゃいじやって……子供みたいよ？」

「す、すみません……／＼／＼……あ、そうだ。紫さん、折角なんでみんなで一緒に写真を撮りませんか？」

すると予想外だったのだろう、きよとんとした顔で――

「あら？私が入っても良いのかしら？どうせなら二人で撮れば良いのに」

えっと……ちよつと照れくさいけど――

「――その、紫さんは僕にとって……パルスイさんと同じ……大切な家族なんです……だから……その……家族との写真を撮りたい「碧君！」むぐっ?!」

目にも止まらぬ速さで紫さんに抱きつかれた。

え？……なんで？

「ありがとう……碧君も、私が守るべき大切な家族よ……。それにパルスイちゃんも……ね？」

コクンと頷くパルスイさん。

「ええ。確かに私達が出会えたのも紫さんのお陰ですし……私も、紫さんと一緒に写真を撮って……その……思い出として残しておきたいです」

すると、紫さんが軽く目元を拭い——

「——もう…二人とも、そんなに私を泣かせたいのかしら?…:じやあ…:一緒に撮りましょう。大切な…思い出を…ね?」

それから、雪景色を背景に、三人で集合した写真を何枚も撮った。これでまた…大切な思い出が増えたんだ…:。

そして、満足のいく写真を撮った後は、実際に雪原地帯を歩いてみる事にした。

「碧君、急に深くなっている場所もあるから、気を付けてあるいてね? それと、あまり、遠くへ行つてはダメよ? 周囲の色と、崖や谷の境界があやふやになっていて危ないからね?」

「はい、分かりまし…はうっ?!」
言ったそばから雪に埋もれる——うう…服の中に雪が入って冷たい。

「まったく碧ったら…言ったそば、きやふ?!」
僕を助けに来ようとしたパルスイさんも同じく雪に埋まってしまった。

二人とも下半身が雪に埋もれてるから、とてもシュールな光景だ。

そして僕達はお互いを見て——

「あはっ…」

「ふふっ…」

「「あはははっ (ふふふふっ)」」

三人しかいないその場所で、声を上げ笑い合った。

「パルスイさん…あはっ…言ったそばからはまるなんて…あははっ
♪」

「碧…そ…くすっ♪…何よ、はうっ?!…ふふっ♪」

「まったく…二人とも、気を付けてって言ったじゃ「えいっ」「わぶっ?!」

一人ふよふよと浮かんでいる紫さんに、さらさらの雪をかける。

そしてパルススイさんも——

「一人だけ浮いてるのはずるいですよ？それっ！「きゃっ?!」「ふふっ♪」

すると、雪をかけられた紫さんは俯き、ぷるぷると震えだした…マズイ…怒らせたかな…。

「あなた達…：やってくれたわね！」

直後、紫さんの足元にあった雪が、一斉に僕とパルススイさんに向かって飛んでくる。

「うわっぷ?!ちよ、これ卑怯?!」

「ご、ごめんなさ、ひゃん?!」

雪玉ではないものの、プチ吹雪とも言える紫さんの攻撃に僕達は瞬く間に、雪だるまと化した。

「くすっ♪あなた達…良い格好になったわね…：そうだ、写真に撮ってあげるわよ?」

そしてとつても良い顔をした紫さんが、雪だるまとなった僕達を撮る…：うう…：やっぱり怒ってる。

「大丈夫よ碧君「：?」…：こういう事をしてくれて、嬉しかったの…：藍や橙は絶対にしないし…：他の人間や妖怪も、絶対にしてこない…：妖怪の賢者」、楽園の守護者…：確かに親しくしてくれる人はいるけど、こんな風に接してくれたのはあなた達が初めてなの…：」

それから一呼吸置いた紫さんは——

「ねえ碧君…：今、幸せかしら?」

その問いに、僕は迷いなく——

「はい！パルススイさんがいて、紫さんがいて…：支えてくれるみんながいて…：僕は…：幻想郷に来て…：本当の幸せを見つけた事が出来ました」

その答えに満足したのか、フツと紫さんは笑い。

「そう、なら…：これからもその幸せを…：みんなで作っていきましょうね…：あなたは私の大切な家族なんですから…：ね?」

「紫さん……はいっ！」

それから僕達は、三人で夕暮れになるまでひたすら遊び続けた。雪合戦をしたり、転んだり、雪玉で服がびちよびちよになったり……。

こんなに遊んだのはいつ以来だろうか？

そして、楽しい時間も終わりを告げ――

「さて、日も落ちるし……そろそろ帰りましょうか？」

紫さんの言葉にうなづく僕達。

「はい……その、紫さん。今日はありがとうございました」

「私からも……また、新しい思い出……地上の素敵な場所を知れて……嬉しかったです」

「いいのよ。そうね……また、こうして遊びたいわね。今度は藍と橙も一緒に……ね？」

そうしてスキマを潜りマヨヒガへと戻る。

「ところで今日は二人は、家に泊まっていくのかしら？一応、部屋は空いてるけれど？」

紫さんのお誘いは嬉しいけど……。

「いえ、服もびちよびちよなんで……風邪を引く前に、パルスイさんの家に帰ろうと思います」

「そう……なら、体調には気を付けて……それから、今度は夕飯の準備をしておくから、その時はみんなで団欒しましょうね♪」

そして僕達はパルスイさんの家へと帰っていった。

帰った僕達は、そのままお風呂へと直行した。

幸いな事に、地底にある家の大半は温泉をひいており、常に源泉か

け流しの天然温泉を楽しむことができる。

パルスイさんの家のお風呂は、和風の檜風呂で広さもそれなりにある。

だから二人で入っても全然問題はない。

お互いに身体を洗い合い、湯船へと浸かる。

「はあく…温まるね〜」

軽く霜焼けになりそうだった手足が少し、ヒリヒリとするが、それも心地良い。

「本当ね〜…やっぱり温泉は良いわね〜」

隣に座り、二人で寄り添う形で湯船に浸かる。

付き合い始めた頃は、恥ずかしくてタオルを巻いたり、お互い視線を逸らしたりしていたが、今では普通にこの体勢が当たり前になっている。

こうして、肌と肌でくっ付いていると落ち着くんだよね。

「それにしても、今日は楽しかったね」

今日の事を思い出しながら話をする。

「ええ…あんなにはしゃいだのなんて久しぶりだし…何より、紫さんの楽しそうな顔も見れたから…」

うん…いつも見えないところで自分の役割をこなして、その上僕達に気を遣ってくれて…。

「だね。今度行くときは、何かお土産を持っていかないかね」

そして、そんな話をしながら身体の芯まで温まるまで二人で湯船に浸かっていた。

「さて、今日は寒いし…お鍋にしたんだけど…良かったかな？」

パルスイさんが着替えや、髪を乾かしている間に晩御飯の準備を済ませておく。

「ええ…お鍋なんて久しぶりね。お仕事がお休みなのに晩御飯を作らせてしまつて…ごめんなさいね」

「作りたいから作つてるんだよ。だからそこは、ありがとうつて言つてほしいかな？」

「うん…ありがとう…碧…／＼／＼」

そして鍋を机に置き、二人で食べ始めた。

「味はどうか？ シンプルに出汁のお鍋にしてみただけど？」

作つた側としてはやはり気になるところ。

「ええ、とつても美味しいわ。お野菜も新鮮だし…出汁もキチンと出て…うん…美味しい♪」

喜んでもらえて何よりだ。

そして、鍋を食べていると、思い出す――。

「こうしてると…外の世界での事を思い出すなあ…」

「…？…碧…？」

様子のおかしい事に気が付いたのか、心配そうな顔でこちらを見てくるパルスイさん。

「冬になるとね、こうして家で鍋パーティーをやつてたんだ。その時はまだ料理が出来なかつたから、親友の女の子に頼んでただけだよ…」

「前に言つてた…あなたの親友…祥華ちゃん…だったかしら？」

「うん、祥華さんは料理が上手でね、偶に家に来てご飯を作ってくれたんだ」

「そうなのね…（多分…ううん、絶対その子…碧の事が好きだったわ

ね」

「あの時は楽しかったなあ…、かぼすをかけるか酢橘をかけるかで揉めたり…三人で初めてお酒を飲んだり…締めをうどんにするか雑炊にするかで言い合ったり…」

思い出すのはあの時の光景…三人で笑い合った記憶。

「でも…そんな二人を置いて…僕はこっちに来た…手紙は送ったけど…それ以降、どうなったのかも…本当なら、紫さんに直ぐに聞くのが一番なんだと思う…でも…」

でも…できなかった。

「——そう、怖いんだ…もし、あの手紙が二人の負担になってしまったら…今でも二人を苦しめてしまっているんじゃないかって思ったなら…」

すると、パルスイさんが僕の後ろに来て、優しく抱きついてきた——？

「碧…大丈夫。その人達は…あなたの親友なのでしょう？…だったら大丈夫…信じてあげて？」

そのままギュツと抱きしめてくるパルスイさんを見上げる。

「僕だけこんなに幸せで良いのかな？…本当に…むぐつ?!」
パルスイさんにキスをされ、それ以上の言葉を止められる。

「んっ…、ちゅっ…ふはっ…。碧、言ったでしょう。信じてあげて。それに、あなたには幸せになる権利がある。紫さんも言っていたでしょう？みんなで幸せになりましたよって…ね？」

パルスイさん——

「——ありがとう…パルスイさん」

もしかしたら、こうしてお鍋を食べるたびに思い出すかもしれない。

二度と会えない親友との、大切な思い出…。

だけど、それは決して悪い事じゃない——

それは、今の僕を支える大切な欠片——

そして、これからも大切な人達と…幸せになるために…ううん、幸せを掴むために。

——色んな思い出を作っていこう

38話 忘符「凍てつく先に在るモノは？」

今日は、急な食材の仕入れでお店がお休みになったので、一日暇になつてしまった。

パルスイさんとデートをしたかつたんだけど――

「ごめんなさい！今日は用事があつて、家に帰るのは夕方になりそうなの……本当にごめんなさい……」

と、謝られてしまった。

まあ急な話だったから仕方がないかな。

「うーん……かといつて、一日家でのんびりするのもなあ……」

どうしようか考えていると、ふとこの前に雪原を思い出した。

「あの場所もまた、雪が積もつて綺麗になつてるのかな？」

そうだね、一度言った場所だし、地図からの転移で行ける。

「そうと決まれば、さっそく準備をしよう！」

そうして僕はカメラや携帯食料など、準備を整えてあの雪原へと向かった。

さて、この前の場所に着いたんだけど……――

「この前より積雪は減つてるけど……相変わらず綺麗な場所だなあ……」

太陽に照らされて浮かび上がる、白銀の景色。

うん、何度見ても良いものだ。

「それに、積雪が少ない分、色々な場所を歩いて回れそうだし……」

とりあえず、この前とは違う……綺麗な景色を写真に撮っていこう。

そうして、僕はこの前撮れなかった場所や、同じでも景色の変わった場所をカメラで撮っていった。

「……ふう……こんなものかな？」

これをパルスイさんに見せたら喜んでくれるかな？

そんな事を考えていると、ふと……この前来た時に登れなかった山が視線に入った。

「前は雪が多くて、行ったらダメって紫さんに言われてたんだよね……」

あの山の上から、この場所を撮ったらどんな綺麗な景色が見れるだろう。

「うん、今日は雪も少ないし……いざとなったら陰陽玉と転移札もあるから大丈夫だよね」

そうして僕は一人、山へと向かって歩いていった。

「ふう……結構登ってきたなあ……」

山は見た目以上に傾斜がきつく、重装備で来ていたら即リタイヤしていただろう。

「うん、大体中腹くらいに来たのかな？」

上下を見比べると、丁度半分くらいに見える。

「ここからの景色も綺麗だなあ……うん、とりあえず何枚か撮っておこう」

天魔さん特製のカメラで写真を撮っていく。
このカメラ色んな機能があつてホント便利なんだよね。

「ここからでも十分綺麗なんだけど…木々が少し邪魔なんだよね…
もつと上に行つたら見晴らしも良くなるかな？」

多少の疲労感はあるけど、帰りはすぐに帰れるし…うん、登つて
いこう。

そうして、見晴らしのいい場所まで僕は山を登つて行つた。

「それにしても…辺り一面真っ白だから、ホント…色んな境界があや
ふやになつてるなあ」

確かに注意しておかないとこれは危ない。

(ガサツ)

「ん？何だろう？上から音が…？」

気になつて見上げてみると…うそっ?!雪の塊が落ちてくる?!

恐らく上の方から転がつて来た、小さな雪の粒が、落ちてくるのと
同時に他の雪を纏つていき大きくなつたんだろう。

かなりの大きさ…パツと見でも僕の身長くらいの大きさはある。

あれに当たつたら流石にマズイ!

そう思い、その場からすかさず離れたんだけど…それがまずかつた
……。

「…………え？」

避けようと踏み込んだ足は…何も…空中に踏み出していた。そう、その場所は足場が無く急な崖になっていた。気が付いたときにはもう遅い、体が傾いていく感覚……。

そして、一瞬の浮遊感の後に――

「ぐがっ?!がはっ……――」

自分が崖から落下して、体の至る所を打ちつけていく衝撃。

そしてそのまま……僕の意識は闇に沈んでいった――



——Side——

この季節は気持ちが良い――
自分の一番輝ける季節で……自分が唯一表に出て来れる季節だから――。

適度に雪を降らせたり、雪化粧を楽しんだり――

そして、今は自分が施した雪化粧を楽しみながら、雪原を散歩をしている。

この雪原はあまり人が来ることもなく……自分のお気に入りの場所だから。

そうして、私のがのんびりと散歩をしていると――何かしら？

これは……血の匂い……？

この季節に動き回る動物はそんなにいない。
そして独特の匂い……人間の血だ。

血の匂いを辿っていくと、そこには案の定、人間が雪に埋もれていた。
た。

どうしてここに人間が？とも思いつつ――

「いけない！早く助けてあげないと！」

そうして、私は必死で雪を掻き分け、埋もれていた人間を見つけ出した。

「人間の……子供？」

背も高くないし……12〜13歳くらいだろうか？顔つきからしてもっと若いようにも見えるけど……。

「女の子……いえ、男の子ね……」

雪女としての自分の能力で、相手の性別はすぐに分かる。

いえ、そんなことよりも――

子供の周りは大量の赤い雪……この子の血を吸って赤く染まった雪。
雪。

そして、今なお頭部から出血してるのが分かった。

「これ、かなりマズイわね……」

恐らく人里……もしくは永遠亭に連れて行けばいいのだろうけど、こ

ここらだとかかなりの距離があり、間に合うか分からない……いや、間に合わない可能性の方が高い。

「なら、方法は一つよね」

子供の周囲には様々な荷物が散乱していたが、私は急いで子供を抱えて、自分の家へと連れて帰った。

——彼女が立ち去ると同時に、その場所は吹雪へと変容した。



——パルスイSide——

夕方、用事を終えて家に帰ると、碧の姿が無かった。

「どこかに出かけてるのかしら？……でも夕方には帰るって伝えてたんだけど……連絡してみましよう」

私は陰陽玉を使って碧に連絡をしようとしたんだけど——

(ザー……ザー……)

「変ね……ノイズが聞こえるだけなんて……映像の方も出してみましよう」

前はこれでトラブルになったんだけどね——なんて考えていると

映し出された映像は、ノイズ交じりの吹雪いている雪原地帯。

「え？……何これ？碧？……碧っ！聞こえてるなら返事をして頂戴！碧!!!」

しかし、陰陽玉からは何の反応も無い。

そして、次第に送られてくる映像も途切れていく。

嫌な予感……いいえ、最悪の展開を予想した私は、すぐさま紫さんに連絡を入れた。

『あら？パルススイッチちゃん？どうしたのかしら？ひよつとして家が恋しく……』

「紫さん!?碧が…碧が大変なんです!」

『碧君が……聞かせて貰えるかしら?』

そうして私は一部始終を紫さんに話した。

『状況は理解したわ。少し待って頂戴……碧君の陰陽玉の反応は……この前行った雪原にあるわ』

「本当ですか?!」

『ええ。私も直ぐに向かうから…パルススイッチちゃんも地図を使って、来て頂戴。詳しくは現地で話しましょう』

そうして通信を終えた私は、すぐさま地図を使い、雪原へと向かった。

「急がないと…急いで行かなきゃ、行かないと…碧が…碧が……」

もし碧の身に何かあったら……??

彼のいない生活なんてもう考えられない……。

お願い…無事でいて…碧！

現地に着いた私は、紫さんと合流した。

雪原は、この前と違い…ものすごい吹雪が吹き荒んでいた。

「紫さん！碧は！碧はどこに?!」

「待って頂戴…陰陽玉の反応は…この先からだわ」

そして吹雪の中、私達は小高い山の麓にやってきた。

そこには――

半分くらい雪に埋もれた、陰陽玉、散乱した碧の荷物――

そして――

――碧の血の匂い。

「うそ…うそよね…?」

自分でも分かるくらい…情けない声が出る――

「碧…ここにいますよ?」

そうだ…碧は雪に埋もれて出れないんだわ。

「待つててね……すぐに助けてあげるから……」

私は、血の匂いのする雪をひたすら手で掘り進める――

「大丈夫だから、すぐに助けるから――」

なんだか手がヒリヒリしてきたけど関係ない――

「……碧……碧……碧っ！」「パルスィちゃん！」「っ?!紫……さん……?」

どうしたの？早く碧を助けないといけないのに――

「パルスィちゃん！あなた、自分の両手を見てみなさい！」

私の……手？

そう言われて自分の手を見ている――

皮膚は、雪の冷たさで真っ赤に……いつもきれいに磨いている爪もボロボロになり、霜焼けのあまり軽く出血していた。

「――それが……どうしたんです？」「……パルスィちゃん？」「……私の手なんてどうでもいいんです、早く碧を助けないと……」

そう言っって私は再び、その場所を掘り進めていく――

「碧……碧……碧……碧!!」

そして、一番血の匂いの強い場所まで掘り進めると……そこには――

「——みどり……？」

大量の血の浸み込んだ雪……でもそこには誰もいなかった。

「……うそよね？……みどり……」

私は、目の前が真っ暗になった——



——紫Side——

最初にパルススイッチちゃんから連絡を貰ったとき、私は胸が張り裂けそうになったわ。

碧君は私達の大切な家族——

私はかろうじて陰陽玉の場所を特定し、その場所……雪原に来たのだけ——

(こんな吹雪の中に……碧君が……)

なぜ碧君が、ここに來ていたのかは分からない。

今は、ただ彼の安否を確認することが先だから。

でも——そこには絶望があった。

雪に埋もれた碧君の荷物と壊れた陰陽玉。

見上げた先には山がある——もしかしたら、あの山から落ちたのではないか？

すると、パルスイちゃんが碧君が埋まっているかもしれない場所を素手で掘り始めた。

この低温の中、凍結した雪を掘り進めるのは妖怪でもキツイものがある。

みるみる彼女の両手は傷つきボロボロになっていく。

そんなパルスイちゃんを見ていられず、私は彼女を止めたのだけだ
ど——

「…私の手なんてどうでもいいんです、早く碧を助けないと…」

彼女の真剣な眼差しに、私は何も言えなかった。

何か…私ができる事は——

すると、パルスイちゃんの動きが止まった。

そして、彼の…碧君の名前を呼びながら倒れてしまった。

「パルスイちゃん?!:しっかりして!パルスイちゃん!」

只でさえ碧君の安否も分からない今、吹雪のさらに強くなるこの場所にいるのは危険だ。

悔しいけど——

私は、意識を失ったパルスイちゃんと碧君の荷物を持ってマヨヒガへと帰った。

家へと帰った私は、パルスイちゃんの両手の手当てをし、そのままベッドへと寝かせた。

こんなにボロボロになるまで――

それから私は、碧君の荷物を調べてみたの。

中には防寒具と携帯食料、それからカメラが入っていた。

カメラで撮られた写真を見ると、まだ晴れていた時間の雪原が写されていた。

そして何枚か見ていく内に、山に登り……恐らくそこから落下したのだろうと予想が付いた。

しかし、そこからの足取りが分からない。

あの出血で動けるとは思えないし……ダメね……何が賢者よ！自分の大切な家族の危機なのに……何もしてあげられないなんて！

考えた私は、自分一人では考えが詰まってしまうと思い、他の……碧を思う人達に協力を仰ぐことにしたの。

まずは――

「四季映姫……急な連絡ですみません」

『いえ、私は構いませんが……八雲紫、あなたから連絡が来るとは珍しいですね……何がありました？』

流石に管理者の一人だけあつて聡い——なら率直に伝えるだけね。

「碧君が…行方不明になったの『なっ?!』……今日、有った事を伝えるわね——」

『……成程、理解しました。今の所こちらに魂は来ていないので…少なくとも死んではいません』

それを聞いた瞬間、体から少しだけ力が抜けた気がした。

『ですが、このままでは埒があきませんね……分かりました。明日、そちらと合流し、碧さんを捜しに行きましょう』

「感謝します…こんな事を頼めた柄ではないのだけど……私の家族の為に……お願い」

『いえ、私にとつても彼は大切な人物なのです……では、詳しくは明日……』

四季映姫との会話を終えた私は——

「碧君…死んでなくて良かった……ううん、まだ安心は出来ない…次は——」

そうして次に私が連絡を付けたのは——

『あらあら…?どうしたの紫く?また宴会でも開きたいのかしら…?』

冥界の管理者——碧君を自分の子供のように可愛がる彼女

「急な連絡でごめんなさい幽々子。率直に言うわね、碧君が行方不明なの」

それを聞いた彼女は普段のおつとりと間延びした声ではなく

『——紫、それは今日の話かしら？碧くんの生死は？足取りも何も分からないの？』

本来の彼女が持つカリスマを十二分に感じさせる声色だった。

「ええ……それで『分かったわ、明日……マヨヒガへ行けばいいのね？』
……お願い……ふう……」

幽々子との通信を終え、一息つく。

本当なら、今すぐ飛び出していきたい。

でも幻想郷の管理者としての立場がそれを許さない——
だから、私は……——

「後は……永遠亭と地霊殿ね……碧君……お願い……無事でいて……」

パルスイちゃんも目を覚ます気配はない。

全ては明日……——絶対に見つけ出す。



——Side——
???

ケガをしていた子供は、私の家に連れてきて、何とか応急処置は済ませただけ——

「頭部からの出血、腕と足の骨折……正直、予断を許さない状況ね……
本当なら永遠亭に連れて行くのが一番なのだけど……」

今のこの子を運んだら、それだけで命を落としてしまうかもしれない。
い。

しかし、この子は本当にどうしてあんなところに居たのだろうか？

人里の子？…それにしても身なりが違いすぎるし……——

それに……あの場所は人が…それもこんな子供が、おいそれと行ける場所ではないし……。

「私が姿を消していた一年で何かあったのかしら？……あら？」

子供をみると、すごく苦しんでいる。

それはそうだ、大人でもこの怪我は辛いものがある。

だけど、子供は…動かせないはずのその腕を、まるで何かを求めるかの様に手を伸ばした。

もしかして……親が恋しいのかしら？

握ってあげたいけど……私のこの冷たい手じゃ……——

「……いたいよ……こわいよ……たすけて……」

それでも必死に手を伸ばしてくる子供、私は少し考えた後に——

(ギョツ)

冷たさがこの子の負担にならないだろうか？振りほどかれたりしないだろうか？

様々な考えが頭を過ぎるが、まずはこの子を安心させてあげるのが

優先だ。

私は意を決して、子供の右手を優しく両手で包んであげた。

少しでも落ち着いてくれれば……この子の苦しみが解放されれば。

——そう願いながら。

すると、子供は——

「おかあ……さん……」

と言いながら、安らかな顔になり……再びスヤスヤと寝息を立てて眠り始めた。

お母さん……か。

何故だろう、そう言われると心がとても温かくなる。

それに、この子の寝顔を見ていると、とても安心する。

それからしばらくして、子供が目を覚ました。

良かった……何とか目を覚ましてくれたのね……。

「ねえ、あなた……大丈夫かしら？」

しかし、私の問いに、子供はただ首を傾げるだけだった。

嫌な予感がした。

「ねえ……あなたの名前は？あの場所にはどうやって来たの？」

「ぼくは……ぼくのなまえは……わからない……おもいだせない……」

やっぱり……頭の怪我で、一時的に記憶が混濁してるのかもしれない。

「ぼくは、だれ？……ここはどこ？……っ?!……いたい……くるしい……」

子供は頭や腕を抑えながらもがき苦しむ、いけない!?

「ひつく…:いたいよお…:こわいよお…:たすけてよう…:ぐすつ…:」

そうよね、自分の事も…:この場所のことも…:何も分からない、何も
思い出せない…:なら

「大丈夫…:大丈夫だから…:落ち着いて…:ね?」

私は子供を優しく抱きしめる。

自分の冷たい体では、かえって不味いかもしれないけど、まずはこ
の子を落ち着けるのが先だ。

「ぐすつ…:だいじょうぶ…:ぼく…:だいじょうぶなの?」

すると、少しずつ落ち着きを取り戻していく子供…:良かったわ。

「何も思い出せないなら…:寂しくて辛いなら…:今だけ、私があなた
のお母さんになってあげる。だから、安心して…:ね?」

「…:ほんとう?」「ええ嘘は言わないわ」…:ありがとう…:おかあさん
♪」

お母さんか…:我ながら咄嗟の対応だったけど…:この子が安心
してくれたなら良かったわ。

「ねえ、おかあさん…:」どうしたの?」…:おかあさんのからだ…:つめた
くてあんしんするね」

正直びつくりした。

それはそうだろう。雪女はその体で人間の男を凍らせてしまう妖
怪。

それを安心するだなんて…:ホントにこの子は…:

「この子…そうね、いつまでも名前が無いと呼びづらいし…あなたに仮だけど名前をつけてあげるわね」

すると子供の目がぱあっと明るくなった。

「ほんとうに……つたた「落ち着きなさい」…うん…ごめんなさい、おかあさん…」

「良いのよ。…そうね…あなたの名前……」

雪のように白い肌……穢れを知らないその瞳……うん、決めたわ。

「——あなたの名前は「ハク」……でどうかしら？」

雪の中で出会ったというのもあるのだけど…我ながら単調な名前だったかしら？

「ハク……ハク……うん！ぼくはハクだね！うれしい！ありがとう、おかあさん！」

そうして再び私に身体を寄せ、甘えてくる。

良かった。これでこの子も少しは安心できると良いわね。

無意識の内にハクの頭を撫でていたのか、ハクは少しくすぐったそうに、目を細めて……それでも安心した顔で私の腕に包まれていた。

そして、怪我やストレス等…疲労も限界に達していたのか、ハクはそのまま眠りに就いた——私の手をぎゅっと握ったまま。

「困ったわね……離してくれる気配もないし…無理やり離すのも……可哀相ね…」

どうしたものかと思っただけ……

「えへへ……おかあさん……」

はあ、今夜はこのまま一緒に寝るしかないわね。

「少しでも温かくして……うん、これで良いかしら？」

それにしても……母親か……雪女として、それも……自然現象に近い存在として生まれた私には、母親という概念はない。

ただ……この子の……ハクの記憶が戻るまで……仮初とは言え、きちんと母親として接してあげよう。

そう決意して私はその日は眠りに就いた——誰かと眠るなんて、初めてね……。

——こういうのも……案外良いものなのね。

——後編へ続く。

39話 想符「愛しき者達の心」

——紫Side——

「早朝からお集まり頂き、申し訳ありません……それと同時に、来ていただいた事に感謝致します」

そう言っただけ私は目の前にいる人達へと頭を垂れる。

幻想郷の創設者の一人にして、妖怪の賢者とまで言われる私がこうして頭を下げるなどいつ以来だろうか？

でもそれだけ事態は切迫している……だって——

「頭を上げて下さい、八雲紫。彼の……碧さんの事が心配なのは私達も同じです。むしろ直ぐに知らせてくれた事を感謝します」

そう言っただけ私の肩に手を置いてきたのは、四季映姫——

いつもなら憎まれ口の一つでも言うのだけれど——

「いえ……これも私の不注意ですので——」「ダメよ紫？それ以上自分を責めては」……幽々子……

私の親友、西行寺幽々子——

「それに、彼の魂は『まだ』こちらには来ていない——つまり生存はしていると言う事よ？」

そう——映姫と幽々子の調査で碧君が少なくとも死んではない……という事は分かった

でも……問題は——

「——その場所、ですね？紫さん？」

私の思った言葉を続けるように言葉を発するのは、古明地さとり——

人が集まるという事で、サードアイを付けている——無論、理由

はそれだけではないのだけれど……。

「とにかく！早急にみーくんの居場所を探し出して、一刻も早く永琳に治療して貰わないと！」

そうして彼女にしては珍しく……いえ、初めて見るその焦り。

正直意外だった。彼女が自ら屋敷から出てきた事は。

「それを今から突き止める為に、こうして集まったのでしよう？確かに心配だけど、輝夜……あなたが取り乱しても事態は変わらないのよ？」

そう言いながら主である蓬莱山輝夜を嗜める八意永琳――

普段は碧の為にと暴走する永琳を、輝夜が嗜めるとというのが普通の光景なのだけど、今はそれが逆転してしまっている。

秋のお月見以来、輝夜は碧の事を心からの親友と思い、いつも気にかけてくれるようになった。

だからこそ、今こうして碧が行方不明になっている事態を静観できなかつたのだろう。

「でも……このままじゃ、みーくんが……」その為に今日、皆さんをお呼びしたのです……そうよね、それで……何か手がかりが掴めたの？」

一旦落ち着きを取り戻した彼女は、いつもの整然とした表情に戻り、一つでも多くの情報を聞き漏らさないようにしている。

「ええ。まず、幽々子、それから四季映姫の協力により碧が死んでいない……そして死の淵に瀕している状態ではない事が確定情報として分かりました」

ほっと……息を撫でおろす他のみんな……。

「次に、碧の居場所ですが……さとり、頼めるかしら?」「ええ、もちろんです」…お願いね」

私に代わり、さとりが説明を始める。

「皆様…地霊殿の主、古明地さとりです。皆様の知つての通り、私の能力は“心を読む程度の能力”です。そしてこれは、実の所、人や妖怪などの生物に限った能力ではありません」

一瞬考える一同…しかし直ぐに、思い当たる節があつたのか……

「なるほど…つまり、残された荷物の心…もしくは記憶を読む…所謂サイコメトリーのような事が出来る訳ですね」

流石は閻魔様…近い道具を操るだけあつて直ぐに答えが出てきたわね。

「閻魔様…その通りです。呪われた…忌むべき力…それを人の為…大切な人の為に使える事を私は誇りに思います」

その能力ゆえに地底に封じ込められてきた彼女の言葉には、とても重い意味が…それと同時に、本当の意味で地上と地底が相互理解できる日も遠くないのではないか?と思わせる程の力が込められていた。

「さて、時間も惜しいので直ぐに始めます。紫さん…荷物を」

「ええ…見つけられたのは、バッグ、カメラ…それから壊れた陰陽玉よ。…お願いね」

荷物を受け取ったさとりは真剣な顔つきで…
「任せて下さい…では…」

そして目を瞑り、意識をサードアイへ向ける。

一同が固唾を飲んで見守る中――

「……………ふう……………成程、大体の事は分かりました」

!?!?

顔には出さないが、それぞれ、驚いているのは分かった。

「それで…碧の居場所に繋がる手がかりは…何か分かったのかしら?」

急かすような口調になってしまったが、今は一つでも多くの情報が欲しい。

「はい。まず、予想されている通り、碧さんは崖から落ち、大怪我を負いました。それも、自分一人では動く事すら出来ない状態です」

つまり、その状態の碧を移動させた者がいる。

待て…今と言う季節。一面に吹き荒ぶ吹雪…――

「そこに…一人の女性が現れました。薄紫の髪…青い服…そして白いターバンのような物を巻いています。私は見た事がないので特定は出来ないのですが…紫さん?」

間違いない…彼女だ。

「ええ…ありがとう、さとり。これで碧を迎えに行ける「本当に?!」…輝夜…本当よ。碧を連れて行った人物…それは…『冬の忘れ物』、…局所的な大寒波』…『レティ・ホワイトロック』…所謂、雪女とも呼ばれている妖怪よ」

レティは、冬にしか現れない…言わば自然現象のような存在。

だから、毎年現れる場所は変わるが、その拠点となる場所…つまり家の場所は把握している。

「場所は分かったから、直ぐにスキマを開きます。それと、さとり、輝夜…碧の部屋にいるパルスィに声を掛けてきてくれないかしら?あの子…昨日から塞ぎ込んだじゃって…お願い…」

本当なら、保護者である私がどうかしなくてはいけないのだろう。

でも、私の言葉では彼女に…パルスィに届かなかった。

だからこそ、この二人なら…二人を良く知るさとりと碧の親友の輝夜なら…きつと届く。

「任せて下さい、紫さん。あの子の事は…良く知ってますから」

「ええ！一刻も早く碧の所に行きたいんだから…引きずってでも連れて行くわよ！」

「お願い。こちらは場所への最短ルートの計算と座標の固定をしておくから」

任された…とばかりに二人は家へと入っていく。

二人とも心強い…でも、輝夜…あなた、本当にアグレッシブになつたわね？

永琳も驚いてるし…。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

——パルスイSide——

こうして彼の眠っていた布団に包まれていると、色んな事が思い出される。

でも、彼は…碧はあの血だまりには居なかった…。

碧…もう会えないの？

私が直ぐに気が付かなかったから？

私がつと、すっかり彼を見ていれば？

ああ…碧…会いたい…でも…どうすれば…？

(ドタドタ)

？…何かしら？

(バタン！)

「入るわよ！」か、輝夜さん…入ってから言うのは少々お行儀が…「いいの！それよりもパルスイは…そこね、てい！」

喧騒の中、私を包んでいた布団が無理やりは剥ぎ取られた。

そして、いきなりの事で驚いている私の目に入って来たのは、息を荒げながらこつちを見据える輝夜さんと、苦笑いをしながらこちらを見る私の親友だった。

「え…？…何…？…何で二人が…？」「水橋パルスイ！」っ、は、はい…」

思わず気圧されてしまうほどの一喝。

ただ、名前を呼ばれただけなのに身体が委縮してしまう程の圧倒的

カリスマ感。

「まったく…死んだ魚みたいな目を……。いいこと？単刀直入に言うわ。みーくんの居場所が分かったわ「?!」…私達は、今からその場所へと直ぐに向かうわ。パルスィ…もちろんあなたも来るのよね？」

わたしは……。

「パルスィ…あなたの苦しみも分かるわ。大切な人が死んでしまったかもしれない…自分が守れなかったのかもしれない」

そうだ…何もできなかった。

そして、みんなが必死で探しているのに、私はただ…自分の殻に閉じこもっていただけ……。

そんな私が、今更彼に…碧に会う資格なんて……「それは違うわ、パルスィ」…さとり？

「悪いけど…あなたの心の声を聞かせて貰ったわ。あなたの言いたい事も分かるわ。大切な人を助ける事が出来なかった。自分は何もすることが出来なかった。……でも、それだけじゃない。あなたが動かない本当の理由…それは、碧さんの生存を信じないといけない自分が、一番最初に諦めてしまった事……違うかしら？」

その通りだ……昨日見た光景…あの真っ赤な血が今でも頭から離れない。

そして、気を失う瞬間…私は諦めてしまっていた。

「そうよ……だからこそ…そんな私が彼の元に行く理由なんて…「馬鹿じゃないの！」…っ?!」

再び一喝される。でもその声には、先程まで無かった感情が込められていた。

「確かに、悲惨な光景を、一番間近で見てしまったあなたの気持ちは理解できるわ…。そして、諦めてしまう気持ちも…ね」

輝夜…さん…？

「でもー!」っ?!」一度諦めてしまったから何!?もう二度と会ってはいけないなんて決まりでもあるの!?違うでしょ!あなたのみーくんに対する想いはそんな物なの?私は諦めないわ:みーくんは私の大切な親友。たとえ自分の立場を失っても、一度は絶望しても:絶対に守ってあげるって決めたのよ!あなたは違うの?!水橋パルスィ!!!」

言葉の強さとは裏腹に、今にも泣きそうな顔をしている輝夜さん……。

そうだ、私の心はもう:決まっている――

「……くわよ……」「何?」:行くわよ!それから伝えるの!どれだけ私が:いいえ、私達が絶望したか、どれだけ心配したか!うじうじなんてしてられない、彼に:碧に会って、私の想いを全部伝えるわ!」

言った。一晩溜め込んだ感情が溢れだした。そんな私を見た輝夜さんは――

「良い顔になったわね。そんなあなただからこそ、みーくんは選んだ。(…少し:羨ましいな…)」

「(輝夜さん:…心中お察しします…)さて、パルスィ。碧さんのいる場所への、移動準備は紫さんがしてくれています。直ぐに、出発できますね?」

「さとり:…ええ、行きましょう!」



――紫Side――

家の中から輝夜の怒声が聞こえてくる。

「あの子が、あんなに感情を露わにするのなんて:いつ以来かしらね…」

「永琳:…。そうね、私も初めて彼女のあんな声は聞いたわ。:…:ありがとう」

「それは碧君の無事が確認できてから、改めて聞かせて貰うわ:それ

にしても、私は会った事は無いけれど…そのレテイとはどんな妖怪なの？」

「そうね、気まぐれな彼女ですし、遭遇することは滅多な事では無いでしょう。」

「彼女は…所謂、雪女と言われる妖怪なのだけれども…普通の雪女と違って行動目的と言うものが明確に無いのよ」

「行動目的がない？一般的な雪女は…『死』を表す白装束を身にまとい、男を凍らせ、その精気を吸い尽くすものだ」と聞いているのだけではない？」

「ええ…逸話や伝承でも…実際に彼女以外の雪女は、そういった行動を起こしている。でも彼女は違うの。冬になったら現れ…何の目的もなく雪原を歩く、そして春の訪れを感じると、再び消えていく…妖怪と言うよりも、どちらかと言えば、妖精や自然現象に近い存在なのよ」

「そう、だからこそ不思議に思った。」

「なぜ、そんな彼女が碧さんを連れて行ったのか？ですね？八雲紫？」

四季映姫：地獄の裁判長でも、彼女の事について把握は出来ていないらしい。

「ええ、ただ…碧君が生きている事を考えると、少なくとも殺すためではないと考えられます。今は…その望みに掛けましょう」

「そうしていると、家の中から輝夜に手を引かれたパルスィちゃん」と、その後ろからさとりが出てくる。

「そして、パルスィちゃんが私の目の前に来る。」

「紫さん、ご迷惑をお掛けしてすみませんでした」

「うん、あの二人に任せた事は間違いじゃなかったみたいね。」

「いいのよ。あなたも私の大切な…そうね、妹みたいなものですから。」

「紫さん…」さあ、それでは準備はいいですね？このスキマの向こう側はレテイの家へと直通しています。私が先導しますので、皆さんは付いて来てください」

「いよいよ、彼に…碧君に会える。」

そう考えると、勇み足になってしまう。

でも…一番の懸念…――

レティ…あなたは何故、碧を連れて行ったの？



――レティSide――

朝、目を覚ますと少しだけ冷たい空気が流れていた。

私には心地よい環境なのだけれど、この子には辛いのだろう。

寒さを凌ぐ為に必死で私の身体に抱きついて眠っている。

はあ…それだともっと寒くなってしまおうわよ？

でも、そんな事なんてお構いなしに抱きついてくるこの子を見てみると、不思議と心も…そして雪女であるはずの私の身体も温かくなつていく…何故かしらね？

「仕方がない子ね…えっと、少しでも部屋を暖かくして…あら？」

私が冬の間だけ使う家、その入り口に複数の気配が現れた。

「この力は…大妖怪クラス、それも複数…もしかして、この子の知り合い…？」

状況的に考えて間違いはないだろう…でも、今のこの子は記憶が

「ま、出ていかないと大変な事になりそうね…。事情を聞いてくれると有りがたいのだけれど…」

そうして私は、ハクをその場に寝せ、家の外へと向かった。

外に出た私が見た光景は、普通の妖怪であれば即倒したくなる様な
絵図でした。

幻想郷の賢者…八雲紫様を始めとし――

地獄の最高裁判長：四季映姫――

冥界の管理者：西行寺幽々子――

純粋な力では幻想郷屈指の方々が3人も…それに、後ろに控えている人達も、自分よりも遥かに格上の存在である事が分かる。

さて…：対応を間違えれば、私も危険ですが…まずは――

「こんな辺鄙な場所へようこそ。幻想郷の有力者様方、それと…初対面の方々もおりますので自己紹介を「ねえ！碧はここに居るの?!」…碧…ですか？」

金髪で緑色の目をした…ふむ、妖怪でしょうか？…が、私の言葉を遮り聞いてくる。

それだけ、あの子は想われている…だとしたら、キチンと答えないといけませんね。

「碧…と言う方かは分かりませんが、子供を一人、保護しています」とすると八雲様が一步前に出てきて――

「その子供は無事なのかしら？それと、単刀直入に聞くわ。雪女と言われるあなたが、何故あの子を保護したのかを」

なるほど、確かにそれは普段の自分を知る者からすれば、不思議に思われても仕方がない。

「私とて、倒れている子供を見て見ぬふりが出来る程、冷徹な妖怪ではないのですよ？」

しかし、その答えに八雲様はいまいち納得がいつてない様子でした。

「妖怪であればこそ…よ。あなたも感じたのではなくて？あの子の匂いを？そして、それが発する魅惑的な…甘露とも言える魂を？」

そうだ、確かに“その”感情が無かったと言えば嘘になる。

あの子の身体から発せられる匂いは、どんな妖怪…いいえ、人間も

なのかもしれない。とにかく魅力的な匂いだった。それと同時に覚えてしまった。あの美しく、どこまでも純粋な魂の色を。

自然の一部である自分。それ故に見えてくるモノもある。ですが

「——確かに。あの子の魂はとても「美味しそう」に思えます。あの子から精気を貰えば、それこそ100年は季節問わずに現界していただける程の力もあるのでしょうか」

しかし、この答えが不味かつたのでしよう。それぞれの目つきが陰しくなっていくきます。

「……彼が死ねば、その魂を吸収することも出来ない。だから、あえて連れ去った……と?」

冥界の管理者……普段はおっとりとしているその表情からは、一切の感情が消え去り、私が一つでも回答を間違えれば、その瞬間に存在を消滅させようとしている気配を感じます。

失敗しましたね。普段、人とコミュニケーションを取らない事が仇となりました。もつとキッチンと説明が出来れば——

「確かに、連れて帰ったのは事実です。ですが——」「なら、碧は?!無事なの?!」……一命は取り留めています。ですが……」

記憶を失ったあの状態を、無事……と言えるのでしょうか?

目の前の人達の重圧……説明しても良いものか?という私の考え……。

張りつめた空気の中、家の扉が開き……っ?!あの子、まさか?!

そこに立っていたのは、昨日私が助けた子供。

記憶を失い、心の拠り所すら失っていた綺麗な子供

いくら手当をしたとはいえ、一晩で治る筈も無く、ましてや立ち上がるなんて出来る筈がない。

それなのに——

「——おかあ……さん……」

頭や腕、足に包帯や添え木をして最低限の応急処置と治療しかして
いない。

右の手足は骨が折れたまま。身体も大量の打撲と裂傷で傷つき、普
通の子供なら、立ち上がる事すら出来ない…いえ、そんな事をさせて
はいけない。

「…おかあさん…」

それなのに、この子は…痛みを顔に歪めながら――

折れた足を引きずりながら――

ゆつくりと私の前にやってきて――

「おかあさんは…ぼくが、まもるんだ…っ!」

目の前の大妖怪クラスの方々に向かい言い放つ。

ああ…この子は何て…――思わず涙が溢れそうになった。

たった一晩、それも起きていた少しの時間――

それなのに、自分の怪我を厭わず、私の事を守ってくれようとして
いる。

「碧?!無事だったのね…。良かった「うるさい!」み、碧…?」

先程の金髪の女性が声を掛けるが、ハクはそれを聞かず…むしろ敵
意を向けている。

「何で…?何でそんな目で私達を見るの?…私達は…「おまえたちは、
おかあさんをいじめた!」おかあさんをいじめる人はゆるさない!

…っ?!」…あ…ああ…」

絶望の表情を浮かべる彼女…余程親しい間柄だったのだろう、で
もそれよりも――

「ハクっ!」お…かあさん…?」…私は大丈夫よ?だから心配しないで
…ね?」

その言葉に頷きながらも、私の前からは離れようとしな…

――今なお激痛で倒れそうになっているのにも関わらず。

「八雲様、事情を聞いていただけないでしょうか？」

私がつと上手く説明できていれば――

「その必要はありませんよ？」

すると、後ろに控えていた紫の髪をした小柄な少女が言葉を発した。

「私は地底に封じられた妖怪……その取り纏めをしている、『古明地さとり』と申します。大変失礼とは思いましたが、レティさんの心を読ませて頂きました」

なるほど、彼女は「そういう」妖怪なのか。

「なら、話は早いです。知つての通り、今のこの子には記憶がありません」

私の言葉に息を呑む一同。

「ええ……そして、なぜそういつた経緯になったのかも、全てが繋がりましたので……私から説明させて頂きます」

口下手な私に代わり、古明地さんが……私がハクを見つけた時の事、手当をしてそのまま看病していた事、記憶を失い心の拠り所を失い、壊れそうになっていたハクの母親代わりになってあげると言つた事。

余程、信頼されているのでしょう。彼女の言葉を全員は真剣に聞いていました。

そして一緒に来ていた銀髪の女性（聞くと、永遠亭の医者だと言う）から――

「……恐らくですが、強い衝撃と極度の寒さ。これにより脳が生命維持活動を優先させ、一時的に記憶の混濁、並びに幼児退行が起きている……と思われれます」

「永琳……それは治療をすれば、元に戻るものなのかしら？」

八雲様の問いに、お医者様は――

「……早い段階で、身体の治療に専念することが出来れば。……ですが、一刻でも遅れた場合、二度と記憶が戻る事はないでしょう……」

沈痛な面持ちで現状を語り、こちらを向くお医者様。

「私では何もできません……お願いします」

力強く頷く。後は、移動手段だけでも――

「では、このまま直ぐに永遠亭へ連れて行きましょう？ スキマは直ぐに用意するから……」

良かった……これで、この子が助かる……「いやだ！」……ハク？



――ハクSide――

目をさますと、おかあさんがとなりにいなかった。

いつしよにいてくれるって言ったのに……。

そしたら、外からこえがきこえてきた。

おかあさんのこえ？

ぼくはいたいのをがまんして、おかあさんのところにむかった。

なんとか、とびらをあけて見てみると……

おかあさんがこわい人たちにかこまれてた。

なんで？ どうして？ あんなにもやさしいおかあさんが？

そうおもったら、いたむからだをむりやりうごかし……おかあさんの前に立った。

「おかあさんは……ぼくが、まもるんだ……っ！」

でも、おかあさんはだいじょうぶだったみたいで、ぼくをだきしめてくれた。

よかった。でも、ほかのお姉さんが何かはなしをして、ぼくはどこかにつれていかれるみたいだ。

そんなのはイヤだ！

目の前の人たちは、みんなこわい……。

「おかあさん……怖いよ……はなれたくないよお……」

「ハク……」

「ぼくはどうしたらいいの?!助けてよ…おかあさあん…ぐすつ…」



碧の：ハクの言葉に、誰もが言葉を失う……
守ると決めた。

幸せにすると決めた。

そんな彼が：ただの子供のように混乱し泣き叫んでいる。

きちんと治療を受け、記憶を戻す事……それが何よりも良い解決策なのに、誰も：それを口に出せずにいた。

無論、彼女達の力なら、無理やり連れて行き治療を受けさせる事なんて造作もない。

だが、誰も：それを口に出せなかった。

それほどまでに、今の碧：ハクは危うかった。

しかし、そんな空気を：碧が幻想郷に来て、初めてできた親友……
永遠亭の主、蓬莱山輝夜が打ち破る。

「~~~~つ！みーくん！あなたの想いは！今まで積み重ねた記憶は！
意志は！思い出は！そんなことで忘れられるモノだったの！」

輝夜の一喝。

そこに居た全ての人達は彼女の言葉に気圧されていた。

「みーくんは！あの日、私の思い出を聞いてくれた……。一緒に音楽を奏でた……。そして、常識はずれで、人付き合いの苦手な私を：私のやりたい事を一緒に探して、見守ってくれて言ってくれた！そして：初めて、対等な“親友”になって：愛称まで付けてくれた！」

彼女を知る人が見たら、誰もが驚愕するだろう。

それほどまでに、今の彼女は、感情的で、この場の誰よりも人間味を帯びていたのだから。

永遠亭の主としてではなく……ただ一人の、碧の親友……輝夜としての言葉。

その言葉は、その場に居た他の人達にも紡がれていく。

「碧君……あなたは、幸せを求めて、この幻想郷に来た。そして多くの出会いがあったわ。もちろん、私もその一人……。妖怪の賢者としてではなく、あなたの家族として言うわ！今を捨てろとは言わない！でも！あなたの事を、こんなにも心配して駆けつけてくれる人たちがいる！そんなあなたの家族になれた事を……私は何よりも誇りに思うわ」

紫の言葉に続くのは、彼に指針を指し示し、これからも毅然と接するであろう人物――

「碧さん。前に言いましたよね？あなたは少し、優しすぎる。そして、その優しさを本当に理解できたとき、優しさは何よりも強くなる……。あなたの優しさは私達……いえ、私達だけではなく様々な人達との結びつきを生みました。そして、これからも多くの出会いがある筈です。その出会いを、上手く繋ぐ力……それがあなたの『優しさ』の在り方ではないのですか！」

そして、幽霊でありながら、全てを包み込むような優しい微笑みを浮かべる人物――

「ねえ、碧くん。前に、魂には色があるって事を話したでしょう？魂は、その人の、その時の『在り様』でその色を変えるの。あの時の碧君の色は希望と幸福に満ち溢れた……キラキラとした宝石みたいな色をしていたの。でも、今のあなたの魂は真っ白……ねえ？それがあなたの望む魂の在り方なの？違うでしょう？あなたの目指すモノを……大切な人と幸せに過ごすために、その魂を輝かせてきたのでしょうか？……目覚めなさい。あなたは、戻るべきなの。私の様になつてはいけない。空白に戻るのではなく、今を生きる為に……その魂を輝かせなさい

「魂の在り方……成程、勉強になります。私からも言わせて貰いますね？輝夜さん程、近い仲ではないですが……それでも、初対面で私の事を気味悪がず、その上で私の事を労ってくれましたね。あなたのその優しさに、私は何度も救われたのですよ？今の碧さんの恐怖は痛いほど伝わってきます。ですがそれを拒まないで下さい。全ての想いを受け入れて下さい。さて、では後は任せましたよ——パルスィー——」

大神碧の恋人。最愛の運命の人——

大粒の涙を、ボロボロとこぼしながら……彼女はただ一言、優しく言葉紡ぐ……

「……お願い、戻ってきて？……私の大切な『碧』」

縫うような、諭すような——

それは、彼女の……いや、彼女達の心からの想い。

全ての言葉を聞き終えたハク……碧に……異変が起きる。



——ハクSide——

知らないはずのお姉さんたちの言葉。

それが、心の中にある『何か』をざわつかせる。

そして最後の、緑色の綺麗な瞳のお姉さんから言われた瞬間、自分の中にある過去の記憶……その全てがフラッシュバックしていく。

『でもね……月を離れ、幻想郷で生活をするようになった私は自分の

本当にやりたい事を探すことに決めた。そして、これからも探し続ける…あなたには…それを一緒に探して…見守って欲しいの…これが、今の私の一番やりたい事”

かやちゃんとの記憶——

“碧君。たとえ離れていても、あなたは私の…いいえ、私達の大切な家族だから…いつでも帰って来てね?”

紫さんとの記憶——

“優しさは、ある意味で病気のような物です。自分にとつての優しさ、相手にとつての優しさ…。その二つが完全に一致しなければ、優しさは『自己満足な偽善』となってしまう。本当の優しさとは、相手の全てを背負う、“責任” “勇気” “精神力” がいます。そして、ただ優しいだけじゃ駄目なんです。相手の“怒り”や“苦しみ”、“憎しみ”や“妬み”…そういう負の思い…その理由を理解するのです”

映姫さんとの記憶——

“あなたの命は、もうあなただけの物じゃないの、大切な人と生きるんでしょ？ 幸せを掴むんでしょ？ だったらもう…無茶しないで？ これからは私達が何とかするから？ だから約束して…——絶対に無茶はしないって…ね?”

幽々子さんとの記憶——

“ふふっ…。私は優しくなんてないわ。何の思惑も無く…普通に話ができるあなたこそ、本当に優しい人間なんだと思うわ…。不思議ね…あなたの様な人間もいるのね…”

さとりさんとの記憶——

“見た所、普通の人間みたいだけど…あなた、地上から来たんじゃないの?”

“私は水橋パルスイ。種族は橋姫…これでいいかしら？”

“…碧…なの？”

“あの日…私は自分の嫉妬心を抑えられなかった…。あなたに醜い顔を見て欲しくなかった…。でも、そんな私の事を…あなたは心配してくれて、優しく抱きしめてくれたわ。…温かかった…。ずっと抱きしめて貰いたかった。そして、目の前にあなたの顔があつて…そこで私の…それまで抑えていた恋心が解き放たれたの…。あんな形で…あなたの唇を奪ってしまったってごめんなさい…”

“ぐすつ…。こんな私に…いいえ、私で良ければ…お願いします…”

碧／／／

次々と駆け廻っていく、パルスイさんとの記憶——

“そういえばさく、茜ちゃんこの前また告られたんだって？”

“うげ…祥華、なんで知ってんの？”

“や、告つたのがうちの友達やったんよ。悪い子やなかったやろ”

？なんで断つたん？”

二度と会えない親友との記憶——

そして訪れる静寂——闇…

その闇が、光によって照らしだされていく——この記憶は…？

“ねえ、おかあさん。”

“どうしたの碧？”

それは、在りし日の記憶——

“なんでぼくの名前…碧ってむずかしい漢字の碧なの？”

優しいな表情を浮かべる母親——

“ふふっ。そうねえ…あなたも大きくなってきたし、教えてあげま

しょうか？”

“うん！”

“『碧』は青と緑の中間の色。落ち着いた色合いの中で、信頼感や安心感を与えてくれる色なの”

“むく…落ち着けるってこと?”

優しく冷たい手で、僕の頭を撫でながら続ける母親——

“そうね…。でもそれだけじゃないのよ? 碧色の宝石はキラキラと光り輝く物、そしてあなたには、宝石のように綺麗に澄み切った心と、いつも落ち着いて、みんなに優しくできる人になって欲しい。そういう意味を込めて『碧』って名前にしたのよ?”

“そっかあ! なら僕、誰よりも優しい人間になる!”

“ええ…あなたならなれるわ…そして、いつか…出来る大切な人を…その優しきで包み込んであげてね?”

——ああ…そうか、僕は…こんなにもみんなに愛されてたんだ。

ありがとう…みんな……ありがとう……かあさん…——
そうして僕の意識は沈んでいった。



——パルスイSide——

あの後、碧はその場に倒れた。

心配した私達は直ぐに駆け寄り声を掛けると——

「みんな…ありがとう…——」

と、言つて、優しい顔を浮かべていた。

永琳さんの方を見ると、どうやら記憶を取り戻したみたいだ。

ただし、怪我の事もあるのですぐさま、紫さんの開いてくれたスキマで永遠亭へと移動した。

怪我の具合は、とてもひどい状態で、レティさんが応急処置をしてくれていなければ手遅れになっていたと言う。

そして今は永遠亭の病室で碧は眠っているのだけど…。

「…っ……かあ…さん……、一人は…嫌だよ…」
うなされる碧……何とかしてあげなくちゃ…そう思ったのだけど…。

「まったく…最後まで手を焼かせてくれる子ね…ハク…いいえ…碧」

そう言つてレティさんが、碧の手を握り…優しく頬を撫でてあげる。

その姿はさながら聖母のようで、思わず見惚れてしまうほど、美しく、尊いものだと感じた。

「う…ん……かあさんの手……冷たくて…おちつく………すー…すー…」

そう言つて、安らかな寝息を立てて再び眠りに就く碧。

良かった……。それと、言わなくちゃ！

「あのっ！レティさん！」



——レティSide——

寝息を立てて眠る碧。

これでようやく安心できる。

すると、隣に座っていたパルスイさんが——

「あのっ！レティさん！」

少し声が大きかったので、しーっと指を立てて静かにするように注意する。

あ、と恥ずかしそうな顔をするパルスイさん。クスツ♪…可愛い子ね。

「あの…レティさん…今回の件…ありがとうございました…その、何も知らずに…私はレティさんに…」

ああ…この子も中々不器用な子だ。

「元はと言えば私の説明下手なものもあるから…それに、この子が…碧が記憶を取り戻したのは、あなた…いいえ、あなた達とこの子の絆が…積み重ねてきた思い出が強かったから「それでも!」…?」

「それでも…碧の心が壊れなかったのは…レテイさんが、ずっと支えてくれていたからです。永琳さんも言っていました、もし、仮に命が助かっても、生きる事を諦め…心が壊れてしまっっては…手遅れになっていったって」

そんな真つ直ぐに言われると、照れてしまうわね…。

「いいのよ。この子が無事だった…それだけで私は十分なのだから」

そして軽く、碧の頭を撫でる。

くすぐったそうに…でも、嬉しそうにする顔は、私の心を温かくしてくれる。

「それですね「…?」碧が目を覚ましたら…ぜひ、二人でお礼をしたいんですけど…「それは無理ね…」…え?」

恐らく…ううん、これは間違いないでしょう。

「目を覚ました時、この子は私との出会いを忘れているはずです。ですからこの出来事も…できればこの子には伝えないでおいて欲しいの。あんな怖い目に会った事を…辛い目に会った事を…思い出させたくないの…」

「そんな…そんなのって…悲しすぎます!」

パルスイさん…私の為に涙を流してくれるの?

「いいのよ…私は冬の妖怪、冬の忘れ物、この出会いは偶然のモノ…だから、これでいいのよ?」

私は彼女の涙を拭い――

「こうして私の事を思っつて、悲しんでくれている人がいる…それだけで…ね?」

ん……それに、時間みたいね――



碧の頭を撫でながら、慈しみの笑みを浮かべながら…彼女は…レ
テイさんは言った。

「そんな…そんなのって…悲しすぎます！」

こんなに優しい人を、私は疑ってしまった。

碧に通じる優しさ。

在るがままを受け入れる自然の心。

それを忘れたままにさせるなんて…あんまりすぎる！

そう思うと、私は涙が止まらなかった。

でも、そんな私の涙を彼女の手が拭ってくれた——少しずつ、消
えゆくその指で。

「…え？…なんで…？」

「どうやら…時間みたいね。今年は冬が短かったわ…でも、それ以
上に良い思い出が出来た」

少しずつ、光の粒子になり消えていくレテイさん。

「パルスイさん。あなたは笑顔でいて頂戴？この子が目を覚ました
時、安心できるように」

ああ…こんな時にまで、碧と私の事を…。

「私の、母親としての役目は終わったけれども…この子の事は、きっと
どこかで見守っているから」

「レテイさん!?待って！」

その顔に悲壮感は無く…レテイさんは、最後にとっても綺麗な笑
顔で——

“私の可愛い子供を…頼んだわよ？”

そう言っつて、光の粒子となって消えていった。

「レテイ…さん…」

約束を破ってしまふけど、碧が起きたら全てを伝えよう。

例え覚えていなくても――

誰よりも冷たく、誰よりも孤独な彼女は――

誰よりも優しく、誰よりも母性に溢れていた――

そんな彼女：レティさんとの思い出を……必ず伝えよう――

そしてまた、次の冬に会えたなら……二人で絶対に“ありがとう”
の言葉を伝えよう。